福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1385 集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡（もとおか）・桑原（くわばら）遺跡群 34

―九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う
発掘調査の概要―

２０１９

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1385 集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

元岡（もとおか）・桑原（くわばら）遺跡群 34

―九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う
発掘調査の概要―

２０１９

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原及び、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めていましたが、平成 30 年 9 月に文系 4 学部と農学部が箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転を完了しました。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から引き続き対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査は平成 7 年度から福岡市が取り組み、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成 14 年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査を実施しました。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次発行し、これまでに九州大学を委託者とする報告書を 15 冊刊行しました。その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が 18 冊、概要報告書が 2 冊、関連リーフレットが 4 部発行されました。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことができない成果と考えております。

本書はこの 24 年にわたる発掘調査・資料整理の成果を総括するものとして刊行されるものです。これまでの調査によって先史時代から近世にかけての元岡・桑原地区における重要な考古資料が出土しており、この地域の歴史を物語る上で欠かすことのできないものとなりました。本書が文化財の保護・活用の一助となり、学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州大学をはじめとする関係各機関並びに地元の方々には長年にわたる発掘調査において多くのご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成 31 年 3 月 25 日

福岡市教育委員会
教育長　星子 明夫

例　言

1　本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群の調査報告書で、これまでの調査の総括編として構成されている。

2　本書の執筆は各調査担当者により以下の通り分担した。（肩書は平成 31 年 3 月現在）

Ⅰ・Ⅱ・特論 4 ：大塚 紀宜（経済観光文化局埋蔵文化財課調査第 2 係長）

特論 1 ：萩原 博文（経済観光文化局埋蔵文化財課）

米倉 秀紀（福岡市博物館学芸課長）

特論 2 ：常松 幹雄（経済観光文化局埋蔵文化財課主任文化財主事）

特論 3 ：森本 幹彦（福岡市博物館学芸課）

特論 5 ：菅波 正人（経済観光文化局市史編さん室主査）

3　各章の挿図番号・写真番号は章ごとに通し番号としている。

4　本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

5　編集は、各担当者の協力を得て、大塚が行った。

伊都キャンパス移転前の元岡・桑原丘陵（平成8年撮影）

目　次

第１部　発掘経緯と調査概要

Ⅰ．はじめに …… 1
１．元岡・桑原遺跡群の調査経過 …… 1
２．調査組織 …… 2
（１）調査主体 …… 2
（２）調査・整理報告担当 …… 2
（３）庶務担当 …… 4

Ⅱ．各調査の成果 …… 7

第２部　特論

特論１　旧石器時代から縄文時代の元岡・桑原遺跡群
…… 萩原 博文・米倉 秀紀 …… 41
１　旧石器時代 …… 41
（１）旧石器時代の概要 …… 41
（２）遺跡の立地 …… 41
（３）遺物の変遷 …… 42
２　縄文時代草創期前半 …… 47
３　縄文時代草創期後半から早期前半 …… 48
（１）最終氷期終末（草創期）から完新世初頭（早期）の寒暖差と文化 …… 48
（２）周辺地域との比較 …… 58
（３）スクレーバー類の使用法 …… 70
（４）温暖化と土石流の発生 …… 76
（５）黒曜石原石の獲得戦略 …… 79
４　縄文時代出土地点の動向 …… 87

特論２　元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物の諸相 …… 常松 幹雄 …… 91
１．弥生土器 …… 91
１）弥生時代の土器集積遺構 …… 91
２）土器編年 …… 98
３）大型土器の分布と編年 …… 100
４）浮文のある土器 …… 102
５）有窓土器 …… 104
６）絵画資料 …… 104
７）ヒョウタン形土器 …… 108

２．木製品……110
３．金属器……120
４．まとめ……120

特論３　元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流……森本 幹彦……123
はじめに……123
１．元岡・桑原遺跡群の外来系土器……123
１）朝鮮半島系土器……123
２）格子目タタキの弥生土器・土師器……126
３）日本列島各地の外来系弥生土器……130
２．外来系の金属、木製品、土製品……133
３．漁具の様相……137
４．まとめ……140

特論４　元岡・桑原遺跡群の古墳の変遷から見た社会構造の変化について
……大塚 紀宜……143
はじめに……143
１．元岡・桑原地区の古墳について……143
（１）前方後円墳・大型円墳……143
（２）群集墳……148
（３）元岡古墳群Ｇ－１号墳・Ｇ－６号墳……152
２．古墳時代後期の２つの対照的な古墳・古墳群……154
（１）元岡古墳群Ｇ－６号墳……154
（２）桑原石ヶ元古墳群……160
３．元岡・桑原地区の古墳築造の構造……161
（１）古墳時代後期～古代の元岡・桑原地区古墳群の変遷……161
（２）元岡古墳群Ｇ群と石ヶ元古墳群の構造的差異……163
（３）まとめ～古代の元岡・桑原地区の社会構造に繋がる古墳築造の構造……163

特論５　古墳時代後期から古代の様相について……菅波 正人……165
１　古墳時代後期の遺構と遺物……165
２　古代の遺構と遺物……169
３　製鉄遺構の様相……176
４　おわりに……180

抄録・編集後記……181

Ⅰ　はじめに

１．元岡・桑原遺跡群の調査経過

平成３（1991）年 10 月、九州大学は箱崎・六本松両キャンパスの移転候補地を福岡市西区元岡・桑原地区とする決定を行った。これを受け、移転予定地区での大規模な開発工事が見込まれることから、福岡市教育委員会は平成７（1995）年２月から 12 月まで対象地内全域の踏査を行い、古墳、山城、埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。これをもって元岡・桑原遺跡群の調査開始としている。また平成８（1996）年３月から９月までバックホーを使用した試掘調査を実施し、集落、製鉄遺構、遺物包含層等を確認した。

平成８（1996）年には九州大学統合移転事業に係る埋蔵文化財調査を担当する大規模事業等担当課が設置された。あわせて平成８年８月に桑原金屎古墳、元岡石ヶ原古墳等の確認調査を開始した。

平成８年３月、福岡市と九州大学、福岡市土地開発公社の三者間で「造成に関する覚書」が締結され、公社が事業用地の造成に関して埋蔵文化財調査等を行うものとすると定められた。移転用地は土地開発公社が全域を先行取得し、造成工事後に九州大学が再取得することとなっていため、造成工事に伴う発掘調査は当初、福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結んで行われ、公社との委託契約による調査は平成８年から平成 20（2008）年まで実施された。公社の先行取得地は移転予定地北側のＡ区～Ｆ区の工区で、調査前半期には造成工事が先行した桑原地区と元岡地区北側の範囲を中心に調査が行われた。

しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区（Ｇ地区）についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、調査の実施主体について福岡市教育委員会と九州大学との間で協議が行われ、最終的に福岡市が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。これに基づき、平成 15（2003）年から平成 27（2015）年度まで九州大学との受託契約による発掘調査を実施した。

なお、土地公社委託部分の調査は遺跡が確認された範囲については全域を調査対象としていたが、九州大学再取得地については、造成工事計画と遺構面の標高を精査し、造成工事が遺構面に影響を与えない範囲については調査を行わず、遺跡の保全をはかる方向で調査範囲を設定した。また、工事設計のわずかな変更によって遺跡の保全が可能となる範囲については極力調査を回避する方向で九州大学側に協力を頂いた。したがって、現在もＧ地区の多くの範囲に未調査の遺跡が埋蔵されており、将来的にこれらの部分で遺構に影響が生じる造成工事や建物建設がある場合には発掘調査が必要となる。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は事業開始時以前には複数の遺跡に分かれていたが、移転事業に伴い、古墳などを除いて九州大学敷地全域を含む範囲を「元岡・桑原遺跡群」と総称することとした。同遺跡群内では平成 27（2015）年度までに 66 次の調査が実施された（表 1）。

２．調査組織

（１）調査主体

福岡市教育委員会（平成８年度～平成 30 年度）

教育長	町田 英俊（～平成 10 年度）
	西 憲一郎（平成 11 年度～ 12 年度）
	生田 征生（平成 13 年度～ 15 年度）
	植木 とみ子（平成 16 年度～ 18 年度）
	山田 裕嗣（平成 19 年度～ 23 年度）
	酒井 龍彦（平成 24 年度～ 27 年度）
	星子 明夫（平成 28 年度～ 30 年度）

福岡市経済観光文化局（平成 24 年度～平成 30 年度）

局長	永渕 英洋（～平成 25 年度）
	重光 知明（平成 26 年度～ 28 年度）
	髙島　収（平成 29 年度～ 30 年度）
文化財部長	後藤　直（平成７年度～８年度）
	平塚 克則（平成９年度～ 10 年度）
	柳田 純孝（平成 11 ～ 13 年度）
	堺　　徹（平成 14 年度～ 15 年度）
	山崎 純男（平成 16 年度～ 18 年度）
	矢野 三津夫（平成 19 年度～ 20 年度）
	宮川 秋雄（平成 21 年度～ 22 年度）
	藤尾　浩（平成 23 年度～ 24 年度）
	西島 裕二（平成 25 年度～ 26 年度）
	菊田 浩二（平成 27 年度～ 28 年度）
	髙山 嘉樹（平成 29 年度～ 30 年度）※平成 30 年度は文化財活用部長

（２）調査・整理報告担当

福岡市教育委員会文化財部大規模事業等担当（平成７年度～ 17 年度）

課長	山崎 純男（～平成 10 年度）
	二宮 忠司（平成 11 年度～ 15 年度）
	力武 卓司（平成 16 年度～ 17 年度）
主査	池崎 譲二（～平成９年度）
	松村 道博（平成 10 年度～ 13 年度）
	濱石 哲也（平成 14 年度～ 15 年度）
	米倉 秀紀（平成 16 年度～ 17 年度）
調査担当	小林 義彦（～平成９年度）

久住 猛雄（平成 8 年度）
松浦 一之介（平成 8 年度～ 12 年度）
菅波 正人（平成 9 年度～ 15 年度）
吉留 秀敏（平成 10 年度～ 13 年度）
星野 恵美（平成 13 年度～ 14 年度）
屋山　洋（平成 14 年度～ 16 年度）
上角 智希（平成 15 年度～ 17 年度）
池田 祐司（平成 16 年度～ 17 年度）
木下 博文（平成 17 年度～ 17 年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第 2 課（平成 18 年度～平成 23 年度）

課長　力武 卓司（～平成 19 年度）
田中 壽夫（平成 20 年度～ 23 年度）
調査第 2 係長　菅波 正人（平成 22 年度～ 23 年度）
調査第 2 係長（調査担当）
米倉 秀紀（平成 18 年度）
常松 幹雄（平成 19 年度～ 20 年度）
主任文化財主事
吉留 秀敏（平成 21 年度～）
長家　伸（平成 23 年度）
調査担当　上角 智希（～平成 18 年 9 月）
池田 祐司（～平成 20 年度）
木下 博文（～平成 20 年度）
大塚 紀宜（平成 22 年 12 月～ 23 年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（平成 24 年度～平成 27 年度）

課長　宮井 善朗（～平成 25 年度）
常松 幹雄（平成 26 年度～ 27 年度）
調査第 2 係長　菅波 正人（平成 24 年度）
榎本 義嗣（平成 25 年度～）
主任文化財主事
大塚 紀宜（～平成 26 年度）
調査担当　比嘉 えりか（～ 24 年度）
大森 真衣子（～平成 26 年度）
清金 良太（平成 25 年度～ 26 年度）
嘱託員　佐々木 蘭貞（平成 25 年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課（平成 28 年度～平成 29 年度）

課長　常松 幹雄
調査第２係長　加藤 隆也（平成 28 年度）
大塚 紀宜（平成 29 年度）
調査担当　中尾 祐太（平成 27 年度）

福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課（平成 30 年度）

課長　大庭 康時
調査第２係長　大塚 紀宜
事前審査係長　本田 浩二郎
事前審査担当　中尾 祐太

調査補助員（平成７年～平成 27 年）

石橋忠治　大歯あずさ　大庭友子　鐘ヶ江賢二　櫛山範一　小杉山大輔
ゴチョウ・メネス　坂口剛毅　中園聡　名取さつき　西村直人　八丁由香
濱石正子　藤木聡　藤原由博　本田浩二郎　松浦一之介　水崎るり　撫養久美子　吉岡和哉

（３）庶務担当

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（平成７年度～平成９年度）

課長　荒巻 輝勝
第一係長　横山 邦継（～平成８年度）
二宮 忠司（平成９年度）
事務担当　内野 保基

福岡市教育委員会文化財部文化財整備課（平成 10 年度～平成 17 年度）

課長　上村 忠明（～平成 13 年度）
平原　豪（平成 14 年度～ 16 年度）
榎本 芳治（平成 17 年度）
管理係長　井上 和光（～平成 12 年度）
市坪 敏郎（平成 13 年度～ 16 年度）
栗須 ひろ子（平成 17 年度）
管理係　岩屋 淳美（～平成 12 年度）
中岳　圭（平成 13 年度～ 14 年度）
鈴木 由喜（平成 15 年度～ 16 年度）
鳥越 由紀子（平成 17 年度）

福岡市教育委員会文化財部文化財管理課（平成 18 年度～平成 22 年度）

課長　榎本 芳治（～平成 21 年度）
管理係長　栗須 ひろ子（～平成 19 年度）
白川 国俊（平成 20 年度～ 21 年度）

田中 龍三郎（平成 22 年度）
管理係　鳥越 由紀子（～平成 19 年度）
垣替 美香（平成 20 年度）
山本 朋子（平成 21 年度）
井上 幸江（平成 22 年度）

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第 1 課（平成 23 年度）
課長　濱石 哲也
管理係長　和田 安之
管理係　井上 幸江

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課（平成 24 年度～平成 27 年度）
課長　米倉 秀紀
管理係長　和田 安之（～平成 25 年度）
内山 広司（平成 26 年度）
大塚 紀宜（平成 27 年度）
管理係　川村 啓子（平成 24 年度）
横田　忍（平成 25 年度～ 28 年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課（平成 28 年度）
管理係長　大塚 紀宜
管理係　松原 加奈枝

福岡市経済観光文化局文化財部文化財保護課（平成 29 年度）
課長　宮崎 誠二
管理調整係長　藤　克己
管理調整係　松原 加奈枝

福岡市経済観光文化局文化財活用部文化財活用課（平成 30 年度）
課長　松本 真人
管理調整係長　藤　克己
管理調整係　松原 加奈枝

表1　元岡・桑原遺跡群調査一覧

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書(集)
9602	第1次	確認	960401～960930	8154		試掘調査	743
9656	桑原石ヶ元古墳群	公社	960401～970331	4737		円墳	722・744
9657	桑原金屎古墳	確認	960820～961129	605		前方後円墳	909
9685	元岡石ヶ原古墳	確認	960827～961129	1280		前方後円墳	909
9656	第2次	公社	961111～970325	3007		古墳時代～古代、溝、土坑、水田	722
9763	第3次	公社	971113～990222	3500	1	縄文時代石組炉、弥生時代住居跡、円墳	829
9764	第4次	公社	971201～980331	1219		古代～中世掘立柱建物、溝	829
9771	元岡古墳群第2次(D群)	確認	971110～971128	60	2	試掘調査	年報12
9811	第5次	公社	980427～980623	2500		古代土坑、包含層	693
9812	第6次	公社	980630～980828	2800		古墳時代包含層	693
9813	第7次	公社	980506～990611	7500		古墳時代～古代住居跡、池状遺構、製鉄路	1012・1302
9829	第8次(元岡古墳群M群)	公社	980916～981225	300	1	円墳	829
9851	第9次	公社	981102～981210	190		弥生時代住居跡	1172
9854	第10次	公社	990106～990225	1336		古代～中世包含層	639
9855	第11次	公社	990106～990320	1650		古墳時代～古代土坑、包含層	829
9902	第12次	公社	990406～000328	5500		古代製鉄路	860・1063
9903	第13次	公社	990412～000316	600	3	前方後円墳、円墳	861
9904	第14次	公社	990422～990722	1200		古代包含層	693
9923	第15次	公社	990611～990928	3500		古代包含層、中世水田	860
9933	第16次	公社	990802～991110	1200		古代包含層	693
9934	第17次(元岡古墳群B群)	公社	990910～991208	517	2	円墳	861
9946	第18次	公社	991010～020215	16800	2	古墳時代～古代住居跡、掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	1063・1102・1172・1246・1302
9947	第19次	公社	991016～991215	3200		古代包含層	743
0001	第20次	公社	000405～030523	20130		古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962・1013・1063・1105・1328
0002	第21次(石ヶ元古墳群)	公社	000405～000921	3170	3	円墳	910
0033	第22次	公社	000410～001025	4750		古代掘立柱建物、製鉄関係遺構	909
0019	第23次	公社	000601～010331	8110		確認調査	1011
0034	第24次	公社	000821～030320	5500		古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052	第25次(元岡古墳群A群)	公社	001124～011130	2200	7	円墳	861
0110	第26次	公社	010405～011130	5487	1	古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153	第27次	公社	011201～020829	4495		古墳時代住居跡	909
0154	第28次	公社	020201～020704	2200		古代～中世包含層	909
0204	第29次(元岡古墳群N群)	公社	020405～030930	4000	9	円墳	861
0240	第30次	公社	020801～020930	2450		古代包含層	1011
0242	第31次	九大	021001～060113	10000		古代瓦窯、掘立柱建物、鍛冶炉、古墳時代祭祀関連	1103
0257	第32次	九大	030120～030331	1700		試掘	(1328)
0303	第33次	九大	030408～030519	450	1	円墳	1064
0310	第34次(元岡古墳群J群)	公社	030401～030812	1200	3	円墳	909
0340	第35次(石ヶ原古墳)	公社	030520～050112	1853	1	前方後円墳	909
0341	第36次(経塚古墳)	公社	030901～050331	8000	1	円墳、中近世墓群	1011・1105
0365	第37次(元岡古墳群O群)	九大	031020～040226	461	4	円墳	861
0371	第38次(水崎城)	公社	040308～050117	1816		中世山城	1105
0404	第39次	民間	040405～040416	880		弥生時代包含層	1064
0410	第40次	九大	040407～040428	1250		包含層	1064
0435	第41次	九大	040506～060217	900		古代包含層、製鉄関連遺構	1064
0451	第42次	九大	041001～090630	4800		縄文時代晩期～古墳時代初頭自然流路	1174・1246・1275・1276・1328・1354
0486	第43次		050207～050308	180		古墳墓道	1173
0523	第44次	九大	050601～051020	1189		古墳時代～古代集落	1064
0535	第45次(桑原古墳群A群)	公社	050720～051122	1128	3	円墳	1105
0538	第46次	福岡市土木局	050808～051011	403		弥生～中世集落	964
0562	第47次(元岡Ⅰ-1号墳)	九大	060105～060310	107	1	円墳	1064
0563	第48次	公社	060110～070203	447		弥生～古代集落	1173
0611	第49次	公社	060403～070322	2723		古墳時代～古代集落	1173・1356
0709	第50次	公社	070401～070827	811		近世末～近代墓地	1173
0741	第51次	公社	070829～081003	6888		古墳時代～古代集落	1173・1356
0763	第52次	九大	080121～090630	3900		弥生～古墳時代初頭自然流路	1354・1380
0768	第53次	九大	080219～080409	770		古代集落	1328
0844	第54次		081006～090109	1872		古代集落	1173・1380
1001	第55次	九大	100412～110330	3300	2	大型方墳・中世以降水田	1381
1043	第56次	九大	100914～111228	6970	2	大型円墳、中世集落	1210・1355・1381
1103	第57次	九大	110412～130906	6700		古墳時代包含層、古代～中世集落	1328・1356
1110	第58次	九大	110620～130315	1152		縄文時代早期集落、古代包含層	1301
1140	第59次	九大	120123～130315	2298		古墳時代～中世集落	1246
1306	第60次	九大	130522～130829	271		古墳時代～古代包含層	1302
1315	第61次	九大	130701～131023	407		古代包含層	1275
1327	第62次	九大	130901～131115	1374		中世集落	1356
1328	第63次	九大	131001～140423	1244		古代～中世集落	1328
1331	第64次	九大	131001～140430	2900	1	弥生集落、円墳、中世集落	1302
1413	第65次	九大	140602～141226	2451		弥生～古代包含層	1356
1525	第66次	九大	150929～151008	167		中世～近世包含層	1328

Ⅱ．各調査の成果

元岡・桑原遺跡群は平成 7 年（1995）から平成 27 年（2015）まで足掛け 21 年の調査を行ってきた。遺跡群の調査件数としては九州大学移転事業関連の調査として 64 件を数え、その他に前方後円墳、古墳群などの調査は次数外として実施し、また九大移転事業以外の調査も含めるとこれまでに行われた調査は 69 件に上る。

実施された調査の中には 42・52 次調査のように非常に大量の遺物が出土した調査や、7 次調査や 12 次調査のように大規模な製鉄遺構と大量の鉄滓関連遺物を検出した調査、多数の木簡が出土し、古代の文字資料に富んだ 20 次調査など多岐にわたっている。また前方後円墳・古墳群関連の調査においても前期前方後円墳の桑原金屎古墳や、鉄器製作集団との関連性が強い桑原石ヶ元古墳群、後期前方後円墳の石ヶ原古墳、圭頭柄頭や「庚寅銘大刀」が出土した元岡古墳群など、非常に多様な様相を示す。

これらを含む元岡・桑原古墳群の一連の調査内容について、以下、調査ごとに記載する。調査概要についてはスペースの都合で言及できなかった内容が多々あるが、既刊の報告書を参照して頂ければ幸いである。

調査次数	桑原金屎古墳	調査面積（㎡）	605	調査期間	19950820-19961129	調査番号	9657
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］石器（石鏃）							
古墳時代							
［出土遺構］前方後円墳（桑原金屎古墳）・方墳（桑原金屎 2 号墳・同 3 号墳）							
［出土遺物］							
調査概要							
古墳群は狭小な尾根上に位置し、金屎古墳は前方部を南西に向けて築造される。墳丘全長約 24m、後円部径 12.5 ～ 12.7m、前方部幅約 12m の規模で、後円部 3 段、前方部 2 段築成で、地形に従ってやや不整な形状を呈する。 主体部は後円部中央部に位置し、5.2 × 4.1m の方形に地山を掘り下げて墓壙とし、粘土郭を築造して全長 2.6m、幅約 0.7m の割竹形木棺を設置している。被葬者の頭位は前方部側に向く。 被葬者頭部両側に銅鏡 2 面が置かれ、木棺床面に赤色顔料（水銀朱・ベンガラ）が塗布される。木棺外から古式土師器・ガラス小玉が出土している。 古墳の年代は墳丘形状、副葬遺物から古墳時代前期後半とみられる。また 2 面の銅鏡は中国鏡とみられ、西晋後期～東晋の作と考えられる。							
特記事項							
調査途中で現地保存が決定したため、古墳は調査後埋め戻され、周辺は保全地区として現況のまま保存されている。							
調査担当者	山崎純男・久住猛雄・池崎譲二				掲載報告書	6（909 集）	

調査次数	石ヶ原古墳 1 次	調査面積（㎡）	1280	調査期間	19960827 ～ 19961129	調査番号	9685
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］前方後円墳（元岡石ヶ原古墳）							
［出土遺物］須恵器・土師器・鉄器（鉄鏃・鉄刀）							
調査概要							
石ヶ原古墳について、墳丘規模と埋葬主体の構造の確認のための調査を行う。 墳丘規模の確認のため、墳丘にトレンチを設定し、墳丘全長 55m、後円部径 34m、前方部長 21m、前方部幅 23m と推定した。 主体部は長 3.6m、幅 2.1m の横穴式石室で、天井部が崩れ、側壁上部の石材も失われていることが確認された。 トレンチ・石室内から須恵器・土師器・鉄器が出土し、出土遺物から 6 世紀の築造と考えられる。							
特記事項							
調査結果については、この後 35 次調査の結果によって一部修正されている。							
調査担当者	池崎譲二・松浦一之介				掲載報告書	6（909 集）	

調査次数	桑原石ヶ元古墳群	調査面積（㎡）	4737	調査期間	19960401-19981031	調査番号	9656

時代別出土遺構・遺物

古墳時代

［出土遺構］古墳 29 基

［出土遺物］

4 号墳：須恵器・装身具（土玉・ガラス玉・耳環）鉄器（鉄鏃）

5 号墳：須恵器・土師器（高坏）鉄器（鉄鏃・刀・刀子）

6 号墳：須恵器・鉄器（鉄鏃・刀・靭金具・鉸具）青銅器（鈴）装身具（ガラス玉・土玉・耳環）

7 号墳：須恵器・鉄器（鉄鏃・胡籙金具・刀・刀子）・馬具・石製品（紡錘車）装身具（ガラス玉・耳環）

8 号墳：須恵器・土師器・鉄器（鉄鏃・弓金具・刀・単鳳環頭大刀・鉄矛・石突・刀子）馬具（鞍・帯金具・帯先金具・飾金具・素環鏡板付轡・鞍金具・覆輪・輪鐙）装身具（ガラス玉・土玉・碧玉管玉・瑪瑙丸玉・水晶製切子玉・琥珀勾玉・耳環）

9 号墳：須恵器（坏・高坏・甕・壺・甕）土師器（坏・高坏・小型丸底壺）陶質土器（壺）・鉄器（鉄鏃・鉄斧）・石製品（紡錘車）

11 号墳:須恵器（坏･高坏･壺･平瓶･甕）武器（鉄刀･鉄鏃）馬具（素環鏡板付轡）工具（刀子)･装身具（ガラス小玉･耳環）

12 号墳：須恵器・土師器・武器（鉄鏃・弓金具・刀）馬具（鈴・鉸具・辻金具・雲珠・素環鏡板付轡）農工具（刀子・鉄鋸･鉄鉇･鉄斧･鑿･金床･金槌･金鉗）装身具（ガラス玉･耳環）　13 号墳:須恵器　14 号墳:須恵器･武器（鉄刀）

17 号墳：須恵器･土師器･土製品（人形)･武器（鉄鏃･鉄刀)･工具（刀子)･装身具（ガラス玉・碧玉管玉・瑪瑙勾玉・耳環）

18 号墳：須恵器

19 号墳：須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀)・工具（刀子)・馬具（楕円形鏡板付轡・鉸具・吊手金具)・装身具（ガラス玉・碧玉管玉・翡翠勾玉・耳環）

20 号墳：須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀・鞘尻金具)・馬具（馬鐸)・装身具（碧玉管玉・水晶切子玉・硬玉勾玉）

21 号墳：須恵器・弥生土器　22 号墳：須恵器　23 号墳：須恵器　25 号墳：須恵器・装身具（ガラス玉）

27 号墳：須恵器・工具（刀子・砥石)・装身具（ガラス小玉・耳環）

28 号墳：須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀）工具（鉇・鑿・刀子)・装身具（ガラス玉・水晶玉・土玉・耳環）

29 号墳：須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀）工具（刀子・鎌）　30 号墳：須恵器・土師器　32 号墳：須恵器

33 号墳：武器（鉄鏃・鉄刀）工具（刀子）　34 号墳：須恵器・武器（鉄刀）　35 号墳：須恵器

37 号墳：武器（鉄刀)・工具（刀子)・装身具（ガラス玉）

調査概要

桑原石ヶ元古墳群のうち、4 号墳から 37 号墳までの 29 基の調査。10・15・16・24・26 号墳は古墳でないことが判明し、欠番。

4 号墳:径 13m の円墳。主体部は両袖式単室横穴式石室。玄室長 2.3m、玄室幅 1.3m。玄室床面の敷石は 2 面確認。6 世紀後半の遺物が出土。

5 号墳：径 16m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 3.1m、玄室幅 1.7m。6 世紀後半 ~7 世紀の遺物が出土。

6 号墳：径 20.5m の円墳。石室石材は奥壁以外遺存せず。玄室長 3.9m、玄室幅 2.4m。玄室・墳丘から 6 世紀後半～ 7 世紀の遺物が出土。

7 号墳：径 17m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 3.0m、玄室幅 1.7m とみられる。墳丘から 6 世紀後半の遺物が出土。

8 号墳：墳丘形状・規模不明。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.4m、玄室幅 1.9m。玄室内に 2 面の敷石を確認。玄室内から単鳳環頭大刀をはじめ 6 世紀末～ 7 世紀の遺物が出土。

9 号墳:径 18m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.4m､玄室幅 1.6m。墳丘から 6 世紀後半～末の遺物が出土。

11 号墳：径 12m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.3m、玄室幅 1.8m。玄室内に 4 面の敷石を確認。玄室から 7 世紀の遺物が出土し、墓道から供献鉄滓が出土。
12 号墳：径 14m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.7m、玄室幅 1.9m。玄室内は屍床を区画し、3 面の床面を確認。玄室内から人骨の他、6 世紀末～ 7 世紀初頭の遺物が出土。
13 号墳：墳丘形状・規模は不明。両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 1.7m、幅 1.1m とみられる。6 世紀後半か。
14 号墳：径 16m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 3.2m、玄室幅 1.7m と推定される。6 世紀後半～末か。
17 号墳：径 14m の円墳。玄室長 3.3m、玄室幅 1.9m。床面の敷石は 1 面で、6 世紀中頃の遺物が玄室から出土している。
18 号墳：墳丘形状・規模は不明。両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 1.6m、玄室幅 1.3m。墳丘・石室から 7 世紀前半の遺物が出土。
19 号墳：径 16m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 3.5m、玄室幅 2.4m。床面の敷石は 1 面で、6 世紀中頃の遺物が出土した。
20 号墳：径 15m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 2.7m、玄室幅 1.8m。敷石は 1 面で、石室撹乱から 6 世紀後半の遺物が出土。
21 号墳：墳丘規模・形状は不明。両袖式単室の横穴式石室で玄室長 2.3m、玄室幅 2.1m。墳丘・石室撹乱から 6 世紀前半と 6 世紀後半の遺物が出土した。墳丘から須玖Ⅰ式の甕破片が出土している。
22 号墳：径 12m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で玄室長 2.4m、幅 1.9m だったとみられる。
23 号墳：墳丘規模・形状は不明。石室隅角の腰石のみ遺存し、石室形状・規模は不明。6 世紀中頃の須恵器坏が出土した。
25 号墳：墳丘規模・形状は不明。石室床面の一部のみ遺存し、石室形状・規模は不明。6 世紀後半とみられる須恵器が出土した。
27 号墳：墳丘規模・形状は不明。床面と腰石の一部のみ遺存し、石室形状・規模は不明。6 世紀後半～ 7 世紀初頭の遺物が出土した。
28 号墳：径 12m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で玄室長 2.7m、玄室幅 1.7m。床面の敷石は 4 面で、6 世紀末～ 8 世紀の須恵器が出土。
29 号墳：径 15m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で玄室長 2.1m、玄室幅 1.4m、羨道長 3.1m。6 世紀中頃から 8 世紀の遺物が出土した。
30 号墳：径 8m の低墳丘墳。竪穴系横口式石室で、玄室長 2.1m、玄室幅 1.1m。床面で敷石を 1 面確認した。6 世紀前半の遺物が出土している。
31 号墳：径 10m の円墳。竪穴系横口式石室で、玄室長 2.4m、幅 1.1m。出土遺物はない。
32 号墳：径 8m の低墳丘墳。竪穴系横口式石室で、玄室長 2.5m、幅 1.2m とみられる。墳丘盛土から 5 世紀後半の須恵器が出土。
33 号墳：径 10m の円墳。竪穴系横口式石室で、玄室長 2.6m、幅 1.2m。玄室床面に敷石を 1 面確認し、鉄鏃・鉄刀が出土した。
34 号墳：径 10m の円墳。竪穴系横口式石室で、玄室長 2.9m、幅 1.2m。床面に敷石を確認している。
35 号墳：径 10m の円墳。片袖式竪穴系横口式石室で、玄室長 2.9m、玄室幅 1.0m。玄室床面には敷石を 1 面確認した。
36 号墳：墳丘規模・形状は不明。竪穴系横口式石室で、玄室長 3.3m、幅 1.3m とみられる。出土遺物はない。
37 号墳：墳丘規模・形状は不明。床面の一部のみ遺存し、石室形状・規模は不明。

特記事項

出土遺物に多くの製鉄・鍛冶関連遺物がみられ、鉄器生産集団の首長層の墳墓群と考えられる。

調査担当者	松浦一之介・小林義彦・久住猛雄	掲載報告書	2（744 集）

調査次数	1 次（試掘）	調査面積（㎡）	8154	調査期間	19960401-19960930	調査番号	9602
調査概要							
九州大学統合移転用地内の造成予定地を対象とした試掘調査。水田・果樹園跡地等、バックホーで侵入・試掘可能な地点について全 538 本のトレンチを設定し、試掘調査を実施した。 試掘調査の結果、移転用地ほぼ全域で遺構を検出した。遺跡の時代は縄文～中世・近世に及び、集落の他、製鉄関連遺構の可能性のある遺構・遺物も確認した。							
特記事項							
調査担当者	池崎譲二				掲載報告書	概報 1（693 集）・概報 2（743 集）	

調査次数	2 次	調査面積（㎡）	3007	調査期間	19961111-19970325	調査番号	9656
時代別出土遺構・遺物							
旧石器・縄文時代							
［出土遺構］土坑・どんぐりピット							
［出土遺物］旧石器（ナイフ形石器・スクレイパー）・縄文土器（鉢）・打製石器（石鏃・スクレーパー・石核）							
弥生時代							
［出土遺物］弥生土器（壺・甕・高坏・器台）磨製石器（石斧）							
古墳時代							
［出土遺構］掘立柱建物							
［出土遺物］須恵器（坏・蓋・甕）土師器（甕・壺・甑）							
古代							
［出土遺物］須恵器（坏・皿）土師器（坏・鉢・碗）鉄滓							
中世							
［出土遺物］土師器（坏）							
調査概要							
現行の水田畦畔単位で 7 区画分の調査。 1 区では古代の水田が検出された。2 区では古代の水田跡と縄文～古墳時代の包含層・柱穴群が検出される。2 区と 3 区を中心に縄文時代中期から後期・晩期の土器が出土する。 3 区では包含層・土器だまり・溝・土坑・柱穴があり、縄文～古代の遺物が出土する。 4 区では自然流路が検出され、遺構内から陶質土器が出土している。5 区では古代の水田、土坑、溝、自然流路が検出される。6 区では古代の水田跡と包含層、自然流路、土坑を確認した。7 区では縄文時代のどんぐりピットをはじめ縄文～古代の包含層、土坑を検出した。　どんぐりは C14 年代で 2820 ± 110BP の測定値が出ている。							
特記事項							
調査担当者	久住猛雄				掲載報告書	1（722 集）	

調査次数	3 次	調査面積（㎡）	3500	調査期間	19971113-19990222	調査番号	9763
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］集石遺構・炉穴（連結土坑）・焼土面							
［出土遺物］縄文土器（早期：押型文土器・撚糸文土器・刺突文土器　中期：曽畑式土器・阿高式土器）・打製石器							
弥生時代							
［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物							
［出土遺物］弥生土器・石器							
古墳時代							
［出土遺構］円墳（元岡古墳群 M-2 号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・甕）・土師器（坏）・須恵器模倣土師器（器台・有蓋高坏）・鉄器（鏃・鎌・刀子）・耳環							
調査概要							
調査区は東側に開口する谷の北側斜面に位置する。 縄文時代の遺構は早期の撚糸文・刺突文土器から押型文土器の時期で、集石遺構は炉とみられ、形態から数タイプに分けられる。連結土坑は C14 年代測定で BP9120 ± 45 の値が出ており、遺構面の深さから撚糸文・条痕文土器の時期とみられる。 弥生時代中期後半の竪穴住居は平面形が方形・隅丸方形で、斜面を掘り込んで平坦面を作り築造している。造成によって斜面下部側が削られ、遺存状況は悪い。 M-2 号墳は主尾根から南に延びていた尾根の線端部に作られた小円墳とみられる。谷部下部を欠き、墳丘盛土も削られているが、遺存する周溝から径 9m の円墳が復元できる。玄室は幅 1.8m の規模で、床面の敷石は 3 面確認できる。							
特記事項							
調査担当者	菅波正人			掲載報告書	3（829 集）		

調査次数	4 次	調査面積（㎡）	1219	調査期間	19971201-19980331	調査番号	9764
時代別出土遺構・遺物							
弥生～古代							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺）須恵器（坏・甕）・土師器（甕）							
中世							
［出土遺物］青磁（龍泉窯系碗･同安窯系碗･皿）、土師器（皿･坏･鍋）、瓦器（坏）、国産陶器（捏鉢）、中国陶器（壺）							
調査概要							
調査区は石ヶ元古墳群の位置する尾根に挟まれた谷部に位置する。谷奥部は中世に埋め立て造成を行い、平坦面を作り出している。掘立柱建物は周囲に溝を伴い、同一で数度の建て替えを行っている。龍泉窯系青磁碗をはじめとする遺物が出土し、12 世紀後半～ 13 世紀前半の遺構群とみられる。 下段の造成面には土止めのための 3 列の石列が約 30m 間隔で並んでおり、土手を築造しながら埋め立てを進めた状況が看守できる。埋め立て時期は 13 世紀より実施されたとみられる。 調査区北側は谷部になり、遺構は存在しない。包含層や表土中から弥生～古代の遺物が出土しており、尾根部からの流れ込みとみられる。 調査担当者は「元岡城」に関連する遺構と考えている。							
特記事項							
調査担当者	池崎譲二			掲載報告書	3（829 集）		

調査次数	5 次	調査面積（㎡）	2,500	調査期間	19980427-19980623	調査番号	9811
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代～古代							
［出土遺構］土坑・柱穴							
［出土遺物］須恵器・土師器							
調査概要							
調査区は 3 次調査区の位置する谷の谷奥部に位置し、桑原石ヶ元古墳群が築造された丘陵の南側斜面にあたる。調査地点の標高は 30m 付近である。 調査の結果斜面を削り出して造成した平坦面と、土坑・柱穴と自然流路・包含層を検出した。出土遺物は古墳後期のものとみられ、調査区北側に隣接する古墳群からの流れ込みによる二次堆積物と考えられる。							
特記事項							
調査担当者	松村道博			掲載報告書	概報 1（693 集）・年報 Vol.13		

調査次数	6 次	調査面積（㎡）	2880	調査期間	19980630-19980828	調査番号	9812
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］柱穴・土坑・自然流路・包含層							
［出土遺物］須恵器・土師器							
調査概要							
調査地点は西に開口する谷の谷奥部にあたり、桑原石ヶ元古墳群が築造された丘陵の南西側斜面にあたる。調査地点の標高は 22m 前後である。 調査区最高所にトレンチを設定したが古墳は確認できなかった。谷部では丘陵裾部にピット群を検出し、丘陵裾部と谷中央部に溝・流路を確認した。丘陵裾部の溝は断面 V 字形で、幅 1.5m をはかる。谷部の包含層の下層でピット群を検出している。 土坑と包含層から須恵器・土師器の小片が出土し、古墳時代後期のものとみられる。							
特記事項							
調査担当者	松村道博			掲載報告書	概報 1（693 集）		

調査次数	元岡 D 群 （確認調査）	調査面積（㎡）	60	調査期間	19971110 ～ 19971128	調査番号	9771
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］古墳 2（元岡古墳群 D-1 号墳・D-2 号墳）							
［出土遺物］ 1 号墳：須恵器（壺・高坏・有蓋脚付壺・器台・提瓶）、鉄器（刀子・鉄斧・馬具・鉄鏃）、装身具（鐵釧・ガラス小玉） 2 号墳：須恵器							
調査概要							
移転用地内の古墳群の確認調査として実施される。 1 号墳：径約 10m の円墳。石室は下部のみ遺存し、北側に開口する両袖型単室の横穴式石室。玄室長・幅は約 2.0m で玄室は正方形を呈する。6 世紀後半の築造と考えられる。 2 号墳：主体部は確認できず。周溝とみられる溝を確認したが、墳丘規模は不明。							
特記事項							
古墳群は緑地地区にあたり、現状で保存されている。							
調査担当者	松浦一之介			掲載報告書	年報 Vol.12		

調査次数	7 次	調査面積（㎡）	7500	調査期間	19980506-19990611	調査番号	9813
時代別出土遺構・遺物							
旧石器・縄文時代							
［出土遺構］包含層							
［出土遺物］縄文土器（押型文土器･条痕文土器･阿高式系土器･晩期粗製深鉢）石器（細石刃･細石刃核･ナイフ形石器）							
弥生時代							
［出土遺物］弥生土器・石器（石斧・石包丁・石鏃）							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物・土坑							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・高坏）・土師器（甕・壺）・埴輪（壺形埴輪・円筒埴輪）							
古代							
［出土遺構］掘立柱建物・柵・土坑・製鉄炉・鍛冶炉・堰・池状遺構							
［出土遺物］須恵器（坏･皿･鉢･甕･壺･平瓶･硯）･土師器（甕･壺･甑･製塩土器･竈）･木簡（「壬辰年韓鉄□□」･「里長」「嶋里」・荷札木簡・郡符木簡）・鉄滓・炉壁・羽口・装身具（土玉）・刻書土器・墨書土器・鉄製品（鉄鏃器・刀子・鎌、鉸具）・木製品（鞍・容器・櫛・曲物）・祭祀具（馬形・舟形・人形）・瓦（軒丸瓦・平瓦・熨斗瓦）・石製品（石鍋・権・紡錘車）							
調査概要							
旧石器・縄文・弥生時代の遺物は古墳時代以降の包含層に混入するものが多く、遺構はない。古墳時代前期の遺物は池ノ浦古墳からの流入とみられ、埴輪等が確認できる。 古墳時代後期～末の遺構は谷奥部の西側斜面を中心に分布し、竪穴住居・掘立柱建物等が検出されたが、古代以降の造成により遺存状況は悪い。 古代の集落は谷奥部の西斜面を造成して 3 段の平坦面を形成した上に作られ、掘立柱建物、柵・土坑等が確認されている。また谷奥や東斜面には製鉄炉・鍛冶炉が作られ、谷を堰き止めた池状遺構も作られる。池状遺構からの排水溝 SD13 から「壬辰年韓鉄□□」銘木簡が出土しており、出土遺物から池状遺構の年代は 7 世紀末とみられる。製鉄炉は 8 世紀中頃以降に操業されたと考えられる。							
特記事項							
造成面 SX111 と池状遺構 SX123 を中心とした範囲は埋戻し保存されている。							
調査担当者	吉留秀敏			掲載報告書	12（1012 集）14（1063 集） 27（1302 集）		

調査次数	8 次 （元岡 M-1 号墳）	調査面積（㎡）	300	調査期間	19980916-19981225	調査番号	9829
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕）・磨製石器（石斧）							
古墳時代							
［出土遺構］円墳（元岡古墳群 M-1 号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・平瓶・壺・甕）土師器							
調査概要							
石ヶ元古墳群 19 号墳の南東側に位置する古墳の調査。石室石材は大部分が失われる。墳丘は平面形が楕円形で南北 17.5m、東西 14.0m を測り、北側に丘陵切断の溝が掘られる。 石材の抜き痕から、石室は全長 4.8m、玄室幅 1.8m、玄室長 2.8m の両袖単室式の横穴式石室とみられる。原位置を保つ遺物はなく、石室内撹乱土や石室外から須恵器・土師器などが出土した。土器の年代は 7 世紀以降で、古墳の立地とあわせ、終末期古墳だった可能性が高い。 弥生時代の遺物は墳丘構築時に混入したものとみられ、丘陵端部に集落があったことを示唆する。							
特記事項							
調査担当者	松村道博			掲載報告書	3（829 集）		

調査次数	9 次	調査面積（㎡）	190	調査期間	19981102 ～ 19981210	調査番号	9851
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］竪穴住居 2 棟							
［出土遺物］弥生土器（壺・甕・高坏等）							
調査概要							
元岡瓜尾貝塚の西側丘陵先端部の調査。調査区周囲は土砂採掘や果樹園造成により大きく削られ、調査区内も削平を受けている。 調査区内で方形の竪穴住居 2 棟を検出したが、削平を受け、遺存状況は悪い。竪穴住居はいずれも 2 本主柱で両側に地山整形によるベッド状遺構を設けるもので、出土遺物より弥生時代後期後半～末の時期にあたるとみられる。							
特記事項							
調査担当者	松浦一之介				掲載報告書	19（1172 集）	

調査次数	10 次	調査面積（㎡）	1336	調査期間	19990106-19990225	調査番号	9854
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代～縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］打製石器（台形様石器・剥片尖頭器・剥片）・局部磨製石斧							
古墳～中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器・土師器・青磁							
調査概要							
調査地点は大原川右岸の標高 20m 前後の谷部で、河川堆積層上面で遺構検出を行ったが、近代以降の水田に伴う溝・暗渠以外の遺構は検出できていない。近代の溝状遺構内から旧石器～縄文草創期の石器が出土した。 出土遺物は須恵器・土師器・青磁の細片の他、神子柴型とみられる局部磨製石斧、剥片尖頭器が出土している。いずれも河川堆積による二次堆積とみられる。							
特記事項							
調査担当者	松浦一之介				掲載報告書	概報 1（693 集）・年報 Vol.13	

調査次数	11 次	調査面積（㎡）	1650	調査期間	19990106-19990320	調査番号	9855
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］土器溜・溝状遺構							
［出土遺物］須恵器（坏・甕）土師器（坏・甕・壺）鉄器（鋤先）							
調査概要							
調査区は北に開口する幅広の谷の谷奥部にあたる。調査区内の西側斜面の裾に沿った長さ 8m、幅 1m の範囲で土器が堆積しており、須恵器・土師器・鉄製鋤先が出土した。堆積状況から、6 世紀後半の集落にともなう廃棄遺構とみられる。 調査区内で集落は検出されておらず、集落は調査区西側斜面にあった可能性が高い。							
特記事項							
調査担当者	松村道博				掲載報告書	3（829 集）	

調査次数	12 次	調査面積（㎡）	5500	調査期間	19990406-20000328	調査番号	9902
時代別出土遺構・遺物							
弥生～古墳時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺）須恵器（坏・横瓶）土師器（甕・壺・高坏）							
古代							
［出土遺構］製鉄炉 27・砂鉄ピット・溝・土坑							
［出土遺物］鉄滓・須恵器（坏・壺）土師器（甕・壺・碗）黒色土器（碗）青磁（越州窯系碗）木製品（送風管・棒状木製品・火錐臼）							
中世							
［出土遺物］青磁（龍泉窯系碗）白磁（碗）							
調査概要							
調査地点は平川池の南に位置する、東に開口する谷部である。 谷の北側の段造成を行った平坦面に、製鉄炉が 27 基確認できた。製鉄炉の分布は東西約 60m、南北 6m の帯状の範囲に広がり、大きく 6 つの小群を形成している。各小群は 3m ほどの間隔を取って 10m 前後の範囲にまとまる。製鉄炉の形態は箱型炉の両側に排滓坑がつくもので、形態上 3 類に分類可能である。 共伴する須恵器の年代は 8 世紀中ごろ～後半を主とすることから、この時期の前後を含む期間の操業が考えられ、鉄滓の放射性炭素年代測定もこれを裏付ける。 出土した鉄滓・炉壁は総量で 78t に及ぶ。分析の結果、大原海岸の砂鉄に近い成分を原料とした製鉄を行っていたことが明らかとなった。							
特記事項							
調査終了後、全面を埋め戻して現地保存を行っている。							
調査担当者	菅波正人			掲載報告書	4（860 集）14（1063 集）		

調査次数	13 次（E 群）	調査面積（㎡）	600	調査期間	19990412-20000316	調査番号	9903
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］前方後円墳（元岡古墳群 E-1 号墳）・円墳（E-2 号墳）							
［出土遺物］ 1 号墳：銅鏡 2 号墳：鉄器（鋤先・斧・鎌・鉄鏃・刀子）・須恵器（坏・提瓶・𤭯・甕・壺）・玉類（ガラス・碧玉）・耳環							
調査概要							
E-1 号墳は前方後円墳で墳丘西側が大きく削られるが、全長 35m、後円部径 22m、前方部長 15m、後円部・前方部とも 2 段築盛と推定できる。主体部は削平を受け、さらに近世墓によって破壊されているが粘土郭で割竹形木棺とみられ、粘土郭の灰色粘土内から直径 9.2cm の方格 T 字鏡が出土した。古墳時代前期に築造された可能性がある。 E-2 号墳は径 11m の円墳で、北西側に馬蹄形溝が残る。主体部は両袖式単室の横穴式石室とみられるが大きく削平されているが、側壁痕跡から玄室長 2.7m、幅 2.6m、羨道長 1.2m と推定できる。玄室敷石は 3 面確認でき、最下面を中心に副葬品が出土した。6 世紀前半の築造時期が考えられる。 E-3 号墳は E-2 号墳の下層で検出され、径 9.6m の円墳とみられる。主体部は割竹形木棺とみられ、長 3m の墓壙内に長さ約 2m、幅 64m の木棺を据えている。西側周溝にも土器棺墓が作られる。古墳時代初頭の築造とみられる。							
特記事項							
調査担当者	松浦一之介			掲載報告書	5（861 集）		

調査次数	14 次	調査面積（㎡）	1200	調査期間	19990422-19990722	調査番号	9904
時代別出土遺構・遺物							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］ 土師器							
調査概要							
調査区は大原川の湧水点（幸ノ神）の東側に位置し、北西に開口する谷の下部にあたる。 調査の結果、丘陵斜面で径 10 ～ 30cm のピットを確認し、谷部包含層から古代の土師器が少量出土したが、斜面に遺構群を想定するには出土量が少なく、調査区内に集落は存在しないとみられる。							
特記事項							
調査担当者	松村道博				掲載報告書	概報 1（693 集）	

調査次数	15 次	調査面積（㎡）	3500	調査期間	19990611-19990928	調査番号	9923
時代別出土遺構・遺物							
旧石器～縄文時代							
［出土遺物］ 打製石器（ナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器・細石刃・石鏃等）縄文土器（阿高式系土器）							
弥生時代							
［出土遺物］ 弥生土器（甕・高坏）石器（石斧・石剣・石鎌）鉄器（鋳造鉄斧）							
古墳時代							
［出土遺物］ 土師器（甕・高坏・壺・甑）須恵器（坏・甕・壺）装身具（翡翠製小玉）木製品（鍬）							
古代							
［出土遺物］ 須恵器（坏）白磁（碗）青磁（越州窯系碗・水注壺）木製品（鍬・刀把・容器）							
中世							
［出土遺構］ 水田・溝状遺構・石組遺構（護岸・通路）							
［出土遺物］ 土師器（碗）・青磁（龍泉窯系碗）							
調査概要							
製鉄炉が 27 基出土した 12 次調査区の谷の開口部東側に隣接する。調査区の標高は 12 ～ 22m で、大原側北岸の低位段丘面に遺物包含層と 2 面の遺構面が確認されている。 第 1 面では水田・溝・石組遺構などが検出された。溝の築造時期は 11 ～ 13 世紀で、斜面造成に伴うものとみられる。水田は長方形に区画され、区画面積は 50 ～ 80㎡と小規模で、古代末とみられる。配石遺構は護岸や通路とみられる。 第 2 面では 12 次調査区から続く幅約 10m の自然流路があり、流路中途の湧水土坑と、杭列による井堰が設けられている。井堰の時期は古墳時代初頭とみられる。流路内の鉄滓包含層の下層から解除木簡が出土した。 そのほか、旧石器、縄文後期前半、弥生中期～後期初頭の遺物も遺構覆土や包含層から出土した。 解除木棺は折敷底板を転用したもので、十数片に破断している。内容は解除（祓）の祓具の品目数量を記載したもので、70 文字が遺存しており、製鉄操業前のものとみられる。8 世紀代の解除木簡としてはこれまでで唯一のものである。出土状況から大規模な製鉄事業の開始に関わる儀礼に伴うものとみられ、地方での祭儀の実態を示すものとして重要な資料である。							
特記事項							
調査担当者	吉留秀敏				掲載報告書	4（860 集）	

調査次数	16 次	調査面積（㎡）	1200	調査期間	19990802-19991110	調査番号	9933
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺物］ 縄文土器							
古代							
［出土遺構］ 柱穴・ピット							
［出土遺物］ 土師器							
調査概要							
調査区は北東に開く谷の谷奥に位置する。調査区内の中央に谷が入り、谷東側斜面でピットを検出したが、集落としてまとまるものではない。 古代の包含層の下層で縄文土器が数点出土したが、トレンチ調査の結果遺構・遺物とも検出できなかった。 調査区内で出土した遺物は少量で小片であることから、調査区周辺からの流入、二次堆積によるものとみられ、集落は調査区外にあるものとみられる。							
特記事項							
調査担当者	松村道博				掲載報告書	概報 1（693 集）	

調査次数	17 次 （元岡 B 群）	調査面積（㎡）	517	調査期間	19990910-19991208	調査番号	9934
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］円墳 2							
［出土遺物］1 号墳：須恵器（坏・壺）・土師器・玉（ガラス小玉・ガラス粟玉）・鉄器　2 号墳：須恵器（坏）・土師器（坏）・朝鮮陶器							
調査概要							
古墳群は池ノ浦古墳の北側の尾根に位置し、2 基の円墳で構成される。B-1 号墳は直径 12m を測り、内部主体は竪穴系横口式石室で玄室長 1.5m、奥壁幅 0.8m と推定される。羨道は全長 60 ～ 70cm で、板石で玄室を閉塞している。石室床面からは土師器・須恵器・鉄器・玉等の副葬品が出土した。6 世紀中ごろの築造で 6 世紀後半までの使用が認められる。 2 号墳は墳丘北側が大きく削られているが径 11m の円墳とみられる。主体部は竪穴系横口式石室で、玄室長 2m、玄室幅 0.8m を測る。床面の敷石は 2 面確認できたが、玄室内からは副葬遺物は出土していない。墓道から供献土器が出土している。6 世紀中ごろの築造が考えられる。							
特記事項							
調査担当者	松浦一之介			掲載報告書	5（861 集）		

調査次数	18 次	調査面積（㎡）	16800	調査期間	19991010 ～ 20020215	調査番号	9946
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代							
［出土遺構］遺物包含層							
［出土遺物］石器（台形様石器・ナイフ形石器・三稜尖頭器・スクレーパー・細石核等）							
縄文時代							
［出土遺構］遺物包含層							
［出土遺物］石器（打製石鏃・スクレーパー・打製石斧）							
弥生時代							
［出土遺構］遺物包含層							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺）土製品（円板）・石製品（石包丁・磨製石斧）							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居 21・掘立柱建物・埋納遺構（須恵器坏・編籠）・貝だまり遺構・古墳（桑原古墳群 A-12 号墳）・石組遺構							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・鉢・甕・高坏・台付直口壺・横瓶・平瓶・提瓶）・土師器（甕・壺・小型壺・碗・高坏・甑）							
古代							
［出土遺構］掘立柱建物・製鉄炉 7・鍛冶炉 44・井戸 6							
［出土遺物］土器：須恵器（坏・壺・甕・高坏・提瓶・横瓶・平瓶）・土師器（坏・壺・甕・高坏・甑・竈）墨書土器（「官」「廣刀自」） 石製品：滑石製品・軽石製品・紡錘車・石錘・砥石・磨石・敲石・石皿・台石・石権 木製品：農具（鍬・鎌柄・把）・漁具（ヤス）・武器・馬具（居木）服飾具（下駄）・容器（刳物・曲物）・食事具（御敷）・家具（椅子）・遊戯具（独楽）・計量具（秤）・建築材・木簡							
中世							
［出土遺構］掘立柱建物・道路・井戸・木棺墓・土坑・溝・貯水遺構・水田							
［出土遺物］土師器（坏・皿・鍋・鉢）・陶磁器（火舎・捏鉢・擂鉢・坏）・石鍋							
調査概要							
北西方向に開口する谷の調査で、谷の内部に堆積した 6m 以上の包含層では旧石器～近世まで 5 面の遺構面が捉えられる。上層より順に、中世～近世では斜面を方形に造成して、12 ～ 14 世紀の集落と水田を築造している。古代の遺構は 8 世紀前半と 8 世紀後半に分かれ、8 世紀後半頃の遺構は斜面に大規模な造成を行った壇状遺構と、建物跡、製鉄炉・鍛冶炉を確認している。古墳時代後期では竪穴住居と掘立柱建物からなる集落跡を確認した。最下面では弥生時代以前。第 4 面から 5 面の間の包含には旧石器～弥生時代の遺物が含まれる。縄文時代の遺物は後期後半～晩期の資料が多く、弥生時代の遺物は中期後半のものが主体である。 古墳時代の住居群は第 4 面で 21 棟を確認し、斜面上に 4 つの群に分かれて分布する。竈が確認できる住居もあり、出土遺物から 6 世紀後半～末とみられる。埋納遺構は盆状の網籠内に須恵器坏を 4 個配置したもので、6 世紀後半の祭祀に関わるものとみられる。							

製鉄炉は炉の両側に排滓坑がつく型式で、谷の両側に規則的に配置され、出土遺物から 7 世紀末とみられる。鍛冶炉は碗形で、7 世紀中ごろ～後半とみられる。

井戸は谷頭に集中し、7 世紀代の築造とみられ、下流に陸橋によって谷を堰き止めた貯水施設が作られ、これらの施設は鍛冶炉・製鉄炉群との関連性が認められる。

桑原古墳群 A 群 12 号墳（SX-271）は谷部南側斜面上に築かれた直径 5m の墳丘をもつ小型の横穴式石室墳で、出土遺物から 6 世紀後半とみられる。

中世の遺構群は小規模な水田と集落から構成され、安楽寺領桑原庄の「別所」として設けられた可能性がある。

特記事項

SX-111 出土の居木は国内最古例（古墳時代末～古代前半）のものとみられる。中世の遺物は別所僧坊群と関連する可能性がある。

調査担当者	吉留秀敏	掲載報告書	14（1063 集）16（1102 集）19（1172 集）23（1246 集）27（1302 集）

調査次数	19 次	調査面積（㎡）	3200	調査期間	19991016-19991215	調査番号	9947

時代別出土遺構・遺物

中世

［出土遺構］

［出土遺物］土師器

調査概要

調査区は大原川の最上流部にあたり、北東に開く主谷部の西側に鋸歯状に入る支谷の 1 つにあたる。調査の結果、谷に面した斜面上でピットを確認した。

谷部に堆積した包含層から中世の土師器皿の破片が出土した。土師器皿は底部糸切りで、12 世紀以降とみられる。遺物は小片で流れ込みによる二次堆積とみられ、集落域は調査区外にあるものとみられる。

特記事項

調査担当者	松村道博	掲載報告書	概報 2（743 集）

20次調査区全景（北東から）

調査次数	20 次	調査面積（㎡）	20130	調査期間	20000405-20030523	調査番号	0001

時代別出土遺構・遺物

旧石器～縄文時代

［出土遺構］

［出土遺物］石器（ナイフ形石器・ポイント・細石核・石鏃・石錐・スクレーパー・石匙・）・縄文土器（押型文土器・阿高式土器）

弥生時代

［出土遺構］

［出土遺物］弥生土器（二重口縁壺・高坏・甕・土錘）・石器（磨製石斧・石包丁・紡錘車）

古墳時代

［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物・池状遺構

［出土遺物］須恵器（坏・甕・壺・高坏・杯・平瓶・提瓶・瓶・他）・土師器（壺・甕・鉢・高坏・甑・器台・他）・陶質土器（甕）・鉄器（剣・刀・斧・槌・鑿・鍛）・祭祀具（土製模造鏡・滑石製有孔円板・勾玉・子持勾玉・臼玉・水晶製切子玉）

古代

［出土遺構］掘立柱建物・池状遺構・製鉄炉・鍛冶炉・焼土坑

［出土遺物］須恵器（坏・高坏・皿・壺・甕・横瓶・硯）・土師器（甕・高坏・甑）・陶磁器（新羅緑袖陶器・越州窯系青磁皿・灰釉陶器碗）・鉄器（刀）・帯金具・平瓦・墨書土器・刻書土器・木製品（工具・農具・紡織具・服飾具・容器・食事具・琴柱・弓・祭祀具（人形・舟形・男根形））・木簡

調査概要

調査区西側丘陵斜面を中心に古墳時代の竪穴住居 70 軒以上を確認し、未掘包含層の下層にもさらに多くの住居が想定される。竪穴住居群の時期は 5 世紀から 7 世紀まで継続し、池 SX-044 を囲むように集落があったとみられる。平面プランは方形で、竈を持つものが多い。

調査区東側の谷を長さ 14m の築堤で堰き止めた池状遺構 SX001 からは古墳時代から古代にかけての農具・工具・紡績具・服飾具（櫛・下駄）・容器・食事具（杓子）・遊戯具（琴柱）・祭祀具（舟形・人形・男根形）・武器（弓）等の木製品が多量に出土した。また池状遺構 SX-044 は 4 世紀後半から 5 世紀にかけて堰き止めて築造され、4 世紀～ 6 世紀を中心とする時期の建築材・農具・工具や祭祀関係の遺物が出土した。流路内の窪みを利用した貯木遺構 SX162 からは 6 世紀後半の建築部材（柱材・ネズミ返し・梯子等）が出土した。

SX001 から紀年銘木簡（太寶元年・701 年）が出土した。その他に「嶋郡赤敷里」「登志郷」「常石田」などの地名、「「難波部」「額田部」「久米部」「建部」「中臣部」「乙猪」「嶋足」などの人名、「嶋里」「里長」などの郡符木簡、さらには祭祀に関わるものや役職名など多種多彩な木簡・墨書土器が出土した。

特記事項

調査中途で保存が決まり、建物が密集する 1 区の範囲を中心に埋戻し保存されている。古墳時代以下の層は未調査である。

調査担当者	菅波正人　屋山洋	掲載報告書	8（962 集）13（1013 集）14（1063 集）18（1105 集）28（1328 集）

調査次数	21 次	調査面積（㎡）		調査期間	20000405-20000921	調査番号	0002
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］古墳（2 区：桑原石ヶ元 1 ～ 3 号墳・小石室墳　3 区：桑原古墳群 A-1 号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・平瓶・高坏）・土師器（坏・皿）鉄器（鉄鏃・刀子・鉇・杏葉・帯金具）・玉類（ヒスイ勾玉・琥珀棗玉・ガラス小玉等）・耳環							
中世							
［出土遺構］包含層							
［出土遺物］青磁（龍泉窯系　碗・皿）・瓦器（碗）・陶器（四耳壺・土鍋）・朝鮮陶器（碗）							
調査概要							
県道工事にともなう調査。1 区では谷を埋め立てて整地した面から 13 世紀の遺物が出土した。2 区は桑原石ヶ元古墳群 1 号墳～ 3 号墳の調査で、墳丘・石室は削平・破壊を受け、石材の多くが抜き取られていたが、2 号墳は墳丘直径 22m と推定される古墳群内最大級の規模で奥壁側に屍床を設置していたことが明らかとなった。 3 区の桑原古墳群 A-1 号墳は右側壁の一部しか遺存していない。出土遺物から 6 世紀末の築造とみられる。							
特記事項							
調査担当者	松浦一之介			掲載報告書	7（910 集）		

調査次数	22 次	調査面積（㎡）	4750	調査期間	20000410-20001025	調査番号	0033
時代別出土遺構・遺物							
古代							
［出土遺構］掘立柱建物・溝・製鉄炉・井戸・焼土坑・土坑							
［出土遺物］土師器（坏・皿・碗・壺・高坏・竈）・須恵器（坏・甕）・緑釉陶器・青磁（越州窯系）・石器（磨石・砥石）・刻書土器（「日」）							
中世							
［出土遺物］青磁（龍泉窯系　碗）・白磁（碗）							
調査概要							
低丘陵に挟まれた浅い谷部の調査。全体に削平を大きく受け、遺構の遺存状況は悪く、溜池堤体下部のみ遺構が遺存する。 掘立柱建物は全体に逆Ｌ字形に配置され、少なくとも 3 時期の建て替えが想定される。製鉄炉と何らかの関係のある、公的な施設の可能性がある。 製鉄炉は 2 基確認され、うち 1 基は炉の両側に排滓坑がつくものである。単独で築造･操業されたものとみられる。羽口・鉄滓が炉に伴って出土している。鍛冶炉も 1 基確認されている。製鉄炉の時期は 8 ～ 9 世紀と考えられる。 井戸は 2 基検出され、いずれも素掘りの井戸で 8 世紀前半とみられる。							
特記事項							
調査担当者	松村道博			掲載報告書	6（909 集）		

調査次数	23 次	調査面積（㎡）	8110	調査期間	20000601-20010331	調査番号	0019
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代～古代							
［出土遺構］焼土坑							
［出土遺物］須恵器（甕・高坏・瓶）・土師器（甕・碗）・陶器（擂鉢）・青磁（碗・皿）・染付碗・鉄滓							
調査概要							
桑原地区の 4 地点について製鉄遺構の確認調査を行う。併せて、第 1 工区のうち平成 7 ～ 8 年に試掘未実施の範囲について試掘・踏査を行う。 (D-8 地点）2 地点で調査を実施し、遺構は検出されない。撹乱層等から中世の陶器甕、擂鉢、青磁、近世の染付碗、瓦が出土し、炭化物が検出される。 (C-2 地点）緑地保全地区内で、確認調査の結果焼土坑 2 基をを検出する。古墳時代の須恵器甕、瓶、中世の青磁碗、土師器碗等が出土した。 (E-2 地点）谷部の 5,200㎡の調査。中型の焼土坑 4 基、小型の焼土坑 4 基、柱穴群を検出。出土遺物はない。							
特記事項							
調査担当者	二宮忠司			掲載報告書	11（1011 集）		

調査次数	24 次	調査面積（㎡）	5500	調査期間	20000821-20030320	調査番号	0034

時代別出土遺構・遺物

縄文～弥生時代

［出土遺構］

［出土遺物］打製石器（石鏃・掻器・剥片・砕片・石斧）・磨製石器（石斧・凹石）

古墳時代

［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物

［出土遺物］須恵器（坏・壺・甕）土師器（坏・甕・壺）

古代

［出土遺構］製錬炉・排滓坑・鍛冶炉・砂鉄ピット・焼土坑・土坑

［出土遺物］須恵器（坏・壺）・土師器（坏・高坏）・羽口

中世

［出土遺物］青磁（同安窯系碗）

調査概要

調査区は金屎池奥の北西に開口する支谷に位置し、谷斜面を削り出して平坦面を造成し、製錬炉を築造したとみられる。

調査区内で古代の製錬炉 8 基と排滓坑、鍛冶炉、砂鉄ピット焼土坑・竪穴住居・掘立柱建物などを確認した。竪穴住居は製鉄遺構の下面から出土し、古墳時代後半のものと考えられ、竈が遺存するものもある。掘立柱建物も柱穴からの出土遺物から古墳時代と考えられる。丘陵斜面から古墳時代の須恵器とともに滑石臼玉 134 個が出土した。

製錬炉・鍛冶炉は斜面中腹部と斜面裾部の 2 地点に分布している。斜面中腹部の鍛冶炉、製錬炉は 3 基ずつで、製錬炉造成段ごとに 1 基ずつ配置される。斜面裾部では 5 基の製錬炉が確認されている。

縄文時代の遺物のうち、縄文草創期から前期にかけての石鏃・スクレーパー・剥片が認められる。

特記事項

調査担当者	松村道博・濱石哲也	掲載報告書	4（860）

調査次数	25 次 （桑原 A 群）	調査面積（㎡）	2200	調査期間	20001124-20011130	調査番号	0052

時代別出土遺構・遺物

縄文時代

［出土遺物］打製石器（スクレーパー）

古墳時代

［出土遺構］円墳 7 基

［出土遺物］

2 号墳：鉄器（鉗・刀子・金槌）・須恵器（坏・高坏・壺・甕・瓶）・ガラス玉・耳環

3 号墳：鉄器（鉄斧・刀・刀子・馬具？）・須恵器（坏・高坏・壺・甕・提瓶・横瓶・器台）・装身具（ガラス玉・琥珀玉・耳環）

4 号墳：鉄器（鉄鏃・鉗・）・須恵器（坏・高坏・壺）・玉類（滑石製臼玉・ガラス小玉）

5 号墳：鉄器（鉄鎌・刀子）・須恵器（坏・高坏・台付壺・壺・提瓶）・玉（碧玉管玉・碧玉切子玉・滑石臼玉）

6 号墳：須恵器（坏・壺・甕）

7 号墳：須恵器（坏）・鉄器

8 号墳：須恵器（坏・高坏・瓶・器台）・石製紡錘車

調査概要

桑原古墳群 A 群の 2 号墳～ 8 号墳の調査。（1 号墳は 21 次調査）

2 号墳は径 11m の円墳で、玄室長 2m、幅 2.1m、羨道長 60cm で、玄室床面は 3 面確認され、最下面で鉄鉗・刀子・ガラス玉が出土し、墓道からは追葬時に玄室からかき出された遺物が出土した。6 世紀中頃。

3 号墳は径 12 mの円墳で、玄室長 3.0m、幅 1.9m、羨道長 1.3m でを測る。玄室内から玉類や鉄器、中世の青磁碗が出土した。6 世紀中頃。

4 号墳は北東側が流出しているが墳丘径 12m の円墳とみられ、玄室長 2.5m、幅 1.8m、羨道長 1.4 で、玄室内から須恵器・鉄器・滑石臼玉が出土した。6 世紀中頃の築造で 7 世紀まで祭祀が行われている。

5 号墳は墳丘が遺存せず、石室も破壊されているが、一辺 2.2m の石室プランが推定できる。6 世紀前半。

6 号墳は径 9m の円墳とみられる。石室は奥壁側が破壊されている。6 世紀中頃。

7 号墳は径 8m の円墳で、石室石材は失われているが長さ 2.1m、幅 1m の玄室と長さ 1.4m の羨道があったとみられる。5 世紀末。

8 号墳は石室・墳丘ともに遺存せず、古墳出土とみられる遺物の散布が確認できる。6 世紀前半。

特記事項

調査担当者	松浦一之介・星野恵美	掲載報告書	5（861）

調査次数	26 次	調査面積（㎡）	5487	調査期間	20010405-20011130	調査番号	0110
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器							
古墳時代							
［出土遺構］古墳 1 基・竪穴住居 5・掘立柱建物 12							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・甕・平瓶・高坏・瑞）・土師器（甕・甑・高坏）							
古代							
［出土遺構］掘立柱建物・土坑							
［出土遺物］須恵器（坏・碗）土師器（高坏・碗）青磁（越州窯系青磁碗）							
調査概要							
調査地点は 20 次の谷奥部にあたり、谷西側斜面の 1 区と支谷の 2 区に分かれる。 古墳石室は墳丘・石室とも大きく破壊されていたが、6 世紀後半の古墳とみられる。石室規模・墳丘規模は全く不明である。 竪穴住居は一辺 3m 前後の規模の方形プランで竈を備えており、古墳時代中期と考えられるが、後世の造成により削平を受けており、遺存状況は良くない。 掘立柱建物は古墳時代～古代の時期幅でとらえられ、20 次調査で確認された掘立柱建物群から連続した建物群と考えられる。建物は斜面を造成した平坦面に建てられており、削平を受けて柱穴の遺存状態は悪い。							
特記事項							
調査後、20 次調査区とともに埋戻し保存されている。古墳時代～古代の遺構面を保存しており、弥生時代の遺構面は未調査。							
調査担当者	二宮忠司			掲載報告書	9（963 集）		

調査次数	27 次	調査面積（㎡）	4495	調査期間	20011201-20020829	調査番号	0153
時代別出土遺構・遺物							
旧石器～弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］打製石器（旧石器：ナイフ形石器・台形石器・細石核　縄文時代：石鏃・楔形石器・石核）・磨製石器（石斧・石包丁・紡錘車・砥石・台石）・弥生土器							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物・溝状遺構・土坑							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・壺・高坏・平瓶・瑞）土師器（杯・甕・壺・高坏・甑）鉄器（鎌）・耳環							
古代							
［出土遺構］鍛冶炉・焼土坑							
［出土遺物］須恵器（坏）・土師器（甕）・緑釉陶器（碗）・青磁（越州窯　碗）・鉄滓							
調査概要							
丘陵先端部北側緩斜面に調査区が位置する。遺構群は丘陵裾部を中心に遺存している。 竪穴住居は 25 軒確認され、方形の 4 本柱建物で竈を備えるものが多い。SC-16 は火災住居で、6 世紀前半の土師器・須恵器の一括資料が確認された。 掘立柱建物は 1 × 1 間、1 × 2 間の小型の建物が多い。掘立柱建物の多くは古墳時代とみられる。							
特記事項							
調査担当者	二宮忠司			掲載報告書	6（909 集）		

調査次数	28 次	調査面積（㎡）	2200	調査期間	20020201-20020704	調査番号	0154

時代別出土遺構・遺物

旧石器～弥生時代

［出土遺物］打製石器（旧石器：剥片　縄文早期：石鏃・石核　縄文後期～晩期：石錐・縦長剥片・石斧）・磨製石斧・縄文土器・弥生土器（甕・高坏）

古墳時代

［出土遺物］須恵器（坏・提瓶）

古代

［出土遺構］鍛冶炉・焼土坑

［出土遺物］土師器（碗・坏壺）・黒色土器碗・青磁（越州窯　碗）・緑釉陶器・羽口・鉄滓・石鍋

調査概要

Ａ～Ｃ区までの３区画の調査。Ａ区は丘陵尾根部の調査で、古墳の存在が想定されたが、遺構・遺物は確認できなかった。

Ｂ区は幅 10m の谷部の調査で、包含層から旧石器～中世まで幅広い時期の遺物が出土した。

Ｃ区は丘陵斜面の調査で、中世以降の溝・土坑・柱穴と縄文包含層を確認した。

なお、周辺の試掘調査で縄文時代の包含層が確認され、縄文後期中ごろの北久根山式土器が出土した。また、元岡瓜尾貝塚の続きとみられる貝層を試掘トレンチで確認している。

特記事項

Ｃ区の一部は擁壁工事の下部に未調査の状態で原状保存されている。

調査担当者	吉留秀敏・屋山洋	掲載報告書	6（909 集）

調査次数	29 次 （元岡Ｎ群）	調査面積（㎡）	4000	調査期間	20020405-20030930	調査番号	0204

時代別出土遺構・遺物

縄文～弥生時代

［出土遺構］

［出土遺物］石器（スクレーパー・石斧）・縄文土器（条痕文土器）

古墳時代

［出土遺構］円墳 9

［出土遺物］［出土遺物］

1 号墳：須恵器（坏・高坏・壺）・土師器（甕）・鉄器（刀子・刀・馬具（轡）・鏨）・ガラス小玉

2 号墳：須恵器（坏・高坏）・鉄器（刀・刀子・鉄鏃）

3 号墳：須恵器（坏・高坏・壺・甕）・刻書土器（「大道」）・鉄器（刀・鉄鏃・鉸具）・耳環

4 号墳：須恵器（坏・高坏・壺）・土師器（坏・碗）・鉄器（刀・鎌・鏃）

5 号墳：須恵器（坏・平瓶・甕）・土師器（皿・丸底坏）・黒色土器・鉄器（刀子）・鉄滓

6 号墳：鉄器（鉄鏃・鉄斧）・須恵器（坏・壺）・鉄滓

7 号墳：須恵器（坏・壺・甕・磁）・耳環・土玉・銅銭（寛永通宝）

8 号墳：須恵器（壺）・鉄器（鉄斧・鉄鏃・鎌）

9 号墳：須恵器（坏・壺・甕）・投弾・ガラス小玉・銅銭（寛永通宝）

調査概要

元岡古墳群Ｎ群の調査。

1 号墳は径 11m の円墳で、石室は玄室長 2.4m、幅 2.3m、羨道長 80cm の両袖単室。6 世紀前半の築造。

2 号墳は墓道側の墳丘が大きく削られ、石室石材も大部分抜かれる。玄室から古代の須恵器が出土した。7 世紀代。

3 号墳は径 9m の円墳で、石室は羨道側が大きく削られる。7 世紀代。

4 号墳は墳丘が開墾によって完全に削られており、遺物は斜面から出土した。古代の遺物が主である。

5 号墳は墳丘規模 7.5m 以上で、玄室長 1.3m、羨道長 2.3m を測る。7 世紀代。

6 号墳は墳丘が完全に失われ、玄室長・玄室幅 1.6m の正方形プランの石室をもつ。鉄鏃・鉄斧などの鉄器が多く出土した。7 世紀代。

7 号墳は墳丘が削平されており、石室は玄室長 2.4m、幅 1.1m、羨道長 1.3m、最大幅 80cm で、古墳東側から六道銭とみられる寛永通宝 6 枚が出土した。7 世紀代の築造。

8 号墳は調査時に確認された古墳で、墳丘・石室ともに遺存状況が悪い。7 世紀代。

9 号墳は墳丘径 6 ～ 7m、石室は玄室長 1.8m、幅 1.0m とみられる。7 世紀代。

特記事項

調査担当者	星野恵美・菅波正人	掲載報告書	5（861 集）

調査次数	30 次	調査面積（㎡）	2450	調査期間	20020801-20020930	調査番号	0240
時代別出土遺構・遺物							
古代							
［出土遺構］焼土坑・土坑							
［出土遺物］							
調査概要							
23 次調査で確認調査を行った E-2 地点西側の谷部の調査。焼土坑を確認したが、包含層、出土遺物は確認できかった。							
特記事項							
調査担当者	二宮忠司				掲載報告書	11（1011 集）	

調査次数	31 次	調査面積（㎡）	10000	調査期間	20021001 ～ 20060113	調査番号	
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代～弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺・高坏）・縄文土器・石器（石鏃・スクレーパー・石核・石匙）							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居 10・土坑・自然流路（祭祀遺構を伴う）							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・壺・瓶・高坏・提瓶・横瓶・鉄鉢・甑他）・土師器（坏・甕・壺・小型丸底壺・脚坏壺・高坏・甑・ミニチュア土器）・石製品（滑石製子持勾玉 2・臼玉・模倣鏡・船形）							
古代							
［出土遺構］瓦窯 1・瓦集積遺構・鍛冶炉 19・焼土坑・掘立柱建物 10・竪穴住居 1・溝状遺構・自然流路							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・壺・瓶・高坏・椀・硯他）・土師器（坏・甕・鉢・高坏・甑・皿・塔まり・香炉他）・瓦・土製印章（「酒」）・鉄滓・羽口・鉄器（鉄鏃・刀子・捩り棒状鉄製品・鋤先・釘）・砥石・墨書土器・刻書土器・緑釉陶器・黒色土器・銅製帯金具							
中世							
［出土遺物］白磁（碗）・青磁（碗）・青白磁（合子）・青花（皿）・滑石製品（石鍋再利用品）							
調査概要							
調査区内で古墳時代・古代の 2 面の遺構面を確認した。瓦窯は地下式登り窯で下部の燃焼部付近のみが遺存し、灰原や煙道は確認できない。窯内部からは平瓦・丸瓦が出土した。放射性炭素年代測定（AMS）では 7 世紀後半～8 世紀中頃の測定結果が出たが、瓦の年代観と瓦の形態からは 9 世紀の操業年代が想定できる。 鍛冶炉のうち、1 区の鍛冶炉には掘立柱建物による上屋が設けられている。 古墳時代の竪穴住居は谷北側の段丘面上で検出され、住居内に竈を設けたもの、竈祭祀の痕跡が残るものもある。谷流路からは子持勾玉や土師器高坏・小型丸底壺、ミニチュア土器が集中して出土し、水辺祭祀を行った跡とみられる。祭祀系遺物は古代に下るものもみられ、祭祀が継続したことを示す。 瓦窯跡は福岡市内でも発見例が稀少で、出土した瓦の文様から鴻臚館跡で使われた瓦を生産していたものとみられる。							
特記事項							
調査担当者	上角智希				掲載報告書	17（1103 集）	

調査次数	32 次	調査面積（㎡）	1700	調査期間	20030120-20030331	調査番号	0257
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代～古代							
［出土遺構］竪穴住居・溝・柱穴							
［出土遺物］土師器・須恵器・鉄滓							
調査概要							
南東方向に開口する谷部の、製鉄遺構の確認を主眼として全面的な試掘調査を行った。 谷部包含層は青灰色シルトを主体とし、土師器・須恵器・鉄滓等が出土した。調査ではシルト層上部まで確認した。 調査区南側では丘陵斜面上で古墳時代の溝・柱穴・竪穴住居を確認した。							
特記事項							
32 次調査の範囲は 41 次・57 次調査として発掘調査を実施している。							
調査担当者	二宮忠司				掲載報告書	28（1328 集）	

調査次数	33 次	調査面積（㎡）	450	調査期間	20030408 ～ 20030519	調査番号	0303
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］古墳（桑原錦田Ｂ－１号墳）							
［出土遺物］須恵器（高坏・平瓶）							
調査概要							
平川池南側の丘陵上にある小円墳（桑原錦田古墳群Ｂ群１号墳）の調査。地形の改変を大きく受けており、全域に花崗岩盤が露出し、墳丘は遺存しない。 丘陵頂部の平坦面上に長 1.1 ～ 1.5m の割石２石があり、間に幅 1.2m、深さ 10cm の溝が残り、須恵器破片が出土した。溝は周溝か羨道・墓道の痕跡とみられる。古墳の遺存状況が悪く、墳丘の規模や形状、石室の形状は不明である。 出土遺物から、６世紀後半以降の築造とみられる。							
特記事項							
調査担当者	濱石哲也				掲載報告書	15（1064 集）	

調査次数	34 次 （元岡Ｊ群）	調査面積（㎡）	1200	調査期間	20030401-20030812	調査番号	0310
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］古墳（元岡古墳群Ｊ群１～３号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・平瓶）土師器（高坏）・金製細型耳環							
調査概要							
元岡古墳群Ｊ群の３基の古墳の調査を実施した。１号墳は 1986 年に調査が実施されており、石室石材は遺存していないが墳丘径 16m の円墳である。石材抜痕から石室形状は両袖式単室構造、規模は石室全長 4.5m、玄室長 2.2m、奥壁幅 1.7m、羨道幅 0.8m とみられる。86 年の調査で出土した遺物から６世紀末～７世紀初頭の築造が考えられる。 ２号墳は墳丘径 16m で、石材は遺存しないが主体部は両袖式単室の横穴式石室で玄室長さ 2.0 ～ 2.4m、奥壁幅 1.6m を測る。出土遺物は６世紀末～７世紀にかけてのものがみられる。 ３号墳は墳丘が完全に失われ、石室石材も多くが抜かれているが、玄室長 2.2m 以上、玄室幅 1.3m の規模を確認できる。玄室床面には敷石が２面確認でき、室内からガラス玉・金製耳環が出土した。出土遺物から上面は６世紀中頃～後半の時期とみられる。							
特記事項							
調査担当者	屋山洋				掲載報告書	6（909 集）	

調査次数	35 次 （石ヶ原２次）	調査面積（㎡）	1853	調査期間	20030520-20050112	調査番号	0340
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］前方後円墳（元岡石ヶ原古墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・高坏・𤭯・鹿形𤭯・壺・台付壺・台付子持𤭯・瓶・器台・皮袋形瓶）・土師器（坏・高坏・碗・小型壺）・鉄器（刀・矛・鉄鏃・帯金具）							
調査概要							
前方後円墳である石ヶ原古墳の記録保存に伴う調査。表土を除去して墳丘全体の形状と墓道の確認を行い、墳丘除去後地山整形面の確認を行った。 墳丘は調査の結果全長 49m、後円部径 25m、高さ 5m、前方部幅 23m の規模であることが確定し、前方部に中世山城に関連するとみられる溝や柱穴も確認できた。墳丘くびれ部付近から須恵器器台等の遺物が出土している。 石室は後円部中央に作られ、墳丘南側面に開口する。石室の規模は長 3.6m、奥壁幅 2.1m、羨道幅 80cm で、石材は腰石の一部のみが遺存する。 遺物は表土・墳丘・石室等から出土しており、遺物の時期から６世紀中頃の築造、６世紀後半までの追葬年代が考えられる。							
特記事項							
調査後、石室は九州大学構内に移転復元している。							
調査担当者	濱石哲也・菅波正人・池田祐司				掲載報告書	6（909 集）	

調査次数	36 次	調査面積（㎡）	8000	調査期間	20030901-20050331	調査番号	0341
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］円墳（経塚古墳）							
［出土遺物］須恵器（器台・甕・壺）埴輪（家形埴輪・円筒埴輪）							
古代							
［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物							
［出土遺物］須恵器（坏・甕）・土師器（碗・甕）							
中世							
［出土遺構］敷石遺構（配石墓？）							
［出土遺物］青磁碗・白磁碗・他							
近世～近代							
［出土遺構］近世墓							
［出土遺物］近世甕棺・陶磁器・土人形・銅銭・人骨							
調査概要							
調査区は水崎山東側山麓の段丘上に位置する。円墳（経塚古墳）は径30m、高さ3.6mの円墳で、墳丘面に葺石を葺く。石室天井石とみられる板石が墳丘頂部に立てられており、古代末から中世にかけて立石信仰の対象とされていた可能性が高い。主体部は竪穴式石室とみられるが保存のため未発掘である。墳丘西側で幅6mの周溝を確認している。古墳頂部の平坦面に分布する敷石群は中世の祭祀関連の遺構とみられる。古墳の年代は5世紀中頃と推定される。 近世墓は約300基を確認し、「享保15年」「宝暦」等近世の年号が記された墓石が認められる。主体部は甕を用いた棺の他、土壙墓、木棺墓、火葬墓等の種類がある。							
特記事項							
円墳と近世墓群は、調査後埋戻され、石室及び墳丘面の一部は未調査で保存されている。							
調査担当者	屋山洋・菅波正人				掲載報告書	11（1011集）18（1105集）	

調査次数	37 次 （元岡O群）	調査面積（㎡）	461	調査期間	20031020-20040226	調査番号	0365
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］円墳4							
［出土遺物］［出土遺物］1号墳：玉類（ガラス小玉・滑石臼玉） 3号墳：須恵器（坏・蓋・高坏）玉類（ガラス玉9・土玉137）・鉄器（刀子・馬具（環状鏡板付轡・雲珠）） 4号墳：須恵器（坏）							
調査概要							
調査中途で新たに確認された元岡古墳群O群の調査。 1号墳は墳丘径約6mの円墳で、玄室長2m、幅65cmの細長い長方形プランで竪穴系横口式石室に近い。玄室内からガラス小玉・滑石臼玉が出土した。 2号墳は小石室墳で、玄室は長0.75m、幅0.4mでごく短い羨道がつく。出土遺物はない。 3号墳は墳丘幅5.5mの円墳とみられ、玄室長1.57m、幅0.85mの規模で長さ65cmの羨道がつく。玄室内から6世紀後半の須恵器が出土した。2～4号墳のうち初出とみられ、6世紀後半の築造。 4号墳は径4m程度の円墳で、主体部は単室片袖型で玄室長1.1m、幅0.55m、羨道長45cmの小型の石室である。遺物は墳丘上面からの須恵器破片のみである。							
特記事項							
調査担当者	濱石哲也				掲載報告書	5（861集）	

調査次数	38 次	調査面積（㎡）	1816	調査期間	20040308-20050117	調査番号	0371
時代別出土遺構・遺物							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器（坏）							
中世							
［出土遺構］溝状遺構・焼土坑							
［出土遺物］							
近世							
［出土遺構］							
［出土遺物］染付（碗）・陶器（擂鉢）・銅銭（寛永通宝）							
調査概要							
水崎城から北西に延びる尾根上の確認調査。1 区南斜面で竪堀状の溝を検出した。また 2 区の尾根と山頂との接合部分で堀切状の溝を検出し、3 区の尾根から斜面にかけて溝状遺構を確認した。							
特記事項							
調査担当者	濱石哲也・菅波正人・池田祐司			掲載報告書	18（1105 集）		

調査次数	39 次	調査面積（㎡）	880	調査期間	20040405-20040416	調査番号	0404
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺・支脚・鉢）・磨製石器（紡錘車・石斧）							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器（墨書土器）							
調査概要							
元岡保育園建設に伴う調査。57 次調査区が位置する、南東方向に開口する谷の開口部付近に位置する。調査の結果、現地表面から 1.7m 下で遺構面を検出し、弥生時代中期の土器だまりが確認され、完形の土器を含む大量の土器片が出土した。							
特記事項							
事前の試掘調査で墨書須恵器（「林山人」）が出土。							
調査担当者	松浦一之介			掲載報告書	年報 19		

調査次数	40 次	調査面積（㎡）	1250	調査期間	20040407 ～ 20040428	調査番号	0410
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器・土師器							
調査概要							
丘陵北東側の端部から平地にかけての調査。試掘調査では須恵器が出土したが、台地面上及び平地の地山上面では遺構は確認できなかった。 調査区北側では大きく落ち込み、旧海岸線に近い位置にあるとみられる。							
特記事項							
調査担当者	米倉秀紀			掲載報告書	15（1064 集）		

調査次数	41 次	調査面積（㎡）	900	調査期間	20040506-20041130・20060202-20060217	調査番号	0435
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］石鏃							
古墳時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器、土師器							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器・土師器・瓦器・瓦（丸瓦・平瓦）・砥石・鉄滓・羽口							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］陶磁器（捏鉢）・石鍋							
調査概要							
31 次調査区の谷奥部。谷部北側緩斜面上の製鉄関連遺物群（SX-01）からはパンケース 100 箱超の鉄滓・炉壁等が出土し、須恵器・土師器・羽口等の遺物も共伴する。出土遺物から 9 世紀前半と考えられ、調査区外の北側斜面に製錬炉が存在する可能性が考えられる。 谷部包含層最下層から出土した須恵器・土師器は 6 世紀後半のもので、上流に生活空間の存在を想定させる。谷部上層から出土した瓦は 31 次調査出土瓦と同様、9 世紀代とみられる。							
特記事項							
出土した鉄滓は製錬滓が大半で、鉄滓を排出した製鉄炉は北側斜面（63 次調査区との間隙）に位置するとみられる。							
調査担当者	米倉秀紀			掲載報告書	15（1064 集）		

G-1号墳を見学する元岡小学校生徒（平成22年6月21日）

調査次数	42 次・52 次	調査面積（㎡）	（42 次）4800 （52 次）3900	調査期間	20041001 ～ 20090630 （52 次は 2008 年 1 月～）	調査番号	0451 0763

時代別出土遺構・遺物

縄文時代

［出土遺構］遺物集積部 4

［出土遺物］縄文土器（草創期：微隆起線文土器・無文土器、晩期：黒川式土器・孔列文土器）、打製石器（石鏃・スクレーパー・石匙）

弥生時代中期～古墳時代前期

［出土遺構］自然流路（SD01・02）、掘立柱建物 8、竪穴住居 4

［出土遺物］土器、石器（農具・工具・石剣・砥石・石錘・縄文打製石器）、木器（農具・容器・琴板・鳥形木製品・翳・木偶・剣形木製品等の祭祀木器・船材・建築材・家具・日用品・漆塗製品等）、鉄器（鉄鏃・鉄斧）青銅器（鋤先・銅鏃 5 点・小銅鐸 2 点・小型仿製鏡 4 点・五銖銭 1 点・貨泉 8 点等）、銅戈鋳型（中細形）、絵画土器（高床建物・鳥）、玉類（ガラス製小玉、滑石製臼玉）、自然科学的資料（種子・辰砂粒子・イノシシ下顎骨・鯨骨・海豚骨）

古代～中世

［出土遺構］

［出土遺物］銅銭（太平通宝）

調査概要

調査地点は丘陵南部の、南に開口する谷が合流する地点にあたる。調査区は 2 本の自然流路と、その間の平坦地からなる。流路内には総延長 100m 以上に及ぶ遺物集積が確認され、縄文時代から弥生・古墳時代にかけての遺物が約 1 万箱以上出土した。

Ⅰ区の流路東側の河岸段丘面で縄文時代草創期の遺物集中部（ユニット）4 か所を確認し後氷期（アレレード期；14000 ～ 13000calBP）に位置づけられる可能性が高い。

土器群は自然流路に小群に分かれて出土している。SD01 では 100m 以上に及ぶ遺物集積が確認されている。最下層からは縄文晩期の遺物が出土し、弥生中期初頭の土器も認められるが、大部分は弥生時代中期後半～古墳時代初頭の土器である。土器群 15 からは仿製鏡 1 面と貨泉が出土している。土器群 16 からは小型仿製鏡 1 面が出土し、調査区南端では弥生後期後半の小銅鐸 2 点が出土している。弥生後期末には大型土器の投棄とともにスサ入り焼成粘土塊が出土している。

SD02 では弥生時代中期後半～後期後半・弥生末～古墳前期の遺物が出土した。遺物は土器・石器の他、翳・鳥形木製品を含む木製品や、青銅製鞘尻金具も出土した。土器の中には龍やシカを描いた絵画土器、動物形土製品もみられる。また、土器群 103 内から中期末・後期中頃の 2 基の小型甕棺墓が出土した。元岡・桑原遺跡群で甕棺墓が確認されたのはこれだけである。土器群 113 から中期後半～後期前半の土器と共伴して半島系土器（無文土器・楽浪系土器）が出土した。土器群 120 の下層からは辰砂も出土した。

2 本の流路の間には平坦部があり、弥生時代中期～後期の竪穴住居・掘立柱建物が確認された。この平坦面は一部が方形に造成されて、掘立柱建物 2 棟が建てられいる。

SD-02 の西側段丘上でも弥生後期後半～弥生末の竪穴住居が確認されている。

特記事項

流路内の遺物には無文土器・楽浪系土器等の半島系土器、山陰系土器等の搬入土器が含まれ、五銖銭・貨泉等の中国銭も出土している。

調査担当者	米倉秀紀・常松幹雄・吉留秀敏	掲載報告書	21（1174 集）23（1246 集）24（1275 集）25（1276 集）28（1328 集）29（1354 集）32（1380 集）

調査次数	43 次 (A-1 号墳)	調査面積（㎡）	180.5	調査期間	20050207 ～ 20050708	調査番号	0486
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］落とし穴状遺構（？）							
［出土遺物］黒曜石製石鏃							
古墳時代							
［出土遺構］円墳（元岡古墳群 A-1 号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・提瓶・高坏・平瓶・壺）							
調査概要							
43 次調査は元岡古墳群 A 群 1 号墳の調査である。調査範囲は 1 号墳の墓道及び石室の断面の観察にとどめ、残りは現状保存としている。 墓道は斜面上に直線的に伸び、幅 2 ～ 3m、深さ 1.3m の規模で、6 世紀末～ 7 世紀初めの須恵器が出土した。 石室は敷石を確認し、床面幅は約 1.3m とみられる。腰石を含む側壁石材は抜かれているが構築材の一部は遺存している。							
特記事項							
1 号墳の調査範囲外の部分と 2・3 号墳は九大内の緑地保全地区にあり、保存されている。							
調査担当者	池田祐司				掲載報告書	20（1173 集）	

調査次数	44 次	調査面積（㎡）	1189	調査期間	20050601-20051020	調査番号	0523
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕）石器（石包丁）							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物・土坑・方形区画溝・柵							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・甕・高坏・瑞）・土師器（甑）・鉄滓							
古代							
［出土遺構］焼土坑・土坑・溝							
［出土遺物］須恵器（坏・皿）・土師器（坏・鉢・甕）・鉄滓							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］青磁（碗）白磁（皿）陶器（東播系須恵器鉢）石製品（石鍋・小容器）							
調査概要							
32・57 次調査区が位置する谷の西側斜面の調査。遺構面上の遺物包含層は弥生時代～中世の遺物を含む。 遺構面は 2 面確認され、第 1 面では土坑･柱穴、第 2 面では段造成の痕跡と竪穴住居･掘立柱建物等が確認された。第 1 面は 8 ～ 9 世紀、第 2 面は古墳時代後期～末とみられる。 他、弥生時代の遺物は中期後半ごろ、中世の遺物は 12 世紀後半～ 13 世紀前半である。							
特記事項							
調査担当者	木下博文				掲載報告書	15（1064 集）	

調査次数	45 次 （桑原 A 群）	調査面積（㎡）	1128.6	調査期間	20050720 ～ 20051122	調査番号	0535
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］古墳（桑原古墳群 A 群 9 ～ 11 号墳）							
［出土遺物］須恵器・土師器・鉄器（2 号墳：鉄刀・鉄鏃・鉄鑿　3 号墳：鉄剣・素環頭刀子）・玉（琥珀玉・メノウ玉・ガラス玉・空玉）・耳環・石製品（紡錘車）炉壁							
中世							
［出土遺構］溝状遺構（堀切の可能性あり）							
［出土遺物］朝鮮陶器							
近世							
［出土遺構］							
［出土遺物］染付							
調査概要							
桑原古墳群 A 群 9 ～ 11 号墳の調査。1 ～ 8 号墳の尾根の北東側の別の尾根上にある 3 基の小型古墳。 9 号墳は墳丘が削平され、石室石材も腰石以外は抜取られている。遺存する石材から主体部が横穴式石室で、玄室幅 1m、玄室全長 2m の小石室墳であることが分かる。石室横を溝が横切るが、中世山城に関係する遺構の可能性がある。 10 号墳も墳丘は削平されているが、石室南側に周溝が確認でき、径 8m の墳丘と推定できる。主体部は単室の横穴式石室で、奥壁幅 78cm、全長 1.85 ～ 1.9m で、羨道から前庭部にかけて石積が続く。玄室敷石は 4 面確認でき、最下面で鉄刀・鉄鏃・鉄鑿・土器・装身具等の副葬品が出土した。前庭部・周溝からも須恵器・土師器・炉壁が出土した。出土遺物から、6 世紀末～ 7 世紀初頭の築造、7 世紀後半までの追葬が考えられる。 11 号墳も墳丘盛土はほとんど遺存せず、丘陵切断の溝を確認した。主体部も削られており、掘方の一部が確認できるだけで、掘方内から鉄剣が出土した。							
特記事項							
調査担当者	池田祐司			掲載報告書	18（1105 集）		

調査次数	46 次	調査面積（㎡）	403.11	調査期間	20050808-20051011	調査番号	0538
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］縄文土器（後期中葉～後葉）							
弥生時代							
［出土遺構］旧河川・溝・土坑							
［出土遺物］弥生土器（甕）・楽浪土器（筒坏）							
古墳時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］土師器（鉢）須恵器（甕）							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器（坏）・土師器（竈）・羽口							
中世							
［出土遺構］柱穴・土坑							
［出土遺物］白磁（碗）・青磁（碗）・瓦器（碗）土師器（坏）・黒釉陶器（壺）・石鍋							
調査概要							
県道拡幅工事に伴う調査。A 区では中世前半期の柱穴・土坑を主とする遺構が高い密度で分布していることを確認した。 B 区は 42・52 次調査区が位置する谷の下流部分の調査区で、弥生時代の旧河川・溝・土坑を確認した。							
特記事項							
調査担当者	久住猛雄			掲載報告書	10（964 集）		

調査次数	47 次	調査面積（㎡）	107	調査期間	20060105-20060310	調査番号	0562
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］円墳（元岡古墳群Ⅰ群 1 号墳・2 号墳）							
［出土遺物］							
近世							
［出土遺構］近世墓							
［出土遺物］							
調査概要							
31 次調査区の南西側丘陵頂部の 2 基の古墳（元岡古墳群Ⅰ群 1 号墳・2 号墳）について調査を実施した。 1 号墳については当初前方後円墳と考えられていたが、墳丘トレンチ調査の結果、前方部との接続部のくびれを確認できず、前方部とされた高まりが近世墓によるものであり、円墳であることが明らかとなった。主体部は竪穴式石室で盗掘を受けており、墳丘から棺材とされる割石が発見された。 2 号墳についても、調査の結果、円墳ではなく近世墓の改葬跡であることが判明した。							
特記事項							
1 号墳は主体部未完掘状態で埋戻し保存を行っている。							
調査担当者	上角智希				掲載報告書	15（1064 集）	

調査次数	48 次	調査面積（㎡）	447.3	調査期間	20060110 ～ 20060223・ 20070124 ～ 20070203	調査番号	0563
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］打製石器（ナイフ形石器・縦長剥片・スクレーパー・石核）							
弥生時代							
［出土遺構］自然流路							
［出土遺物］弥生土器・石器（石斧・磨石）							
古墳時代							
［出土遺構］竪穴住居 3・土坑・掘立柱建物 6・溝・自然流路							
［出土遺物］土師器（坏・鉢・甕・製塩土器）・須恵器（坏・高坏・甕）・装身具（土玉）							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］黒色土器・須恵器・瓦器・木簡							
調査概要							
20 次調査区の北西側に隣接する。20 次調査区の集落の延長部で、古墳時代前期の竪穴住居 3 棟、古墳後期の土坑、掘立柱建物 6 棟などを確認した。 自然流路からは弥生時代中期前半～古墳時代の遺物が出土した。							
特記事項							
調査担当者	池田祐司				掲載報告書	20（1173 集）	

調査次数	49・51 次	調査面積（㎡）	49 次：2723 51 次：6887.4	調査期間	20060403 ～ 20070322 20070829 ～ 20081003	調査番号	0611 0741

時代別出土遺構・遺物

旧石器時代

［出土遺構］

［出土遺物］スクレーパー・剥片石器・細石刃・細石核

縄文時代

［出土遺構］竪穴土坑

［出土遺物］押型文土器・刻目突帯文土器・礫石器

弥生時代

［出土遺構］土坑・自然流路

［出土遺物］銅鏃

古墳時代

［出土遺構］竪穴住居・掘立柱建物・周溝状遺構・自然流路

［出土遺物］銅鏃

古代

［出土遺構］掘立柱建物・鍛冶炉・焼土坑・土坑・柱穴・自然流路

［出土遺物］木器（建築材・馬具（鐙））・鉄滓

調査概要

調査地点は北東に開口する幅 90m の谷部を調査範囲とし、開口部東側斜面を 49 次、谷部分と西側斜面を 51 次として調査区を設定した。

調査の結果、旧石器～中世の遺構・遺物を検出した。東側斜面では 6 世紀後半～ 7 世紀初の竪穴住居、7 世紀～ 8 世紀初の掘立柱建物があり、大型建物もみられる。谷部では古代の耕作の痕跡が確認されたほか、6 世紀後半の遺構が東側斜面から広がる。西側丘陵からの斜面では竪穴住居、掘立柱建物が確認されている。

古墳時代後期以前の河川 032 から、弥生後期～古代の建築材・農具・馬具等の木製品が出土し、他に弥生中期後半～後期の遺物が出土した。

集落の変遷としては、古墳時代後半から終末の 6 世紀後半～ 7 世紀にかけて竪穴住居が重複した形で検出され、7 世紀初頭～ 8 世紀初頭には掘立柱建物による大規模な倉庫群が建てられる。谷部の包含層からは上流の 24 次調査区の 8 世紀後半の製鉄炉操業による鉄滓が出土する。

特記事項

調査担当者	池田祐司	掲載報告書	20（1173 集）・31（1356 集）

調査次数	50 次	調査面積（㎡）	811	調査期間	20070401 ～ 20070827	調査番号	0709

時代別出土遺構・遺物

旧石器時代～縄文時代

［出土遺構］

［出土遺物］打製石器（ナイフ形石器・縦長剥片・横長剥片・台形石器・石核調整剥片・細石刃・細石刃核等）

近世

［出土遺構］甕棺墓・土壙墓・木棺墓

［出土遺物］甕棺・小型容器（蔵骨器）・陶磁器・薬缶

調査概要

36 次調査区（経塚古墳含む）の道路を挟んで西側に隣接する。

調査区内まで 36 次の近世墓が広がっており、近世甕棺墓 21・近世土坑・木棺墓 26 基などが確認された。

調査区北西側丘陵部の旧石器の調査では、旧石器時代～縄文草創期の打製石器がまとまって出土した。

特記事項

近代以降の納骨関連施設 1 棟を確認する。

調査担当者	池田祐司	掲載報告書	20（1173 集）

調査次数	53 次	調査面積（㎡）	770	調査期間	20080219 ～ 20080409	調査番号	0768
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代・縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］打製石器（剥片尖頭器・台形石器・石鏃・スクレーパー）							
古代							
［出土遺構］掘立柱建物 7、溝、井戸、土坑							
［出土遺物］須恵器、土師器、黒色土器、鞴羽口、瓦、巡方、石製品							
調査概要							
49・51 次の谷開口部北側に位置し、現況は水田。東側の 1 区でピット群が検出され、2 区は遺構面が北西に緩く傾斜する。2 区で検出された井戸は円形の土坑の三方を矢板で囲む構造で、9 世紀から 10 世紀初めとされる。 1 区遺構覆土を中心に旧石器を含む石器が出土している。また、井戸覆土から怡土城瓦が出土している。							
特記事項							
調査担当者	池田祐司				掲載報告書	28（1328 集）	

調査次数	54 次	調査面積（㎡）	1872	調査期間	20081006 ～ 20090109	調査番号	0844
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代～縄文時代草創期							
［出土遺構］							
［出土遺物］打製石器（ナイフ形石器・台形様石器・台形石器・尖頭器・石核・細石刃核・細石刃・石鏃）							
縄文時代							
［出土遺構］谷部包含層							
［出土遺物］縄文土器（阿高式系・後晩期）							
弥生時代							
［出土遺構］土坑・谷部包含層							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺・蓋・高坏）・石器（石包丁未成品・石剣・石斧）							
古墳時代							
［出土遺構］谷部包含層							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・甕・高坏・瓶）・土師器（壺・甕・坏・高坏・甑・鼓形器台・ミニチュア土器・土錘）							
古代・中世							
［出土遺構］谷部包含層							
［出土遺物］越州窯系青磁碗・黒色土器・龍泉窯系青磁・白磁皿							
調査概要							
調査区は 20 次 1 区・2 区の間の未調査部分にあたる。20 次 1 区の谷部の下流域を範囲とし、谷部包含層のうち、上層からは弥生時代中期から中世までの遺物が出土し、下層からは縄文・弥生時代の遺物が出土し、旧石器時代の遺物もふくまれる。							
特記事項							
調査担当者	池田祐司				掲載報告書	20（1173 集）32（1380 集）	

元岡古墳群G－6号墳出土　庚寅銘大刀（56次調査）

調査次数	55 次	調査面積（㎡）	3300	調査期間	201000412 ～ 20110330	調査番号	1001
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］方墳（元岡古墳群 G-1 号墳）、古墳（G-2 号墳）							
［出土遺物］須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀・刀装具（圭頭柄頭を含む）・胡籙）・馬具・銅鏡・装身具（銅釧・耳環・玉類）							
中世以降							
［出土遺構］水田跡							
［出土遺物］							
調査概要							
調査区は 42・52 次調査区の北側に隣接する。調査範囲は東側谷部、中央尾根部、西側谷部の 3 つに区分でき、東側谷部では古代後半（10 世紀）の水田面を確認しており、古代以下の面は現状保存されている。西側谷部でも水田面の存在を確認している。 中央尾根部では元岡古墳群 G-1・2 号墳の 2 基の古墳を確認した。G-1 号墳は一辺 18m の方墳で、元岡古墳群では唯一の方墳である。石室は両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 3.6m、玄室幅 2.1m で、側壁・奥壁に巨石を使用している。床面の敷石は 2 面確認でき、玄室内からは鉄刀等の副葬品が出土している。特に金銅製圭頭柄頭は被葬者と中央政権との関係が伺える資料である。古墳の時期は出土遺物や石室形態から 6 世紀後半代と考えられる。 G-2 号墳は石材の散布のみ確認でき、墳丘や周溝の痕跡は全く遺存しない。石室は石材周囲にわずかに掘方らしき凹みが認められるが、規模や形状は不明である。G-1 号墳の位置関係から、径 15m の円墳と推定でき、G-1 号墳と同様に 6 世紀後半の古墳と推定される。							
特記事項							
G-1・2 号墳は調査後、盛り土により埋め戻して、現地保存している。							
調査担当者	吉留秀敏			掲載報告書	32（1381 集）		

調査次数	56 次	調査面積（㎡）	6970	調査期間	20100914-20111228	調査番号	1043
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］土器溜り・土坑							
［出土遺物］弥生土器（甕・壺・鉢）							
古墳時代							
［出土遺構］古墳（元岡古墳群 G-3 号墳・G-6 号墳）							
［出土遺物］ 3 号墳：装身具（ガラス玉・滑石勾玉・水晶切子玉・瑪瑙玉） 6 号墳：銘文大刀（「庚寅」銘大刀）・須恵器（坏・高坏・平瓶・壺・器台・提瓶・甕・甕）土師器（坏・高坏・器台）・武器（鉄鏃・鉄刀・鉄矛・弓金具）・馬具（大型馬鈴・素環鏡板付轡・鉸具）・工具（鉄斧・鉄鋸・鉄鑿・鉋）・装身具（ガラス玉・水晶勾玉・水晶切子玉・土玉・耳環）							
中世							
［出土遺構］溝・掘立柱建物・柵列・竪穴土坑							
［出土遺物］青磁（碗・小壺）・白磁（碗）朝鮮陶器（碗・皿）土師器（皿）染付（皿）							
調査概要							
55 次調査区の北側部分の調査。遺構が分布している地区ごとに 1 区から 3 区に分かれており、丘陵部分の測量調査も実施している。 1 区は丘陵尾根東側斜面を段造成した平坦面から斜面にかけての調査。6 世紀末～ 7 世紀の古墳である元岡古墳群 G-6 号墳は径 18m の円墳で、石室は両袖式単室の横穴式石室で、玄室長 2.5m、玄室幅 2.4m、石室全長 7.5m を測る。玄室内の敷石は 2 面確認され、玄室内から金象嵌銘文大刀をはじめとする副葬品が出土した。古墳南側の造成面には弥生時代の土坑（竪穴住居）と中世の建物群が配置される。 2 区は丘陵東側の谷部の調査で、弥生時代前期後半の小規模な土器溜りが確認された。 3 区は尾根上の元岡古墳群 G-3 号墳から尾根西側の谷部にかけての調査。G-3 号墳は玄室長 2.1m、玄室幅 1.2m の横穴式石室で、頭位付近から装身具のセットが出土した。6 世紀末～ 7 世紀初の古墳とみられる。谷部からは古代から中世にかけての遺構群を検出した。							
特記事項							
G-6 号墳と G-3 号墳は石室内に土嚢を充填して埋戻し、現地で保存している。2･3 区についても工事計画が変更され、埋め戻されている。							
調査担当者	吉留秀敏（～ 2010 年 12 月）・大塚紀宜・ 比嘉えりか			掲載報告書	22（1210 集 ）・30（1355 集 ）・ 33（1381 集）		

調査次数	57 次	調査面積（㎡）	6700	調査期間	20110412 ～ 20130906	調査番号	1103
時代別出土遺構・遺物							
古墳時代							
［出土遺構］自然流路							
［出土遺物］須恵器（坏・平瓶・壺・甕・高坏）・土師器（壺・甕・高坏・甑・坏）・埴輪・装飾品（耳環）							
古代							
［出土遺構］自然流路・掘立柱建物・竪穴住居・製錬炉・鍛冶炉・大型溝							
［出土遺物］須恵器（坏・皿・壺）・土師器（椀・高坏・筒形土製品）・黒色土器・新羅土器・木器（容器・建築材）・木簡・墨書土器・石製品・土製品							
中世							
［出土遺構］柵列・土壙墓・焼土坑							
［出土遺物］陶磁器（青磁碗）・土師器（皿）							
調査概要							
調査区は丘陵南側の谷部に位置する。 谷部の包含層は現地表面から 6 ～ 7m の厚さで堆積しており、包含層下層からは古墳時代から古代の遺物、上層では中世後半の陶磁器が出土している。 谷の東西斜面から谷部にかけて古代から中世にかけての遺構を検出した。古代の遺構は製鉄炉・鍛冶炉や、大型の柱穴を持つ掘立柱建物等で、斜面を区画する大型の溝など古代の時期に谷を大規模に造成した痕跡がみられる。 掘立柱建物のうち SB-1103 は柱穴径が 60 ～ 70cm と大型で、主軸が南北方向で、倉庫等の機能が考えられる。隣接して建物が東西に並び、公的な施設として機能していた可能性がある。木簡や墨書土器が見られることから、製鉄・鍛冶活動を管理する政府の出先機関が置かれていたことが推定できる。 谷の西側斜面に古代の製鉄炉・鍛冶炉が検出されており、製鉄炉 SK-003 は操業時に崩壊したまま埋没したもので、炉壁に設けられた通風孔等が原形のまま確認できる。谷部の包含層にはこれらの製鉄炉から排出された鉄滓が大量に堆積する。 包含層最下層から古墳時代の須恵器や埴輪破片が出土しており、谷東側斜面から耳環などが出土していることから、尾根上に古墳が築かれていた可能性が高い。							
特記事項							
調査担当者	長家伸・大塚紀宜				掲載報告書	28（1328 集）・31（1356 集）	

調査次数	58 次	調査面積（㎡）	1152	調査期間	20110620 ～ 20130315	調査番号	1110
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］黒曜石埋納遺構 2、集石遺構 3、土坑							
［出土遺物］縄文土器（押型文土器・刺突文土器・撚糸文土器・条痕文土器・無文土器）・石器（石鏃・楔形石器・石核・尖頭状石器・石槍・スクレーパー・異形石器・石皿・砥石・磨石・黒曜石原石、等）							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器（高坏・壺）・土師器（甕・皿・碗）・黒色土器（椀）							
中世							
［出土遺構］溝・集石							
［出土遺物］陶磁器（朝鮮青磁碗・国産陶器）・土師器（皿・碗）							
調査概要							
調査区は峰古墳の南側の細い谷に位置する。 調査区のうち標高 30 ～ 33m の緩斜面に堆積した包含層から縄文早期の遺物が出土した。その下層で縄文早期の遺構が確認された。縄文早期の遺物数は 4000 点以上である。 縄文包含層は押型文単純層から刺突文・押型文・撚糸文共伴層、撚糸文・条痕文・刺突文共伴層の各層に分けられる。縄文早期の遺構には石組炉や集石遺構など、居住域を示す遺構がみられる。縄文時代早期の遺構・遺物群としては福岡市内でも規模が大きなもので、貴重な資料である。 縄文早期包含層の上層に古代の包含層が堆積するが、明瞭な遺構は確認できない。 調査区内の北～西側にかけて堀切状の溝状遺構が検出されている。溝の幅は 2.5 ～ 3m、総延長 32m で、元岡峰城に関連するものと思われる。							
特記事項							
調査担当者	大森真衣子				掲載報告書	26（1301 集）	

調査次数	59 次	調査面積（㎡）	2298	調査期間	20120123 ～ 20130315	調査番号	1140
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］谷包含層							
［出土遺物］条痕文土器（縄文晩期）・石器（石鏃）							
古墳時代							
［出土遺構］祭祀遺構（SX24）							
［出土遺物］須恵器（坏）・土師器（坏・小型壺・高坏・紡錘車・甕・壺・甑）・滑石製品（臼玉・紡錘車）・ミニチュア土器							
古代							
［出土遺構］焼土坑							
［出土遺物］須恵器（坏）・土師器（坏・皿・甕・壺・高坏・鍋）・瓦（怡土城瓦・鴻臚館瓦）・黒色土器							
中世							
［出土遺構］大溝（SD05）							
［出土遺物］輸入陶磁器（同安窯系青磁皿、龍泉窯系青磁碗・白磁碗）・朝鮮陶器（皿・碗）瓦質土器（擂鉢・足鍋・火鉢・羽釜）							
調査概要							
調査区は 31 次調査区の西側の谷頭部分及び丘陵斜面、丘陵裾部に及ぶ。谷頭から丘陵斜面にかけて大型の溝状遺構（SX05）が廻り、谷下方へ下るのが確認できた。溝は出土遺物から 12 ～ 13 世紀にかけて掘削されていたものとみられる。 丘陵裾部の溝際の祭祀遺構（SX24）では古墳時代中期の須恵器・土師器、滑石製品が多数出土した。遺物の時期は 5 世紀後半～末で、溝の縁で水辺祭祀を行った痕跡とみられる。 焼土坑から出土した木炭の AMS 年代測定の結果、8 世紀後半～ 9 世紀後半の木材であることが判明した。							
特記事項							
調査担当者	比嘉えりか			掲載報告書	23（1246 集）		

調査次数	60 次	調査面積（㎡）	271	調査期間	20130522 ～ 20130829	調査番号	1306
時代別出土遺構・遺物							
旧石器時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］台形様石器							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］須恵器（坏・壺・円面硯）・土師器（甕・高坏・甑）・土製品（土鈴）・石製品（砥石・台石・石錘）							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］陶磁器（龍泉窯系青磁碗・国産陶磁器）・瓦器鍋							
調査概要							
調査地点は 7 次調査近隣の谷の谷頭に位置し 7 次調査区とは尾根を挟んで 100m の距離である。谷部に堆積した包含層からの出土遺物は 7 世紀後半～ 8 世紀の古代の土師器・須恵器と、13 ～ 15 世紀の輸入陶磁器を含む中世陶磁器類に分けられる。明確な人為的遺構は確認できない。							
特記事項							
調査担当者	大森真衣子			掲載報告書	27（1302 集）		

調査次数	61 次	調査面積（㎡）	407	調査期間	20130701 ～ 20131023	調査番号	1315
時代別出土遺構・遺物							
古代							
［出土遺構］谷部遺物包含層							
［出土遺物］須恵器（坏）・土師器（坏・高坏・甕）・鞴羽口・石製品（石錘・磨石）							
調査概要							
遺跡南西端の、南に開口する谷部の谷奥部の調査。谷の内部に堆積した包含層から奈良時代の遺物が出土する。包含層は漸移的な堆積状況を示し、短期間での埋没や人為的な造成の痕跡はない。 調査区内では明瞭な遺構は検出されず、出土した遺物の量も少ない。42・52 次調査地点の谷を遡った地点であるが、時期、遺物の様相とも大きく異なっており、弥生中期～後期の遺物はない。							
特記事項							
調査担当者	清金良太				掲載報告書	24（1275 集）	

調査次数	62 次	調査面積（㎡）	1374.4	調査期間	20130901 ～ 20131115	調査番号	1327
時代別出土遺構・遺物							
中世							
［出土遺構］竪穴土坑							
［出土遺物］							
調査概要							
調査区は東西方向に延びる狭い尾根と、南に傾斜する斜面からなる。 調査の結果、調査区西半部は大きく削られた後で埋め戻されており、遺構・遺物は確認できない。造成の時期は 1980 年代とみられる。 調査区東半部では土坑 11 基を検出し、うち大型のものは中世の竪穴土坑とみられる。後世の斜面の造成により、大部分が削られているが、本来は深さ 2m 以上掘られていたと考えられる。小型の円形の土坑は、中世～近世の土坑とみられる。いずれの遺構からも出土遺物はなく、正確な時期は不明である。							
特記事項							
調査担当者	大塚紀宜				掲載報告書	31（1356 集）	

調査次数	63 次	調査面積（㎡）	1244	調査期間	20131001 ～ 20140423	調査番号	1328
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕）							
古代							
［出土遺構］							
［出土遺物］土師器（坏）・越州窯系青磁碗							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］龍泉窯系青磁碗							
近世							
［出土遺構］近世墓 27							
［出土遺物］土師器皿・銅銭（寛永通宝）・はさみ・キセル・刀子・釘							
調査概要							
調査区は尾根部と南側斜面・谷部に位置する。尾根部で検出された近世墓は、2m 以上の深い掘方で土壙墓または早桶を用いた墓葬で、うち 17 基は人骨が遺存しており、性別・年齢が判明するものもある。 尾根南側斜面は傾斜が強く、多数のピットが検出されたが建物を構成するものではない。 谷部の包含層は厚さ 2m で堆積し、下層は粗砂層や粘質土等の水成層により構成される。							
特記事項							
調査担当者	大森真衣子				掲載報告書	28（1328 集）	

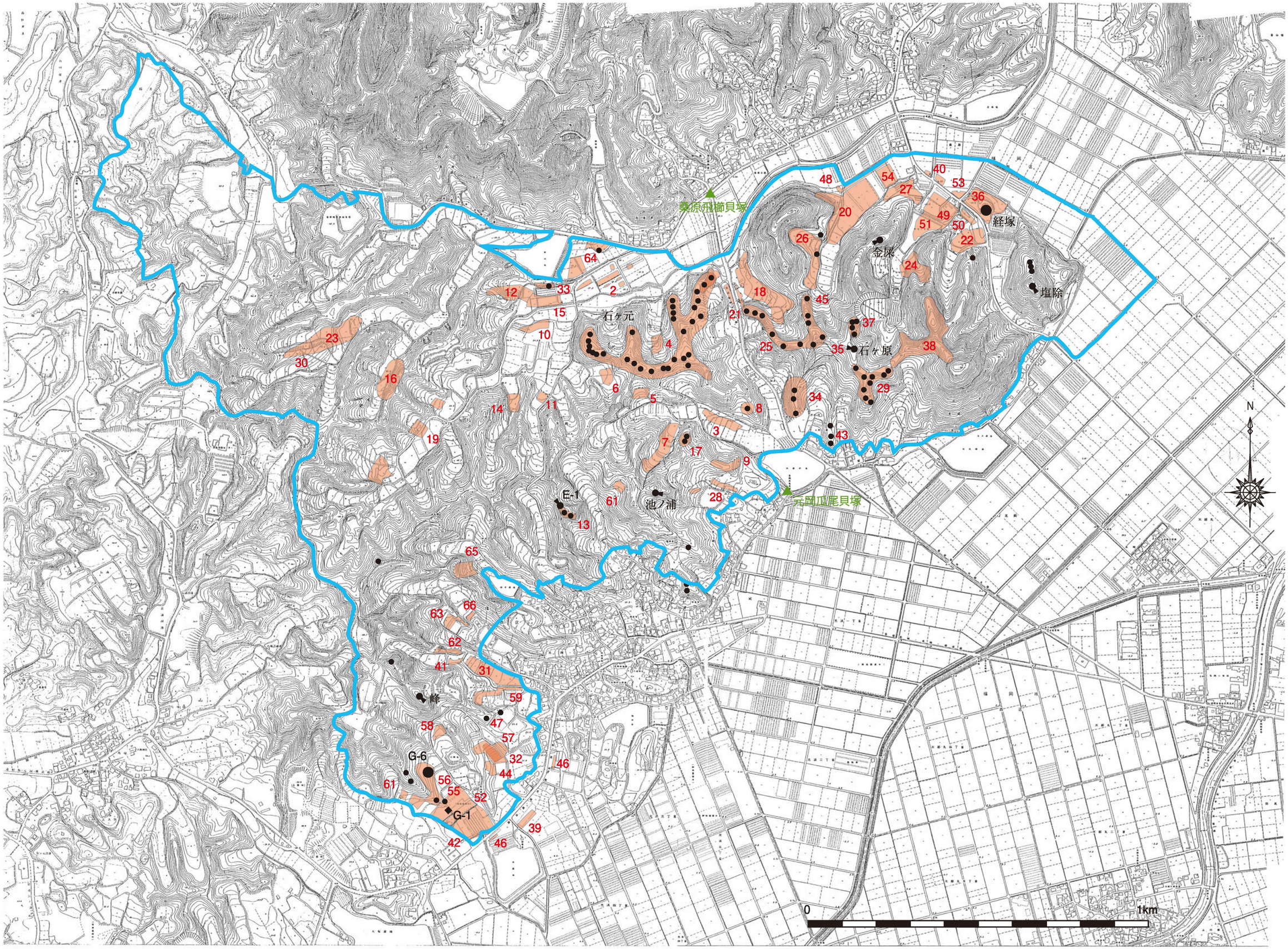
調査次数	64 次	調査面積（㎡）	2900	調査期間	20131001 ～ 20140430	調査番号	1331
時代別出土遺構・遺物							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］弥生土器（甕・高坏）・石器（石鏃）							
古墳時代							
［出土遺構］古墳 1（桑原錦田 A-3 号墳）							
［出土遺物］須恵器（坏・甕・𤭯・提瓶）・耳環・玉類							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］陶磁器（同安窯系青磁皿）・石製品（石鍋）・砥石							
調査概要							
調査区は平川池東側の河岸段丘及び下段の扇状地状の地形を呈する範囲である。下段では弥生時代後期～古墳時代初めの土器を含む包含層と、ピットが確認されただけで、遺構・遺物ともに稀薄である。 上段の河岸段丘面では古墳 1 基（桑原錦田古墳群 A 群 3 号墳）が確認された。墳丘は大きく削平され、石室は基底部の石材が部分的に原位置をとどめるだけで遺存状況は悪いが、奥壁幅 2.5m 以上、左側壁長 2.75m が確認できる。古墳の時期は 6 世紀後半以降と考えられる。地山上に堆積する包含層からは 7 世紀から中世にかけての遺物が出土した。							
特記事項							
調査担当者	清金 良太				掲載報告書	27（1302 集）	

調査次数	65 次	調査面積（㎡）	2451.2	調査期間	20140602 ～ 20141226	調査番号	1413
時代別出土遺構・遺物							
縄文時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］石器（黒曜石製石鏃）							
弥生時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］鉄器（袋状鉄斧）・石器（磨製石斧）							
古墳時代							
［出土遺構］							
［出土遺物］土師器（甕・坏・高坏）							
調査概要							
谷奥部の、北方向に開口する谷部と、その西側尾根部を調査区とする。尾根部分は表土除去後遺構を精査したが、明瞭な遺構は検出できなかった。 谷部包含層からは弥生時代～古墳時代の遺物が出土したが、遺物量は極めて少ない。袋状鉄斧は基部が折れ曲がる形状を呈している。出土遺物のうち、磨製石斧と鉄斧はこの地点での土地利用を示唆する遺物である。袋状鉄斧は、朝鮮半島系の鉄器（サルポ）の可能性もある。							
特記事項							
調査担当者	清金良太				掲載報告書	31（1356 集）	

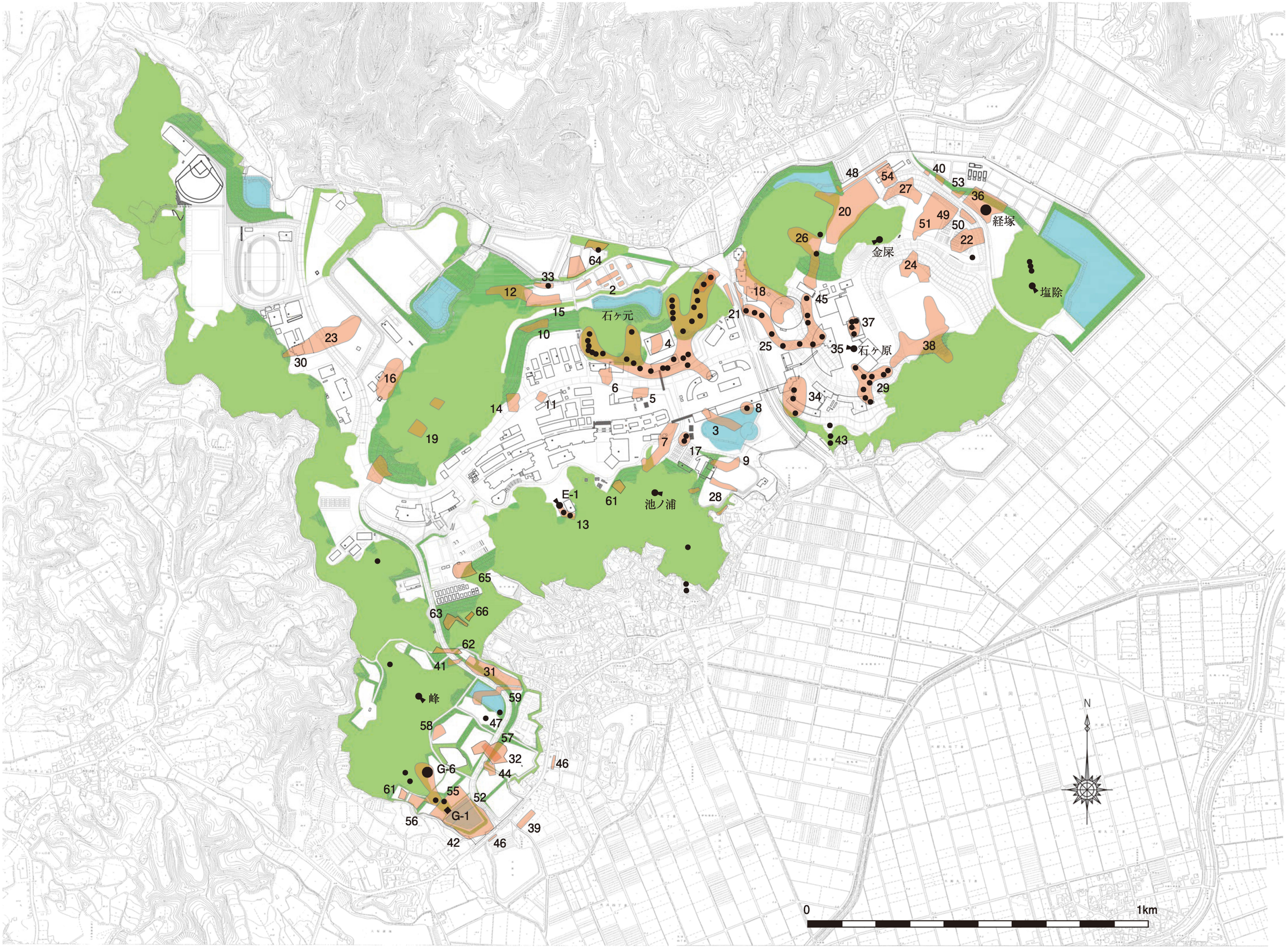
調査次数	66 次	調査面積（㎡）	167	調査期間	20150929 ～ 20151008	調査番号	1525
時代別出土遺構・遺物							
中世							
［出土遺構］							
［出土遺物］陶磁器（白磁碗・青磁碗・青白磁破片）							
調査概要							
造成工事の擁壁部分について調査対象に設定し、谷部内に堆積した包含層の調査を行った。近代～現代の層の下層から灰黄褐色粘質土からなる中世の包含層が確認され、12 世紀～ 14 世紀の遺物が出土した。							
特記事項							
調査担当者	中尾祐太				掲載報告書	28（1328 集）	

表2　元岡・桑原遺跡群発掘調査報告書一覧

書名	調査次数	集数	発行年
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1		福岡市埋蔵文化財調査報告書第693集	2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2		福岡市埋蔵文化財調査報告書第743集	2003
元岡・桑原遺跡群1	第2次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集	2002
元岡・桑原遺跡群2	桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第744集	2003
元岡・桑原遺跡群3	第3次・4次・8次・11次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集	2004
元岡・桑原遺跡群4	第12次-1・15次・24次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集	2005
元岡・桑原遺跡群5	第13次・17次・25次・29次・37次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第861集	2005
元岡・桑原遺跡群6	第22次・27次・28次・34次・金屎古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第909集	2006
元岡・桑原遺跡群7	第21次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第910集	2006
元岡・桑原遺跡群8	第20次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第962集	2007
元岡・桑原遺跡群9	第26次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第963集	2007
元岡・桑原遺跡群10	第46次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第964集	2007
元岡・桑原遺跡群11	第23次・30次・36次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1011集	2008
元岡・桑原遺跡群12	第7次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1012集	2008
元岡・桑原遺跡群13	第20次―2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1013集	2008
元岡・桑原遺跡群14	第12次-2・18次-1・20次―3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1063集	2009
元岡・桑原遺跡群15	第33次・40次・41次・44次・47次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集	2009
元岡・桑原遺跡群16	第18次―2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集	2010
元岡・桑原遺跡群17	第31次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1103集	2010
元岡・桑原遺跡群18	第20次―4・36次―2・38次・45次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1105集	2011
元岡・桑原遺跡群19	第9次・18次―3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1172集	2012
元岡・桑原遺跡群20	第43次・48次・49次-1・50次・51次-1・54次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1173集	2012
元岡・桑原遺跡群21	第42次―1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集	2012
元岡・桑原遺跡群22	第56次-1（G-3・G-6号墳）	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1210集	2013
元岡・桑原遺跡群23	第18次―4、42次-2、59次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1246集	2014
元岡・桑原遺跡群24	第42次―3、61次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1275集	2015
元岡・桑原遺跡群25	第42次-4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1276集	2015
元岡・桑原遺跡群26	第58次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集	2016
元岡・桑原遺跡群27	第18次-5、60次・64次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1302集	2016
元岡・桑原遺跡群28	第20次-5、42次-5、53次、57次-1、63次、66次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集	2017
元岡・桑原遺跡群29	第42次-6、52次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集	2018
元岡・桑原遺跡群30	第56次-2（G-6号墳）	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1355集	2018
元岡・桑原遺跡群31	第49次-2、51次-2、57次-2、62次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1356集	2018
元岡・桑原遺跡群32	第52次-2、54次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1380集	2019
元岡・桑原遺跡群33	第55次、56次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1381集	2019
元岡・桑原遺跡群34	調査総括編	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1385集	2019
桑原遺跡群1　第1次発掘調査報告	第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第432 集	1995
桑原遺跡群2 飛櫛貝塚第1次調査	桑原飛櫛貝塚第1次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第480 集	1996



第1図　元岡・桑原遺跡群調査区位置図(1/10,000)



第2図　元岡・桑原遺跡群調査区位置図（造成工事後）（1/10,000）

特論１　旧石器時代から縄文時代の元岡・桑原遺跡群

萩原 博文

１　旧石器時代

（１）　旧石器時代の概要

日本の旧石器時代は、ホモ・サピエンス（新人）の登場以後と考えられる後期旧石器時代と、それ以前に分けられる。元岡・桑原遺跡群とその周辺地域で確認される旧石器時代の遺物は、全て後期旧石器時代のものであり、ここではその時代のみを取り上げることにする。

後期旧石器時代の始まりは全国的に約 38,000 年前（38,000calBP）とされており、この頃遺跡数が増加し、大陸から人類の流入が考えられている。この時期の地球は寒冷化が進行し、乾燥した気候下にあった推定されている。旧石器時代は氷河時代と呼ばれているが、その中では比較的暖かい時期に相当するため、朝鮮半島との陸橋は想定されず、人類は海を渡ってきたと考えられる。朝鮮海峡は、人類が日本列島へ来る主要なルートなのである。北方や南島ルートに比べ、最も早い時期に人類が到達したのが朝鮮海峡ルートと言えよう。

この頃の人類は、ナウマンゾウやヤベオオツノジカなどの大型動物の狩猟で生計をたてていたと考えられる。ところが、約３万年前頃その数の激減が想定され、その後暫くして絶滅する。よって、後期旧石器時代後半にはシカ類やイノシシなどの中小動物の狩猟が中心になると思われる。28,000 年前以降は最終氷期において最も寒い時代で、植物相は現代とは異なっており、マツ科の常緑針葉樹林と考えられている。狩猟とともに、可食植物の採集も行っていたと考えられるが、詳細は明らかにされておらず、磨石や石皿などの植物を加工する道具も殆ど検出されていない。

旧石器時代は、動植物を追い求め移動を繰り返す時代と考えられている。その証拠に遺構の形成されていない小規模な遺跡が多数を占めている。糸島半島でも同様と思われ、旧石器時代遺物が大量に検出された事例はない。短期間に移動を繰り返し、その場で必要な道具（石器）を製作していたと考えられる。福岡地方では素材生産から石器製作までの全工程の認められる遺跡は少なく、少数の定形石器や剥片が出土する遺跡が多い。

日本列島では沖縄を除き、人骨などの有機物が発見されることは稀で、石器や礫群のみが人類遺物と言っても過言ではない。福岡地方も例外でなく、黒曜石や安山岩製の石器、礫群などの遺構が検出されるにすぎない。しかし、ユニットなどと呼ばれる遺物集中部や遺構を組み合わせ、当時の人類行動を研究する方法が発展してきた。福岡地方でも板付遺跡や井尻Ｂ遺跡などで研究が進められている。

元岡・桑原遺跡群では旧石器時代の石器は多数発見されているが、原位置の状態で検出されたものが殆どなく、その実態は不明と言わざるを得ない。本遺跡群では、旧石器時代の堆積土が河川などの作用で流出する過程で、後の時代の埋土に混入したものである。よって、この地域では旧石器時代の本格的研究が行われていないのが現状である。

（２）　遺跡の立地

日本列島の旧石器時代の遺跡は、水源に近い台地の端部に形成される場合が多い。九州も例外でなく、多くの遺跡が調査されている。大きな台地の認められない山間部などでも、池や湿地などの近く営まれる場合が多く、遺跡の立地する上で水源が大きな意味を持つものと思われる。台地中央に立地するのは小規模遺跡のみで、集団の多くが集合する大規模遺跡は水源の近くに位置しているのである。

糸島半島は、花崗岩台地を小規模の河川が解析し、多数の小さな河岸段丘が形成されている。旧石器時代や縄文時代の遺跡は、これらの段丘に形成されたと考えられる。ところが、洪水などにより段丘堆積物の一部が流出しているのである。その部分を新しい堆積物が覆う、というのが本遺跡群の実体と考えられる。新しい堆積物の中には土石流もあり、温暖期には大規模なものが認められ、暫くの間、人類の居住に適さなくなった時代もある。

旧石器時代の遺物は、段丘堆積物の流出した縄文時代の遺物包含層や（旧）河川堆積物などから検出されている。縄文時代草創期前半のものではあるが、58 次調査地点では細石核製作に関する接合資料が認められ、近接した場所で検出していることから、本来の場所は極めて近いと思われる。他の遺跡でも、石器に移動することによって生じるキズ痕の認められない場合があり、近くから移動しているものが意外と多いように思われる。このことから、旧石器時代の包含層などを削り取った土などで縄文時代の包含層が形成された可能性が指摘できる。

しかし、比較的広い段丘面には旧石器時代の包含層が残されている可能性がある。42 次調査では泥炭層も確認されており、52 次調査でも縄文時代草創期の遺物が認められることから、旧石器時代のものも良好な状態で保存されている可能性が高いのである。

（3） 遺物の変遷

① 遺物変化の概要

旧石器時代石器の形態変化の研究は、同時性の明確な火山灰の堆積や放射性炭素年代などを利用することにより発展してきた。ナイフ形石器や台形石器などの出現・消滅時期、形態変化は、地域ごとに研究が進められてきた。火山灰の発達はないが、福岡地方も例外でなく、周辺地域との比較などにより、比較的詳細な編年関係が明らかにされている。図 1 は、北部九州で検出された主要石器の編年関係を示したものである。ナイフ形石器や台形石器のように存続期間の長いものと、剥片尖頭器など短期間で消え去るものがある。このほか、掻・削器、彫器、錐器などがあるが、形態的には縄文時代のものと共通するものもある。型式名のある特徴的な形態は少なく、元岡・桑原遺跡群に直接関係のある道具もなく、図では省いている。

ナイフ形石器群と細石器は、道具の使用方法に大きな違いがある。後者は組み合わせ道具であり、骨格等に埋め込んで使われる。これは旧石器時代の中で最も大きな変化であり、道具に関する考え方が革命的に変わっている。

一般的に、土器の出現によって縄文時代が始まるとされているが、九州では細石刃が引き続き用いられ、主要な狩猟具として利用されている。土器出現後も、旧石器時代的な道具が引き続き用いられているのである。人類の生活は革命的に変化するのではなく、長い時間をかけ、徐々に変わっていったのである。この頃土器や石鏃など、縄文時代的な道具が次々に出現している。その間、旧石器時代的な石器は長期間残存したのである。

ただし、元岡・桑原遺跡群は原位置による出土例はなく、個々の遺物の形態的特徴から判断せざるを得ず、時間的位置付けが困難なものがある。九州の旧石器時代には、同じような形態の石器が再び用いられる例がしばしばあるのである。図 2 と 3 は元岡・桑原遺跡群から出土した代表的な石器である。これのみでは石器文化の説明が充分出来ないので、福岡を中心とする北部九州を念頭にその概要を提示したい。

② ナイフ形石器文化前半

約 38,000 年前より、姶良 Tn 火山灰降灰やや後の約 29,000 前の寒冷化が進行しつつある時代に

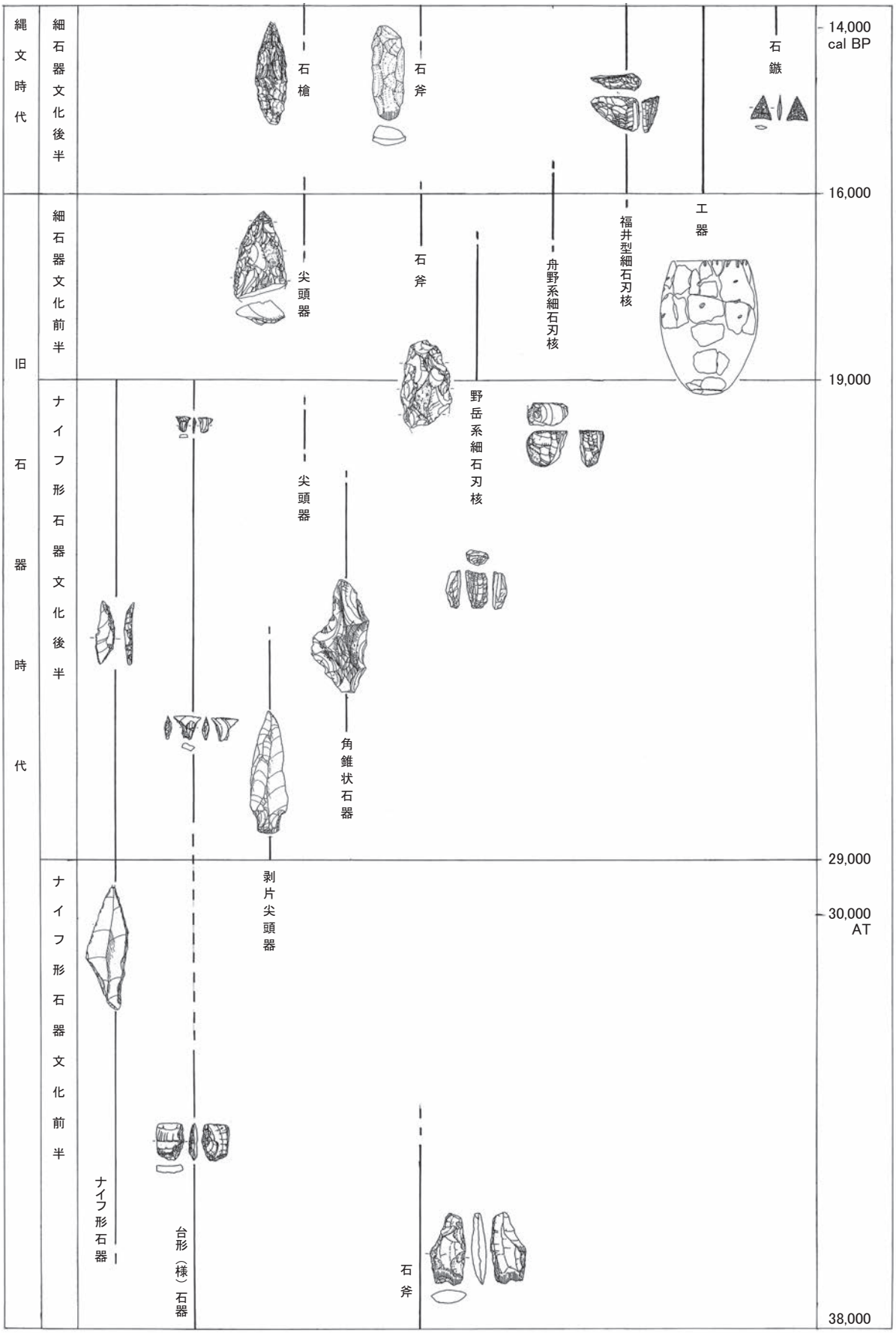


図1　旧石器時代から縄文時代初頭の遺物変遷

該当する。ナウマンゾウやヤベオオツノジカなどの大形哺乳動物が生息している時代であるが、狩猟活動の詳細は明らかでない。

当初は台形様石器と部分磨製石斧などが認められ、暫くして石刃製ナイフ形石器が出現する。九州では後期旧石器時代を特徴付ける石刃技法は、出現期には組成しないと理解できるのである。縦長剥片は古くから認められることから、初源期はナイフ形石器と結びついていない可能性が強い。

図 2.7･8 はナイフ形石器文化前半期に良く見られる台形（様）石器であるが、7 のような形態は後半期にも用いられている。前半期は両面に平坦細調整を施したものが特徴的に認められるが、後半期には枝去木型台形石器として形態的に完成する。

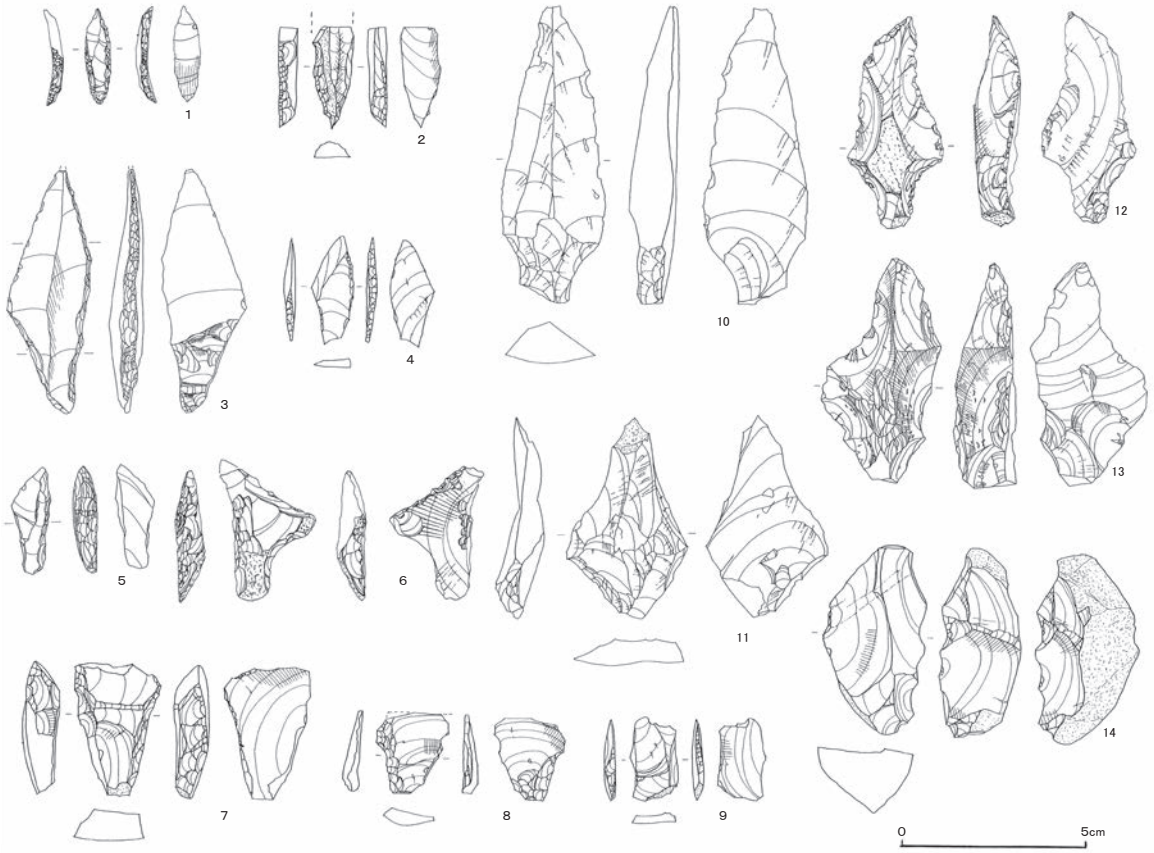
柳葉形の図 2.2 や背面基部細調整を施す 3 は、前半期末に良く見られるナイフ形石器である。1 や 4 のようなものは長期間存続するようである。前半期初期は基部加工のナイフ形石器が良く見られるが、福岡地方ではあまり発達しない形態である。

ナイフ形石器文化前半期の初期は台形（様）石器と石斧によって特徴付けられるが、その後半は石刃技法とナイフ形石器が発達する。このような傾向は日本列島の大部分に認められ、同じような内容の文化が形成されていたものと考えられる。

福岡地方は、明確に前半期に位置付けられる遺跡の発掘調査例が少なく、詳細な編年関係は明らかにされていない。大分や熊本地方のように火山灰による厚い堆積物が検出されないため、多層遺跡が認められず、研究の進展を妨げているのである。

③　ナイフ形石器文化後半

後半期は最終氷期の中で最も寒冷な時期で、氷河時代の名にふさわしい時代である。朝鮮半島から剥片尖頭器が齎されることによって画期され、細石刃が登場するまでの約 1 万年間存続している。



1･6･12……3次　13……18次　3･5……20次　2･4，7～9，14……27次　10･11……58次

図2　元岡・桑原遺跡群出土ナイフ形石器文化の石器

剥片尖頭器や角錐状石器など狩猟具の発達が認められるが､大形哺乳動物は絶滅に向かう時期である。礫群などの遺構が九州各地に認められるが、糸島半島周辺ではあまり認められない。

ナイフ形石器は図 2.1･4 のような一般的なものもあるが、台形石器の影響を受け、5 や 6 のような切出形石器が発達する。台形石器は、時間の経過とともに原の辻型、枝去木型、百花台型と特徴的な形態が認められ大量生産されている。このような状況は東九州には認められず、北部九州や西九州に特有な在り方である。9 は百花台型の一種と考えられる。原の辻型台形石器を製作した良好な事例は、井尻 B 遺跡（阿部ほか 2014）に認められる。この石器は素材生産から石器製作に関し、強い規制がみられる。その過程には、瀬戸内技法の影響も認められる。

図 10 は、基部のみに細調整を施した典型的剥片尖頭器である。朝鮮半島の事例と比較すると、舌部が幅広である。朝鮮半島では長期間存続するようであるが、九州では極めて短期間大量生産されている。11 は今峠型ナイフ形石器と呼ばれる特殊な石器である。今峠型は黒曜石を素材とする場合が多いが、この石器は安山岩が用いられている。

図 12･13 は角錐状石器である。12 は舌部を作り出したもので、剥片尖頭器の影響を受けている。13 もこれに近い形態である。角錐状石器は存続期間も長く、これ以外にも多様な形態が認められる。また、本州の広い範囲に分布することから、日本の旧石器時代の中でも一般的な器種である。

図 14 は、幅広の不定形剥片を剥離した石核である。台形石器などの素材を生産したと考えられる。石核は時間的変化の少ない石器であり、長期間殆ど変化しない。北部九州などではナイフ形石器やスクレーパー類・彫器の素材を剥離する技術として、石刃技法が発達している。この地域では、松浦産などの黒曜石円礫を素材とする磯道技法が認められる。

本州では、ナイフ形石器文化の終末期に槍先形尖頭器の発達が認められる。中部地方を中心としてこの石器は縄文時代にも受け継がれ、形態的に変化する様子が確認される。旧石器時代の九州でも、南九州などで極めて短期間特殊な形態の尖頭器が認められる。北部九州でも製作されたようであるが、詳細は明らかにされていない。終末期は本州と異なり、基部加工ナイフ形石器を中心とする小形ナイフ形石器や、小形の百花台型台形石器が発達するようである。

ナイフ形石器後半期は朝鮮半島からの石器が齎されることによって開始され、遺跡数も急激に増加している。原の辻型台形石器など、比較的小さな地域単位に独特の型式が発達する地域性の顕著な時代と言える。前半期に比べると、各種石器が地域ごとに異なるのが特徴といえる。

糸島半島では、前半期の様相はあまり明確でないが、後半を特徴付ける器種が複数の遺跡で確認される。人口の増加により、本地方の小河川流域がしばしば利用されるようになったと思われる。剥片尖頭器や角錐状石器など狩猟具と考えられる石器も多いことから、動物も水場等に良く集まって来たのであろう。

④　細石器文化前半

約 19,000 年前頃、突然細石刃石器群が北部九州に認められるようになり、ナイフ形石器文化は終末を迎える。その出自は明らかでなく、大陸からの伝播説と内部発展説がある。朝鮮半島や北海道ではこれより大分前に細石器文化が始まっているが、細石刃核の形態などは九州のものとは異なっている。図 1 のように、約 16,000 年前頃には土器が出現するので、旧石器時代の細石器文化前半は約 3,000 年間の短期間認められる文化である。

ナイフ形石器文化とは石器の形態に大きな違いがあるが、石材は引き続き松浦産等の黒曜石円礫を使用しており、同じ人類集団によって受け継がれた可能性がある。北部九州ではナイフ形石器文化後半期の変化もさほど大きなものでなく、大規模な人類の交替は旧石器時代を通じて考えにくい。

この時期の細石刃核は日本列島全域で大きな違いはなく、野岳系細石刃核（位牌塔型細石刃核など）と呼ばれている。その終末期の土器出現直前には、船野型細石刃核と呼ばれるものが西南日本に分布している。このように、細石刃文化前半は日本列島の広い範囲に共通する石器文化が拡がっていたと考えられる。船野型は北方に分布するホロカ型細石刃核と共通する部分が多く、両者の接触により生まれたと思われる。

この状況は、ナイフ形石器文化後半と異なっており、何らかの強い力が作用しているものと思われる。西南日本の広い範囲でナイフ形石器から細石器への移行がなされており、全く異なる狩猟具が採用されているのである。当時の人類にとって、細石刃は優れた道具だったと言えよう。あるいは、動物相の変化がそれを促したとも考えられる。

一般的に北部九州では、前半より後半の細石刃石器群の方が格段に多く認められる。図 3.1・2 は野岳系細石刃核の破損した一部、3 は船野型細石刃核である。その他は後半の関連資料で、福井型に関するものである。

野岳系細石刃核の最初期に位置付けられる茶園型細石刃核は、ナイフ形石器文化終末期の磯道型石核との類似点がみられ、何らかの関連性が指摘できる。（細）石刃の幅はやや小さいが、石材や製作技法に共通点がある。中国大陸や朝鮮半島からのインパクトで細石刃を生みだしたとしても、その地域の伝統の中に組み込んだと考えられるのである。

前半終末には再び石斧が現れる。北方からの影響と考えられるが、興味深い事柄である。同時に円形刃部掻器の発達が認められ、今までとは住居や衣服に関する考え方に違いが生じたように思える。晩氷期における、温暖化の始まる約 15,000calBP のベーリング期よりやや前の出来事である。

4・12, 14〜16……3次　13……18次　11……27次　3・5・6……54次　1・2, 7〜9, 10……58次

図3　元岡・桑原遺跡群出土細石器文化の石器

2　縄文時代草創期前半

①　細石刃文化後半

九州や北海道は、ほかの地域に比べ細石刃文化がかなりの期間残存している。北部九州は、泉福寺洞窟や福井洞窟の再調査成果から、日本列島で最も早い約 16,000calBP に土器が出現したことが明らかにされている。

土器の出現とほぼ同時に細石刃核の形態も変化し、福井型細石刃核が登場する（図 1）。船野型は暫く存続していたものと思われる。初源期の土器は豆粒文土器や隆線文土器で、西北九州の洞穴遺跡で確認されている。それに続く爪形文土器は、福岡県の門田遺跡で検出されている。糸島半島では福井型は多数発掘されているが、土器は発見されていない。この時代の土器は極めて少数で、拠点遺跡以外持ち運ばない可能性もある。

細石刃文化後半終末には石鏃も組成されるようになる（図 1 ）。初源期の石鏃は南九州と同様、三角形を呈し、抉りが認められない。それとともに、豆粒文土器や隆線文土器段階には認められない石槍型尖頭器や石斧も共伴している。これらの石器は本州でも認められるのだが、古い段階のものに形態的に類似している

本州では、大形石斧や尖頭器に特徴付けられる神子柴文化に初源期の土器が伴い、その後隆線文土器や有舌尖頭器が発達している。この間九州では細石刃が存続するのだが、両者の比較はかなり困難である。九州では有舌尖頭器の発達が弱く、茶園遺跡や直谷岩陰に見られる尖頭器や石斧について、本州との対比も結論を得ていない状況である。

細石刃と同じ狩猟具である槍先型尖頭器、石鏃の発達によって、ようやく細石刃文化は終末を迎える。以後石鏃が発達し、石槍も狩猟具の中で補完的な役割を果たすようになると思われる。本格的な縄文文化は植物採集・漁労などが発達し、狩猟活動の役割は相対的に低下するようである。

②　元岡・桑原遺跡群の細石刃核

糸島半島の小河川で形成された段丘には、楔形を呈する福井型細石刃核関連資料が多数検出されている。細石刃文化後半の集団にとって、良好な生活空間が形成されていたものと思われる。恐らく、狩猟活動のキャンプ・サイトとして利用されていたのだろう。

図 3.4 ～ 16 はその一部である。15・16 は細石刃を剥がす前の段階のもので、ブランク（母型）と呼ばれている。両面に細調整を加え両面加工品を作ろうとしているが、細調整は粗く、両者共に自然面を大きく残している。16 は長軸方向の加撃で打面を作り出している。その時生じるのが、14 のようなスポール（削片）である。このような資料は、北方系の湧別技法などにも認められ、両者の関系が問題となる。

図 5・6・10 は、打面を縦長のスポールを剥離することにより形成しているが、そのほかの細石刃核は横打による幅広剥片の剥離痕が認められる。後者は福井型の典型的事例であるが、福井洞窟などでも縦長スポールを剥ぎ取る技術は認められる。

図 7 ～ 9 は、58 次調査地点で出土した接合資料である。最終的に細石刃剥離に失敗したと思われる剥片 8 と、打面より側面調整を行った剥片（9 の一部）と 7 が接合したものである。打面部からの側辺調整は船野型細石刃核に認められる技術であるが、この資料は下縁調整が明確で、福井型のバリエーションと言える。

3　縄文時代草創期後半から早期前半

元岡・桑原遺跡群を含む福岡地方で、良好な文化層の調査事例が蓄積されているのは、縄文時代草創期後半から早期前半にかけた時代である。小規模の河岸段丘などに立地する複数の遺跡より、住居跡・炉跡などの遺構、土器・石器などの遺物が大量に検出されている。晩氷期から完新世初頭に相当し、寒暖が繰り返された時代である。温度変化に伴い動・植物相など環境の変化が著しく、それに伴い人類集団の行動が大きく変化したと考えられ、主要遺物の形態的特徴もそれを反映している。ここでは寒暖差に主眼を置き、多方向から当時の人類集団に迫ってみたい。

（1）　最終氷期終末（草創期）から完新世初頭（早期）の寒暖差と文化

①　北部九州におけるスクレーパー類の形態変化

最終氷期の寒冷な気候も、約 15,000 年前頃になると温暖化が始まり、晩氷期に移行する。晩氷期は温暖なベーリング期、アレレード期と寒冷気候のオールダー・ドリヤス期、ヤンガー・ドリヤス期に分けられる（図 4）。ただしオールダー・ドリヤス期は、日本では明確な寒冷化の傾向は確認できず、短期的なものであるため、前半の温暖期（ベーリング・アレレード期）と後半の寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）に二分されて理解されている（工藤 2012）。

ヤンガー・ドリヤス期の始まりは、グリーンランド氷床コアや中国フールー洞窟の石筍、福井県水月湖の年縞堆積物などによって、暦年で約 13,000calBP とされている。その終末は 11,600calBP 頃で、本格的な温暖化の始まる完新世へ移行する（図 5）。

考古学遺物において、寒暖の差を最も良く表しているのはスクレーパー類である。生活の実態を良く表しているのだろう。本章は、寒冷期と温暖期の遺物を扱うものであるため、15,000calBP の温暖化直前から完新世の始まり（ほぼ縄文時代草創期から早期前半）までを取り上げる。草創期前半は福岡地方に良好な遺跡が存在しないため、西北九州の洞窟遺跡を取り上げる。代表的文化層の主要遺物変遷は図 4 に示すとおりであり、寒暖に良く対応しスクレーパー類が変化している様子が窺える（大森編 2016）。

福井洞窟 4 層は土器出現直前で、旧石器時代の最終末に位置付けられる。船野型細石刃核（図 4.83・84）と共に安山岩製の大形厚手幅広剥片の端部に斜め細調整を施したスクレーパー類（77・78）が特徴的に組成されている。細石刃（79 ～ 81）は細小の大きさで、石槍（82）や石斧も組成されている。その直上の 3c 層も同様のスクレーパー類が検出されているが、共伴する細石刃核は福井型である。第 2 トレンチでは、楕円形状の掻器も検出されている（鹿叉 2015）。この掻器は、北日本で良く見られるエンド・スクレーパーの一種と考えられ、皮革加工と強く結びついている可能性がある。3c 層の放射性炭素年代値は、温暖化の始まる 15,000calBP より古く、16,000calBP に近い値である（栁田編 2016）。豆粒文土器（76）や隆起線文土器、泉福寺 10 層類型細石刃核（75）などが出土している泉福寺洞窟 10 層も、ほぼ同時期の所産と考えられる。スクレーパー類（69・70）は同じ形態であるが、その割合は福井Ⅳ層に比べ低いようである（麻生編 1985）。土器出現前後に細石刃核等は大きく変化するが、安山岩を用いた同じ形態のスクレーパー類が存続する点は重要である。この地域をテリトリーとする、同じ集団が土器を獲得した可能性が指摘できるのである。

泉福寺洞窟 7 ～ 9 層は、主に隆線文土器（68）を伴い、細石刃核は 8 層類型（67）が組成されている。当初 15,000calBP 以降と考えたが、冷涼・乾燥気候を特徴付ける砂層に包含されていることから、温暖化以前である可能性が高いと思われる（中村・石井 1980、川道 2015）。ほぼ同時期と考

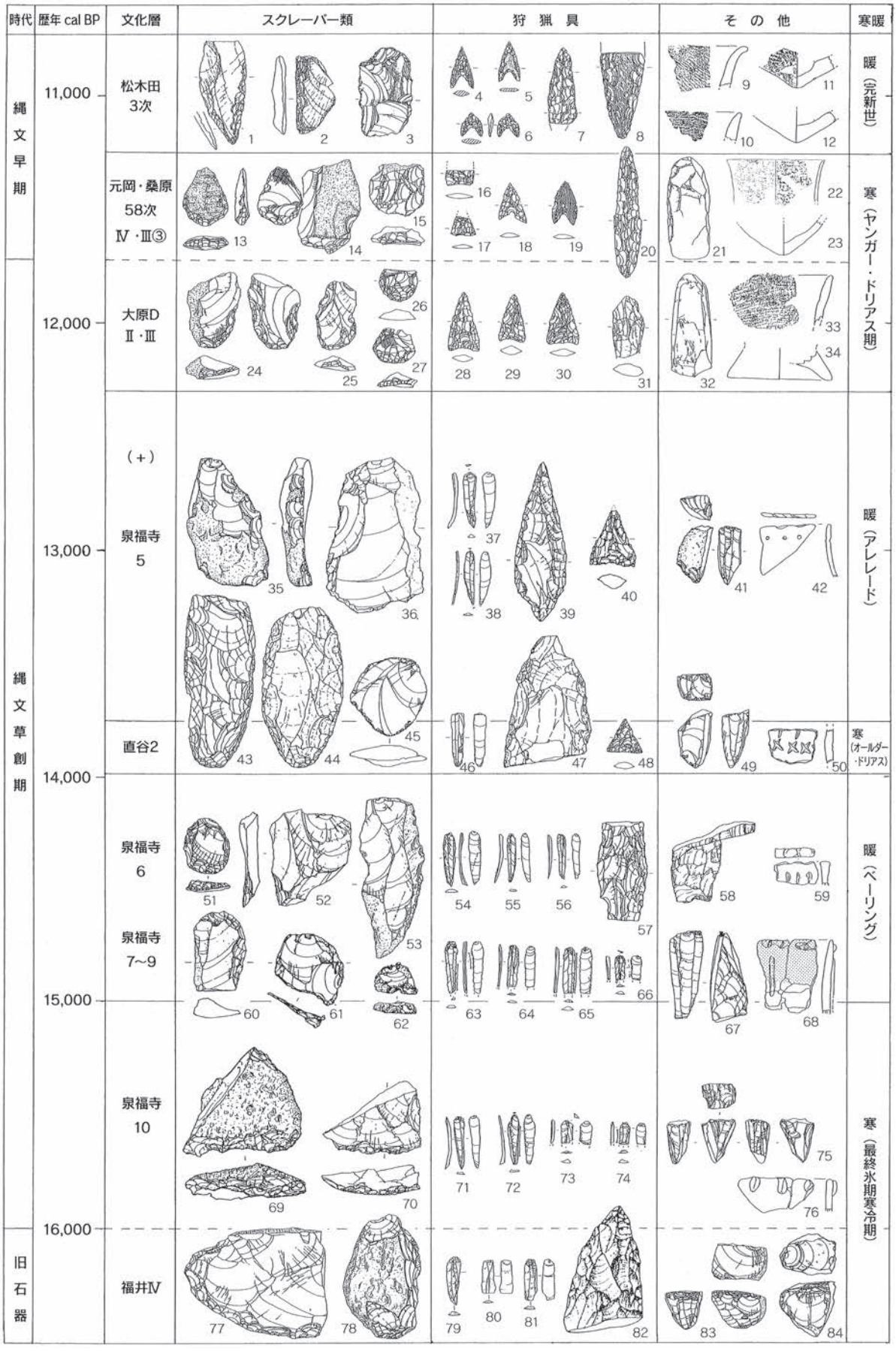


図4　寒冷適応とスクレーパー類の変遷（石器 1/3、大形石器・土器 1/4 ～ 1/8）　大森編 2016 より

えられる福井 3a 層は 15,000calBP より前であり、2 層の爪形文土器との間に温暖期との境界がある（工藤 2018）可能性がある。スクレーパー類の割合はさらに低下するが、61・62 のように 77 の小形化した形態も含まれている。サイド･スクレーパー（60）の形態は、5･6 層のものと類似している。

泉福寺洞窟 6 層は 51 のようなスクレーパーも認められるが、53 のようなサイド・スクレーパーが目立つ存在となる。細石刃核（58）に大きな変化はないが、再び石槍（57）が組成されている。土器は爪形文土器（59）が新たに登場している。爪形文土器が含まれる福井洞窟 2 層も、同じような傾向が窺える。泉福寺 5 層は 6 層と整合の関係にあり、シルト層またはシルト質砂層であり、細石刃核を伴うことから近い時間関係にあると考えられる。6・5 層は温暖で湿潤な気候下で形成された可能性が強く、15,000calBP 以降のベーリング期に位置付けられよう。6 層と同様、35・36 のような大形サイド・スクレーパーが認められる。石槍（39）を伴う点は同じだが、新たに石鏃（40）が登場し、土器文様も押引文に変わる。5・6 層段階には小形の円形刃部掻器（51）もみられるが、スクレーパーそのものの役割が低くなり、その割合が低下する。

再び安山岩製横広大形スクレーパー類が登場するのは、直谷岩陰 2 層である（川内野 2008、松尾・川内野 2010）。これに加え、尖頭形の大形エンド・スクレーパー（43・44）を組成している。この形態は九州ではみられず、他地域から齎されたと考えられる。福井型細石刃核（49）、X 字状爪形文土器（50）、石鏃（48）などと共伴している。放射性炭素年代値は 14,000calBP 頃であり、短期間ではあるがやや寒冷の傾向にあるオールダー・ドリヤス期に相当する可能性が高い。日本では寒冷期として捉えられていないようであるが、人類遺物としては明確な寒冷適応と評価できる。

直谷岩陰 2 層と泉福寺 5 層はスクレーパー類の形態的特徴は異なるが、他の石器組成は大きな違いはない。直谷岩陰が爪形文土器の範疇に含まれるため古いと考えていたが、泉福寺 6 層と 5 層の連続性を考えると、5 層より新しい可能性もある。

直谷岩陰と同じく石槍、石鏃、石斧を共伴する五島列島の茶園遺跡Ⅳ層も同じく細石刃石器群の終末期に位置付けられよう。石鏃が主体をなす平戸市田崎遺跡はこれらより新しい可能性が高い。アレレード期に相当する温暖期は、南九州の隆帯文土器の盛行期とほぼ一致すると思われるが、その時期の北部九州の様相は明らかでない。細石刃石器群の最終末や、最近報告した元岡・桑原遺跡群 52 次調査（図 5）が該当するものと思われる。

図 4 には示していないが、その後報告した 52 次調査地点（常松編 2018）は、各種サイド・スクレーパー（図 8.160・161）を主体に構成されている。U 字状の抉りを施した大形石鏃（153 ～ 155）に特徴があるが、このような形態は九州には認められず、本州でも一般的でない。石槍（159）も、丁寧な細調整を施した薄手のものである。平底の隆線文土器（163 ～ 169）を伴うが、福井洞窟や泉福寺洞窟のものとは違いがある。このような遺物群は九州には認められず、現在のところ日本列島に例がないため、その出自は明らかでない。

ヤンガー・ドリヤス期の寒冷化が始まると、北部九州では多数の遺跡が確認されている。日本列島各地で特徴的な掻器が認められ、堤隆は本州の多縄文土器と共伴する円形刃部の特殊なスクレーパーを寒冷化の特徴とした（堤 2000・2003）。保坂も縄文時代草創期の掻器について論じている（保坂 1999）萩原は岩下洞穴Ⅸ層など北部九州を中心とする当該期の遺跡・遺物について言及した（萩原 2001・2016・2019）。

北部九州で、西北九州産黒曜石を素材とする小形円形スクレーパー（図 4.26・27）が発達するのは、西北九州の岩下洞穴Ⅸ層、泉福寺洞窟 4 層、福岡地方の大原 D 遺跡 14 区（24 ～ 34）、元岡・桑原遺跡群 3 次・58 次（13 ～ 23）などである。鹿児島県の建昌城跡でも、多量の円形刃部掻器が

検出されている。これらのなかで最も古い放射性炭素年代値は、13,000calBP であり、グリーンランド氷床コアの寒冷化する時期（ヤンガー・ドリヤス期）とほぼ一致している。スクレーパーとしては劇的な変化で、寒冷適応の典型的な姿と評価できる。福井洞窟 4・3c 層や直谷岩陰 2 層に比べると小形化し、円形を呈するものの割合が高くなっている。また、円形掻器には黒曜石が用いられている。

寒冷化の始まる時期と考えられる岩下洞穴Ⅸ層、大原Ｄ 14 区Ⅲ層下部、元岡・桑原遺跡群 3 次調査下層、建昌城跡はスクレーパー類の割合が極めて高く、特に黒曜石製小形円形掻器が発達する。ところが、元岡・桑原遺跡群 58 次Ⅳ・Ⅲ③層ではスクレーパー類の割合は低下するが、やや大形の円形掻器（15）、定形化した大原 D・元岡型スクレーパー（13・14）が認められる。これらはヤンガー・ドリヤス期の後半に位置付けられる可能性が高く、前者とは石鏃など狩猟具の形態や土器の文様・底部形態などに違いが認められる。

前半期の石鏃は三角形や二等辺三角形（28 ～ 30）が大半であるが、後半期は三角形を呈するもの（16・17）もあるが、抉りの深いもの（18・19）が一定量含まれ、部分磨製石鏃（19）の割合も高くなる。石槍は後半期に定型化する（20）。土器は、前半期は平底や上げ底（34）の無文土器や条痕文土器が認められ、後半は乳房状尖底（23）の条痕文土器や刺突文土器である。撚糸文土器が出現している可能性もある。このように、前半期と後半ではスクレーパー類以外の遺物が大きく変化しているのが特徴と言える。

11,600calBP 頃完新世の本格的温暖化が始まるが、再びサイド・スクレーパーが優勢となる。松木田遺跡（図 4.1 ～ 12）では、小形石鏃（4 ～ 6）や石槍（7・8）が発達し、部分磨製石鏃・石槍の割合が最も高くなる。サイド・スクレーパー（1・2）は特徴的な形態である（米倉 2001）。土器は尖底の撚糸文土器（9 ～ 12）である。ヤンガー・ドリヤス期末と比べ狩猟具に大きな変化はないが、円形刃部掻器は消滅している。同じような文化層は元岡・桑原遺跡群 3 次調査地点中層に認められ、ここでは撚糸文土器とともに刺突文土器や条痕文土器が共伴している。

環境の変化に伴い、スクレーパー類の形態が大きく変化することが明らかとなった。各時代、地元の石材と結びついた特徴的な形態が認められる。最終氷期終末や晩氷期の寒冷期には、幅広の掻器や尖頭形掻器が特徴的に組成されている。ヤンガー・ドリヤス期には、初めて西北九州の黒曜石と結びついた小形円形掻器が大量生産され、その後半にはエンド・スクレーパーの一種である大原 D・元岡型スクレーパーが完成した姿を見せる。また、寒冷期（の始まる時期）にスクレーパー類の割合が高いことも共通して認められた。

晩氷期の温暖期（ベーリング期）には大形のサイド・スクレーパー、アレレード期はやや小形サイド・スクレーパーが特徴的に組成されている。ヤンガー・ドリヤス期を挿み千年以上経過した、完新世初頭にも同様の形態が認められる。

最終氷期終末から完新世初頭の約六千年間、二種のスクレーパー類が交互に発達することが明らかになった。両者共に時間の経過とともに小形化し、形態的特徴も少しずつ変化しているが、長い空白期を経て前代のものが復活していると考えられる。気候変動により、石器製作にも変化が起こっていると解釈できる。この数千年間は気温変化のみでなく、植物相・動物相を含めた大きな環境の変動が起こったはずである。

動・植物相は、環境の変化に伴い移動することが明らかにされている。寒冷期には南下し、温暖期は北上するのである。人類集団の一部も、同じような環境を求めて移動を繰り返していた可能性が指摘できる。北部九州の寒冷期に特徴的な縦長の掻器は、本州北部の石刃製エンド・スクレーパーの流れを組むものと考えられ、横広剥片製掻器は地元石材である安山岩との強い関係が窺える。横広掻器

の一部は、直谷岩陰２層において円形掻器へと変化しているようであり、岩下洞穴Ⅸ層では黒曜石製円形掻器を新たに開発している。

大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、エンド・スクレーパーや拇指状掻器の発達した形態で、現在のところ福岡地方のみで検出されている。これと近い形態は各地に認められるが、大原Ｄ 14 区から元岡・桑原 58 次に至る形態的発展の在り方を追うことができる。また、この形態は大原Ｄ段階ではサイド・スクレーパーに近いものもあり、幅広く影響を与えているのである。岩下洞穴Ⅸ層や泉福寺洞窟 4 層には確認できず、西九州では組成されない可能性もある。

これら寒冷期のスクレーパー類は衣服等に用いる皮革加工具と考えられ、北日本では各時代の遺跡で組成されており、日常生活のなかで重要な地位を占めている。南日本には稀で、割合も低く、しかも不定形の掻・削器が検出される場合が多い。温暖期を特徴付ける大形サイド・スクレーパーの用途は明らかにされていないが、その形態から先端部を利用する大原Ｄ・元岡型スクレーパーや円形掻器などとは違う機能と考えられる。

北部九州では、寒暖差によりスクレーパー類の形態に明確な違いが認められたが、他の地域で通時的な形態差に関する研究が行われておらず、その詳細は明らかでない。今後、周辺地域との関係を明らかにする必要があろう。

②　晩氷期後半から完新世初頭の福岡（元岡・桑原遺跡群）

前述のように、寒暖によるスクレーパー類の形態差が明らかになった。福岡地方では縄文時代草創期前半の状況は明らかでないが、ヤンガー・ドリヤス期（草創期末～早期初頭）から完新世初頭（早期前半）の良好な調査事例がある。特に、元岡・桑原遺跡群や大原Ｄ遺跡群の崖下遺跡は西北九州の洞穴遺跡ともにその調査例が多く､寒冷期に良好な狩猟環境が形成されていたものと思われる。元岡・桑原遺跡群では３次・58 次調査以外にも、２次、15 次、48 次、54 次調査でも黒曜石製円形掻器が出土している。黒曜石円礫を用いた掻器は、ヤンガー・ドリヤス期特有の形態と言えるのである。

ヤンガー・ドリヤス期前後の様相が、最も明らかなのは福岡地方で、複数の良好な遺跡群が認められ、細かな編年が可能となっている。図５はヤンガー・ドリヤス期直前より、完新世初頭までの約４千年弱の期間における編年関係と、主要遺物の変遷を示したものである。

糸島半島における縄文時代最古の元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点（常松編 2018）は、標高 10 ～ 11m の低位段丘に形成された遺跡である。前述のように、北部九州の中では特異な遺物が検出されている（図５・8)。現在のところ、石鏃、石槍、土器ともに、北部九州の遺跡群との関係を明らかにすることはできない。脚部がＵ字状を呈する図 8.153 ～ 155 のような石鏃、丁寧に細調整を施した薄い石槍（159)、163 のような隆線文土器は周辺地域に類例がないのである、ただサイド・スクレーパー（図 8.160 ～ 162）は、完新世初頭の松木田遺跡（図５、図 8.15・16）などと共通する部分がある。いずれも、縦長剥片の側縁に細調整を加えたものである。

北部九州では、ヤンガー・ドリヤス期直前の温暖期であるアレレード期に位置付けられる遺跡は極めて少なく、現在のところ元岡・桑原遺跡群 52 次調査のみである。ほぼ同じ時期の南九州は、隆帯文土器を共伴する多数の遺跡が形成されている点と大きく異なっている。

大原Ｄ遺跡群（菅波 1997、池田・荒牧ほか 2003）は、糸島半島東北部（元岡・桑原遺跡群北部）の小規模な河岸段丘に立地（いわゆる崖下遺跡）しており、特に 14 区では焼失住居などの遺構に伴い大量の遺物が検出されており、北部九州最大の縄文草創期後半期のヤンガー・ドリヤス期に位置付けられる遺跡と言える。時間幅はさほど大きくないがⅢ層下部、Ⅲａ層、Ⅱ層に区分できる。元岡・桑原遺跡群３次調査下層、松木田遺跡群４次２区でも同様の遺物群が認められる。だが、大原Ｄ遺

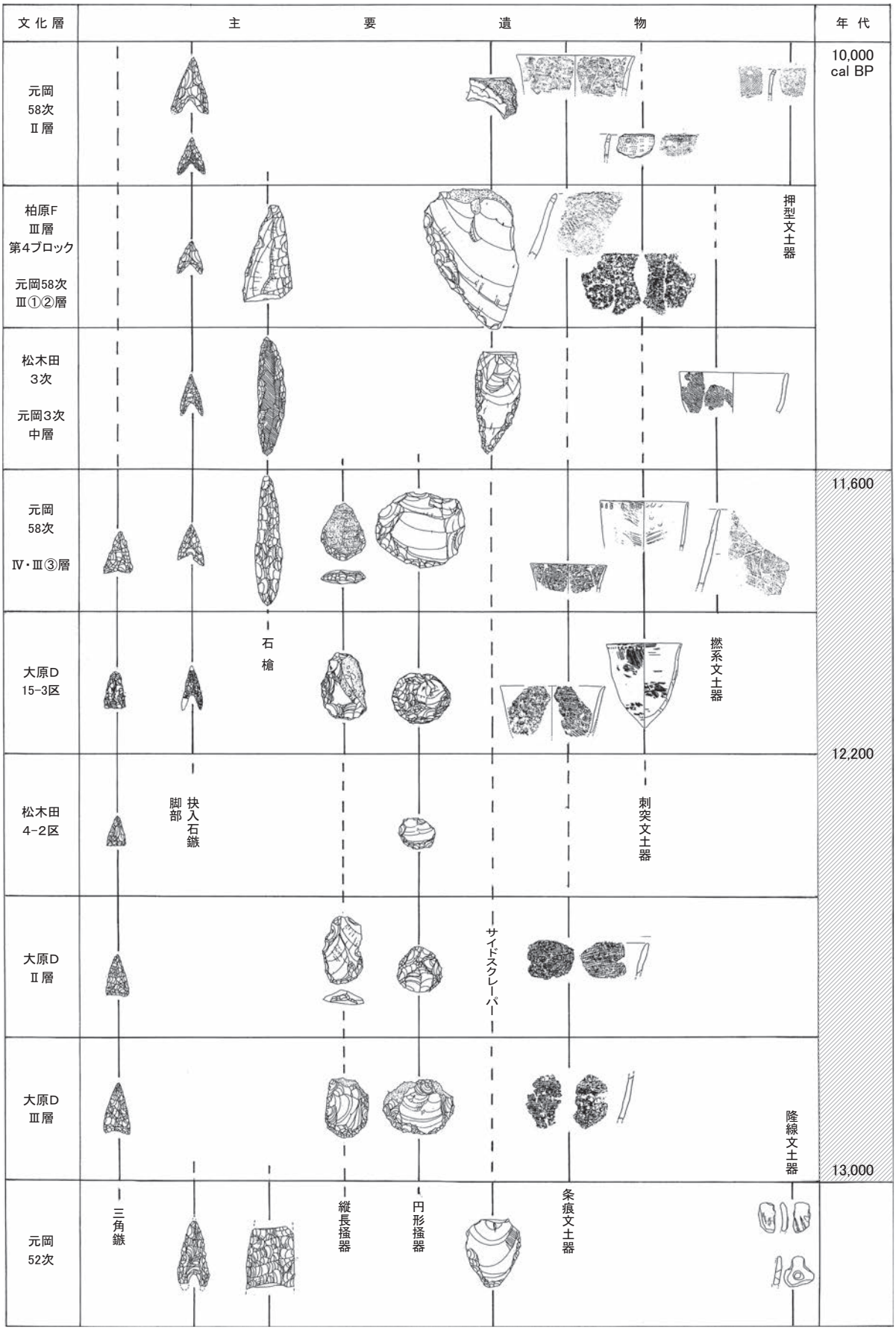


図5　糸島地方を中心とした縄文時代草創期後半から早期前半の遺物変遷

跡群 15 － 3 区はやや異なる狩猟具（石鏃）などの石器や土器が出土している。元岡・桑原遺跡群 58 次Ⅳ・Ⅲ③層でも、これと類似する遺物が検出されている。14 区Ⅲ層下部の放射性炭素年代は 11,000BP より古く（Ⅲ h 層 11,100 ± 40，Ⅲ k 層 11,330 ± 60）、暦年で 13,000calBP に相当し、ヤンガー・ドリヤス期の寒冷化開始期にあたる。15-3 区の刺突文土器付着炭化物の年代は 10,480 ± 30BP で、58 次調査地点は土器等の編年関係よりこれより新しいと考えられ、ヤンガー・ドリヤス期終末に位置付けられよう。

大原Ｄ遺跡 14 区の層位的成果により、ヤンガー・ドリヤス期前半の変遷過程が明らかにされつつある。石鏃は、三角形鏃や二等辺三角形鏃によって特徴づけられ（図 5）、上層ほど細長鏃の割合が高くなり、小形化している。そのほか、やや深い抉りを入れたもの（図 7.12）、五角形鏃（図 7.13、図 8.123）などもみられる。石槍は不定形（図 8.125）で、しかも量が少ない。前の時期の 52 次調査や、後に続く 58 次調査に比べると、明らかに石槍の比重が低下している。掻･削器はⅢ層 179 点、Ⅱ層 117 点で、減少傾向が窺える。石核も 200 点以上認められることから、石鏃や楔形石器とともに本遺跡で大量生産されている。黒曜石製の定形化した小形円形掻器（図 5、図 7.14 ～ 17）は目立つ存在である。特に、Ⅲ下層ではその割合が高い。大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、図 5、図 7.18・19 のように定形化していない。円形掻器は、寒冷化の始まりとともに黒曜石製小形品が開発され、定形化したものが現れるが、エンド・スクレーパーの流れを汲むものは不定形の状態にあるようである。

土器は 14 区Ⅲ層下部に無文土器（図 7.25 ～ 28）、Ⅲ a 層に条痕文土器が現れ、Ⅱ層は条痕文（図 8.129・130）主体となる。無文土器はⅢ層下部で 5mm 程度の薄手（図 7.26・27）主体、Ⅲ a 層は 10mm 以上の厚手主体となるが、Ⅱ層で再び薄手の割合が高くなるようである。Ⅱ層の土器底部は上げ底（図 7.29、図 8.133）を主体に平底、丸底（図 8.132）がみられる。Ⅲ下層からⅡ層にかけて、無文土器から上げ底の条痕文土器主体へと変化している。古い要素は残るが、新しい要素の出現によって画期出来るのである。

元岡・桑原遺跡群 3 次調査地点は標高 13 ～ 19m の狭い段丘に認められ、崖下遺跡の典型と言える。縄文草創期末から早期前半にかけて、複数の文化層が認められる（管波ほか 2004）が、中層との分離が困難な部分もある。上げ底の条痕文土器は、36 Ⅰ区 9 層、38 G区 10 層より検出されている。三角形鏃も 36 G 9 層、37 G 10 層、38 G 10 層などに位置することから、この地点に下層の遺物包含層があるものと思われる。しかし、三角形鏃はこれより広範囲に分布し、小形円形掻器、大原Ｄ・元岡型スクレーパー類似品の分布域も広いことから、最初にこの地に来た集団はかなり広い空間を利用していたと思われる。

石鏃は抉りのない小形二等辺三角形のものが主体で、三角形、やや抉りのあるもの、五角形状のものなどがある。ほぼ大原Ｄ 14 区Ⅱ層と同じで、正三角形に近い形態を主体とするⅢ層下部やⅢ a 層とは異なる。石槍は、確実に下層に所属するものは認められなかった。スクレーパー類は、円形掻器、大原Ｄ・元岡型スクレーパー類似品などが出土しており、これも大原Ｄ 14 区Ⅱ層と同じである。土器は上げ底底部の条痕文土器で、横方向の貝殻条痕を施している。無文土器を共伴すると思われるが、詳細は不明である。このように、下層は大原Ｄ 14 区Ⅱ層とほぼ同時期と思われ、石器や土器の特徴が一致している。

松木田 4 次 2 区（長家ほか 2013）は、早良平野の西山（標高 430 m）の東側山麓部に広がる中位段丘面に立地する。松木田遺跡の西側端に位置し、標高は約 53 mである。遺物は 4.3 × 3.8 mの住居跡と思われる土抗より出土している。埋土は全量採取、水洗され、約 784 g の黒曜石、安山岩

片が検出された。定形石器は石鏃 57 点、スクレーパー類 4 点、楔形石器などで、少量の土器小片が検出された。土器形態は明らかでないが、石鏃の大半は細長の小形二等辺三角形鏃（図 5）であり、三角形鏃の最も新しい段階と思われ、ヤンガー・ドリヤス期前半の終末に位置付けられよう。円形掻器（図 5）を組成するが、これも小形品で数量も少ない。大原Ｄ 14 区Ⅲ層に比べると、掻器の割合が低くなっている。

大原Ｄ遺跡 15 － 3 区は標高 26 m前後の埋没谷に位置し、砂礫中より多量の遺物が検出された（池田・荒牧ほか 2003）。14 区とは石鏃や土器に違いが認められるが、この時期の典型的なスクレーパー類が出土しており（図 5）、少なくともその一部はヤンガー・ドリヤス期後半に位置付けられよう。

15 － 3 区は原位置の状態で検出されたものではないが、一部を除き纏まった遺物群と思われる。石鏃は三角形鏃や細長鏃も組成するが、抉りの深いもの（図 5）が一定量認められ、14 区の様相とは異なっている。土器は条痕文土器も認められるが、刺突文土器（図 5）が主体を占める。刺突文土器は条痕調整によるものが多く、14 区からの発展による可能性が高い。条痕を横方向に施したものが多い点も 14 区Ⅱ層と共通している。しかし底部は乳房状尖底（図 5）であり、これまでの平底基調とは大きく異なっている。無文土器主体から、条痕文→刺突文という新しい要素が次々と現れる点が、この段階の土器編年の基本であり、底部も乳房状尖底という新しいものが現れる。だが、新しい要素の出現後も古い要素は維持されている。条痕文土器や刺突文土器は、その後も暫く共伴関係が認められる。

石鏃とその未製品 17 点に対し 15 点のスクレーパー類が検出されており、再びその割合が高くなっている。その中には、典型的な厚手円形掻器、大原Ｄ・元岡型スクレーパー（図 5）が含まれている。これらのスクレーパー類はヤンガー・ドリヤス期の典型的なものであるが、放射性炭素年代は 9,170 ± 110BP（10,575 ～ 10,160calBP）、9,210 ± 80BP（10,575 ～ 10,215calBP）であり、1000 年程新しい年代値が報告されている。恐らく、これらは円筒形土器を伴う文化層の年代であると思われ、前述の刺突文土器付着炭化物の年代 10,480 ± 30BP が本来の年代に近いと思われる。このほか、北部九州では珍しい丸ノミ形石斧が検出されている。

元岡・桑原遺跡群 58 次調査は、第 52 次調査地点上流部の標高 30 ～ 34 mの小規模な河岸段丘上に立地している。約 200㎡という小規模な調査にも係わらず、良好な複数の文化層が検出された（大森編 2016）。最下層のⅣ層やⅢ③層の一部は寒冷期に特有の灰色系の土壌に包含されており、堆積土の色調においてもヤンガー・ドリヤス期の所産である可能性が指摘できる。このような土層は大原Ｄ遺跡 14 区でも確認されており、福岡地方に一般的であったと思われる。52 次調査地点に比べ、凹石、磨石、石斧などの大形石器を多く含み、土器の数量も多いことから、比較的長期間利用された遺跡であろう。

Ⅳ層とⅢ③層は寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）の所産と考えられ、典型的な円形掻器（図 5、図 8.69）、大原Ｄ・元岡型スクレーパー（図 5、図 8.67・68）を組成している。円形掻器は、大原Ｄ遺跡 14 区Ⅲ層に比べると大形になっている。大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、下端部の斜め細調整に加え側辺部（斜め細調整）や背面（平坦細調整）にも加工が施され、完成された整った形態で、図 8.68 は刃部付近や背面中央付近に顕著な使用痕（線状痕）が認められる。スクレーパー類の割合は上位の温暖期文化層に比べ高いが、大原Ｄ 14 区Ⅲ層や同 15 － 3 区よりも低い。

石鏃は抉りの殆どない三角形鏃（図 8.58・59・65）、細長石鏃（図 8.56・57）よりも深い抉りを入れたもの（図 8.60 ～ 63）の割合が高い。抉りへの細調整の最後に深い特徴的な加工を加えた

もの（図 8.60）は、大分県二日市洞穴第 8 文化層（橘 1980）に類例（図 8.45・48）がある。部分磨製石鏃（図 .62・63）も一定量組成されている。石槍は定形化しており、細長のもの（図 8.66）とやや幅広品がある。

条痕文土器（図 8.70・71）、刺突文土器（72）に加え、新たに撚糸文土器が組成されている。条痕文や撚糸文が横方向や斜めに施されており、古い様相と思われる。本遺跡では、上層ほど縦方向条痕文を施文している。大きな縦長の楕円形を呈し、強い押引き技法で刺突され、内側に粘土の隆起が明瞭に残る刺突文土器（図 8.72）はⅣ・Ⅲ③層にのみ認められ、古い技法と考えられる。撚糸文土器はⅢ③層で最も多く、撚糸原体を回さずに擦過させ、条痕状を呈するものが多い。松木田遺跡では撚糸原体を転がし、縄目文様が明確に確認出来ることから時間差があるものと思われる。

このように、福岡地方のヤンガー・ドリヤス期は大きく 2 時期に分けられる。前半期は三角形・二等辺三角形鏃、小形円形掻器、上げ底の無文土器・条痕文土器によって特徴づけられる。石鏃は次第に細長の二等辺三角形鏃の割合が高くなり、土器は無文土器に加え条痕文土器が新たに出現する。当初小形円形掻器の割合が高いが、次第に低率となるようである。

後半期は、変化の基準軸に違いが生じている。すなわち、石鏃は細長化でなく、抉りの深いものが一定の割合を占めるようになる。しかし古い要素（三角形鏃）は残り、新しい要素の出現によって画期される。土器も同じことが言え、古い要素（無文土器・条痕文土器）に加え条痕調整刺突文土器（大原 D15 － 3 区）、撚糸文土器（元岡・桑原遺跡群 58 次Ⅳ・Ⅲ③層）が新たに出現する。円形掻器はやや大形化し、大原 D・元岡型スクレーパーは定形化するが、スクレーパー類の割合は低下している。

縄文時代早期前葉を最も特徴づけているのは、松木田遺跡 3 次地点である（米倉 2001）。抉りのほとんどない三角形鏃（図 8.1）、二等辺三角形鏃（2）も残存するが、脚部の尖る石鏃（3 ～ 11）が主体を占める。部分磨製石鏃（6 ～ 8，13）の割合が高いのも特徴の一つである。脚部の尖る石鏃の中に、下半部が円味を帯びるもの（7 ～ 9）が認められる。脚部が明確な角状を呈するものはまだ出現していないが、帖地型石鏃（12）や柳葉形石鏃は（13）は検出されている。石槍（14）も定型化しており、部分磨製石槍も認められる。掻器は円形刃部を呈するものは共伴しないが、特徴的な縦長のサイド・スクレーパー（15・16）が認められる。同じような石器群は松木田遺跡 4—1 区にも認められ（長家ほか 2013）、石鏃も同じ形態で、大きさもほぼ同じ（3 次地点長さ平均 1.83cm、4 次 1 区 1.78cm）である。

他の遺跡と異なり、撚糸文土器（図 8.17 ～ 19）単純に近い状況で検出されている。その特徴は、器壁が 1㎝以上と厚く、斜め方向の撚糸文を施文し、胎土は粗く脆い。撚糸原体を転がし、縄目文様が確認出来るものが多い。器形は外反気味に立ちあがるもの、直口気味に外反するものがあり、底部（19）は崩れた乳房状を呈している。直口気味に外反するものは、58 次調査でⅣ層やⅢ③層の条痕文土器や刺突文土器に見られる特徴で、古い様相と考えられる。

元岡・桑原遺跡群 3 次調査中層（管波ほか 2004）も、これに近い内容と考えられる。土器は条痕文土器、撚糸文土器、刺突文土器、無文土器が共伴している。これは、ほぼ撚糸文土器単純の松木田遺跡 3 次調査地点（米倉 2001）と異なるが、元岡・桑原遺跡群 58 次調査地点Ⅲ層とは良く類似している。

石鏃は多様な形態が認められ、部分磨製石鏃の割合も高い。脚部が凸状のもの、抉りのないもの、やや浅い抉りのあるもの、深い抉りで脚部の尖るもの、脚部が丸味を帯びるもの、柳葉形石鏃などがある。部分磨製石鏃の割合も高い。部分磨製品を含む柳葉形石鏃は、松木田遺跡第 3 次調査地点などに類例があるが（米倉 2001）、極めて珍しい存在である。石槍は細身の柳葉形のものが多く、細

調整も丁寧である。福岡地方でも例の少ない部分磨製石槍を含み、これも松木田遺跡３次調査地点と良く類似する。スクレーパー類は縦長のサイド・スクレーパーを主体とし、エンド・スクレーパー、不定形スクレーパーなどが含まれる。サイド・スクレーパーは多様な形態を含み、温暖期を特徴付けている。

元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅲ①②層は、小円形刺突文（刺突文①類）土器が新たに組成される（大森編 2016）。スクレーパー類は劇的に変化し、サイド・スクレーパー（図 5）が目立つ存在となり、円形掻器や大原Ｄ・元岡型スクレーパーは消滅している。抉りの浅い三角形鏃も認められるが、大原Ｄ 14 区Ⅱ層などにみられた細長の特徴的な形態は姿を消しているように思える。抉りの深い石鏃は、Ⅳ・Ⅲ③層が脚部の尖るもの主体なのに対し、丸味を帯びるものの割合が高くなる。部分磨製石鏃も認められるが、Ⅳ・Ⅲ③層に比べるとその割合は低くなっている。定形的な石槍は認められず、粗雑な調整を施したものが組成されている。本文化層は柏原Ｆ遺跡Ⅲ層（山崎ほか 1983）の一部と良く類似しており、押型文土器出現直前頃と考えられる。

元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅱ層ⅡＡユニットは、押型文土器（図 5）の出現によって下層と画期される。大分県の川原田式に匹敵する九州最古の押型文土器であり（大森編 2016）、無文帯のある格子目状文などが検出されている。スクレーパー類は、不定形剥片を素材とするサイド・スクレーパー（図 5）が主体であるが、小形エンド・スクレーパーも認められる。温暖期ではあるが、刃部円形掻器を使用する行動があったと思われる。三角形鏃や脚部の尖るもの、部分磨製石鏃も認められるが、鍬形鏃（図 5）が出現し大型化する。典型的石槍は認められず、不定形のものがみられる。

58 次調査ⅡＢ・Ｃユニットの押型文土器は、大分県の稲荷山式古層段階に対比できる（大森編 2016）。刺突文土器は、口縁の小形刺突文下に細い円弧状の文様を施すものなどが新たに組成される。スクレーパー類に定形的なものは認められず、刃部円形掻器も存在しない。石鏃は細長の大久保（帖地）型、大形の三角形鏃、脚部の尖るものもあるが、鍬形鏃が主体を占めている。同じような事例は、柏原Ｆ遺跡でも認められる（山崎編 1983）。Ⅱ層最新段階のＣユニット、1 号石組炉の放射性炭素年代は 8850 ～ 8900BP（約 10100calBP）であり、福岡地方押型文土器初源段階の基準となる年代値と言える。

58 次調査Ⅰ層の資料は少ないが、稲荷山式新相段階の押型文土器が検出された。石鏃は大形の鍬形鏃を主体とし、不定形のスクレーパー類が伴っている。

元岡・桑原遺跡群３次調査上層は、押型文土器（稲荷山式・早水台式・下管生Ｂ式）の文化層である。押型文土器は複数の型式を伴うことから、生活面は一つでないと考えられる。中層と同様多数の集石遺構が検出されており、遺構のレベルから見ても、複数の生活面があるものと考えられる。

石鏃は抉りのない二等辺三角形鏃、浅い抉りを造り出した正三角形鏃、脚部が尖るもの、脚部が丸味を帯びるものあるいは鍬形鏃がある。大形の鍬形鏃もみられる。石槍は中層の出土資料と同じ形態であるが、14 Ｆ区 1 層の出土であり、中層との間に無遺物の土石流堆積物を含むことから、上層のものである可能性が高い。スクレーパー類は大形品が見られる。背面に粗い調整を施したハリ質安山岩製の削器、右側辺に粗い調整を加えた安山岩製幅広剥片製のもの、縦長剥片製のサイド・スクレーパーなどが出土している。

完新世の始まりとともに温暖化が進行し、約 1 万年前（10,000calBP）頃から始まる押型文土器の段階には、日本海へ対馬暖流が本格的に流入したと考えられる。北部九州では、晩氷期の温暖期であるアレレード期には遺跡がほとんど形成されていないが、ヤンガー・ドリヤス期には急増し、住居址などの遺構が盛んに造られている。この傾向は完新世の温暖化が始まっても維持され、糸島半島では

ヤンガー・ドリヤス期と同じ小さな河岸段丘に営まれた。

晩氷期には、寒冷期に円形刃部掻器、温暖期に縦長の削器が交互に発達し、環境に即した行動を行っていたと推定される。完新世になっても、松木田遺跡や 58 次調査Ⅲ①②層では、ベーリング期の細石刃文化と同じ縦長剥片製削器が使用されている。その後、押型文土器が出現する頃にはこのような石器は認められず、氷河時代（旧石器時代文化）が完全に終末を迎えたと思われる。

温暖化傾向が強まった押型文土器の段階には、糸島半島の小河川流域に形成された遺跡群において土石流の発生が確認出来る。複数生じたと思われ、その中には大規模なものが認められる。河岸段丘にはその後暫く人類の痕跡が途絶える。

（２） 周辺地域との比較

福岡地方でみられた寒暖差による遺物、特にスクレーパー類の変化は、他の地域でも認められるであろうか。当時の環境に違いのある、南九州など周辺地域と比較することにより、検討してみたい。ヤンガー・ドリヤス期の前後について、時間を追って比較したい。北部九州は福岡のみでなく、長崎県や大分県の遺跡・文化層なども対象に含めることにする。図 8 は、九州各地のアレレード期から完新世初頭までの代表的遺跡・文化層を年代順に並べたものである。ここでは、これらをもとに気候変化の影響を考えてみたい。

①　アレレード期

晩氷期の温暖期後半に属し、年代は 14,000 ～ 13,000calBP 頃と考えられている。南九州は隆帯文土器が盛行し、北部九州は細石刃石器群の最終末がこの段階に含められる可能性がある。しかし、細石刃を含まない文化層は元岡･桑原遺跡群 52 次調査以外認められず､人口が希薄だった可能性がある。西北九州の洞穴遺跡も､この段階と考えられる文化層の詳細は不明である。大分県南の森の木遺跡は、隆帯文土器の終末期に位置付けられる（綿貫編 2016）可能性が高いが、南九州の影響を強く受けた遺跡と言えよう。

南九州の隆帯文土器段階の遺跡は 78 遺跡検出されており（馬籠・秋成 2015)、遺構等で検出された炭化物の放射性炭素年代は 11,000 ～ 12,000BP に納まり、土器付着炭化物の年代とも矛盾しない。暦年ではほぼ 13,000 ～ 14,000calBP で、アレレード期に相当する。宮崎県王子山遺跡におけるプラントオパール分析によると、隆帯文土器の出土するⅩ層でメダケ率が高く、Ⅸ層下部で低くなり、その後急激に増加しており（古環境研究所 2012)、この頃の寒暖の状況を良く示している。恐らく、Ⅸ層下部がヤンガー・ドリヤス期にあたり、その後のメダケ率増加は完新世に位置付けられよう。30 遺跡で、竪穴住居址、集石、舟形配石炉を含む配石、炉穴、陥穴などの遺構が出土し、遺物量も爆発的に増加する。細石刃は消滅し、石鏃などの狩猟具とともに、丸ノミ型石斧などの石斧・礫器（伐採具）や石皿・磨石・凹石・台石（粉砕具）が多数出土している。各遺跡で主要な道具類が異なり、重点の置かれた生業活動に違いがあるものと考えられている（芝 2018)。隆帯文土器期は堅果類加工具の発達が認められ、狩猟活動は低調となり、植物食の割合が増加したものと思われる。これは、温暖化に伴う植物相の変化によるものと思われる。

隆帯文土器後半期を代表する宮崎県王子山遺跡では、竪穴住居址 4、配石炉（舟形配石炉含む）8、炉穴 30、集石 6、土坑 10 が検出されている（桒畑編 2012)。炉穴群の一部からはコナラとアベマキの炭化子葉、ツルマメ種子の土器圧痕、ユリ科ネギ属の炭化鱗茎が出土している。鹿児島県東黒土田遺跡を含めた植物利用から､遺跡周辺はコナラやクヌギが生育する暖温帯落葉広葉樹林と考えられ、ドングリ類とダイズの野生種を食用にしていたのである(佐々木 2015)。石鏃 22､スクレーパー類 5、

石斧 2、礫器 2、砥石 6、磨石 50、石皿 85 などの遺物が出土している。堅果類の粉砕と関連付けられる、磨石・石皿の大量出土は隆帯文土器期を特徴付けている。その前の細石刃を伴う遺跡ではその割合が少なく、狩猟具（細石刃、石鏃等）が主体であった。完新世初頭まで、狩猟具中心の北部九州とは大きな違いが認められる。南九州では、温暖化が生業に変化を齎したと言える。

隆帯文土器期でも、種子島の鬼ヶ野、鹿児島県の向栫城跡、志風頭は狩猟具中心に構成されており、引き続き狩猟活動は重要な役割を担っていたと考えられる。王子山遺跡でも、石鏃（図 .134 ～ 147）は細石刃文化期と同様、抉りの殆どない三角形鏃である。しかし、調整手法には違いがある。粗い調整によるため、両側縁部が鋸歯状を呈しているのである。スクレーパー類は大形の不定形のもの（図 8.148）で、少なくとも北部九州の寒冷期には認められない形態である。これらが、典型的な平底隆帯文土器（図 8.149 ～ 152）と伴っている。石鏃は、細石刃文化期には非黒曜石が用いられている場合が多いが、本遺跡は桑ノ木津留産黒曜石製である。

北部九州における、アレレード期唯一の遺跡である元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点（常松編 2018、図 8.153 ～ 169）は、ほぼ狩猟関連道具のみで構成されている。北部九州は、温暖化に伴う生業の転換が行われておらず、コナラやクヌギなどで構成される暖温帯落葉広葉樹林が形成されなかった可能性もある。

しかし、寒冷期に盛行した円形刃部スクレーパーの割合は低くなり、サイド・スクレーパー（160・161）中心となっている。石鏃はＵ字状抉り（153 ～ 155）に特徴があり、九州など周辺地域に類例のない資料と言える。156 のような石鏃は、宮崎県上猪ノ原遺跡第 5 地区（秋成 2018）などに見られ、隆帯文土器と共伴するようである。石槍（159）は押圧剥離を平行に加えた薄手のもので、有舌尖頭器の調整手法に類似している。土器は薄手平底の隆線文土器（163 ～ 169）であり、大原 D14 区Ⅲ下層の薄手無文土器に繋がるものと推定される。

南北九州間で、石鏃の一部に共通する要素はあるが多くの点で異なっており、集団間の交流がほとんどなかったと考えられる。生態系の違いに起因する生業形態が異なるため、交流が進まなかったと推定される。北部九州では引き続き狩猟に重きをおいており、遺跡数がほとんど認められないことから、人口の激減が想定される。

②　ヤンガー・ドリヤス開始期における南北九州の比較

ヤンガー・ドリヤス期の寒冷化が始まる頃になると、両地域で遺構や土器・石器の形態的特徴において、共通性のある遺跡が認められる。このようなことは、晩氷期から完新世初頭の数千年間で唯一と言える。鹿児島県の建昌城跡（深野ほか 2005）と大原Ｄ 14 区である。建昌城跡の放射性炭素年代は 11,230 ± 170 ～ 10,930 ± 50BP で、前述の大原Ｄ 14 区Ⅲ層下部の年代 11,000BP を若干超える数値とほぼ一致しており、ヤンガー・ドリヤス期が開始される年代（13,000calBP）である。建昌城跡はサツマ火山灰（Ｓ z- Ｓ、12,800calBP）の直下で検出されており、大原Ｄ 14 区Ⅱ層の年代も 10,000BP 年代後半であることからも信憑性の高い年代値と言える（池田・荒牧ほか 2003）。

建昌城跡は厚手無文土器に伴い、竪穴状遺構 8、炉状遺構 8、集石遺構 16、土坑 105 が検出されており（図 6 下段）、石器製作の場も確認されている。隆帯文土器期に引き続き、豊富な遺構が維持されている。ところが、南九州のヤンガー・ドリヤス期（水迫式土器期）ではこのよう事例は例外で、遺構が形成されるのは稀で、遺物量も少なくなる。

大原Ｄ 14 区もⅢ層とⅡ層で、竪穴住居跡 5、配石炉 2、集石遺構 2、土坑 7、焼土 29 が出土している（図 6 上段）。炉跡（連結土抗）は未検出だが、小さな段丘上に豊富な遺構が認められる。完新世になると北部九州でも遺構数が増えるが、晩氷期においては例外的な存在と言え、南九州の遺跡群

と比べても遜色ない。しかし、そのほかのヤンガー・ドリヤス期の遺跡では明確な遺構は少なく、その実態は明らかでない。

住居跡は両者ともに比較的浅い竪穴だが、大原Ｄ 14 区では斜面を利用した人工洞穴として復原されている（浅川 2003）。斜面に立地する、隆帯文土器期の鹿児島県掃除山遺跡の竪穴住居跡も同様と考えている。この時代は斜面を好んで利用していることから、このような住居の築造法が発達したようである。

建昌城跡 SX4 は南北 3.60 m、東西 3.52 m、深さ 0.18 mの略円形を呈する。竪穴内周辺部と外部にピットが配されている。埋土中より黒曜石原礫片 1、黒曜石剥片 1、小円礫 2、角礫 7 が出土した（深野ほか 2005）。黒曜石礫は底面付近に認められ、住居内保管が考えられるが、遺物は格段に少なく、その使用法に違いがあると思われる。

遺構築造に時期差のあることが、その埋没過程や石器・石材集中の状況から明らかにされている。調査区北東隅に位置する竪穴状遺構 SX5 は埋土に遺物は認められないが、隣接する SX6 は底面近い位置に黒曜石製剥片・砕片が纏まって検出され、廃絶間もない時期に石器集中部が形成されたと推定される。そのとき、SX5 は既に埋没していたのである。

大原Ｄの焼失住居 SC003 は円形の竪穴で、床面全体に炭化物と焼土が検出されている。南側は谷による削平を受け、東西 4.3 m、南北 3.5 m以上である。遺構内埋土は、上から炭化物、上部焼土、黄茶色土、下部焼土、炭化物層、床面、黄茶色土であり、上下二層の炭化物・焼土が存在している。主軸周辺の南北方向に深さ 10 ～ 20㎝のピット集中部が認められ、ここに棟持柱が何本かたってい

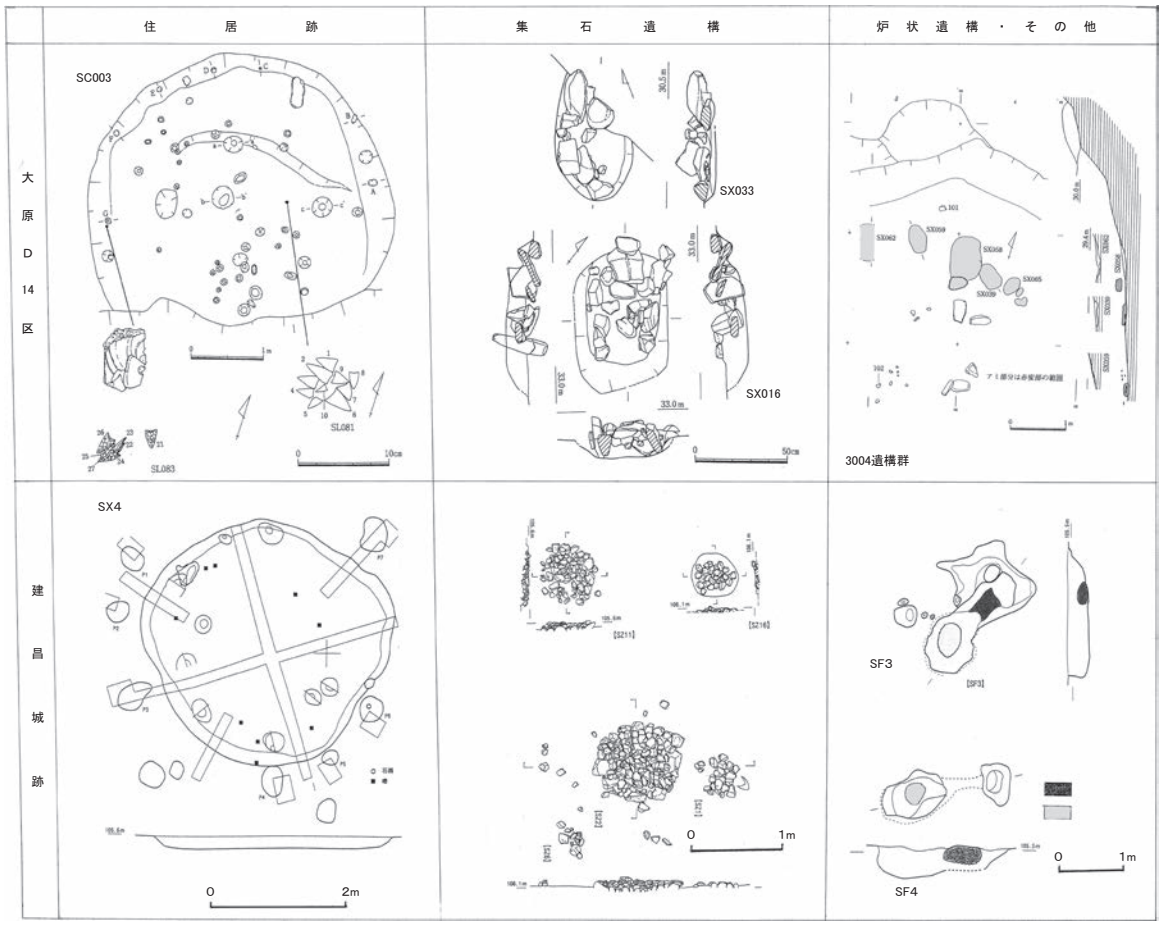


図6　大原 D14 区と建昌城跡（鹿児島県）の遺構比較

て、付け替えを繰り返していた痕跡とみることが出来る。また、壁に並ぶ径 5㎝、深さ 5 ～ 10㎝の 2 m間隔のピットは壁柱の痕跡と想定できる（浅川 2003）。炭化物の放射性炭素年代は、10,840 ± 70BP、10,880 ± 110BP である。

石鏃 49、掻器 6、削器 8、尖頭状石器 1、使用痕ある剥片 12、石核 3、黒曜石原石 2 など 1,200 点が取り上げられた。土器は小片のみで、条痕文土器や無文土器片が出土したが、原位置を保つと考えられるものはなかった。このほか、土壌の水洗で黒曜石、安山岩の砕片が多数検出された。2mm 大の黒曜石小片が特に多いが、石鏃などの製作時に生じたものと推定される。石核や原石も認められ剥片の数量も多いことから、定形石器製作のみでなく、その素材生産も行われていたと考えられる。建昌城跡と異なり、住居内でも石器製作が行われているのである。黒曜石原石を保管している点は、共通点と言えるかもしれない。

石鏃の集積が 3 ヶ所認められ、2 ヶ所は図示している（図 6）。SL081 は中央部東寄りで石鏃 10 個が平均的に纏まって出土し、SL083 は西側壁際の炭化物中から、4 個が平面的に重なり、2 個が横に立った状態、1 個が 3㎝ほど離れた位置で検出された。また、8㎝北東に黒曜石原石、その先から剥片が出土している。図示していないが、SL082 は中央部の炭層の上面で 10 個纏まって出土した。SL083 は矢の状態で壁際の垂木などに吊り下げられていた可能性が強く、SL081 は石鏃の先端部が周囲を向いていることから、矢に取り付けられていなかったと推定される。炭層上面で検出されていることから、床面に直接置かれた状態ではないようであり、木材などの上に保管されていた可能性がある。

SC003 程ではないが、SC014、SC019、SC021、SC029 でも石鏃などの石器や石核が出土しており、住居内で石器製作を行っていた可能性が指摘できる。特に、Ⅱ層の SC014（放射性炭素年代 10,760 ± 70BP、10,680 ± 130BP）からは、中央部の円形土抗の東側壁際から板状炭化物の上より黒曜石の原石（円礫）が検出された。住居内の木材の上に保管されていたものと思われる。

建昌城跡では多様な形状の密集した集石遺構が認められる（図 6 中央下段）が、大原 D 14 区では掘り込みのある典型的なものは 2 基認められ、Ⅰ層に掘り込まれている可能性が高い。Ⅱ層にも疎らな集石が認められる（2001 遺構群）。図に示した 2 基（SX016、SX033）は、掘り込みに礫を配したもので、石囲炉と考えられる。SX016 は 2001 遺構群の一部を形成し、85 × 50㎝の隅丸長方形を呈し、深さ 10㎝以上である。SX033 は 40 × 70㎝以上の長楕円形の浅い掘り込みで、20 から 25㎝大の礫が長辺をそろえて並んでいる。

図示した 3004 遺構群はⅢ a 層における焼土（SX039・SX058・SX059・SX062・SX065）の集合体で、その南側には石鏃 4 点など遺物も集中しており、居住空間と考えられる。また、40㎝大の平たい石や無文土器片の集中（102）も認められる。

煙道付炉状遺構は、元岡・桑原 3 次調査で早期（9,120 ± 45BP）のものが認められる（菅波ほか 2004）が、極めて稀な存在である。南九州では隆帯文土器段階から多数認められ、建昌城跡でも複数の形態の炉状遺構が検出されている。SF4 は、焚口部は軽石粒のみを埋土とし、煙道から煙出部は黒褐色粘質土である。焚口部の軽石粒の直下に厚さ 2 ～ 3㎝被熱した赤化面、炭化物集中が認められた。煙道はブリッジ部を含めて完存し、ほぼ平らな状態で煙出部に至り、ここで斜め上方へ延びる。

細かな違いはあるが、ヤンガー・ドリヤス期の初頭は南北九州で住居や集石・炉などの調理施設などから成る集落が形成されていたと考えられ、両者に有意な差は存在しないと考えられる。しかしその規模は小さく、いずれも 2 軒程度であったと思われる。遺構の多さは、長期間で形成されたためと思われる。集石遺構と炉状遺構において両地域間で違いがあるが、食料あるいは調理方法の差を示

していると思われる。北部九州で同じような遺構が発達するのは、完新世の温暖期になってからであり、その頃植生が変化するものと考えられる。

両者は出土遺物においても、上げ底の土器、円形刃部スクレーパー、三角形鏃などという共通点がある（図 7）。大原Ｄ 14 区の遺物図は、建昌城跡とほぼ同じ年代であるⅢ層を中心に構成している。西北九州の岩下洞穴Ⅸ層（麻生 1968）や泉福寺洞穴 4 層（麻生編 1985）も、ほぼ同様の内容である。なお、岩下洞穴や大分県二日市洞穴（橘 1980）などでは寒冷期特有の白・灰色系の土壌がその前後に堆積している。

大原Ｄ 14 区の石鏃は正三角形鏃（図 7.1 ～ 3）、やや細長の二等辺三角形鏃（4 ～ 11）を主体とし、少数だがやや深い抉りを入れたもの（12）もある。上層ほど細長の石鏃の割合が高くなり、それが極限に達し、しかも小形化したのが松木田遺跡 4 次調査 2 区の石器（長家ほか 2013）と言える。部分磨製石鏃は、Ⅲａ層より上部に若干認められる。細長五角形の特徴的な形態（13）が極めて少数検出されている。石槍は不定形のもので、形態的に完成されたものはない。本遺跡の出土量を考えると全てが失敗品ともいえず、集団による石槍製作の学習が充分ではなかったと考えられる。

建昌城跡もほぼ同じで、正三角形（図 7.30 ～ 33、35）、二等辺三角形（34、36、37）を主体としている。しかし、先端部の尖らせ方には違いがある。そのほか、やや丸味を帯びる幅広のもの（38 ～ 40）、細長の帖地型（41）、尖頭状石器（42）がある。その素材は王子山遺跡と同様、桑ノ木津留産黒曜石である。

大原Ｄ 14 区で掻器はⅡ層 30 点、Ⅲ層 53 点、削器Ⅱ層 87 点、Ⅲ層 126 点が出土している。そ

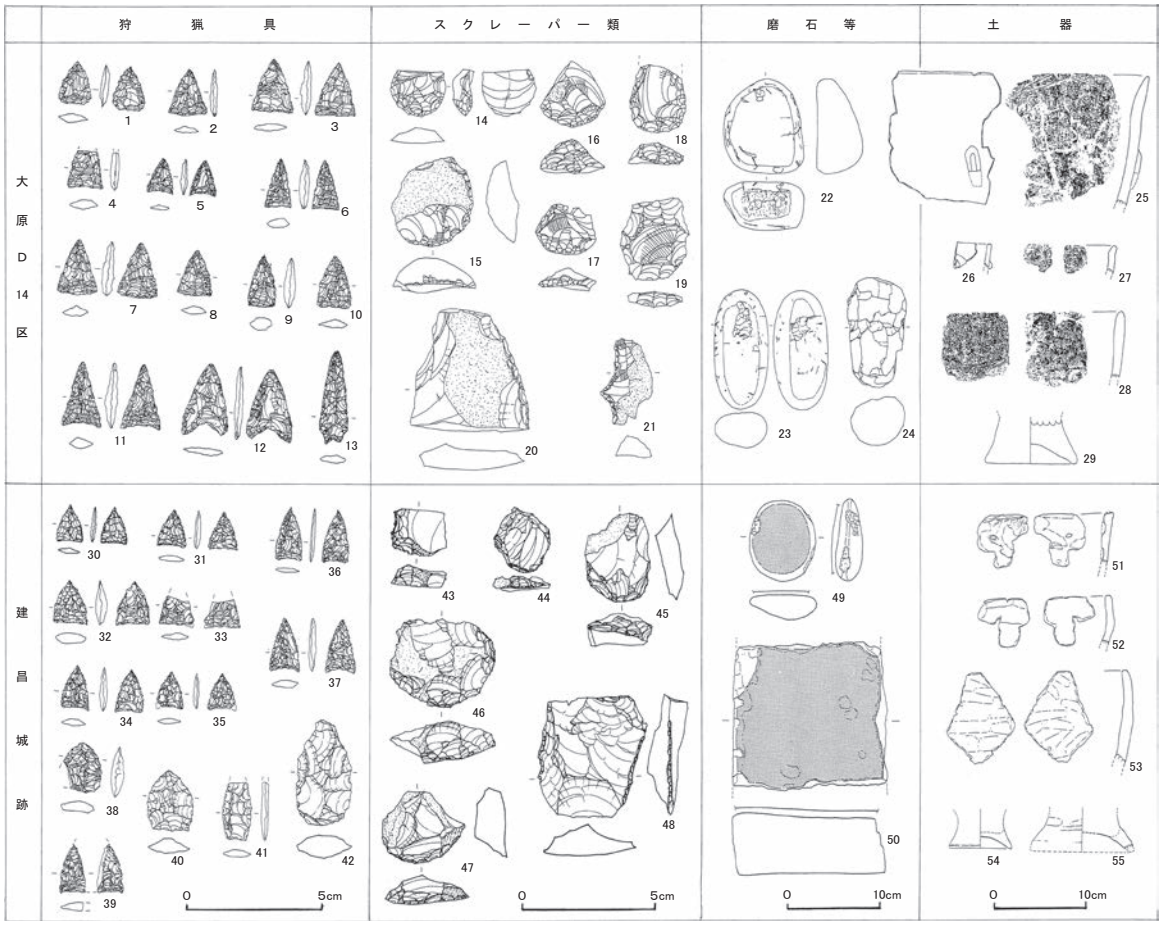


図7　大原 D14 区と建昌城跡（鹿児島県）の出土遺物比較

の他の層位を含め計 433 点である。669 点の石鏃に次ぐ数量である。定形石器に占める割合は、掻器（Ⅱ層 2.9%、Ⅲ層 7.0%）、削器（Ⅱ層 8.5%、Ⅲ層 16.5%）である。寒冷化の始まりと共に、黒曜石製のスクレーパーが大量生産された様子が窺える。スクレーパー類や石鏃の多くは周辺加撃（求心状剥離）石核から剥離された幅広の剥片を素材としており、佐世保市針尾島産原石（円礫）などが用いられている。円形掻器は、当初極めて小形のもの（14 ～ 17）が多いが、Ⅱ層ではやや大形のものが認められる。Ⅲ a 層出土の厚手のもの（16）は佐世保市岩下洞穴Ⅸ層にも認められ（麻生 1968）、地域を超えて共通している。縦長の大原 D・元岡型スクレーパー類似品は定形化したものは認められず、形態的統一感もない（18・19）。そのほか、大形のサイド・スクレーパー（20）、コンケイブ・スクレーパー（21）を組成している。

建昌城跡も大きな違いはなく、その割合も高い。円形掻器（44 ～ 47）は定形化していないように思える。大原D 14 区と同様、縦長の定型化した掻器も認められない。その素材は、石鏃とは異なる産地の黒曜石、メノウが用いられており、大原D 14 区とは異なっている。

建昌城跡を特徴付けるのは石皿（50）、磨石（49）などの粉砕具である。これらはドングリ類の粉砕などに用いたと思われ、植物食を裏付ける道具と考えられ、隆帯文土器期にも大量生産されている。大原D 14 区も敲石・磨石（22 ～ 24）は比較的多いが、明確な石皿は認められず、遺構と同様、食料原の差を示している可能性が高い。大原D 14 区は、あくまでも狩猟活動に重きをおいており、植物食は従的な存在と思われる。

大原D 14 区の土器は、各層でかなり明確に分けられる。Ⅲ層下部は無文土器を主体とし、器厚が 10㎜を超えるもの（25）より 5㎜程度の薄いもの（26・27）が多い。Ⅲ a 層は条痕文土器の出土が目立ち、無文土器も器厚が 10㎜を超えるものの割合が高くなる。Ⅲ層下部とⅡ層の中間的様相と言える。Ⅱ層は条痕文土器主体であるが、無文土器もかなり出土している。無文土器はⅢ a 層よりも器厚 5㎜程度の薄手製品の割合が高い。底部は上げ底（29）や丸底がある。当該期の北部九州は平底を基本としているが、地域的特色が保持されているので、本遺跡例はそれを良く表している例と言えよう。なお、上げ底土器はⅡ層の条痕文土器に認められるが、Ⅲ層の底部形態は明らかでない。

建昌城跡も上げ底（54・55）という特殊な形態であり、大原D 14 区と良く類似している。口縁部の立ち上がりの状況（51 ～ 53）は複数存在するが、大原D 14 区と大きな違いはないと思われるが、瘤状の突起を付けたものはない。南九州では、隆帯文土器から水迫式土器へと繋がるが、西多羅ヶ迫遺跡や本遺跡の無文土器はこれとの関係が不明である。大原D 14 区のⅢ層下部が無文土器を主体とするため、むしろこれと近い関係にあるのかも知れない。

このように、長い南北九州の歴史のなかでも極めて類似する石器や土器が使用されている。両者には細かな違いがあり、遺構からも生活様式の差異が想定され、植民というべきものではないだろう。しかし、寒冷化がもたらした人類集団の移動との関連はあると考えるべきだろう。その過程で、両地域の集団が学習した結果生じたと考えられる。

③　九州におけるヤンガー・ドリヤス期前半と後半

ヤンガー・ドリヤス期初頭の様相を述べたが、西北九州で大原 D14 区と良く類似する遺跡は佐世保市岩下洞穴である。岩下洞穴Ⅸ層は平底の条痕文・無文土器に伴い、石鏃、尖頭状石器、スクレーパー類、使用痕ある石器、敲石、凹石、磨石、石核など 216 点が出土している（図 8.93 ～ 108）。遺物は炉址周辺にスクレーパー類など、その東側に石鏃が分布し、その南西に接し土器が密集している。スクレーパー類は石鏃の 2 倍近く認められ、黒曜石製の小形円形掻器（102 ～ 104）に特徴がある。そのほか、サイド・スクレーパー（105）も認められる。特に、黒曜石の分厚い剥片に樋状の細調整

を施し、円形に加工したもの（102）が本遺跡を特徴づけている。このような小形円形掻器は西北九州の黒曜石円礫と結びつき、独自に発展した形態と思われる。石鏃は浅い抉りの三角形鏃を主体とし、正三角形に近いもの（98・99・101）と細長の二等辺三角形鏃（93 ～ 96）がある。その中には、第一次剥離面を残すもの（101）を一定量含み、先端が円味を帯びるもの（100）もある。部分磨製石鏃は認められず、石槍も組成されていない。Ⅷ層も石鏃、石槍、スクレーパー類、石核、磨石など126 点が出土している。Ⅸ層ほどでないがスクレーパー類の割合が高く、小形の刃部円形掻器も組成されている。石鏃は細長の三角形鏃が主体で、脚部の抉りがないものが多い。ここでは部分磨製石鏃や石槍が組成されている（麻生 1968）。

土器は東南方向への自然傾斜に伴い堆積しており、大原Ｄ 14 区Ⅲ層と同様、条痕文土器と無文土器が認められる。条痕文土器は横方向の調整が認められ、底部は張り出しのある特殊な形態の平底であり、建昌城跡や大原Ｄ 14 区とは異なっている。

泉福寺洞窟 4a ～ 4g 層でも同じような遺物が認められるが、4a 層に部分磨製石鏃や刺突文土器を含むことから、複数の文化層より成ると思われる。石鏃 292、尖頭器 16、彫器 18、スクレーパー類 329、礫器 3、石斧 1、敲石 3、磨石 3、砥石 14、石核 221 など 6412 点が出土している（麻生編 1985）。岩下洞穴Ⅸ層と同様スクレーパー類の割合が高く、円形掻器も多数認められる。その中には背面に細調整を施したものもあるが、大原Ｄ・元岡型のような縦長のものは認められない。直谷 2 層では多数の縦長掻器が検出されているが、その後姿を消している可能性もある。ただ、佐世保市菰田洞穴には類似品が出土している（川内野編 2003）。円形掻器は貝殻状剥片や幅広剥片を素材とし、岩下洞穴に比べやや大形のものも存在する。

石鏃は三角形鏃が主体を占め、岩下洞穴Ⅸ層に比べると抉りのない二等辺三角形鏃の割合が高い。抉りのある部分磨製石鏃は、4a 層より出土している。周縁部のみを調整し、第一次剥離面を大きく残すものも認められる。石槍は荒い調整の細身柳葉形のものだが、福岡地方と同様定形化していないと思われる。

土器は、岩下洞穴と同じような特徴的な平底の条痕文土器である。条痕の施文方法も横方向のみである。僅かだが無文土器も認められ、4a 層からは刺突文土器が出土している。刺突文は縦長の楕円形を呈し、押引の手法で施文されているようである。

前半期は福岡地方と同様、岩下Ⅸ層→泉福寺 4f 層→岩下Ⅷ層という変遷が考えられ、石鏃には細長化と小形化傾向が認められる。スクレーパー類は小形円形掻器に特徴があり、西北九州産黒曜石と結びついており、それまで安山岩製を主体としていたが、黒曜石製主体となるとともに小形化している。大原 D14 区では、佐世保市針尾島中町などの黒曜石円礫を素材とする石核が大量生産され、石鏃と共に円形掻器の素材を製作している。この掻器は、西北九州の黒曜石を主な石器の素材とする集団群によって開発されたと思われ、ヤンガー・ドリヤス期のみに展開した特殊な石器と考えられる。岩下洞穴や元岡･桑原遺跡群 3 次では上層にも円形掻器が認められるが、混入によるものと思われる。なお，大原 D15 － 3 区や元岡・桑原遺跡群 58 次Ⅳ・Ⅲ③層のような後半期の資料は現在のところ確認できない。泉福寺 4a 層で刺突文土器が検出され、部分磨製石鏃も共伴することから、後半期のものを含む可能性が指摘できるが、詳細は不明である。

ヤンガー・ドリヤス期最古段階は、大原 D14 区Ⅲ下層、岩下洞穴Ⅸ層に見るように、スクレーパー類の割合が高く、小形円形掻器などの円形刃部掻器を多く組成している。スクレーパーの割合が急速に低下する様子は、福井洞窟 4 層から 3 層、泉福寺洞窟 11 層から 7 層の土器出現期の様相に類似しており興味深い。松木田遺跡 4 次調査 2 区は、石鏃とその未製品 62 点に対し、スクレーパー類

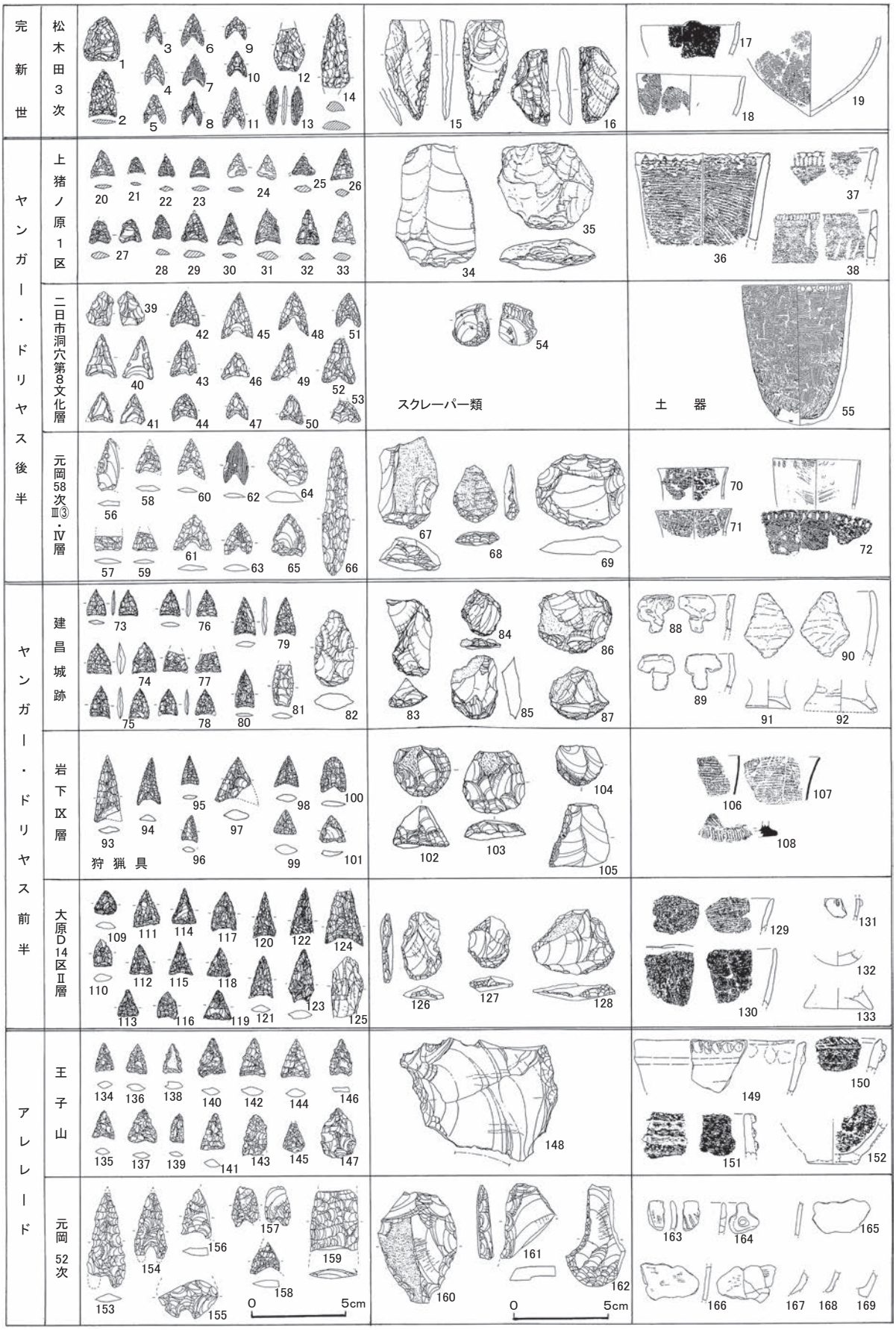


図8　ヤンガー・ドリヤス期前後における狩猟具・スクレーパー類・土器の地域間比較

4 点とその割合がさらに低くなり、小形化している。石鏃の小形化もあり、ヤンガー・ドリヤス期前半期の最終末に位置付けられよう。岩下洞穴Ⅷ層はここまでの小形化傾向になく、西北九州では未検出と思われる。

ヤンガー・ドリヤス期後半段階の確実な文化層も、現在のところ未検出と言える。後半期を特徴付ける刺突文土器は泉福寺洞窟 4a 層に認められ、部分磨製石鏃も伴うことから、後半期に位置付けられる可能性があるが、全体像は明らかでない。また、完成した形態の大原Ｄ・元岡型スクレーパーの類似品が菰田洞穴から検出されているが、これも文化層の重複が認められ、詳細は不明と言わざるを得ない。

ところが、東北九州ではこれと異なるようである。ヤンガー・ドリヤス期に近い時間関係にある遺跡・文化層として、大分県南の森の木遺跡、県北部の二日市洞穴第 8・9 文化層があるが、西北九州や福岡地方と様相が異なっているのである。

森の木遺跡は、地点を異にして隆帯文土器と無文土器が検出されており、出土状態等から後者単独の状況が新しいと考えられている（綿貫編 2016）。細長の三角形鏃や拇指状掻器も組成されており、ヤンガー・ドリヤス期に位置付けられる可能性もないとはいえない。ヤンガー・ドリヤス期初頭の建昌城跡との時間関係は明らかでないが、それに近い時期なのかもしれない。石鏃は、粗い細調整により鋸歯状を呈する二等辺三角形鏃である。この形態は、王子山遺跡など隆帯文土器期に良く見られるが、拇指状掻器はヤンガー・ドリヤス期の遺跡で検出される場合が多い。西北九州や福岡地方とは石鏃の形態が異なり、ヤンガー・ドリヤス期初期とするならば、掻器の割合があまりにも低く、現状では明確な位置付けは困難と言える。なお、無文土器は新しく位置付けられるが、特徴的な石器が認められず、詳細は不明である。

大分県二日市洞穴（橘 1980、竹野・綿貫 2004）は堆積土の色調や遺物の形態的特徴などから、第 8・9 文化層がヤンガー・ドリヤス期の所産と考えられる。

最下層の第９文化層は、ⅩⅢ～ⅩⅣ層より検出されている。条痕文土器・無文土器とともに、石鏃 64 点、石槍 8 点、石錐 1 点、斧形石器 1 点、スクレーパー類 8 点、加工痕・使用痕ある石器 8 点、敲石・磨石 18 点、石核 7 点、剥片・砕片 990 点が出土している。石鏃は抉りの浅い三角形・二等辺三角形のものが主体を占める。抉りのない平基鏃は認められない。抉りのやや深いものもある。脚部は尖るものが主体で、円味を帯びるものが少数含まれる。鋸歯状細調整を施したものもあるが、顕著な存在でない。石鏃は、三角形鏃を主体とする福岡地方・西北九州・鹿児島の諸遺跡とは形態的に異なるようである。スクレーパー類の中に円形掻器を含むが、その割合は極めて低い。

土器は条痕文土器と無文土器で、底部は平底である。しかし、大原Ｄ 14 区、岩下洞穴と異なった形態である。条痕の方向は横あるいは斜めで、縦方向は存在しない。このようなあり方は、大原Ｄ 14 区というよりも元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅳ層などに類似している。

第８文化層（図 8.39 ～ 55）は、ⅩⅡ層を中心に包含されている。条痕文土器・無文土器に伴い、石鏃 44 点、石槍 2 点、楔形石器 1 点、スクレーパー類 6 点、加工痕・使用痕ある石器 8 点、敲石・磨石 18 点、剥片・砕片 138 点が検出されている。三角形鏃は幅広で抉りの浅いもの（42 ～ 44 など）が主体だが、抉りが深く脚部の尖るもの（48 など）が一定量組成されている。48 のように脚部の抉りが特徴的なものがあり、58 次地点第Ⅳ層例（60）と良く類似している。側縁は直線状のもの（45 など）と円味を帯びるもの（51 など）がある。スクレーパー類は先端に細調整を加えた掻器（54）、背面調整加えた特徴的なものがある。第９文化層と同様、西北九州や福岡地方に比べ円形刃部スクレーパー類の数が少ないと言える。ただ、福岡地方も後半期になるとその割合が低下しており、同じよ

うな様相なのかも知れない。

土器は第 9 文化層と同様、条痕文土器と無文土器が認められ、直立する口縁部を持ち、底部は平底に近い丸底で、口縁部には刻み目がみられる（55）。第 8 文化層は条痕調整の丸底土器が主体であるが、石器は元岡・桑原遺跡群 58 次Ⅳ・Ⅲ③層と大きな違いはない。58 次Ⅳ・Ⅲ③層の脚部最後の抉りに特徴のある石鏃（45・48 と 60）と同じものを組成することから、時間的に近い関係にあるのは間違いない。第 8 文化層の放射性炭素年代は 9,900BP 前後であり（遠部 2006）、ヤンガー・ドリヤス期最終末に位置付けられる可能性がある。第 9 文化層も、抉りのある石鏃の割合が高くスクレーパー類が少ないことから、福岡地方のヤンガー・ドリヤス期後半に相当するものと思われる。

東北九州は、前半期の状況は不明と言わざるを得ないが、後半期は福岡地方と土器では違いがあるが、石器には共通点もあり、比較的良く連絡が取れていたものと思われる。しかし福岡地方のように、狩猟活動に特化した北日本の遺跡に特徴的な掻器は組成されていないようである。

南九州は建昌城跡直後の 12,800calBP 頃、桜島薩摩火山灰（Sz － S）の降下により壊滅的な打撃を受けていると思われ、前半期の様相は明らかでない。後半期は水迫式・岩本式土器段階と思われるが、早期前半段階と混在しているため不明な点が多い。

宮崎県清武上猪ノ原遺跡第 1 地区は、草創期や早期の遺物が混在しているが、遺物分布にからある程度の分離が可能である（井田・秋成 2008）。円形刃部掻器は、調査区中央部から纏まって出土している。建昌城跡などと比べるとやや大形だが、定形的な形態を有している。図 8.34 は頁岩製の縦長剥片を素材とし、下端部に斜め細調整を施している。背面への細調整はほとんど行っていない。35 は砂岩の短形剥片を素材とし、下端部正面、背面側縁へ斜め細調整を行い、円形に仕上げている。石器の大きさは石材が関与しているものと思われる。この地点からは、石鏃 1 類（三角形鏃、図 8.20 ～ 25）、2 類（二等辺三角形鏃、26 ～ 33）など桑ノ木津留産黒曜石製の石器、岩本式などの貝殻円筒形土器（36 ～ 38）が出土している。また、A 区 6 層中位で検出された集石遺構 SI-39 の放射性炭素年代は 9,800 ± 40BP であり、ヤンガー・ドリヤス期最終末に位置付けられる可能性がある。桑ノ木津留産黒曜石は草創期の隆帯文土器期にも認められるが、細調整手法などに違いがある。

ヤンガー・ドリヤス期初頭に比べ、その違いはあまりにも大きい。土器は条痕文を有する点で共通するが、平底であり、乳房状尖底の北部九州とは異なる。スクレーパー類は、大原 D・元岡型に近い形態はあるが、細調整の手法や部位に違いが認められる。円形掻器は、素材生産の方法や細調整部位などに違いがある。石鏃は正三角形鏃や二等辺三角形鏃を伴う点で共通するが、より小さなものが多数を占めている。

このように、前半期に比べると後半期は地域間の違いが顕在化している。それぞれ独自の道を模索しているように思われるが、共通する要素も認められ、地域間交流が全く失われた訳ではないと思われる。

④　完新世（温暖期）へ

完新世初頭を代表する松木田遺跡 3 次調査（米倉 2001）は、石組炉 2 基、集石遺構 1 基などの遺構とともに、石鏃 146、石槍 10、スクレーパー類 7、磨石 5、石皿 7、撚糸文土器が出土した。石鏃は小形の三角形鏃（図 8.1･2）や逆ハート型のもの（3 ～ 7、9･10）、長めの脚を持つ細長のもの（8･11）が多いが、柳葉形（13）や大久保（帖地）型石鏃（12）など特徴的な形態が認められる。石槍は安山岩の横長剥片に丁寧な細調整を加えた細長の小形製品（14）である。石鏃や石槍の狩猟具に磨製技術が用いられ、その割合は最も高く、4 割程度である。スクレーパー類はサイド･スクレーパー（15･16）が多く、15 のように両側縁に細調整を施した特徴的な形態が認められ、温暖期を特徴付けている。

撚糸文土器（17 ～ 19）のみで構成されるが、元岡・桑原遺跡群３次調査などほかの遺跡では、条痕文土器や刺突文土器と共伴している。撚糸文土器は器壁が 1㎝以上で、斜め方向に施文している。原体を横にすべらせた条痕状の施文もあるが、撚糸原体を転がし縄目文様が明確なものが多い。

岩下洞穴Ⅵ層は人骨埋葬穴、炉址、配石が確認されている。遺構より離れた位置に、無文土器や条痕文土器が纏まって検出されている（麻生 1968）。押型文土器などもみられるが、混入したものだろう。石器は石鏃、石槍、尖頭状石器、スクレーパー類、使用痕ある石器、石核、石皿、砥石、磨石、敲石など 1,130 点が検出されている。石鏃は抉りが深く脚部の尖るものを主体とし、抉りの浅い正三角形に近いものなどがある。部分磨製石鏃も半数程あり、その中には全研磨に近いものもある。側縁が丸味を帯びる石鏃も組成されている。石槍は定型化したものが認められ、細身の柳葉形に近いものが多く、丁寧な細調整が施されている。部分磨製石槍も組成されている。特徴的な縦長のサイド・スクレーパーも認められるが、円形掻器はⅤ層例と共に混入と考えられる。

大分県二日市洞穴第７文化層はⅩ層を中心に包含され、器壁 1㎝以上で底部丸底の条痕文土器や無文土器が出土している。口縁部付近の条痕文の最終調整方向は、縦方向が採用されている。石器は石鏃 14 点、スクレーパー類７点、加工痕・使用痕ある石器３点、敲石・磨石４点、剥片・砕片 56 点が出土している。石鏃は平基式の三角形鏃などがある（橘 1980）。幅広のやや抉り深いものは、尖るものと円味を帯びるものがある。縦長で脚部の尖るものは、脚部が肩のように張り出している。スクレーパー類は、縦長剥片の両面あるいは片面に細調整を施した削器である。

第６文化層はⅧｂ・Ⅷｃ・Ⅸ層最上部に包含され、尖底あるいは乳房状尖底の条痕文・無文土器が出土している。直口する口縁部が特徴で、下からナデ上げるようなナデが見られる。石器は石鏃 22 点、石槍４点、スクレーパー類８点、加工痕・使用痕ある石器 30 点、敲石・磨石 10 点、有孔円盤１点、その他１点、石核８点、剥片・砕片 315 点が出土している。石鏃は抉りのない平基式は認められず、脚部の尖るものとやや円味を帯びるものがある。部分磨製石鏃が１点認められ、側縁が円味を帯びるものもある。石槍は定型化したやや細身のものである。

このように、北部九州では松木田遺跡３次地点と同じような比較的均質の遺跡が認められる。温暖化と共に円形刃部掻器が姿を消し、縦型の大形サイド・スクレーパーが再び登場する。石槍も、ヤンガー・ドリヤス期最終末の元岡・桑原遺跡群 58 次地点第Ⅲ③層からの発達が認められ、その割合も高くなり、細長の部分磨製石槍も組成される。石鏃も変化しており、下部縁辺が円味を帯びるものが出現し、岩下洞穴Ⅵ層、二日市洞穴第７・６文化層もほぼ同じ内容である。温暖期は動・植物相の北上が認められ、これを追い人類集団も北へ向かうと考えられる。その過程で、東方（本州）や南方から文化の影響を受けたと考えられる。だが、南九州の状況はこれと大きく異なるようである。この時代、北部九州では地域間交流の密度は高く、西北九州の細長石槍や二日市洞穴第６文化層の部分磨製石鏃は福岡地方から学習し製作したと考えられる。

撚糸文土器を主体とする松木田３次地点と、刺突文土器や条痕文土器の認められる柏原Ｅ・Ｆ遺跡（山崎ほか 1983・1987・1988）などとの前後関係については、松木田遺跡の方が古いと考えられる。そのほうが、石鏃や石槍の変遷が良く理解出来るのである。新しい要素の展開についても矛盾点は認められない。元岡・桑原遺跡群 58 次地点第Ⅲ①・②層は刺突文土器主体の文化層で、石槍の発達は弱く、松木田遺跡に特徴的な縁辺が円味を帯びる石鏃を組成している。

部分磨製石鏃や石槍、縦型のサイド・スクレーパーなどは西北九州との類似点が認められ、引き続き石器石材を通じた交流により、その形態にも影響を与えたのである。腰岳・針尾島・松浦の黒曜石や西北九州の安山岩が使用され、定型石器の製作も学習したと考えられる。福岡の地域集団との間に、

強固な関係が継続しているものと思われる。松木田遺跡の段階では地域間の交流が進んだと考えられ、３地域間で共通点が認められる。石槍の発達や円形刃部掻器の終焉は、生業に何らかの変化があったものと思われる。遺跡立地にも違いが認められ、河川流域の広く開けた微高地に進出するようになるが、崖下遺跡も引き続き利用されている。

福岡では松木田遺跡３次地点をピークに、元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅲ①②層や柏原 F 遺跡Ⅲ層などでは部分磨製石鏃や石槍の割合が急激に低下する。スクレーパー類の割合も低くなり、形態的に変化する。早期前葉は脚部の尖る石鏃と、部分磨製石鏃、細身の石槍、縦型のサイド・スクレーパーによって特徴づけられるが、押型文土器とほぼ同時に鍬形鏃が出現し、石鏃の転換点となっている。前期前葉に小形化の著しかった石鏃は、鍬形鏃の登場により大形化している。大形鍬形鏃の出現と共に石槍が減少し、磨製技術も極端に衰える。剥片剥離技術も一つの完成形が見られ、両面へ剥片剥離を行う円盤状石核や柏原型石核（山崎ほか 1983）が発達する。石鏃の素材を剥離する技術は、長い時間をかけて最もふさわしい剥離技術を手に入れたことになる。大形剥片を素材とする柏原型の普及で、一つの完成を見ると思われる。松浦や針尾島産の円礫素材から、腰岳の角礫を開発することによって、このような変化が生じたのであろう。

⑤　ヤンガー・ドリヤス期の遺物と寒冷期の特徴

福岡地方では、寒冷期のヤンガー・ドリヤス期に崖下遺跡などに、多くの文化層がみられることが明らかとなった。環境の変化により、狩猟のための好条件が形成され、それに重きをおく集団の活動舞台となったのである。遺跡数から見ると、アレレード期（温暖期）に比べ人口が増加しているようである。完新世の初頭は、元岡・桑原遺跡群３次、58 次調査のようにヤンガー・ドリヤス期を引き継ぐ遺跡が多く、集団関係に変化はないように思える。

ヤンガー・ドリヤス期は千年以上続くが、寒冷期も長く続くと遺物群が変化する様子が確認される。ヤンガー・ドリヤス期の初頭は、黒曜石製小形円形掻器の大量生産、という共通点が北部九州に認められた。それ以前は、安山岩製の大形スクレーパー（温暖期も大形サイド・スクレーパーである）が寒冷期を特徴づけており、新たな技術の獲得として評価できる現象である。ヤンガー・ドリヤス期のスクレーパーは、古期の寒冷期に比べ小型化しているのが特徴と言える。これは石材の変化によるものか、あるいは対象の動物に対処したものか、現状では明らかでない。しかし、やや大形の縦長円形刃部スクレーパーは安山岩を素材とする場合が多く、古い様相も残存しているようである。ただ、大原 D・元岡型スクレーパーの定形化は新しい要素が出現した一例と評価することができる。古い様相は継続するが、新しい形態（要素）が出現し、石器群全体が次第に変化するのが北部九州の特徴と言える。これは土器にも当てはまり、前半期は上げ底の条痕文土器や無文土器であるが、刺突文土器や撚糸文土器が次々と出現する。

このように、ヤンガー・ドリヤス期は前半と後半で遺物の形態などに違いが認められる。石鏃は、前半に三角形鏃の細長化、後半は脚部の抉りによって特徴づけられる。石槍は後半期に小形細長の定形化したものがみられる。スクレーパー類は、初期に小形円形掻器を中心に不定形掻器がみられるが、後半期になると大原 D・元岡型スクレーパーが定形化している。その割合も、初期には定形石器の中で最も多いが、後半期ほど割合が低下するようである。しかし、温暖期と比べると高い割合である。

スクレーパーの機能を知るうえで、使用痕の分析は重要である。これまで、寒暖差による石器使用法の違いの研究は行われておらず、実体顕微鏡による線状痕の観察を試みた（萩原 2018）。現段階では資料数が少なく明確なことは言えないが、寒冷期に特徴的な使用痕が明らかにされようとしている。大原 D・元岡型スクレーパーの、上下端部や中央部に特徴的な線状痕が認められるのである。なお、

温暖期のアレレード期に位置づけられる元岡・桑原遺跡群 52 次調査（常松編 2018）では、この掻器の上下端部と同じような線状痕が、使用痕ある石器に確認されたのである。温暖期には明確な細調整を省略し、特定の作業に用いる例があるものと思われる。

前半期の土器底部は平底や上げ底で、無文から条痕調整へと変化している。後半期は乳房状尖底となり、条痕調整の刺突文土器、撚糸文土器が次々に出現する。古い要素である無文土器や条痕文土器は引き続き認められるが、底部は乳房状尖底に変わるのである。底部の状況は地域的な違いが認められ、細かい部分では集団ごとの独自性が発揮されているものと思われる。二日市洞穴の丸底土器は、他の地域では顕著な存在とは言えない。

ヤンガー・ドリヤス期の新たな掻器が、西北九州産黒曜石製である点は重要である。以前より、その黒曜石を用いている西北九州や福岡地方において、黒曜石円礫を用いた円形掻器が大量生産されているのである。大分県の二日市洞穴は、第 8 文化層の刃部円形掻器 1 点が西北九州産黒曜石製であるが、第 8・9 文化層でその割合は極めて低い。黒曜石産地から遠い東九州は円形掻器が少ないことから、地域集団単位でその受入れに違いがある可能性が指摘できる。福岡や長崎に占拠する集団が、他の集団より学習し、寒冷環境に適応した文化を創りだした可能性があるが、東九州へは影響があまり及ばなかったと思われる。それに比べ鹿児島県建昌城跡は、大原 D 遺跡 14 区と土器も良く類似していることから、地域集団間連鎖などによる交流が考えられる。

大原 D 遺跡 14 区は、小さな河岸段丘の斜面に住居が造られている。ヤンガー・ドリヤス期の遺跡はこのような崖下遺跡に営まれている場合が多い。この環境は、西北九州の洞穴遺跡と共通する点が多く、寒冷化に伴い選ばれた可能性もある。西北九州では、細石器文化期の温暖期にも洞穴が盛んに使用されているが、最初に利用されたのは泉福寺洞窟・福井洞窟共に寒冷期である。岩下洞穴はヤンガー・ドリヤス期に初めて本格的に利用されている。この問題は簡単に証明できるものではなく、今後の課題としておく。

（3） スクレーパー類の使用法

前述のように、スクレーパー類は寒冷期と温暖期で形態差のあることが明らかになっている。その使用法に関しては堤隆らが使用痕の研究を行っている（堤 2003 など）が、寒暖の違いについては充分明らかにされていないように思われる。そこで、実体顕微鏡による使用痕観察と遺物分布から、その使用法を検討してみたい。

① スクレーパー類の使用痕

温暖期はサイド・スクレーパー、寒冷期は縦長掻器（エンド・スクレーパー）・円形掻器を主体に組成されており、三者の比較を行いたい。

サイド・スクレーパーを代表するのは元岡・桑原遺跡群３次調査の写真 1（3398-3）で、微細剥離痕（使用痕）と関連する刃部と斜交するやや幅広の線状痕が認められる。ほかの部位ではフィッシャーと交差、斜交する細い線状痕が観察される。サイド・スクレーパーは、浅く比較的密集した線状痕が多い。刃部と平行するものが多いが、斜交あるいは直交するものもあり、複数の部位に異なる形状の使用痕が認められる。

縦長の大原 D・元岡型スクレーパー（萩原 2016）は、顕著な使用痕が認められる場合が多い。写真 2（S349-3、58 次）は、フィッシャーと交差するやや浅い 0.05mm 以下の間隔で形成された線状痕で、背面上端部に認められる。写真 3（S349-2）は、フィッシャーと交差する 0.2mm 程度の間隔で顕在化している深い線状痕で、背面中央に認められる。同じような線状痕が、剥離面の内部にも認

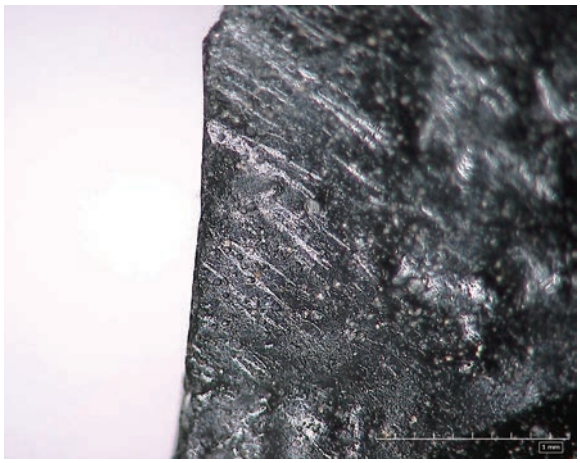


写真1　3398－3－2(3次)サイド・スクレーパー

写真2　S349-3(58次)大原D・元岡型スクレーパー

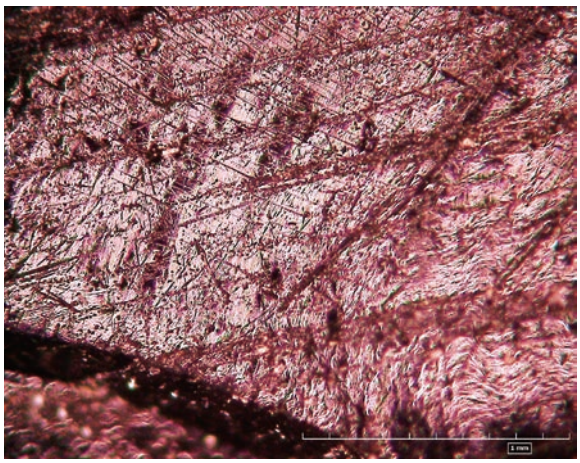


写真3　S349-2-3(58次)大原D・元岡型スクレーパー

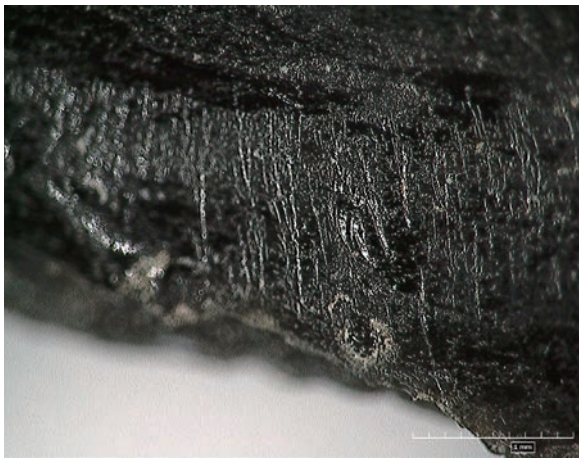


写真4　S352-2-2(58次)大原D・元岡型スクレーパー

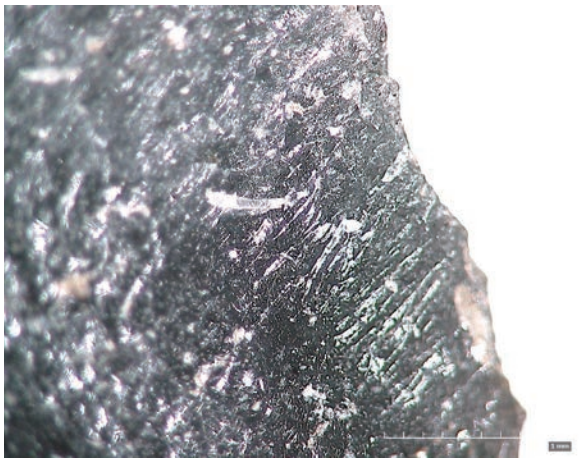


写真5　3600-2-2(3次) 大原D・元岡型スクレーパー

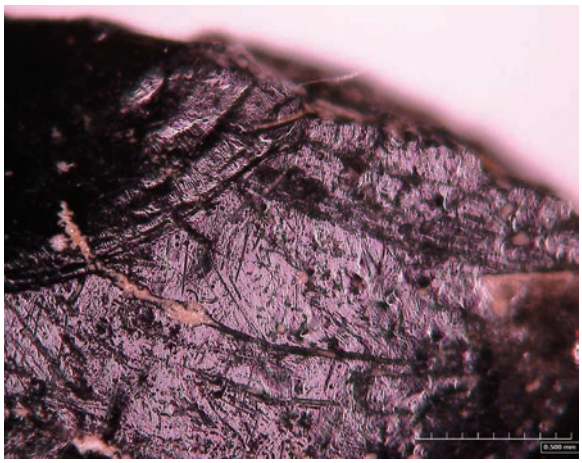


写真6　3665-1-3(3次) 円形スクレーパー

められる。そのほか、刃部（背面下端部）と直交する浅く短い、やや幅広の線状痕もある。これは、サイド・スクレーパーの写真 1 と類似する特徴的なもので、大原Ｄ・元岡型の刃部に良く見られる使用痕である。また、第 52 次調査地点の 57・79（図 9 下段）とも類似する線状痕である。

写真 4（S352-2、58 次）は、背面下端部に認められる刃部とほぼ直交する浅い線状痕である。上端部にも同じような線状痕が、刃部とほぼ直交して認められる。これらは写真 1 や S349 の刃部と直交するものと同じような使用痕であり、石器の端部に形成されている。

写真 5（3600-2、3 次）は刃部と斜交するやや幅広だが浅い、短い線状痕で、背面左側縁近くに認められる。部位は異なるが、写真 1 や写真 4 などと類似している。そのほか、細く浅い、短い線状痕が、正面中央部付近に認められる。

大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、一定方向に顕著な線状痕が認められる場合が多い。浅めのものが一般的であるが、S349（58 次）は浅いものと深めの線状痕が認められる。刃部付近に認められるもの（S349・58 次、S352・58 次、3600・3 次）があり、やや幅広の浅い線状痕に特徴がある。細調整痕とも関連し、サイド・スクレーパーの写真 1 と類似している。顕著な線状痕が、石器の中央付近（S349-2・58 次、3354-3・3 次、3600・3 次）や剥離面（S349-4・58 次、3354-3・3 次）内に認められる場合が多い。また、正・背両面に形成されているのが特徴と言える。

円形掻器は、3 次調査の 3665 などに顕著な使用痕が認められる。写真 6（3665-1-3、3 次）は、刃部近くにそれと平行する深く太いものと直交する細く短い線状痕がある。前者の一部は剥離面にも及び、剥離面が形成された後も使用が継続されたことを示している。3665-3 にも刃部に斜交する線状痕が認められ、一部これと交差するものもある。背面中央部にも、斜めやや深めの線状痕と、これと交差するものがある。また正面中央部にも認められ、細く浅い線状痕が多方向に走っている。

円形掻器は浅く細めの線状痕に特徴があり、ほぼ全ての資料にみられる。写真 6 のように刃部と平行する深い線状痕もあるが、例外と言える。多くは刃部と関連する線状痕だが、中央付近の両面に認められるものもある。

このように、形態別にそれぞれ異なる使用法が考えられるが、お互いに類似している部分も認められた。

②　遺物分布

大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅳ層で纏まって検出されている。二つのユニットからなるが、大形石器（石斧・礫器）や大原Ｄ・元岡型を含めたスクレーパー類の大部分は第Ⅳ Ｂユニットに包含されている。第Ⅳ Ｂユニットは、第Ⅱ Ｂユニットや第Ⅲ③Ｂユニット（大森編 2016）に近い性格と考えられる。これらのユニットは、石皿・磨石など植物食と関連する大形石器が豊富で、定形石器製作も行われている。本層のスクレーパー類は円形刃部掻器（大原Ｄ・元岡型など）を主体とし、皮革加工に関わるものと考えられ、第Ⅳ Ｂユニットを主体にⅣ Ａユニットにも認められる。顕著な使用痕は、第Ⅳ Ｂユニット 1 点（大原Ｄ・元岡型スクレーパー）、Ⅳ Ａユニット 4 点である。第Ⅳ Ａユニットは、スクレーパー類 1 点（大原Ｄ・元岡型の類似資料）、加工痕ある石器 1 点、使用痕ある石器 1 点、砕片 1 点に観察されている（図 9 上段）。飛び地であるⅠ 4 区にも 1 点（使用痕ある石器）確認された。

大原Ｄ・元岡型スクレーパー S 349（G8-291）や大原Ｄ・元岡型の類似資料 S 352（I6-2）は前述のような使用痕が認められる。加工痕ある石器 S 355（I9-135）は、背面左側縁に刃部と直交・斜行する線状痕が確認される。使用痕ある石器 S 356（I8-30）は剥離痕のある正面上部に斜行する線状痕、S 357（I4-1）は正面右上部に刃部と平行・斜行する線状痕が認められる。砕片 J8-18 は、

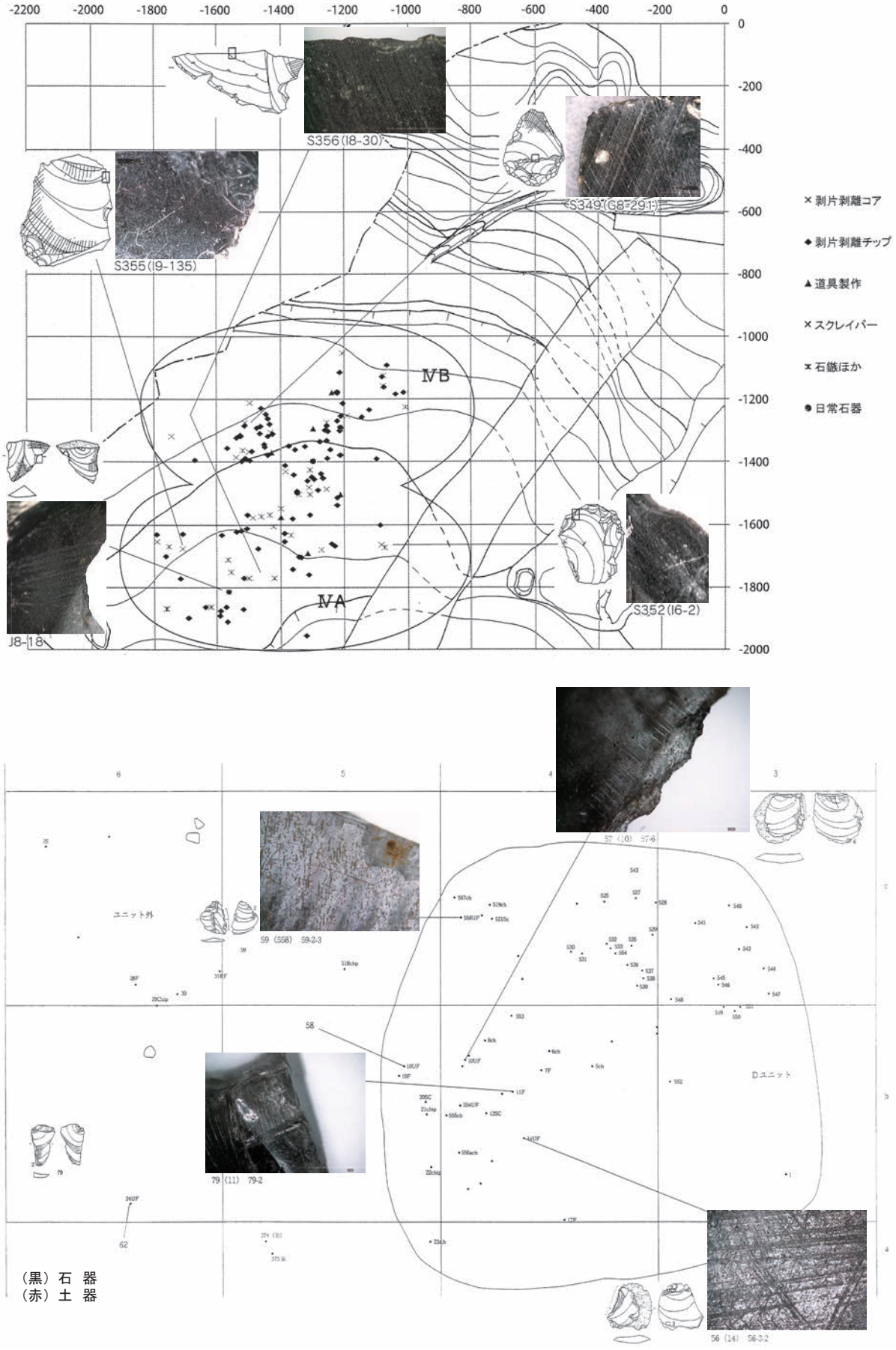


図9 遺物分布と使用痕（上…元岡・桑原 58 次Ⅳ層、下…元岡・桑原 52 次ユニット D）

正面右側縁の凹部に刃部と直交する線状痕、背面右側縁および中央に刃部と平行・直交する線状痕が確認される。このように、複数の用途に用いられている例は、前述のように多数認められる。

大原D・元岡型スクレーパー（S 349、S 352）は、背面を中心とする広い範囲に顕著な使用痕が認められ、皮革加工のような比較的激しい行動により生じたものと思われる。またJ8-18も複数の行為によって生じたと考えられる線状痕が観察され、常識に反し小さな砕片も頻繁に利用されていたことが良く理解できる。

スクレーパー類と他の石器は機能が異なると考えられ、両者は関連する行動ではない可能性もある。特に、大原D・元岡型スクレーパーはほぼ同一の使用痕が認められ、特殊な用途に使用されていたと考えられる。このようなあり方は第Ⅱ層や第Ⅲ③層と異なっており、住居址的な「場」とは違う空間に形成されている可能性が高い。

第Ⅳ層では、食事に関わる道具は大形石器やスクレーパー類とやや異なる場所に存在している。ただ、第Ⅳ層には日常生活に使用する磨石のような大形石器は認められず、住居址的な「場」が存在していない可能性もある。最初に居住した人類集団は，第Ⅱ・Ⅲ層とは異なる空間利用を行っていたようである。

本層における顕著な使用痕は、皮革加工（スクレーパー類）、食事関連（使用痕ある石器、砕片）によって生じたものと思われる。両者は異なる場所で作業がなされており、空間を使い分けていると考えられる。石器の使用痕から、場の機能について有意な関係が認められた。だが分析例は少数であり、今後さらに研究を進める必要があろう。特に住居址や炉址などの遺構との関連、器種による使用痕の違いなどを詳しく検討する必要があろう。

52次調査では定形石器製作に係わるユニットA・B・Cと、その痕跡がなく土器の多いユニットDに分けられる。ユニットDは砕片の密集がなく、石器製作以外の日常生活を行っていた空間といえ、住居に近い場の機能であったと思われる（図9下段）。食事や就寝、道具の修理などが行われていたと考えられるのである。また、57・79のようなやや幅広で浅く短い線状痕は大原D・元岡型スクレーパーに認められ、特殊な行動が考えられる。52次調査地点の事例は、端部から始まる点では大原D・元岡型と同じであるが、剥片中央部に線状痕が形成されておらず、ほかの部位の使用痕も異なることから、全く同じ機能とは言えない。しかし、同じような行動を含むことは確かだと思われる。このような線状痕は、ほかのユニットには認められず、ユニットDは58次調査地点のⅣ層と同じような活動が行われていたと思われる。それは狩猟活動に関するもので、皮革加工に伴うものと考えられる。

③　温暖期と寒冷期のスクレーパー使用法

北部九州のスクレーパー類は安山岩などを素材とする場合が多く、線状痕が観察される場合が少ない。52次調査地点や3次調査地点、58次調査地点の出土資料により、一定量を観察することが出来た。そのため、類型・型式別の違いを検討することが可能となった。これらのスクレーパーの各型式は寒冷期と温暖期を特徴づける（萩原2016）ものであり、環境による使用痕の違いを明らかにできる可能性がある。現状では明快に使用法を明らかにすることは出来ないが、大まかな寒暖差による違いを推定することは可能と言えよう。

サイド・スクレーパーは主に温暖期に発達し、写真1に代表されるような使用痕がみられる。52次調査の図30（常松編2018、48ページ）は多方向の線状痕で構成され、その細さや深さに違いがある。3次調査の3378（常松編2018、60・61ページ）は各部にやや細めの線状痕がみられ、刃部と平行しているものが多いが、直交するものもある。写真1（3次3398）も細い線状痕を主体とするが、刃部から連続するやや幅広の短い（1㍉以下）もの（写真1）がみられる。サイド・スクレーパーは、

部位により線状痕の在り方に違いのある場合が多く、一つの石器で複数の行動が行われていた可能性が高い。これは、ほかの石器にも言えることではある。

エンド・スクレーパーなどの掻器は、寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）を特徴づけるものである。大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、写真２～５に代表される。58 次調査 S349（写真２・3）は、端部と中央部では線状痕の形状が異なっている。上端部（写真 2）は、刃部から始まるやや細い密集した線状痕がみられ、下端はやや幅広で浅く短いものがみられ、両者で使用法は異なっている。中央部付近は剥離面内部を含め、幅広で深い線状痕（写真 3）などがみられる。58 次調査 S352（写真 4）の端部に形成された線状痕は大原Ｄ・元岡型に良くみられる。3 次調査 3600 は背面刃部にやや幅広で短い線状痕（写真 5）、正面中央部にやや幅広で浅いものがみられる。

円形スクレーパーは、各部位に細く浅い線状痕がみられる場合が多い。しかし 3 次調査 3665（写真 6）のように、剥離面にも及ぶ幅広で深い顕著な線状痕も認められる。

このように、各形態は共通点もあるが、違いも認められる。線状痕は平坦な面に形成される場合が多いため、背面に形成される例が多いが、正面に認められる場合もある。両面に形成されているものは、サイド・スクレーパー 7 点中 2 点、大原Ｄ・元岡型スクレーパー 4 点中 2 点、円形スクレーパー 7 点中 2 点で、大きな違いはない。幅広で深い顕著な線状痕は、サイド・スクレーパー 1 点、大原Ｄ・元岡型スクレーパー 2 点、円形スクレーパー 1 点である。刃部とほぼ直交する幅広で浅い特徴的な線状痕は、サイド・スクレーパー 1 点、大原Ｄ・元岡型 3 点、円形スクレーパーには認められなかった。ところが、52 次調査地点の 57（使用痕ある石器）、79（剥片）にも同じような線状痕が認められた（常松編 2018）。また、側辺などの（微細）剥離痕と関連するものは多くのスクレーパーに認められるが、中央部付近はサイド・スクレーパー 2 点（内 1 点は円形状のキズ痕）、大原Ｄ・元岡型 3 点、円形スクレーパー 4 点で、寒冷期のものの割合が高い。細調整痕の部位や線状痕を考慮すると、皮剥ぎや皮なめしのような行動が想定される。寒冷期は、その寒さを生き抜くため温かい衣服や住居が必要とされ、それを行うための道具として大原Ｄ・元岡型スクレーパーや円形スクレーパーが存在したのではないかと思われる。

寒冷期のスクレーパーは、写真 3 の大原Ｄ・元岡型スクレーパー、写真 6 の円形スクレーパーに代表されるように、幅や深さのある顕著な線状痕によって特徴づけられる。大原Ｄ・元岡型スクレーパーに特徴的なやや幅広で浅く、短い特徴的な線状痕（写真 4・5）もこの時期の代表的なものかも知れない。ところが、温暖期と考えられる 52 次調査地点では、使用痕ある石器（57）や剥片（79）に類似する線状痕が認められた。これらはＤユニットの近接した地点で検出されており、同じような行動に用いたと考えられる。58 次調査地点Ⅳ層でも近接して大原Ｄ・元岡型が検出されており、近くで複数の「ヒト」が同じ作業を行っていたと考えられる。3 次調査地点のサイド・スクレーパー（写真 1）にも同様の使用痕が観察された。これらは、ほかの部位には異なる使用痕が認められることから、全く同じものではないが、一連の行動の中に同様の動作を含むものと考えられる。温暖期には、異なる形態の石器または細調整を行わないで、同じような行動をしていた可能性が指摘できる。温暖期とはいえ冬季の寒さは相当厳しく、当然衣服は必要とされたと思われるが、それ専用の道具を持っていなかったと考えられる。だが、大原Ｄ・元岡型や円形刃部スクレーパーが消滅する理由の説明は困難である。

寒冷期と温暖期では、スクレーパー類の形態的特徴に差のあることが明らかにされていた（萩原 2016）。寒冷期には円形刃部スクレーパーが形を変えて登場し、温暖期には縦長のサイド・スクレーパーが主体となるのである。使用痕の検討によって、温暖期にも寒冷期と同じような行動（作業）を、

形態の異なる石器を用いて行っていた可能性が、示唆されたのである。しかしこの問題は結論を急ぐべきでなく、さらに詳細に検証する必要があると思われる。

資料が限定されているため充分なものではないが、環境（寒暖差）による大まかな傾向を示せたと思われる。今後さらに分析資料を増やし、研究を深めていく必要があると思われる。北部九州ではスクレーパー類の寒暖差による形態変化が著しいが、それがいかなる行動によって生じたかを明らかにする必要がある。

（4） 温暖化と土石流の発生

遺物が包含されている堆積土は、その時の環境を良く表している。例えば、長崎県岩下洞穴や大分県二日市洞穴は寒冷期のヤンガー・ドリヤス期に形成された土層は白色・灰色を呈し平底の条痕文土器などが包含され、完新世の温暖期の堆積土は赤色で押型文土器などが認められる。福岡市内でも、大原Ｄ遺跡 14 区や元岡・桑原遺跡群 58 次調査では灰色系、柏原Ｆ遺跡では赤色系の土壌が確認出来る。温暖な間氷期には世界的規模で赤色古土壌が認められることから、最も暖かい時期に形成される土壌と考えられる。

縄文時代の最も温暖な時期は、ヒプシサーマルと呼ばれる縄文時代前期の海進期で、現在よりも 2 ～ 3°温度が高かったと言われている。しかし、北部九州の遺跡で赤色土には早期の押型文土器が包含されており、かなりの時間差がある。この頃は、急激な海面上昇により対馬暖流が日本海に本格的に進出した時期であり、温暖湿潤な気候になったと思われる。このような急激な温暖化は現在と同じであり、大雨などによる災害が危惧されるところである。事実、元岡・桑原遺跡群は花崗岩を基盤とする丘陵や河岸段丘に形成されており、それが風化した真砂土に遺物が包含されているが、遺跡の堆積土には土石流がしばしば認められる。大規模な場合は、谷を埋めるほどの土砂が堆積することにより地形が変形し、かなりの期間人類集団の痕跡が途絶えており、大きな影響を受けている。

また、縄文時代早期の包含層に旧石器時代や細石刃文化の遺物が混入していることが良くあり、背後の丘陵または古い段丘に包含されていた石器が、土壌の崩壊により移動したものと思われる。これも小規模な土石流といえよう。大原Ｄ遺跡 15-3 区は遺物包含層を厚い土石流が覆っており、その後弥生時代までの間に谷が形成され、再び段丘化していることが明らかにされている。このように、埋没と下刻が繰り返されているのである。また 14 区の住居跡 SC003 は、段丘堆積物の直上に造られており、土壌化や崩壊土砂の堆積が進む前、段丘形成後間もない時期に建設されている。事実、段丘堆積物であるⅠグリッド 8 層 11,720 ± 40、Ｕグリッド 10 層 11,480 ± 110 で、住居跡 SC003 は 10,840 ± 70、10,880 ± 110 であり、大きな時間差はない。土石流や崩壊土は温暖期にくり返し生じたようであり、その中にレスに由来する黄褐色土がみられる（磯 1999）。

このように、元岡・桑原遺跡群を含む糸島半島の風化した花崗岩体からなる丘陵地帯では、海退により海岸近くに小規模な谷が形成され、温暖期に土石流による埋没を繰り返していたようである。大原Ｄ遺跡 14 区は、寒冷期の文化層にナイフ形石器や細石刃核が包含されており（池田・荒牧ほか 2003）、寒冷期にも背後の段丘土壌の崩壊が起こっていたと推定される。

元岡・桑原遺跡群 3 次調査地点は、上層とその下位の中層の間に無遺物の拳大から人頭大の礫を多く含む層が認められた（管波ほか 2004）。これが土石流堆積物と考えられる。その下位では条痕文土器、無文土器、刺突文土器、撚糸文土器（図 10.7 ～ 9）、上層では押型文土器（図 10.1 ～ 6）が出土している。押型文土器には稲荷山式（4 ～ 6）、早水台式（2･3）、下菅生Ｂ式（1）が含まれる。このことから、土石流は押型文土器稲荷山式出現以前に生じたものと考えられる。上層出土集石遺構

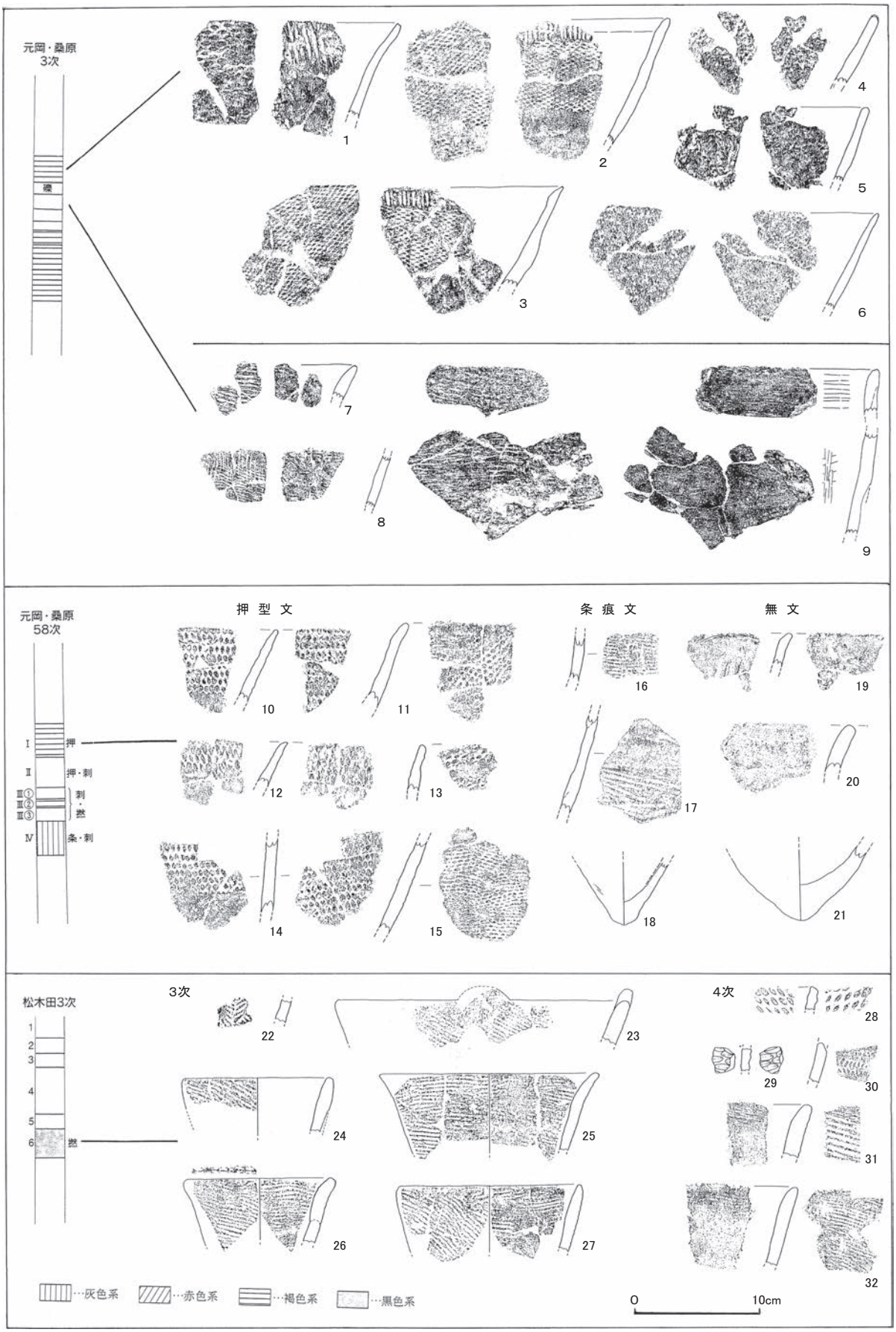


図10　土石流堆積物の時期（大森編 2016 などをもとに作成）

の放射性炭素年代値は8,495 ± 40BP ～ 8,630 ± 35BP、中層集石の最も新しい値は9,245 ± 40BPで、炉穴の年代は9,120 ± 45BPである。稲荷山式は58次調査で8,900BPより若干新しいという測定値があり（大森編2016）、土石流は9,100 ～ 8,900BPに発生した可能性が強い。押型文土器文化層の上位に崩壊土が認められ、弥生時代遺構との間に100 ～ 150㎝の無遺物層があることから、上層の形成後谷を埋没させる大規模な土石流が生じた可能性が指摘できる。

58次調査地点はⅡ層に風化礫を多く含むことから、崩壊土の可能性がある。3次調査と同様、Ⅰ層堆積後かなり長期間利用されていないので、土石流が生じた可能性がある。Ⅰ層からは押型文土器（図10.10 ～ 15）、条痕文土器（16 ～ 18）、無文土器（19 ～ 21）が出土している。条痕文土器（18）と無文土器（21）の底部は乳房状尖底である。押型文土器は縦長の大きめのレンズ状を呈するもの（10・12・14）、横長の円形を呈するもの（11）、横長の米粒状のもの（13・15）がある。このように、Ⅰ層は稲荷山式新相を中心に組成されており、柏原F遺跡Ⅱ層（山崎1983）あるいは3次調査地点とほぼ同じかやや古いと考えられる。柏原F遺跡ではⅡ層の上に1～3ｍの土石流堆積物が認められ、最も大規模な崩壊は下菅生B式以降の可能性が高い。大原D 16区でも、縄文時代文化層最上層（Ⅶ層）と古代の遺構との間に、崩壊土と思われる厚い堆積物が認められる。Ⅶ層出土遺物には押型文土器（稲荷山式・早水台式）を含み、ほぼ同時期と考えられる。

58次調査Ⅱ層B・Cユニットの押型文土器は稲荷山式古相で、その年代値は8,850 ～ 8,900BPである。これより古いⅡ層Aユニットは、押型文土器最古の川原田式段階である（大森編2016）。3次調査の上・中層間の土石流は、Ⅱ層の堆積前あるいは後と考えられるが明確には判断できず、押型文土器稲荷山式古相以後あるいはその出現以前と考えられる。

これらは、糸島半島の小規模河岸段丘より出土したもので、文化層は斜面に形成されている。背後は比較的急な斜面のため、崩壊土が絶えず生じており、大規模土石流の起こった時期を特定するためには、山地と接する比較的平坦な遺跡で検証する必要がある。そこで早良平野の一画、花崗岩山地である西山（標高430 m）東側山麓部に広がる砂礫台地に立地する松木田遺跡を取り上げる。3次調査地点は土石流による微高地に存在している遺跡である。土石流は弥生時代の遺構面と縄文時代包含層の間の砂礫層で、1 m以上堆積している。なお、縄文時代包含層の上位に黄灰色シルト層が堆積しており（米倉2001）、やや間をおいて土石流が発生したようである。4次調査1区はこれに隣接するが、室見川に近い位置にあるため土石流の痕跡は明確でない（長家ほか2013）。

図10下段は松木田遺跡3次および4次調査1区出土遺物である。いずれも撚糸文土器（23 ～ 27、31・32）単純層に近いが、押型文土器小片（22、28 ～ 30）が共伴している。これらの出土状態が問題となる。3次調査の22は不定形の土抗からの出土で、土石流の影響で混入した可能性が指摘できる。小片のため明確でないが、押形文土器の前半期と推定されている（米倉2001）。4次調査1区は楕円押型文（28・29）、山形押型文（30）が出土している。30のような古手のものもあるが、撚糸文土器（31・32）と共伴する可能性は低いと考えられる。これらも土石流により運ばれたものと考えた方が良いのではないかと思われる。松木田遺跡においても、撚糸文土器以降に土石流が生じていることが確認された。しかも間層が堆積していることから、文化層形成後かなりの時間が経過してからのことと思われる。押型文土器が土石流の影響によるならば、稲荷山式以降の可能性が高いといえよう。

このように、福岡地方の花崗岩山地を背後に持つ遺跡群の調査成果から、早水台式の頃大規模土石流が発生し、谷を埋めたため、暫く遺跡として利用されなくなった状況が明らかとなった。これと押型文土器文化層に見られる顕著な赤化土壌との関係を考えたい。大分県二日市洞穴はⅦa層に認めら

れ、Ⅶa・b層が第4文化層（上層）で稲荷山式などの押型文土器が出土している。佐世保市泉福寺洞窟は3層で押型文土器が検出されているが、その最上位の3a層が赤化土壌である。同市岩下洞穴はⅣb・Ⅳ層が赤褐色土で、比較的新しい段階の押型文土器が包含されている。柏原F遺跡Ⅱ層は時間幅があるが、早水台式などが出土している。

顕著な赤化土壌は川原田式のような押型文土器出現期ではなく、やや遅れて形成されている。この年代は、大規模土石流が発生した頃とほぼ同じといえ、早水台式や下菅生B式の時代で、その年代は約8,500BP（9,500calBP）よりもやや新しい頃と思われる。今後は、対馬暖流の日本海への流入の時期など、海水面変動との関係を詳細に明らかにする必要があろう。

（5） 黒曜石原石の獲得戦略

福岡地方は、石器の素材となる石材に乏しく、旧石器時代から黒曜石や安山岩を西北九州から得ている。その採取方法は明らかでないが、当初は現地に赴いていたと思われる。縄文時代の初期（草創期）も基本的には変わらないと思われるが、その後保管のための埋納遺構が作られるようになり、時代が進むと黒曜石原産地の集団が係わった可能性が指摘できる。ここでは、これらの遺構や遺物を詳細に分析し、その実態を明らかにしたい。比較のため、縄文時代後・晩期の遺跡も取り上げ、福岡地方における時間変化を検討したい。

①　縄文時代草創期・早期の様相

a）　大原D遺跡14区

本遺跡は前述のように、草創期末に属し、晩氷期末の寒冷期であるヤンガー・ドリヤス期の始まる頃に形成された遺跡である。遺構に、纏まった黒曜石原石が検出されている点に特徴がある。Ⅰ層SX013（集石）より黒曜石原石2点、Ⅱ層SC014（住居址）より原石2点、Ⅲ層SC003（住居址）より原石2点、Ⅲd層SX049（くぼみ状土坑）より原石1点、Ⅲh（最下層）SL048（剥片集中）より黒曜石剥片に混じって原石1点が検出された。

Ⅱ層SC014は、住居址中央部の円形土坑の東側壁際の板状炭化物の上に、黒曜石の円礫が認められた（図11.下段）。このほか、石鏃9、削器1、楔形石器1、使用痕ある剥片2、剥片31、石核2、条痕文土器､無文土器が出土している。Ⅲ層のSC003でも､黒曜石原石2点が検出された。内1点は、石鏃の集積であるSL083より出土している。石鏃49、尖頭器1点、掻器6、削器8、使用痕ある剥片12、剥片1016、石核3点、条痕文土器、無文土器が検出されている。ほかの住居址でも多数の遺物が検出されており、ここで石器製作活動が行われていた可能性が強い。特にSC003は約1,200点の遺物が認められ、素材生産、定形石器製作が行われていたと思われる（池田・荒牧ほか2003）。

SC014は長崎県松浦産と思われる200ｇ強の黒曜石原石、SC003は100ｇ強である。この他300ｇ程度の円礫が2個あり、一般的な黒曜石原石より大形である。旧石器時代の磯道技法の素材礫と同じ大きさの卵形礫である。このように住居址などの遺構に原石を保管するのは、当時の人類集団が回帰的行動を行っていたことが想定される。この頃は年間を通した定住は行っておらず、季節ごとに周辺部を移動していたものと思われる。後に述べる埋納遺構とは異なるが、黒曜石原石の保管方法の一つとして位置付けられ、その管理は住居に住む家族が行っていたと推定される。

b）　元岡・桑原遺跡群58次調査

Ⅰ・Ⅱ層より埋納遺構（デポ）と考えられる遺構が検出された。いずれも、遺物分布の最も標高の高い地点の近接した位置に認められる。

Ⅰ層の埋納遺構

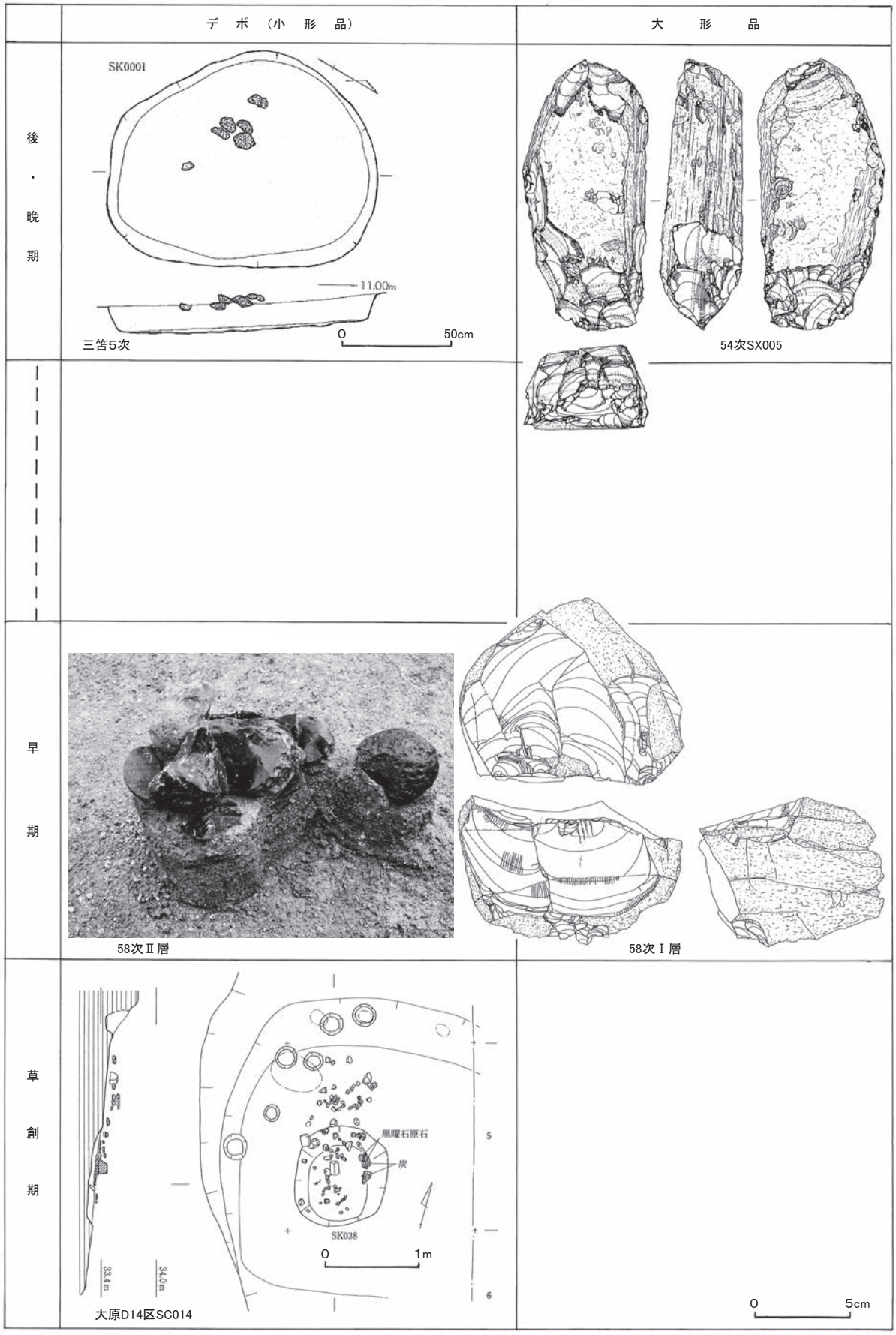


図11　黒曜石原石の保管（デポ）

掘り込み等は確認されず、1 点のみの出土であるが、極めて大形品で質量も約 890 g であり（図 11 中段右）、Ⅱ層のデポとも近接していることから、埋納遺構と判断した。本来、土抗が掘られ、保管されていた可能性が強い。佐賀県伊万里市腰岳産の大型黒曜石であり、複数の剥離痕が観察され、石核素材を剥離した可能性もある。

このほか、石核が H －３区で多数検出されている。その中には腰岳産もあるが、針尾島産や松浦産の円礫が用いられており、多様な石材を用いている。一般的な埋納遺構に比べると、やや広範囲に広がっているが、石器埋納遺構と同じような性格かも知れない。

Ⅱ層の埋納遺構

掘り込み等を平面的に見極めることは出来なかったが、6 個体の黒曜石が幅約 15㎝の中に集中していた（図 11 中段左）。その周囲を一段下げ、別の個体がないかを確認したが検出されなかった。全ての黒曜石の底面レベルは、標高 33.5m と高さが揃っており、本来掘り込みが存在していたものと思われる。

出土したものは、いずれも長崎県佐世保市針尾島産と推定される黒曜石原石である。2 点を九州大学で原産地分析を行ったが、針尾島中町産と推定された（足立ほか 2016）。完全な原石はなく、全て剥離されたものである。分割品と、剥片状に剥離したものがある。いずれも接合関係が認められるが、後者は接合しない例もある。多くの接合例があることは、本地点で剥離したものを埋納したと考えられる。小さな剥離痕は、黒曜石が石器製作に適当かどうかを確認したとも考えられ、石器材料の交易に関し良好な資料を提供するものと思われる。本遺跡で行われた行為であり、遺跡を残した集団が針尾島まで遠征した可能性は低いと考えるべきであろう。第Ⅱ層においても、針尾島産以外の腰岳や松浦の黒曜石を使用しており、安山岩を含め多数の原石産地との交流があったと考えられる。

これらの埋納遺構は押型文土器稲荷山式の時代に位置付けられ（大森編 2016）、石鏃の素材を生産する石核が松浦や針尾島の黒曜石円礫から、腰岳産黒曜石角礫製剥片へと変化しており、本遺跡の埋納遺構はそのことを良く示している。

旧石器時代から縄文時代草創期前半の細石器文化までは、黒曜石円礫が多数持ち込まれ、腰岳産と推定される角礫は少数派である。円礫は、松浦産や針尾島産の他、腰岳から当時の海岸へ運ばれたものも含まれていると思われる。それが、草創期後半の大原Ｄ遺跡 14 区では針尾島中町産が本格的に開発される。それは、主に円形スクレーパーの素材生産のためであったと考えられる。

草創期の大原 D14 区は家族単位で原石を住居に保管しているが、早期の 58 次調査地点では遺跡（集落）の一区画に保管している。これは家族単位でなく、集団単位によると思われ、集団関係に変化が生じたものと思われる。

c)　Ⅱ層埋納遺構出土の黒曜石（図 12）

図 12 に埋納遺構から出土した黒曜石を図示している。完形品はないが、接合により 3 点がほぼ完形となる（図 1・2・5）。3・4 は、剥離された比較的大きな剥片は確認されていない。6 ～ 11 は同一個体であるが、10・11 は接合しなかった。これらは石核、石核素材、それを生産するための黒曜石で構成されている。将来の再来訪に備えて埋納したものであり、石器製作をスムーズに行うことを意図している。これらは石器製作の初期段階のものであるが、6 ～ 11 は素材生産・石器製作活動を行った痕跡がある。

1・2 は打面を形成せず、自然面に加撃し剥片と砕片を剥離した例である。縦長剥片とやや幅広の資料が剥離されている。これらは本地点において、石材の質を見るため剥離したと考えられる。卵形の小礫を用いている。1 は縦長剥片を連続して剥離しようとしている可能性があり、2 は厚手の大形

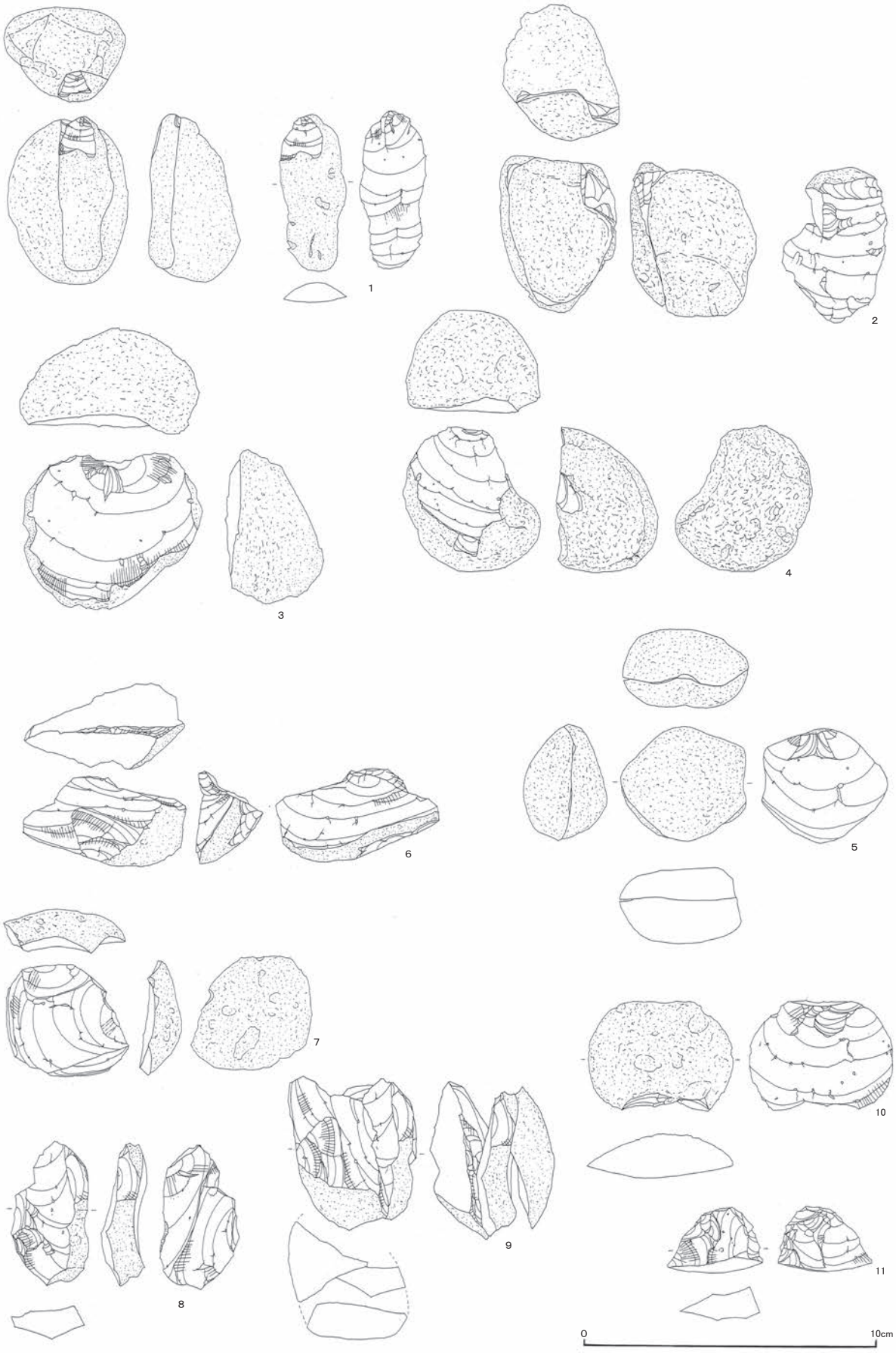


図12　元岡・桑原遺跡群第 58 次調査地点第Ⅱ層デポ出土の黒曜石　大森編 2016 より

剥片を剥離し､石核素材を剥離しようとしていたと考えられる。1 は約 77 g､2 は約 114.5 g である。

3・4 は、原石に 1・2 よりも大きな剥離を施したものである。いずれも、打面を形成せず、自然面に加撃している。四分の一程度が失われているようである。3 は一回、4 は数回の加撃が行われている。遺構の内外の資料について鋭意接合作業を行ったが、接合関係は得られず、他地点（遺跡）へ持ち出されたと考えられる。3・4 は石核素材を剥離したと考えられるが、4 は剥離方向が異なり、打面転移石核の可能性がある。3 は 103.5 g。

5 は小形礫を二分割したものである。7 のような求心状剥離石核の素材として将来使用するため、埋納されたと思われる。2 個で約 50 g。

6 ～ 8 は接合関係にあり、その状態が 9 である。10・11 も同一個体と考えられるが、接合には至らなかった。これらを含めても礫には復元できず、他地点（または他の遺跡）で使用されたと考えられる。合計 98.6 g である。11 は背面に平坦細調整を施した加工痕ある剥片で、第Ⅲ層 F － 8 区より出土している。6 ～ 8 には剥片を剥離した痕跡が認められ、他の個体とは異なり、素材生産を行っている。いずれも円盤状を呈する求心状剥離石核と思われる。10 はその素材で、11 は定形石器に加工しようとした痕跡がある。

本埋納遺構の石器は、剥片剥離（1・2）あるいは分割品（5）の接合例、剥片剥離を行ったが接合しないもの（3・4）に分けられる。これらの石材は、本地点で目的剥片剥離作業を行っておらず、将来の使用を考えたものである。ところが、9 を構成する個体群は目的剥片を剥離した痕跡があり、本地点で素材生産を行った残りを埋納したものと想定される。

消費地に原石レベルで持ち込まれ、石核素材の生産を行っていることが確認できた。恐らく、黒曜石産地を管理する集団から手に入れたものと思われる。原産地集団との交流が想定でき、このことは石器の形態にも及んでおり、技術の学習も行われていると思われる。

② 後・晩期の原石保管と石器素材製作

a） 三苫遺跡 5 次調査

本遺跡は、福岡市東区海の中道東側丘陵地帯の古砂丘後背斜面に展開する、標高 2 ～ 12 mの集落遺跡である（中村・本田編 2003）。縄文時代後期後葉三万田式期の黒曜石原石を埋納した土坑 2 基が検出された。

土坑 SK0001 は長さ 1.2 m、幅 1 m、深さ 0.15 mで、上部に原石 7 個が埋納されていた（図 11 上段左）。大形のもの（5 点）は 110 ～ 270 g で、すべて長軸の一端に 1 ～数回の小剥離が認められる。中型のもの（2 点）は 70 ～ 80 g で、大きなネガティブの剥離面を持つ分割品である。土坑 SK0003 は長さ 1 m、幅 0.8 m、深さ 0.3 メートルで、1 点の原石が保管されていた。重量は 50 g 弱である。上部が削平されており、さらに多くの黒曜石が埋納されていた可能性がある。

b） 元岡・桑原遺跡群 28・54 次調査

28 次調査は、縄文時代後期の元岡瓜尾貝塚の西側約 100 m、今津湾に面する丘陵先端の標高約 20 mの地点である。自然流路斜面の包含層、径 3 mの範囲より黒曜石原石 8 個が出土した（尾山編 2006）。本来約 1 mの土坑に埋納されていたものが、後世に拡散したものと思われる。黒曜石原石は拳大以下の角礫で、腰岳産と推定される。重量は 50 ～ 170 g で、一端に小剥離がみられる。三苫遺跡と同様、原石の材質を確認するための試し打ちと考えられる。

54 次調査で検出された大形黒曜石は、河川に近い谷部下層の調査で出土している（池田編 2012）。縦長剥片（石刃）等が密集して検出された SX005 の一端で、腰岳産黒曜石の大形石核（または整形した原石）が認められた（図 11 上段右、図 13）。比較的細かな剥離を加えているが、縄文

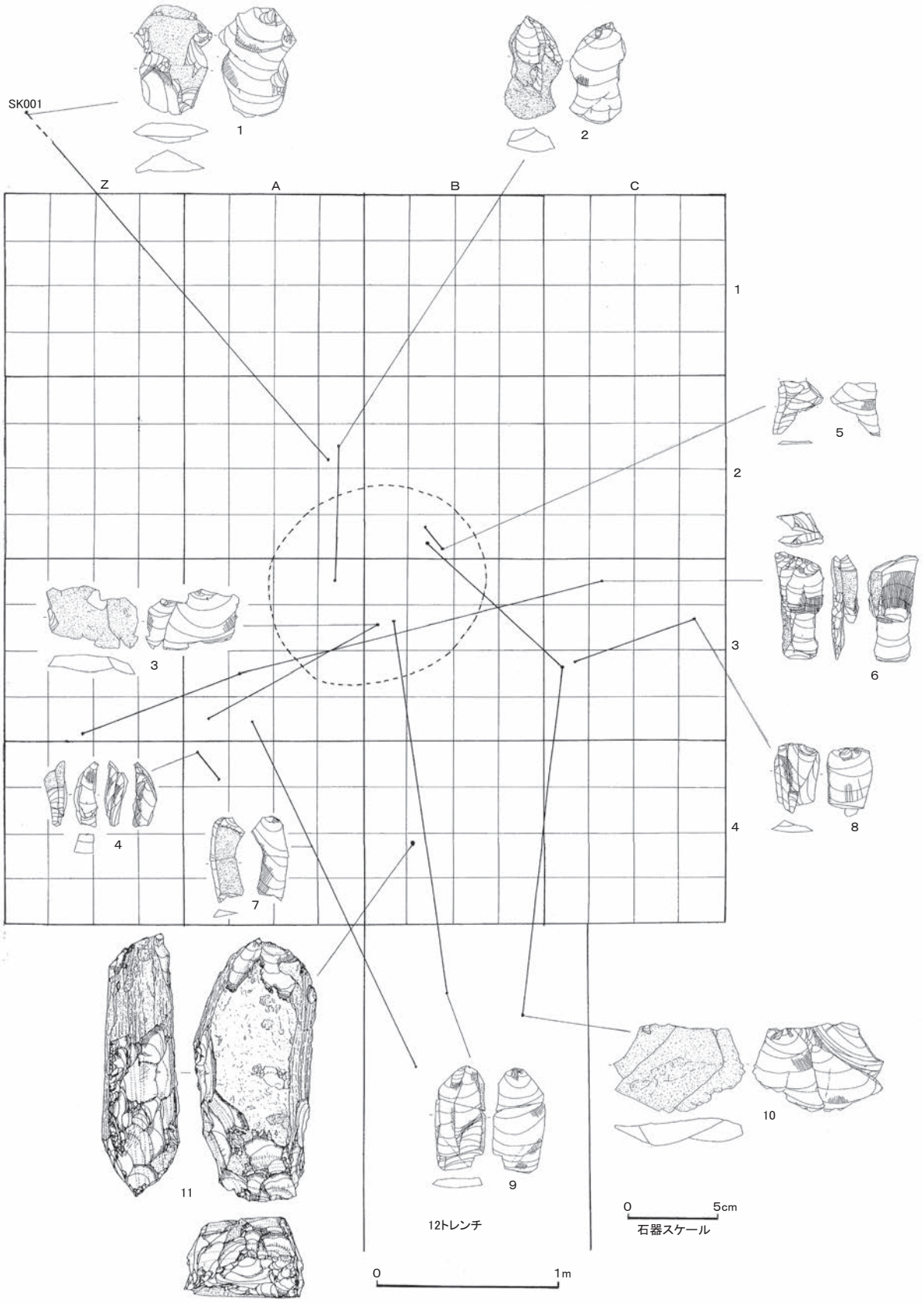


図13　54 次調査地点 SX005 を中心とした接合関係と原石（石核）の出土位置

時代早期 58 次調査 I 層出土の黒曜石原石と同様のものと思われる。石刃製作場の近くに所在し、58 次地点と同様接合関係のないことから、そのように判断した。SX005 は、縄文時代の鈴桶型石刃技法に関連する石刃生産の場であると考えられる。

c） 元岡・桑原遺跡群 54 次調査 SX005 の遺物と接合関係

12 トレンチを調査中に出土遺物（黒曜石片）の多い地点が見つかり、4 × 4m の範囲について 25cm メッシュで区切り土壌を水洗し遺物を取り上げた。これを SX005 と呼称している。遺物は満遍なく出土するのではなく、A-3 区、B-2・3 区を中心に確認された。本来図 13 の点線内部、直径 1m 程度に分布していたものが、風雨等の影響により拡散したものと考えられる。

図 13 には大形石核（整形した原石）と接合資料の大まかな出土位置を示した。大形の腰岳産黒曜石は石核とも考えられるが、接合関係は認められず、本地点以外で剥離された可能性が高い。磨滅痕や運ぶ時に生じたと思われるキズ痕が認められることから、原産地で剥離を行った可能性が指摘できる。そうであれば、剥離痕は原石を採取した集団によってなされた可能性があり、黒曜石原石の整形痕と考えられる。58 次調査地点では、Ⅱ層の針尾中町産小形円礫は接合したが、Ⅰ層の腰岳産大形原石は接合せず、本地点のあり方と一致している。

近接したものが接合した事例が多いが、図 13.1 のように離れたものもある。折断接合と剥離面接合では、距離に違いはないようである。ただし、図 13.1 は大形の剥片が SK001 付近に運ばれており、定形石器製作を意図していた可能性がある。

図には接合資料のみを示しているが、本地点および周辺部から大量（約 700 点）の石器が出土している。石核は認められないが、鈴桶型石核による素材生産活動が行われている。川に近い地点に黒曜石原石のデポがあり、その近くで定形石器の素材製作が行われており、58 次調査地点のあり方とは明らかに異なっている。58 次調査第Ⅰ・Ⅱ層では遺物分布の外れの最も標高の高い地点に認められたのである。また、デポと素材生産の場は離れた位置に存在している。縄文時代早期の 58 次調査地点とは、石器製作の基本的在り方に違いがあるものと思われる。58 次調査は、原石の保管は集落外れの一定の場所に確保され、石器製作は集落内部で一連の行動を行っている。

大原 D 遺跡 3 次調査地点の縄文時代晩期前葉の河川跡 SX01 では、3450 点の腰岳産黒曜石（全体の 98%）が検出された。内訳は、原石 6、石核 243、剥片・砕片類 3163、定形石器 38 である。ここでは、石器製作に関する一連の行動により生じた石器類が揃っている（吉留 2009）。原石の供給地点近くの一定の場所で、全ての行動を行っているのである。

54 次調査地点の川に近い SX005 は、遠くから運ばれてきた黒曜石原石の供給地点近くで素材生産を行い、定形石器に加工する目的剥片のみを他の地点に運んでいるのである。供給地点近くで石器製作の一部を行う点は同じだが、目的剥片のみを他地点に運ぶという行為は、時間的に近い大原 D 遺跡 3 次調査地点と異なっている。54 次調査では石刃製石器が認められないことから、かなり遠くへ運ばれたものと思われる。

石刃で剥片鏃を製作したのであれば、狩猟具の可能性が強く、拠点遺跡を遠く離れた場所に移動した可能性が強いのである。集団間の争いであっても、離れた地点で行われる確率が高いと思われる。このように、本地点で行われた石刃製作活動は遺跡で行われる活動の中では特殊なものと言え、一般的な行動とは遺物分布に違いが認められるのである。

黒曜石原石には図 13.11 のような大形石材と、58 次調査Ⅱ層のような小形石材が認められる。大形石材は良質なものが多いが、整形の過程で確認していたと思われる。本地点の大形原石は鈴桶型石核の素材に利用された可能性が高いが、小形のものは一般的に不定形剥片を剥離する石核に利用され

ているようである。腰岳黒曜石の大形良質石材は、集団にとって重要な道具製作に使用されている可能性が指摘できる。

③　福岡地方における黒曜石の供給システム

断片的ではあるが、福岡地方における黒曜石の供給と保管について述べた。ここでは範囲を拡げて検討し、供給システムの実態を明らかにしたい。

腰岳と同じく、九州の黒曜石大産地である大分県姫島については、供給形態が明らかにされている（清水 2015）。姫島産黒曜石の本格的開発が始まったのは縄文時代早期前半で、大分県内で 4kg、南九州で 1kg 前後の母材が供給されている。早期後半には、大分市横尾貝塚で 10kg以上の大形原石 2 個、直方体に整えられた約 7 kgのカゴ入り素材剥片 1 個が検出された。この遺跡では縄文時代後期にも 0.5 ～ 2.5kgの原石が出土しており、大野川流域方面への最初の中継地としての役割を担っていたと考えられている。縄文時代前期には、国東半島の羽田遺跡で 10kgの原石が検出されている。中期は別府湾奥内陸部の須久保遺跡で 1.3 ～ 5.6kgの原石が出土している。これらは不定形で小形化し、前期までみられた原石調整の技術は衰退している。須久保遺跡は最初の上陸地でなく、第二次中継地と考えられている。その後、縄文時代後期、弥生時代前・中期にはさらに小形となり、採掘技術の後退が看取される。このように、姫島産黒曜石は原産地と中継地の関係が具体的に示されており、黒曜石交易の解明に大きな進展を齎した。

福岡地方でも、西北九州の黒曜石供給関係が次第に明らかにされようとしている。縄文時代草創期の大原 D 遺跡や、早期前半の元岡・桑原遺跡群 58 次調査Ⅱ層は松浦や針尾島の円礫が埋納されているが、その直後の 58 次Ⅰ層では腰岳産の大形礫に変わっている。縄文時代早期前半にその開発が本格化する点は姫島と一致しており、姫島に比べるとかなり小さいが、大形化も軌を一にしている。当時の海岸線は現在よりも海側にあり、標高のやや高い 58 次地点は第一次中継地ではないと思われるが、良好な素材を手に入れることが出来たようであり、盛んに黒曜石埋納が行われている。その量は、遺跡に暮らしていた集団の使用する程度であったと思われる。

以後、腰岳産が主流を占めることになるが、100 g 以下の小形品も盛んに齎されている。それは、縄文時代後期後葉三万田式期の埋納遺構や後期頃と推定される 28 次調査地点黒曜石集中（尾山 2006）に良く表れている。

縄文時代前期・中期の状況は明らかでないが、晩期頃の 54 次調査 SX005 でも整形した大形黒曜石が出土している。これは鈴桶型石刃核の素材に係わるものと思われ、近接した場所に石刃を生産した空間が認められる（池田編 2012）。石器に加工した製品はないので、別の地点（遺跡）で定形石器製作を行ったのであろう。鈴桶技法による石刃の大量生産は、原石産地に近い伊万里市鈴桶遺跡などで行われており、ここでは石器素材である石刃が交易されていると考えられる。石器素材（石刃）の製作は、黒曜石原産地近くで行われる場合と消費地で生産される場合があったようである。

現在のところ、姫島産黒曜石のように、大形石材や大量の石器素材が埋納された中継地点は福岡地方では発見されていない。ところが、元岡・桑原遺跡群のように、海に近い河川の下流域では黒曜石原石の埋納行為や、石器素材生産活動が確認された。これらは小規模であり、1 ～ 2 集団を単位に行われたと思われ、姫島産黒曜石とは異なる供給システムであったと考えられる。

内陸部の状況は、海岸部とは違いが認められる。早良平野中央部の田村遺跡第 3 地点では、定形石器 154、剥片・砕片 329、石核 16、原石 3 の計 502 点の遺物が、後期末の三万田式期の溝状遺構 SX31 より検出されている（浜石編 1987）。大半が黒曜石で、原石は長さ 3㎝以下、重さ 10 g 以下の超小形品である。さらに奥部、油山山麓の岩本遺跡群第 3 次調査地点は、定形石器 6、剥片

41、砕片 61、石核 1、原石 1 の計 110 点が晩期前葉を主体とする遺物包含層より出土した（吉留編 1993）。原石は長さ 3㎝以下、重さ 7 ｇである。剥片鏃や削器に鈴桶型石刃技法と関連する資料はあるが、剥離行為そのものは確認されていない。この点は 54 次調査地点と反対の現象と言え、海岸部で製作された石器素材を用いたと考えられる。

内陸部では原石の埋納行為は認められず、齎された原石も超小形品である。ただし、石核も検出されていることから、やや大形の原石が供給されている可能性は高い。また、鈴桶技法に関しては定形石器として供給された可能性が指摘できる。原産地に近い鈴桶遺跡では、剥片（石刃）、砕片、石核を主体に、少量の定形石器、敲石など数十万点という膨大な関連資料が検出されている（杉原ほか 1965、船井 2002）。海岸部の 54 次調査地点でも鈴桶技法関連する遺物集中が確認されている。一般的に海岸部では完成された定形石器の割合は低く、内陸部はその比率が高くなる傾向がある。

54 次調査地点の状況はその集団の消費分と思われるが、大原 D 遺跡 3 次調査地点は 8・10 区において、定形石器 1035、剥片（石刃含む）3817、砕片 4772、石核 708、石核調整剥片 410、原石 4 で、集団の消費量を超えている。ここで製作された素材や完成石器が、内陸部へ供給された可能性が指摘できるのである。54 次調査地点でも、石刃などは内陸部へと運ばれたと考えられる。

黒曜石原産地より「フネ」を利用して福岡地方海岸部に齎された石材は、一部当地（齎された遺跡）で消費するが、内陸部へも供給する状況（吉留 2004・2009）が想定される。海岸に近く交通の便の良い遺跡が、黒曜石流通の起点になっているのである。（萩原）

4　縄文時代出土地点の動向

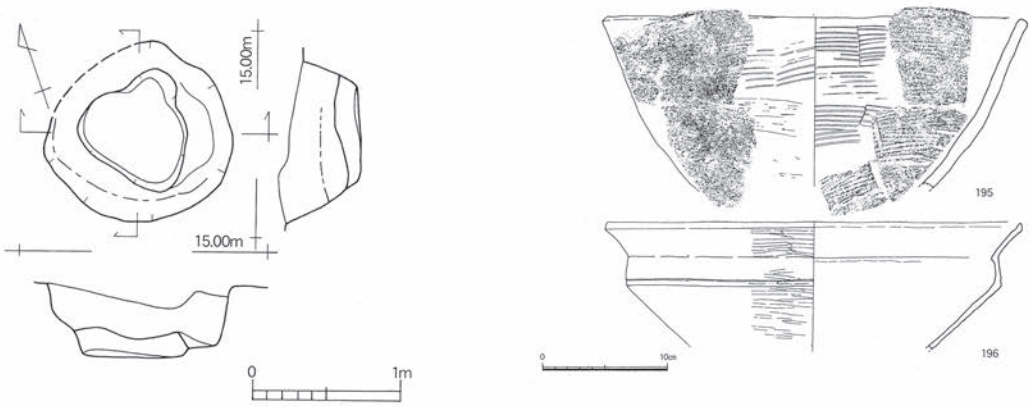
この章では、晩期について簡単にまとめる。

第 2 次調査で貯蔵穴 1 ないし 2 基が検出されている。貯蔵穴内からイチイガシの種実が出土している。同調査区は、南側に急峻な丘陵を控えた沖積平地上に営まれ、地山である白色系のシルトを切り込んでいる。晩期の粗製土器が出土している。

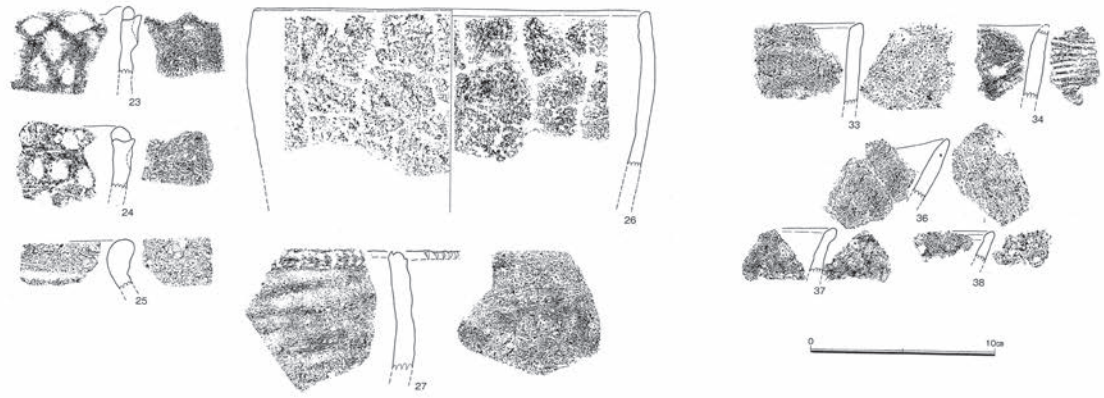
第 18 次調査では、包含層には伴わないものの、晩期土器片と同時期と考えられる打製石斧群が出土した。18 次調査は丘陵直下の斜面上にある遺跡で、他の縄文時代遺物が少量しか出土していな中、40 点以上の打製石斧が出土している。当地の 2 ㎞北にある大原 D 遺跡において、縄文時代晩期の焼畑の可能性がある地点から 200 点以上の打製石斧が出土しているが、当調査区の背後は急斜面ではあるが、周辺域も含めて焼畑農耕の可能性が考えられるところである。

第 42 次調査では、自然流路内で晩期包含層が見つかった。42 次調査地点は東西両側を丘陵に挟まれた幅 100 ｍ前後の谷地形の中にある。縄文時代中・後期までに谷が埋没するが、縄文時代晩期以前に谷の東西両側にそれぞれ山側から自然流路が流れ始め、東側流路 SD01 の最下層と川縁に晩期包含層が形成されている。土器は細片が多く、石器もさほどの量は無いが、土器片の中に孔列文土器が 3 点含まれている。孔列文土器はいずれも粗製深鉢の口縁部である。福岡市内では、早良区田村遺跡、南区野多目遺跡についで 3 例目の出土である。

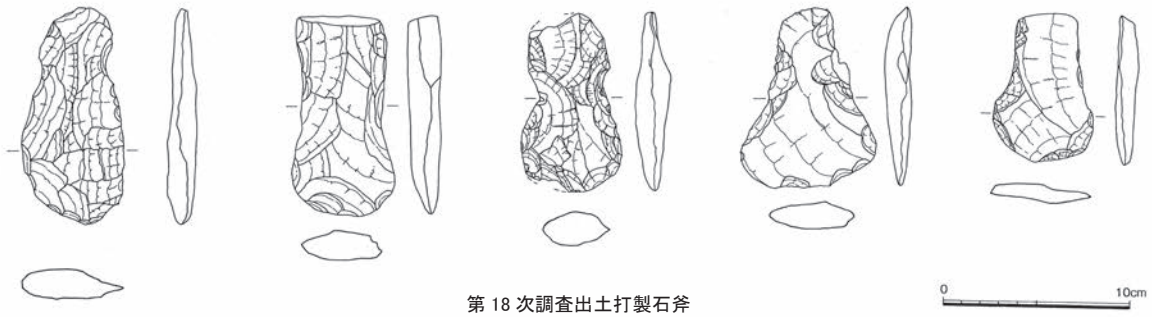
第 42 次調査では、上記 SD01 の底面で幅約 1.5 ｍ、深さ数十㎝のＬ字形に曲がる溝の中に大量のイチイガシ主体とする種実が多量に入っていた。隣接するグリッドの溝底から出土した ^{14} Ｃ年代は 93％確率で 770B.C. ～ 500B.C. で弥生時代早期の年代であるが、この溝は溝底を切り込んでいることから、この年代より古く、縄文時代晩期の可能性があるものと考えられる（報告時は年代等の検討を誤っていたので、本稿で訂正する）。イチイガシはアク抜きせずに食用に供せられるが、虫抜きやわずかなアクを抜くために水につける風習もあり、この溝もその可能性が考えられる。



第 2 次調査の貯蔵穴と出土土器



第 42 次調査出土孔列文土器



第 18 次調査出土打製石斧

図14　元岡・桑原遺跡群縄文時代晩期の遺構と出土遺物

上記のとおり、当遺跡では縄文時代初期の一群と晩期の一群が主に見つかっているが、立地上大きく異なっている。縄文時代初期の遺構・遺物群が見つかっているのは、丘陵斜面直下もしくは緩斜面上で標高が少し上がった地点、晩期は２次・42 次ともに沖積平地上で見つかっている。

ただし、初期は住生活遺構が直接見つかっているが、晩期は貯蔵穴や包含層など直接の生活遺構ではないという相違がある。縄文時代初期は、いわゆる縄文海進の前の時代、晩期は海進後の時代である。縄文海進時に、海岸線が上がった結果、湿地もしくは湖沼状の土地にたまった土壌が、海退時にシルト層として沖積平地となり、そのシルト層上に晩期の遺跡が形成されている。この状況は西区周船寺遺跡や東区名子遺跡など、福岡周辺域で広く認められる可能性が高い。今後の縄文時代後・晩期における斜面地での焼畑耕作、あるいは晩期末～弥生時代初頭における湿地における水稲耕作など、初期農耕期における、小さな一資料を追加したと言えるかもしれない。（米倉）

引用・参考文献（編著者五十音順）

秋成雅博　2018『清武上猪ノ原遺跡第 5 地区』宮崎市教育委員会

足立達朗ほか　2016「元岡・桑原遺跡群第 58 次調査出土の黒曜石について」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群 26―第 58 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集）

阿部泰之ほか　2014『井尻 B 遺跡 23―第 37 次調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1218 集

麻生優　1968『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

麻生優編　1985『泉福寺洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会

浅川滋男　2003「大原 D 遺跡 SC003 の復元」（池田祐司ほか『大原 D 遺跡群 4 ―大原 D 遺跡群第 4 次・第 5 次・第 6 次調査報告　縄文時代編―』）

池田祐司編　2012『元岡・桑原遺跡群 20―第 43 次・48 次・49 次・50 次・51 次・54 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1173 集

池田祐司・荒牧宏行ほか　2003『大原 D 遺跡群 4 ―大原 D 遺跡群第 4 次・第 5 次・第 6 次調査報告　縄文時代編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 741 集

磯　望　1999「丘陵斜面で発見された縄文時代遺跡と崩壊土砂―福岡県大原 D 遺跡群の調査―」『西部地区自然災害資料センターニュース』20

井田　篤・秋成雅博　2008『清武上猪ノ原遺跡 1』清武町埋蔵文化財調査報告書第 24 集

大森麻衣子編　2016『元岡・桑原遺跡群 26―第 58 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集

尾山　洋　2006「第 28 次調査の記録」『元岡・桑原遺跡群 6』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909 集

遠部　慎　2006「北・東部九州における縄文時代草創期末～早期前半の諸様相―大分県九重町二日市洞穴の年代測定―」『九州縄文時代早期研究ノート』第 4 号　九州縄文時代早期研究会

鹿又喜隆ほか　2015「九州地方における洞穴遺跡の研究―長崎県福井洞穴第 3 次調査報告書―」『東北大学総合博物館研究紀要』14

川内野篤編 2003『菰田洞穴発掘調査報告書』（平成 14 年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）

川内野篤　2008「直谷稲荷神社岩陰遺跡の発掘調査」『市内遺跡発掘調査報告書』佐世保市教育委員会

川道寛　2015「爪形文土器から条痕文土器へ―北部九州縄文時代草創期後半の様相―」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会

工藤雄一郎　2012『旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―』（新泉社）

工藤雄一郎　2018「縄文時代草創期の古環境と 14 C 年代」『九州旧石器』21

桒畑光博編　2012『王子山遺跡』（宮崎県都城市教育委員会）

古環境研究所　2012「王子山遺跡の植物珪酸体分析」（菜畑光博編　2012『王子山遺跡』）
佐々木由香　2015「植物資源の開発」『季刊考古学』132
芝康次郎　2018「九州における後期旧石器時代末から縄文時代草創期の遺跡分布と遺跡構造」『九州旧石器』21
菅波正人　1997『大原Ｄ遺跡群２』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第 507 集）
管波正人ほか　2004『元岡・桑原遺跡群３―第３・４・８・11 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 829 集
清水宗明　2015「西南日本の海の黒曜石交易人」『高野晋司氏追悼論文集』高野晋司氏追悼論文集刊行会
杉原荘介ほか　1965「九州における特殊な刃器技法―佐賀県伊万里市鈴桶遺跡の石器群―」『考古学雑誌』51 － 3
竹野孝一郎・綿貫俊一 2004『大分県二日市洞穴－分析編－』（大分県九重町教育委員会）
橘昌信　1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学博物館
堤　隆　2000「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第 47 巻第２号
堤　隆　2003 「後期旧石器時代の石器群と寒冷環境への適応戦略」『第四紀研究』42 － 3
常松幹雄編　2018『元岡・桑原遺跡群 29―第 42・52 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1354 集
中村啓太郎・本田浩一編　『三苫 4―三苫遺跡群第５次発掘調査報告書―』（福岡市教育委員会）
中村由克・石井久夫　1980「泉福寺洞穴の地質と地理的環境」『考古学ジャーナル』172
長家伸ほか　2013『松木田３―松木田遺跡第４次調査１～３・７・８区の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1204 集
萩原博文　2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第 12 号
萩原博文　2016「大原Ｄ・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群 26―第 58 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集）
萩原博文　2018「スクレーパーの使用痕」（常松幹雄編『元岡・桑原遺跡群 29―第 42・52 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1354 集）
萩原博文　2019「ヤンガー・ドリヤス期の北部九州」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流―研究の視点―』（六一書房）
浜石哲也編　1987『田村遺跡Ⅲ』（福岡市教育委員会）
深野信之ほか　2005『建昌城跡―平成 11 ～ 15 年度発掘調査報告書―』鹿児島県姶良町文化財発掘調査報告書第 10 集
船井向洋　2002「腰岳とその周辺の発掘調査による黒曜石研究の歩みについて」『石器原産地研究会会誌』1
保坂康夫　1999「縄文時代草創期段階の掻器について―山梨県高根町社口遺跡の分析から―」『山梨考古学論集』Ⅳ
松尾秀昭・河内野篤　2010「直谷稲荷神社岩陰遺跡の範囲確認調査」『市内遺跡発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）
馬籠亮道・秋成雅博　2015「南九州の移行期」『季刊考古学』132
柳田裕三編　2016『福井洞窟発掘調査報告書』佐世保市教育委員会
山崎純男ほか 1983『柏原遺跡群Ⅰ―縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 90 集
山崎純男ほか　1987『柏原遺跡群Ⅳ―縄文時代 A-1・E 遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 158 集
山崎純男ほか 1988『柏原遺跡群Ⅴ―先土器・縄文時代遺跡 A-2・C・H・J ～ N 遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 190 集
吉留秀敏編　1993『岩本遺跡群第３次調査地点発掘調査報告書』（福岡市教育委員会）
吉留秀敏　2004「縄文時代後・晩期の剥片石器生産について―石器・石材供給システムの様相―」『考古論集』（河瀬正利先生退官記念事業会）
吉留秀敏　2009「北部九州の打製石器の石材利用―石器石材の供給システム―」『環瀬戸内地域の打製石器石材利用』（中四国縄文研究会・西日本縄文研究会合同大会資料集）
米倉秀紀　2001『松木田遺跡群２―第３次下層（縄文時代早期）遺物編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 686 集
綿貫俊一編　2016『森の木遺跡発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター

特論２　元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物の諸相

常松 幹雄

1. 弥生土器

調査区は丘陵南斜面に開析された東西の自然流路 SD01 と SD02 で、流路の間で掘立柱建物や竪穴などの遺構が検出された。調査区の基盤層は花崗岩の岩盤で、ふたつの流路のあいだの開析を免れた個所は南半が暗灰色シルト層を地山とする沖積層で、北半は黄褐色のシルト層である。自然流路にはさまれた位置で検出された掘立柱建物や竪穴は北半の黄褐色のシルト層上に立地している。

SD01 で特筆されるのは、南北 50m 以上にわたって流路中央に厚く堆積した土器の集積、土器群である。ここでは弥生中期後半から古墳時代前期（須玖Ⅱ式から西新式にあたる）コンテナで 13,309 箱の土器が検出された。土器は流路の西側に沿って堆積していることから、掘立柱建物などのある側から流路に向かって継続的に運ばれたとみられる。緩斜面の集積は、土器型式から 3 世紀あまりにわたり、削平と堆積を繰り返しながら水路としての機能を果たしたと推測される。

SD02 の流路の西側から形成されたとみられる集積は、複数のブロックに分かれている。土器群 106 を例にとると上層部を被った西新式土器や後期の土器の直下で弥生中期後半の丹塗り土器が検出された。約 70 ㎡の範囲でコンテナ 700 箱近くの土器が出土した。最下層で祭祀具である有文木製品が検出され、有窓土器やイノシシ類の下顎骨もまとまって出土しており、中期後半に土器が運ばれたのは土器を用いた祭祀の結果とみることができる。SD01 の土器群 9 は約 250 ㎡の集積なので土器群106 は、集積の密度としては群を抜くものといえる。

流路の土器と石錘・砥石などの出土量についてはコンテナ数を一覧にしたので参照していただきたい。SD01 は、南半のⅠ区で 2,695 箱、上流域の 52 次Ⅰ区の 720 箱を加えると 3,415 箱。SD02 は、南半のⅡ区で 4,189 箱、上流域の 52 次Ⅱ区の 1,565 箱を加えると 5,754 箱、出土遺物は木器を除いても 9,169 箱にのぼる。

1）弥生時代の土器集積遺構

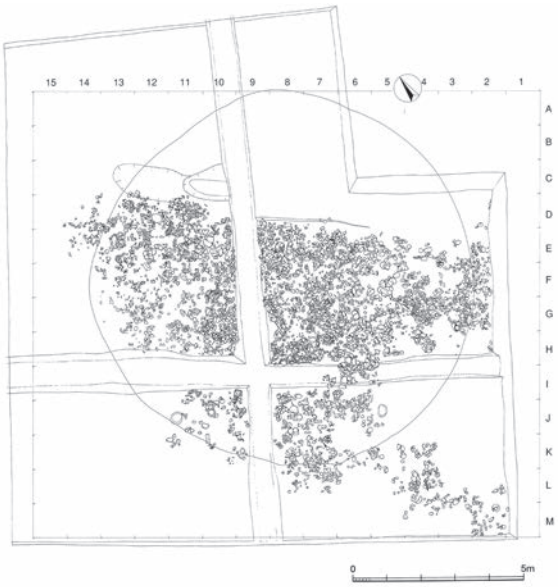
1977 年、糸島半島北東部の小𥫱（こもぐら）遺跡（大原 B 遺跡 1 次調査）で標高 15m の高台に立地する径 11 m（約 95 ㎡）の大型竪穴から多量の土器が出土した。大型竪穴は弥生中期後半の遺構で、厚さ 60 ～ 70 ㎝におよぶ中期から後期後半までの土器（コンテナ 380 箱）と石錘など（コンテナ 10 箱）の漁撈具、獣骨などが検出された。竪穴に堆積した土器類は、投棄されたのか、祭祀によるものかあるいはその両方か、さまざまな状況が想定されてきた。報告から読みとれるのは、遺物は住居跡の凹部に 2 世紀あまりにわたってもたらされたれたことで

第1図　糸島地域における主要遺跡の分布

ある。とくに後期後葉の高杯の出土が目立っている。また漁撈具として長期にわたる使用が可能な石錘がまとまって出土したことも意図的な行為をうかがわせる。

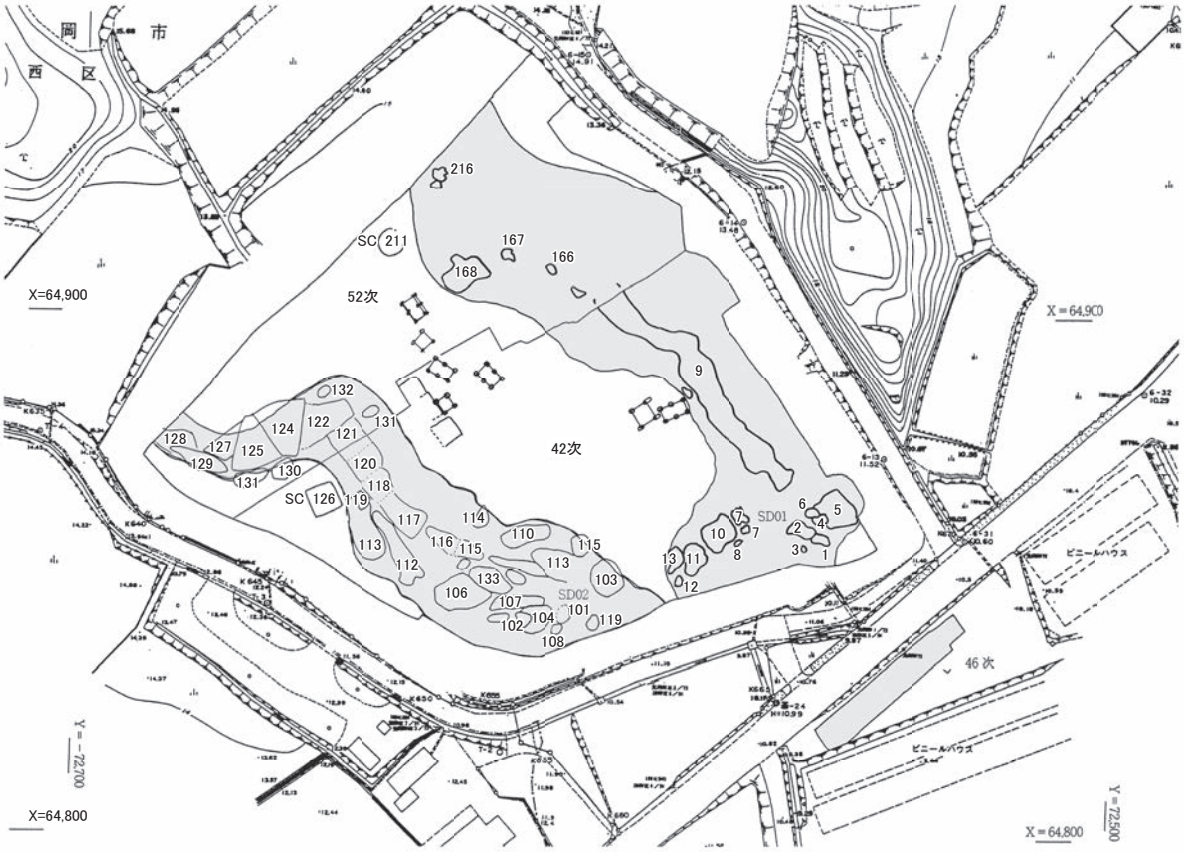
径 10 mをこす大型竪穴は糸島の他の遺跡や福岡平野でも検出例はあるが、住居跡の凹部を利用した集積事例は知られていないので、小葎例は、継続的な土器集積とみなすことができる。こうした土器が主要な構成遺物である場合、その集合を「土器集積遺構」とよぶ。

土器集積遺構は、報告では土器溜りや土器群などと分類表記されることが多い。集落を拡張するため、溝を埋める目的で投棄された土器が混入したとみられる事例は土器集積遺構と区別される。



第2図　小葎遺跡の土器集積遺構

糸島地域で土器集積遺構に該当する例としては先述した元岡・桑原遺跡群 42・52 次調査や小葎遺跡のほか三雲遺跡・番上地区、吉井水付（みんづき）遺跡、深江井牟田遺跡、石崎曲り田遺跡、潤地頭給（うるうじとうきゅう）遺跡、本田（ほんた）孝田（こうた）遺跡、上鑵子（じょうかんす）遺跡などがあげられる。これらの多くは中期後半から後期にかけての時期が主体となるが、潤地頭給遺跡では中期中葉の土器が含まれており集積の開始時期は一段階古く位置づけられる。



第3図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査区の主要遺構の配置 [1 ／ 1,000]

表1　元岡・桑原遺跡群 第42次Ⅰ区出土遺物の構成

MOT-42 Ⅰ区	図化		未図化	
	土器	石	土器	石
土器群1	3		11	
土器群2	3		113	
土器群3			1	
土器群4			3	
土器群5	65		164	
土器群6	2	1	11	
土器群7	2	1	11	
土器群8	2		4	
土器群9	163		1167	
土器群10	13	1	40	
土器群11	15	2	53	
土器群12	2		1	
土器群13	2		5	
土器群14	3			
土器群15	5	1	68	
C・D-1ポンプ用地	12		81	
B-1			71	
C-1	2		56	
D-1			54	
E-1			80	
コンテナ総数	474		2221	

表2　元岡・桑原遺跡群 第42次Ⅱ区出土遺物の構成

MOT-42 Ⅱ区	図化		未図化	
	土器	石	土器	石
土器群101	8		11	
土器群102	6	1	18	
土器群103	22	1	249	1
土器群104	10	1	128	2
土器群105	3		12	
土器群106	56	5	630	2
土器群107	4		5	
土器群108	3		1	
土器群109			5	
土器群110	9		36	
土器群111	1		1	
土器群112	36	1	143	2
土器群113	18	1	35	1
土器群114			1	
土器群115	6		72	
土器群116	3		28	
土器群117	8	1	33	1
土器群118	2		40	
土器群119			44	1
土器群120	9	4	117	1
土器群123	12	1	187	1
土器群133	4		15	
土器群134	4		8	
土器群135	5		17	1
土器群136	10	1	120	
土器群164	4		9	1
土器群165			1	
コンテナ総数	280		3909	

表3　元岡・桑原遺跡群 第52次Ⅰ区出土遺物の構成

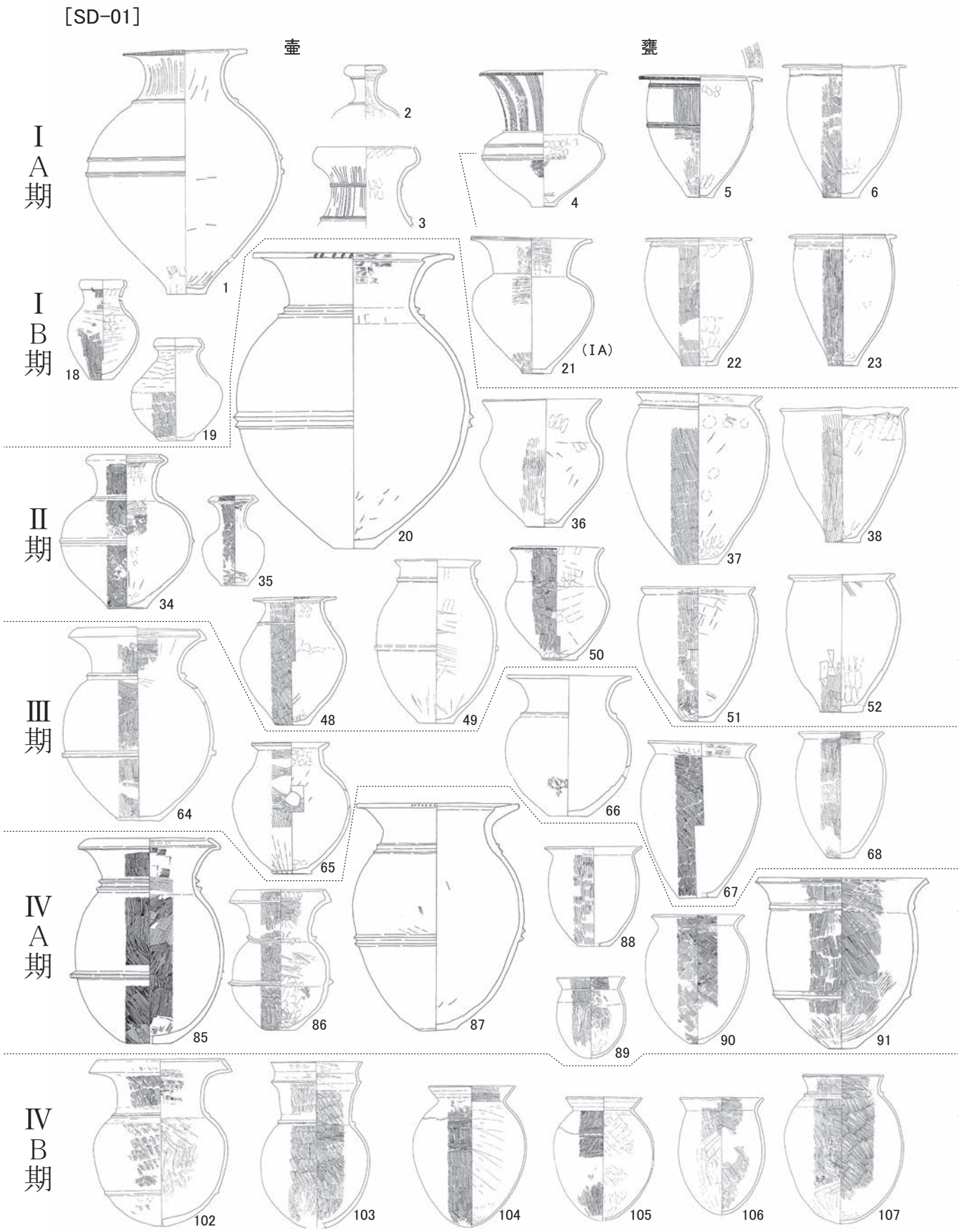
MOT-52 Ⅰ区	図化		未図化	
	土器	石	土器	石
土器群166	3		3	
土器群167			12	
土器群168	1	1	74	1
土器群169	4		1	
土器群193	5		7	
土器群195			1	
土器群196			1	
土器群197	6	1	10	
土器群198	1		1	
土器群206			5	
土器群208	3		5	1
土器群216	5	1	23	
コンテナ総数	37		683	

表4　元岡・桑原遺跡群 第52次Ⅱ区出土遺物の構成

MOT-52 Ⅱ区	図化		未図化	
	土器	石	土器	石
土器群121	8	1	144	1
土器群122	7	1	88	
土器群124	11	1	50	
土器群125	8	2	60	
土器群127	2		38	
土器群128	4		53	1
土器群129	9	1	44	
土器群130	4	1	134	
土器群131	2		34	
土器群132	1		2	
コンテナ総数	62		1503	

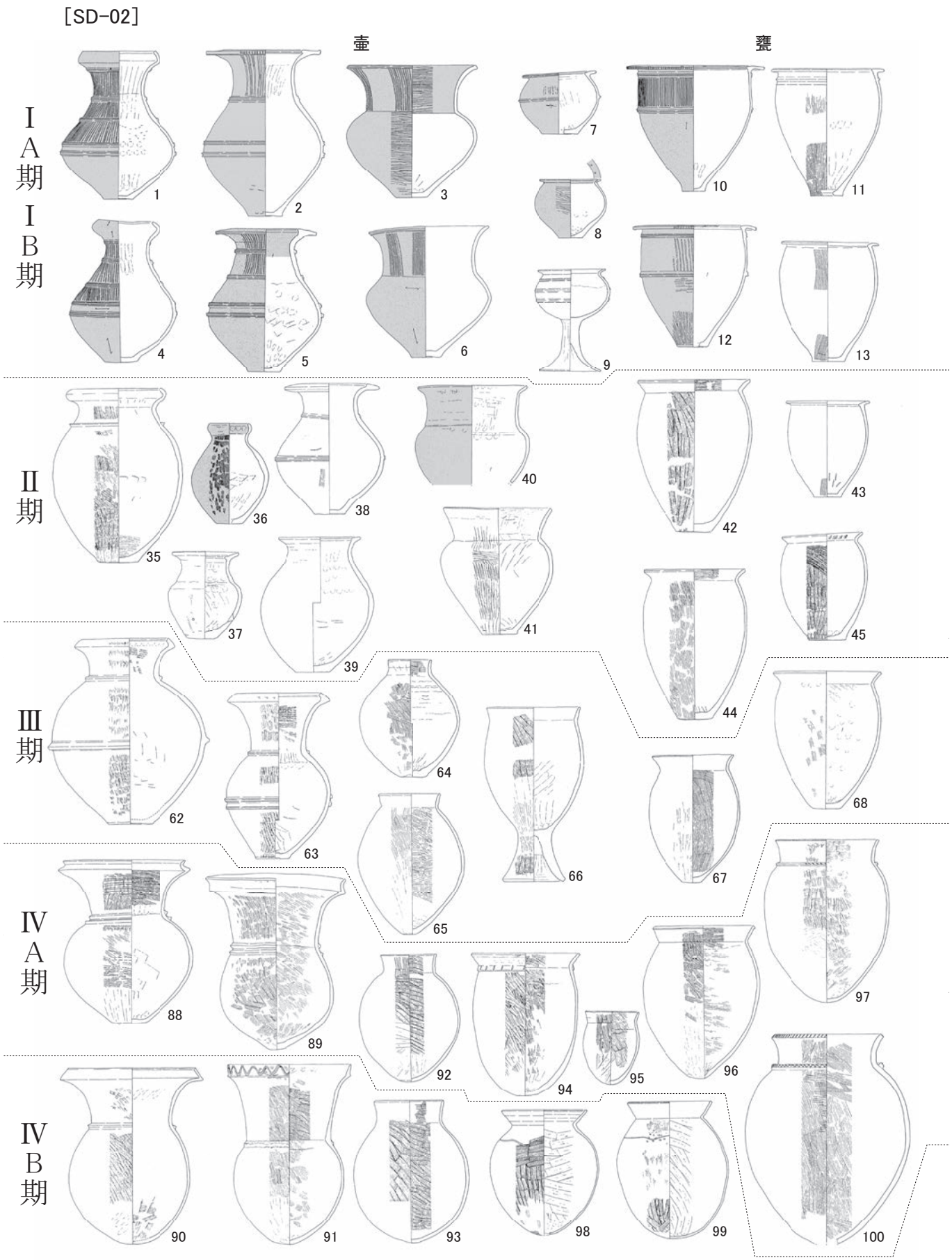
○第42次・52次調査出土コンテナ総数

コンテナ総数	図化	未図化
9169	853	8316



第4図　SD01 の土器相 元岡・桑原

遺跡群 第 42・52 次調査区 [1 ／ 12]



第5図　SD02 の土器相 元岡・桑原

遺跡群 第 42・52 次調査区 [1 ／ 12]

2）土器編年

東西の流路ごとにそれぞれの土器相を上段から二段が中期後葉（須玖Ⅱ式）古・新、つぎを後期前葉（高三潴式）と後期後葉（下大隈式）に大別し、下の二段が終末から古墳前期にかけての土器相（西新式）に分類した（表 5）。

SD01・SD02 ふたつの流路は近接しているが、出土土器の内容はそれぞれに特徴がみられる。器種では、格子タタキのある器種は SD01 下流の土器群 5 に集中する傾向があり、後期後葉から西新式段階の大型土器は土器群 5 に集中している。一方、弥生中期末の有窓土器は SD02 の土器群 106 に集中している。SD01 では方形の有窓土器が数例確認できたにとどまる。木器についてもこうした傾向はあてはまり、トリ形木製品や人面・陽物をかたどった祭祀に関連する木製品はすべて SD02 の流路内で出土している。

型式の属性として壺・甕・鉢に共通するのは底部の変化である。底部は平底（Ⅰ・Ⅱ期）から凸レンズ底（Ⅲ期）を経て丸底（Ⅳ期）に変化する。器高が 35 ㎝前後の中型器種は、Ⅰ期の底部は平底で立あがり部分が内側にナデつけにより内湾するカーブだったものがⅡ期になると立あがり部分のナデつけが弱くなるため立ちあがりが直線的に変化する。そしてⅢ期は「凸レンズ状」とよばれる不安定な平底が主流となる。Ⅳ期ではⅣA期の「尖底状」の丸底からⅣB期の「丸底」へ変化がみられる。Ⅳ期の型式変化は、土器の重心が胴部上半から下方に推移するのと同調したものと考えられる。

表5　元岡・桑原遺跡群における土器相

土器相	型式名	時期区分	底部の傾向
ⅠA	須玖Ⅱ式 古	中期後葉 古	平底
ⅠB	須玖Ⅱ式 新	中期後葉 新	平底
Ⅱ	高三潴式	後期前葉	平底>不安定な平底
Ⅲ	下大隈式	後期後葉	凸レンズ底>不安定な平底
ⅣA	西新式 古	終末～古墳初頭 古	尖底状の丸底（重心上）
ⅣB	西新式 新	終末～古墳初頭 新	丸底（重心下）

つぎに壷は、口縁部の属性によって複合口縁、鋤先口縁、広口、直口縁に分類できる。複合口縁は、中期後半の断面がスプーンのように丸味を帯びた袋状口縁壷から屈曲部が「く」字状に明瞭に型式変化し、Ⅳ期には屈曲部が直立するタイプが出現する。屈曲部が「く」字状を呈する壺がⅣB期まで見られるのは、糸島の地域色である。

壷、甕、鉢、高杯の口縁部に共通する属性として、いわゆるT字状口縁とされるタイプがある。Ⅰ期には総じて水平を呈する口縁部は、時期が降るにつれて内傾する傾向がみられる。広口壷は、T字状口縁をもつ広口壷が古段階に位置づけられる。Ⅰ期では頸部の屈曲が明瞭だったものが、時期が降るにつけて口縁と胴部の境目（頸部）は不明瞭となる。

直立する口縁をもつ直口壷は、福岡平野ではⅡ期に出現し、ⅣB期になると下膨れ気味で表面のタタキ目をナデ消さない器種となる。42・52 次調査では SD02 に多く見られる。

甕の口縁内側が突出しているのはT字状口縁の名残である。Ⅰ期に平坦だった鋤先口縁は時期が降るにつれて内傾し、Ⅱ・Ⅲ期には口縁部の断面が「く」字状を呈するタイプが増加する。Ⅳ期には「く」字状の屈曲部の稜線が不明瞭になる傾向はさらに顕著になる。

鉢は口縁部を有するものと有しない２種に大別され、Ⅲ期になると小型鉢の底部は壺や甕よりも丸底化がはやくすすむ傾向がある。

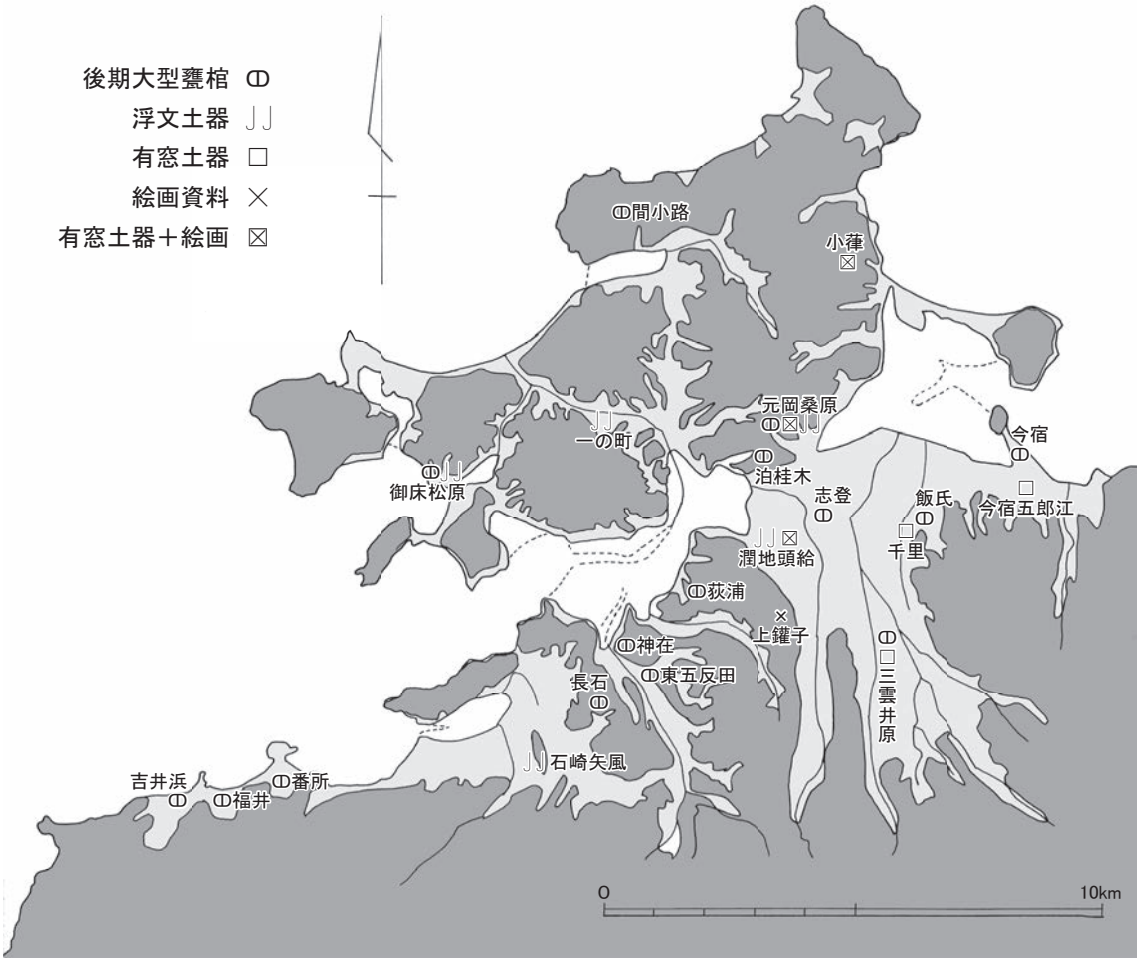
Ⅰ A 期の高杯の口縁部は、平坦で内側に突出するタイプだったものが、Ⅰ B 期になると口縁端部は下方に垂れ気味となる。Ⅱ期の高杯は短脚化し、器面調整は粗雑になる。Ⅲ期になると在来の器種に代わって、瀬戸内系とされる口縁部が直立した器種が出現する。高杯受部の屈曲は時期が降るにつれて下方に移行し、Ⅳ B 期には朝顔状を呈する器種が出現する。

蓋形土器は、Ⅰ期からⅡ期にかけて器高が徐々に高く型式変化する。Ⅱ期以降、器種構成から蓋がみられなくなる要因として、木製の蓋の盛行が想定される。

中期段階の支脚や器台の形状は筒状で、被熱の痕跡から器種を類推する場合が多い。器種の分化がはっきりするのはⅢ期で、丸底の甕の煮沸に有用な沓形器台とよばれる支脚や上部でくびれのある器台の出現にあらわれる。

Ⅰ期は丹塗研磨のある器種とハケ目をナデ消さない粗製の器種が共存するが、丹塗の精製土器の占める割合がたかい。Ⅱ期になると丹塗土器は壷や高杯の一部で見られる程度となり、Ⅲ期後半には、土器の赤彩は一部の精製器種だけにみられる。

外来系土器や特殊性のある器種は編年図の右端に配した。SD02 では半島系の粘土帯土器や中国地方の塩町式土器と須玖Ⅱ式土器の供伴が確認できたことも調査成果といえる。



第6図　糸島地域における特定資料の分布

3）大型土器の分布と編年

埋葬専用土器として九州北部を中心に盛行した甕棺墓は、弥生時代全体でみると成人用とされる大型甕棺 6,000 基のうち約８０％は中期が占める（福岡市博物館 1998）。後期前葉の三津式までの甕棺墓は全体の５％にまで減少し、分布は、福岡県西部の糸島から唐津、佐賀平野にかけての範囲、さらに長崎・熊本の一部に点在する程度となる。

後期後半の甕棺墓は、全体の２％以下である。後期前半にくらべ甕棺墓の減少傾向はさらに顕著となり、衰退期の様相を呈している。甕棺墓の減少にともない墓制は、木棺墓、石棺墓、土壙墓などへ転換したと推定される。

糸島地域では、神在（かみあり）式から福井式段階の大型土器の使用が目立つが、後期の厚葬墓が集中する三雲・井原遺跡群では、刳り抜き式の木棺墓に銅鏡や玉類が偏る傾向から墓制の主流は木棺墓に転換したことがうかがえる。

神在式の型式設定の基準となった神在 1 号甕棺では器壁のハケ目調整を比較的丁寧にナデ消し、突帯は頸部と胴部に限られている。広口壺は、胴部の重心が肩部にあるものから胴部中位へと移行する。本稿では神在式をⅢ期の下大隈式併行期、福井式を西新式併行期に位置づけた。

福井式は、突帯の多条化と器壁のハケ目調整をナデ消さない点が大きな特徴である。また福井式の突帯の断面は、タタキやナデが加えられるなどによって凹凸は顕著でなくなる。大型土器ではⅣ A 期までは重心が胴部上半に位置し小さな平底が遺存するが、Ⅳ B 期になると重心は胴部下半に位置し、丸底化がすすむ。山陰系の大型甕も集落や埋葬遺構で検出されるようになる。

元岡・桑原遺跡群では SD01 南東部の土器群 5 と土器群 8 で計 11 点の大型土器が出土した。これらのなかには全形が復元されたものもあるが、器壁に土器焼成時の破裂痕がみられる例もあることから破損したため未使用の状態で廃棄された個体が含まれている。６・７には胴部突帯に格子タタキがみられ、11 の突帯上部には、波状の調整が加えられている。これらの特徴に適合する資料はこれまで他の遺跡で確認できていない。

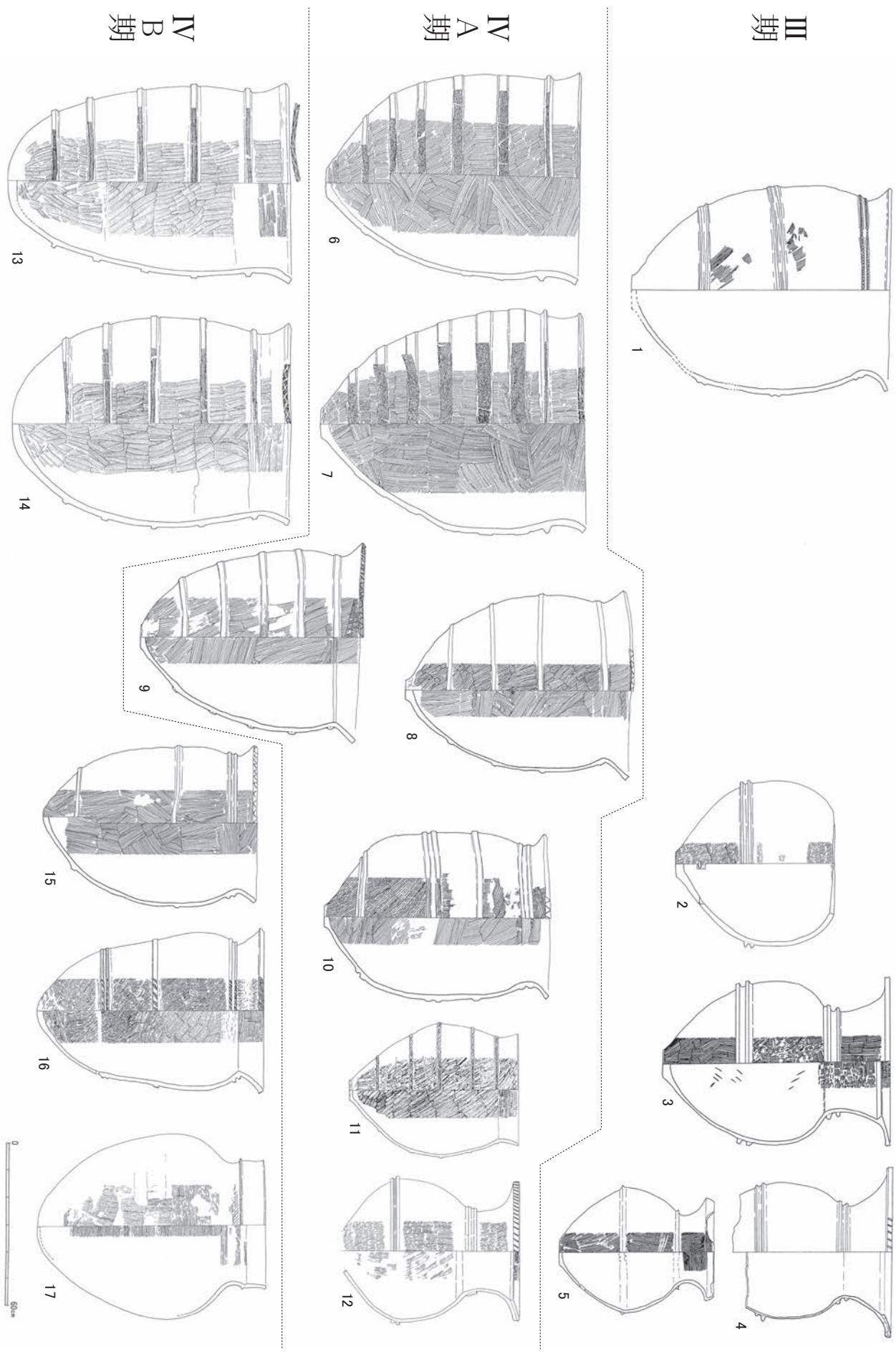
糸島地方の後期の甕棺の分布と型式については大神邦博氏の研究がある（大神 1968）。図 7 は大神氏の論考をもとに作成した分布図である。元岡・桑原遺跡群を中心に見るとき、神在、福井をはじめ後期の主要な甕棺墓が糸島半島東西の湾岸部や河川沿いに分布していることは、大型土器の生産と流通を考えるうえで注目される。

また後期の大型土器は出雲地域での出土が確認されている。西出雲の中野清水遺跡では、糸島地域に多くみられる大型の甕が確認された（島根県 2006）。東出雲では、島根半島北東の堀部 B 遺跡で出土した糸島地域に類例がある大型壺は、出土状況から埋葬に用いられた可能性がある（鹿島町 2002）。九州北部の大型土器と山陰系の大型甕は、日本海ルートの緊密な交流を示唆している。

表6　大型土器の変遷　第7図掲載資料一覧

	遺跡	集	図	番号
1	神在	大神1968	2	2
2	飯氏	390	31	2
3	吉武	514	114	101
4	井原堺	前原市82	54	—
5	井原堺	前原市82	54	—
6	元岡・桑原	1174	91	760
7	元岡・桑原	1174	91	762
8	福井	大神1968	4	7
9	福井	大神1968	3	5

	遺跡	集	図	番号
10	吉井浜	大神1968	2	4
11	元岡・桑原	1174	92	765
12	元岡・桑原	1276	70	672
13	元岡・桑原	1174	46	289
14	元岡・桑原	1174	46	290
15	東五反田	福岡市博物館 1998	弥生人のタイムカプセル	甕棺墓の変遷
16	元岡・桑原	1276	32	228
17	元岡・桑原	1174	55	373



第7図　糸島地域における大型土器の変遷 [1 ／ 20]

4）浮文のある土器

元岡・桑原遺跡群 42 次・52 次調査の弥生中期後半の土器には、口縁部や肩部に「亅」や)、「∩」などの浮文を施した例がある。

初期の施文は、糸島西部の石崎矢風の甕の上部に上下に分かれて弧を描く例や雀居（ささい）遺跡の大甕、比恵遺跡30次の小壺の線刻などから､弥生前期後半の隆起線文や沈線文にさかのぼる｡石崎矢風の甕は、埋葬用の壷の上甕として使われていた（糸島市 2010)。雀居遺跡の大甕は土器溜で出土した。胴部の煤から、集団への供食に用いられたとみられる（福岡市 2003)。

九州北部を中心に分布する前期末から中期前葉にかけての甕棺にみられる隆起線文や沈線で「亅」を組合せた図像は。中期中頃には甕棺や土器の図像は減少し、中細形銅戈の内の意匠に移行する（常松 2007)。弥生中期後半には壺形土器や中広形銅戈、銅鐸鋳型、琴板などへ施文の対象は拡がり、分布域は瀬戸内の平形銅剣や信濃の柳沢遺跡の青銅器埋納遺構まで東漸する（長野県 2013)。

糸島平野の上鑵子遺跡では弥生中期後半から後期初頭にかけての包含層から動物を象った木偶などとともに刺逆のある釣針を描いた琴板が出土した（前原市 1996)。琴板に刻まれたシカと「亅」状の線刻がセットになる構図は、天神ノ元遺跡（唐津市）の中期初頭の甕棺の線刻を初源とするもので、この組合せは、赤穂ノ浦遺跡（福岡市博多区）の横帯文銅鐸の鋳型にみられるシカの背部の線刻に通じる（力武 1982)。

上鑵子遺跡の琴板や赤穂ノ浦遺跡の鋳型に刻まれたシカと釣針に豊饒と辟邪が並ぶ構図から、祭祀の主題が農耕儀礼との深い結びつきが考えられる。上鑵子の釣針は本来観念的なモチーフであった「亅」が、中期末に釣針という具象的な画題として描かれたことを示しており、筆者は「亅」を組合せた一連の文様を「鉤」状文と表現した。

中期後半の丹塗土器にみられる浮文は、弥生前期に系譜をもつ隆起線文や沈線文が様式化した図像である。糸島高校所蔵の千里採集の丹塗壷は、九州北部に辟邪のイメージとして定着した「 鉤 」の表現が祭祀土器に採用されたことを示すもので、土器の装飾としては秀逸である。

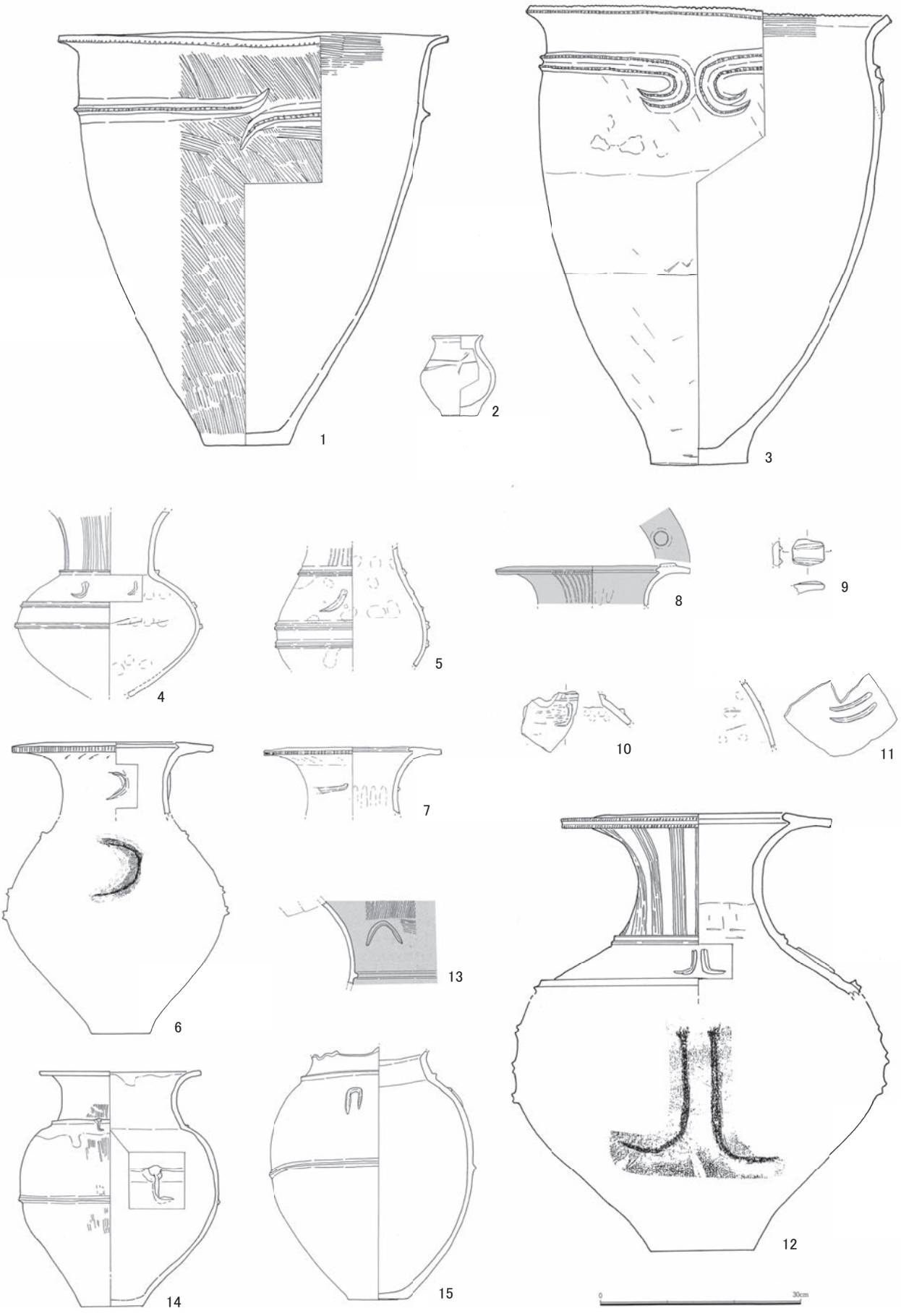
このほか中期後半の壺形土器には「鉤」状文と別系統の口縁部や胴部上半に「○」や「♡」形の浮文が登場する。筆者は漢代の絵画資料と円形やU字形の浮文の比較を通して、踆烏と蟾蜍に象徴される日月や星宿にかかわる思想の影響をうけて発生した可能性を説いた（常松 2016)。弥生土器の円形浮文と「∩」字形の浮文は､祭祀土坑で出土する事例が多くみられる。「♡」字もしくは「∩」形は、弥生時代の琴板の透かし孔にも通じる図像と推定される。

さらに中期中葉以降に出現する、那珂・比恵遺跡や上鑵子遺跡、御床松原遺跡で壷や甕の肩部に貼付された左下がりや右下がりの浮文「ノ」の多くは、「 鉤 」の表現に通じるもので、弥生人の思考の一端を示すものといえよう。

表7　浮文のある土器　第8図掲載資料一覧

	遺跡	集	図	番号
1	石崎矢風	糸島市3	19	10
2	比恵	289	53	486
3	雀居	747	265	23
4	元岡･桑原	1354	82	269
5	元岡･桑原	1276	92	957
6	御床松原	福岡市博物館研究紀要7	1997年	11図
7	元岡･桑原	1276	35	250
8	元岡･桑原	1276	29	197

	遺跡	集	図	番号
9	元岡･桑原	1276	92	952
10	元岡･桑原	1276	100	1051
11	元岡･桑原	1275	67	565
12	千里採集	福岡市博物館研究紀要7	1997年	3図
13	一の町	志摩町30	39	325
14	上鑵子	福岡市博物館研究紀要7	1997年	11図
15	今宿五郎江	737	28	191



第8図　浮文のある土器の変遷 [1 ／ 8]

5）有窓土器

有窓土器とは、胴部に穿孔のある土器で、楕円や方形の孔を窓にたとえた呼称である。九州北部の有窓土器は前期の壷で確認されている（柳田 2002）。糸島地域で時期がもっとも遡るのは千里遺跡の壷 1 だが、中期後葉の有窓土器との系譜的な関連は明らかでない。

42 次・52 次調査では須玖Ⅱ式新段階（Ⅰ B 期）の有窓土器がまとまって出土した。とくに SD 02 下流の土器群 106 と 103 に集中しており、SD01 では少ない。

SD02 流路西側の土器群 106 はすべて楕円の孔を有するタイプで、全形復元できる資料 12 個体，破片 11 点からなる。対岸の土器群 103 では楕円の孔 12 点に対し方形の孔 2 点の割合である。方形の孔を有する型式はⅡ期に降る資料である。

楕円の孔を有する有窓土器は、南西 2km の潤地頭給遺跡（前原市 2007）でも確認された。須玖Ⅱ式古段階（Ⅰ A 期）にさかのぼる有窓土器は SD01 の 3 や潤地頭給例の 2 が確認されている。潤地頭給出土の須玖Ⅰ式段階の胴部を打ち欠いた広口壷や鉢はⅠ A 期に先行する様相として注目される。

後期前葉（Ⅱ期）に有田遺跡で確認された有脚型式の有窓土器 12 は、後期後半（Ⅲ期）になると今津湾沿岸や内陸部の三雲遺跡など糸島地域東部に多く分布する。有窓土器は有脚型式が主流となっていく。この時期，瑞龍寺山山頂遺跡の漢鏡 4 期の鏡（破砕鏡）の東海への波及がイト経由と推定されることや，早良平野の吉武遺跡群で有窓土器 16 が東海系の山中式の高杯や近江系の鉢などと伴うという事象が確認されている。伊勢湾周辺出土の円窓付土器の搬入例はないが（永井 2013），有脚型式の有窓土器がⅢ期に多くみられるのは，列島内における地域間交流の反映と捉えられる。

6）絵画資料

糸島地域では、1990 年代後半から 10 年余りの間に弥生時代の絵画資料の発見が相次いだ。このなかには上鑵子遺跡の「顔面装飾のある人物」を描いた琴板や「釣り針とシカを描いた琴板」のように、先史時代の精神世界を理解するうえで重要な原始絵画が含まれている。ここでは元岡・桑原遺跡 42 次調査で確認した絵画土器について解説する。

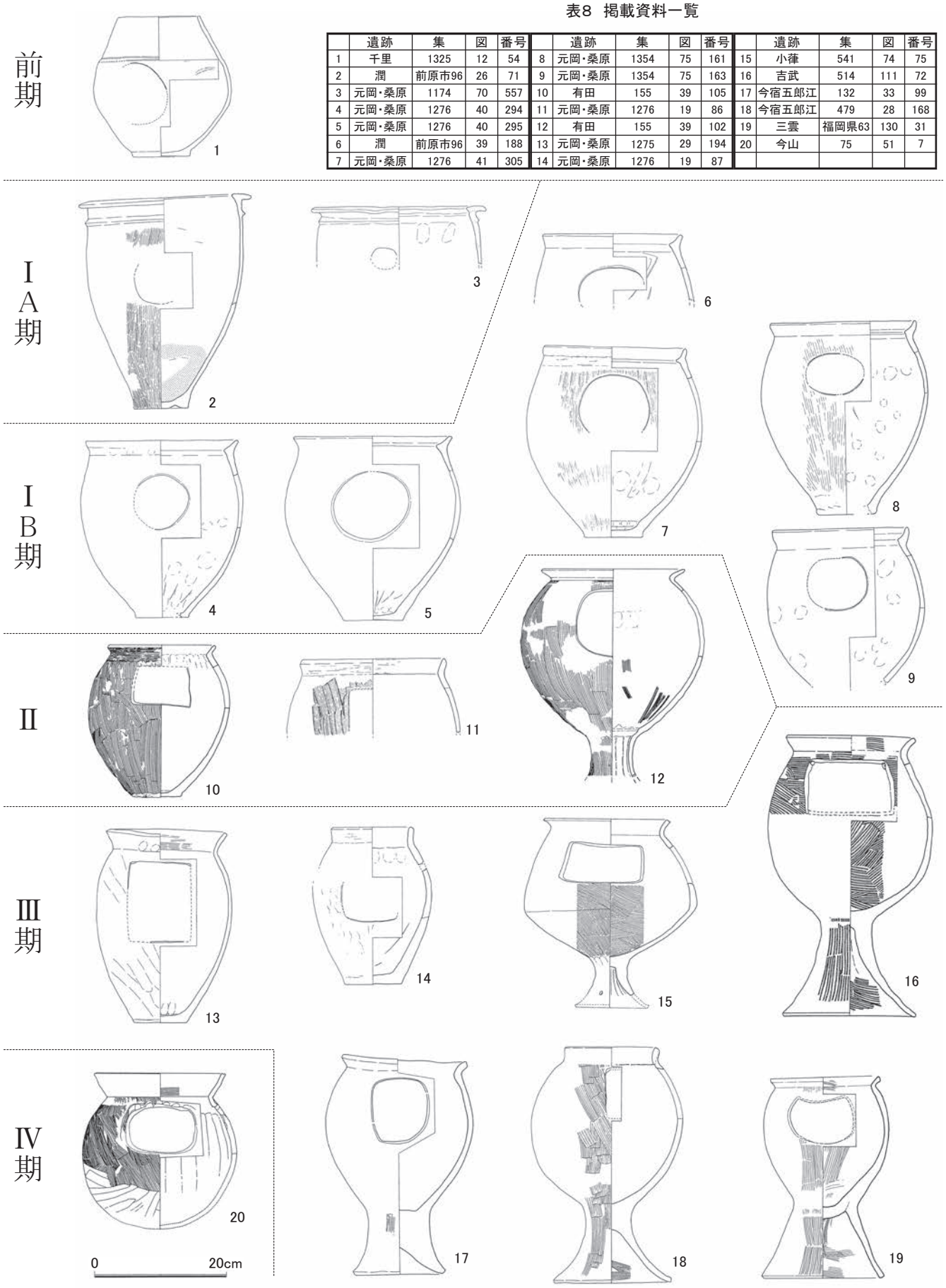
１はシカを描いた支脚の破片である。シカの頸から胴部を「L」字状に表現している。前後の脚を各 2 本線で描くのは原始絵画の約束事であり、前方あるいは斜め方向から見た脚を側面画に組み入れた多視点画といわれる表現である。V 字の頭部の表現にも正面観と側面観の融合がみられる。シカの左側には胴部から尾にかけての線刻があり、シカは連続して描かれていたことがわかる。

２は高床建物が描かれた支脚である。鋸歯状の線でうめられた長方形の区画は屋根、下から派生する条線は建物を支える柱で、高床建物を棟木の方向から描いている。屋根部に空間を持つ構造で、右側には妻側から見た梯子や柱の線刻がある。弥生人が描く高床建物の多くは､種籾の倉庫である。「種籾」は「稲魂」の暗喩であり、倉庫を描くことで「稲魂」を表現したのである。

抜け替わる角をもつシカは、イネの栽培周期と重ねることで「再生」や「復活」の意味が込められていたようだ。甕棺の絵画に必ずシカが描かれた理由はまさにここにある。そしてシカと高床建物を描くのにコメの煮炊きに欠かせない支脚が選ばれたのもそれなりの意味があったのである。

表8 掲載資料一覧

	遺跡	集	図	番号		遺跡	集	図	番号		遺跡	集	図	番号
1	千里	1325	12	54	8	元岡・桑原	1354	75	161	15	小倉	541	74	75
2	潤	前原市96	26	71	9	元岡・桑原	1354	75	163	16	吉武	514	111	72
3	元岡・桑原	1174	70	557	10	有田	155	39	105	17	今宿五郎江	132	33	99
4	元岡・桑原	1276	40	294	11	元岡・桑原	1276	19	86	18	今宿五郎江	479	28	168
5	元岡・桑原	1276	40	295	12	有田	155	39	102	19	三雲	福岡県63	130	31
6	潤	前原市96	39	188	13	元岡・桑原	1275	29	194	20	今山	75	51	7
7	元岡・桑原	1276	41	305	14	元岡・桑原	1276	19	87					



第9図 有窓土器の変遷 [1 ／ 8]

漢代の竜は、季節ごとにその姿を変えていたといわれている。昇竜と伏竜がそれで、『説文解字』には「竜は春分に天に昇り、秋分に淵に潜む」と記されている。３の壷には、鋸歯状の線に挟まれた曲線と、底部から派生して先端がとぐろを巻く線刻がある。この渦状の線刻を淵に潜む竜とすると、鋸歯状の線に挟まれた曲線は、少し頼りないが天に昇る竜に見立てられる。二種の竜は原の辻遺跡出土の壷にもはっきりと描き分けられているので（宮崎 2005）、昇竜と伏竜の情報は弥生後期には伝わっていたようである。

船橋遺跡（大阪府）の壷には、Ｓ字状の胴部に頭部と鰭を加えた勢いのある筆致で竜が描かれている。これにたいし、四神を鋳出した銅鏡は、九州北部に集中するが、絵画土器は鏡の青竜の図像とはかけはなれている。竜を描いた秀逸な資料は、備讃瀬戸から近畿地方に多い。

漢代に盛行した四神の中、専ら竜が画題とされたのは、雷雲や風雨を制する存在として水にかかわる儀礼に通底していたからだといわれる。春成秀爾氏は、弥生時代の竜が稲妻を図像化したアヤスギ文様や波状文と同一の土器に描かれる事例があることから、古代中国の雨乞い神事につくられた土竜を祖形とする説を示した（春成 2011）。糸島地域では本例のほか潤地頭給遺跡（前原市 2005）や曲り田遺跡で竜をあらわした土器絵画が確認されている。

４は、胴部に線刻のある壺である。下向きの線刻に３の昇竜の鰭と類似性を見出すなら竜を描いた可能性がある。

５は全面に線刻のある土器である。口縁にそって弧文を回らし、以下を鰭ともとれる線刻や曲線、×などの図像で填めている。本例は天地を逆にすると長野小西田遺跡（北九州市）の鐸形土製品を彷彿させる。

６は弧帯文のような線刻のある土器片である。壷の肩部の破片であろうか。７はＩ区で出土した。後期初めの壺の肩部に弧状の線刻がみられる。

表９は、九州北部の絵画の変遷を遺物の種類ごとに配したものである。

弥生中期初頭には、シカと鉤状文を表現した甕棺が糸島の東の早良と西の唐津地域で出土している。中期中頃から後期にかけて、銅戈の付け根にシカ・人面・鉤状文・×・)(などさまざまな図像が鋳出された。中期中頃から後葉にかけての青銅器は、福岡・早良平野では埋納遺構が認められるのにたいして、糸島と以西での埋納例は明らかでない。

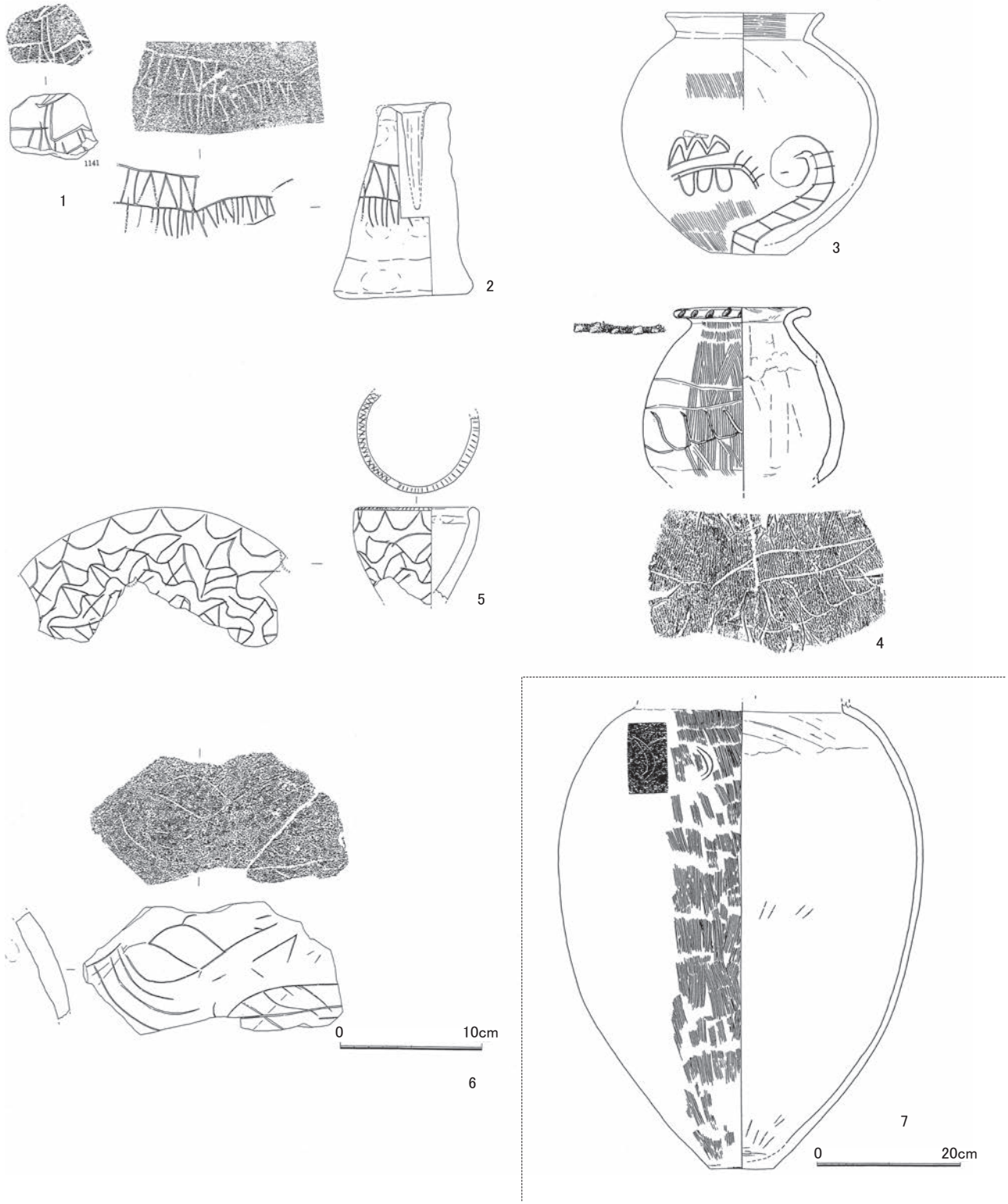
一方糸島地域では、木製品に表現した図像や立体物が多くみられる。これは武器形青銅器の図像の希少性とは対照的で、原始絵画の表現媒体に地域的な偏差があったことがうかがえる。

表9 九州北部の絵画資料の構成

	甕棺	土器	銅戈（鋳型）	銅鐸鋳型（鐸形土製品）	木板・琴板など
前期後半	シカ・鉤状文 人物	鉤状文			
中期初頭	シカ・鉤状文 高床建物・人物 トリ・十字文	鉤状文			シカなど
中期中頃			シカ・鉤状文・条線		
中期後半	戈・楯・×	シカ・トリ 鉤状文	シカ・鉤状文・×・トリ・人面・)(・重弧文・条線・重圏文・・三叉状文・(戈)	シカ・鉤状文・トリ・人面・重弧文・(戈・戈をもつ人物)	シカ・鉤状文（釣針）・トリ・高床建物・竪穴住居？
後期		シカ・トリ・鉤状文 戈・三叉状文・竜	重弧文・条線・(鉤状文・戈・釧?)	(戈・楯・戈をもつ人物)	シカ・人面・)(

表10 絵画土器　第10 図掲載資料一覧

	遺跡	集	図	番号
1	元岡・桑原	1279	107	1141
2	元岡・桑原	1279	107	1142
3	元岡・桑原	1279	102・107	1079
4	元岡・桑原	1279	33	231
5	元岡・桑原	1279	107	1143
6	元岡・桑原	1279	108	1149
7	元岡・桑原	1275	79	667



第10図　絵画土器 [1 ／ 4・1 ／ 8]

7）ヒョウタン形土器

丹塗研磨土器は、弥生中期の須玖式土器の主流で、井戸や集団墓にともなう祭祀に用いられたと考えられてきた。壱岐で初見された宝珠形の頂部をもつ丹塗土器は、のちに壱岐のカラカミ遺跡や福岡平野の比恵・那珂遺跡群でも類例が確認されたが、出土例は少なく、全体の形状は不明のままだった。

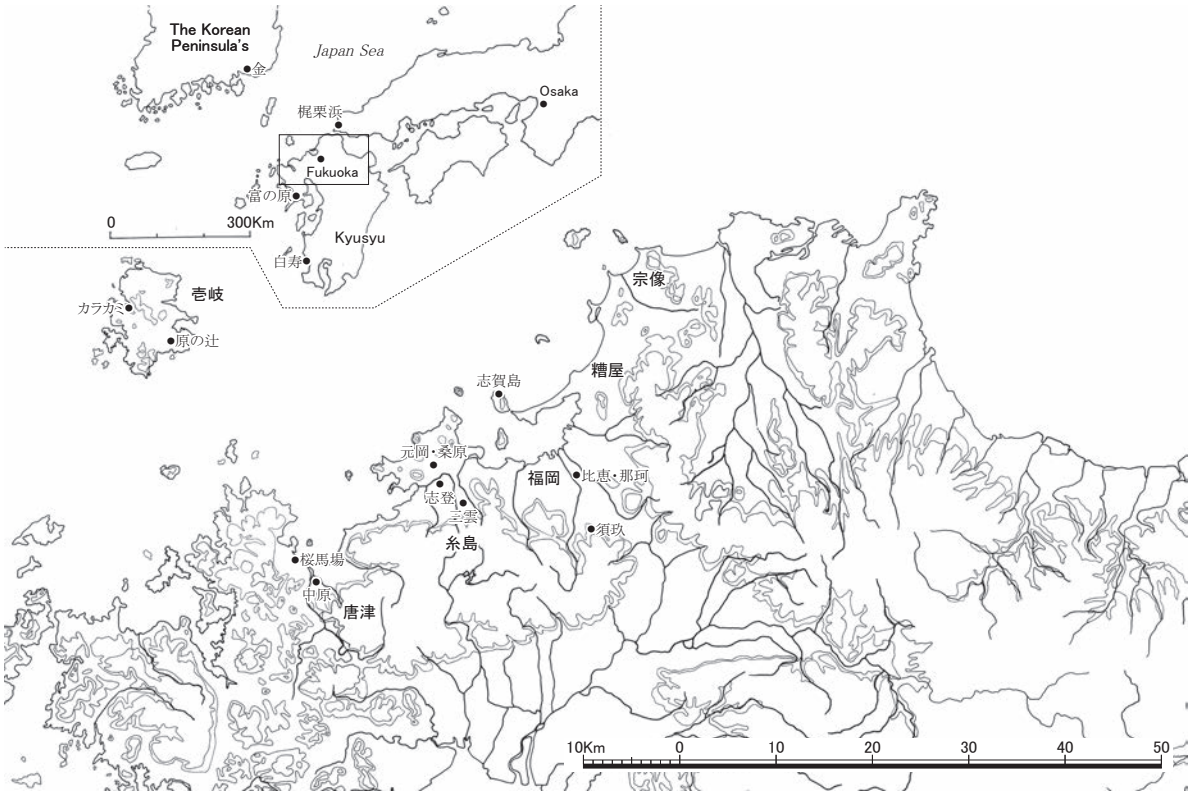
2007 年、42 次調査で出土した宝珠形の頂部は、全形の復元に成功し、中くびれのある丸底土器であることがはじめて明らかとなった。頂部の放射状の線刻とくびれは瓢箪の特徴と共通することから、筆者は「ヒョウタン形土器」の呼称を用いた（常松 2013）。

ヒョウタン形土器は、壱岐、福岡平野、糸島だけで確認されているが、中期やそれ以前の弥生土器に系譜を見出せないため、対外交渉による流入を想定した。そして形態的に共通する属性から蒜頭壷とよばれる容器を候補にあげた。

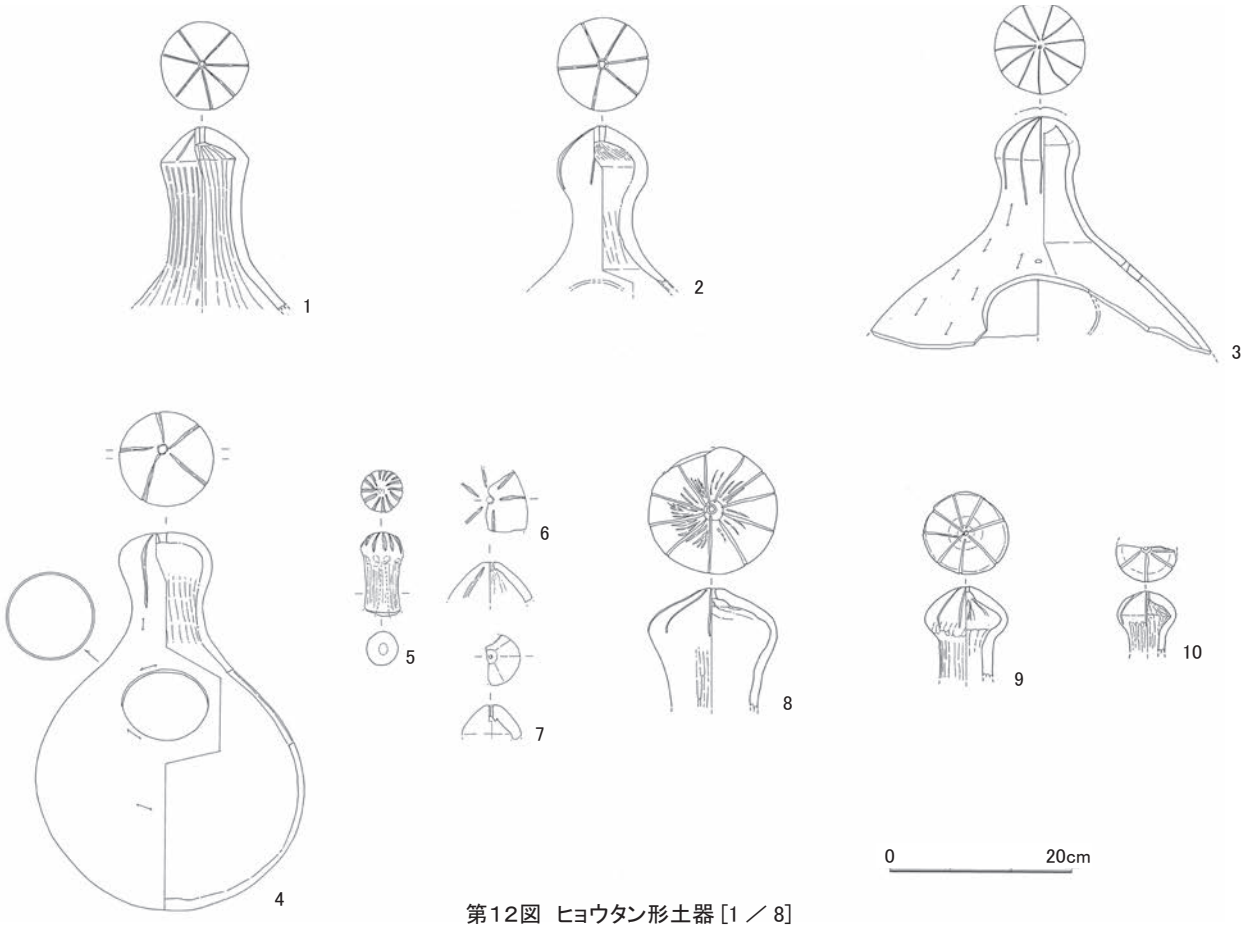
蒜頭壷は、秦の統一とともに長江流域など各地に広まった水や酒をいれる容器である。銅製と陶製があり、頸部が細くすぼまる長頸と中くびれタイプ、そして偏壷の３系統がある。「蒜頭」とは、大蒜（ニンニク）を逆さにしたような口縁部の形状から名づけられたもので、古くからの名称ではない。多くは、明器として墓に供えられた。

長頸の蒜頭壷は、口縁部の放射状の筋と高台がめぐる底部を除けば、須玖式の袋状口縁壷に法量や形状に類似点がある。中くびれタイプの蒜頭壷は、口縁部の放射状の筋や法量にヒョウタン形土器と共通の特徴がみられる。

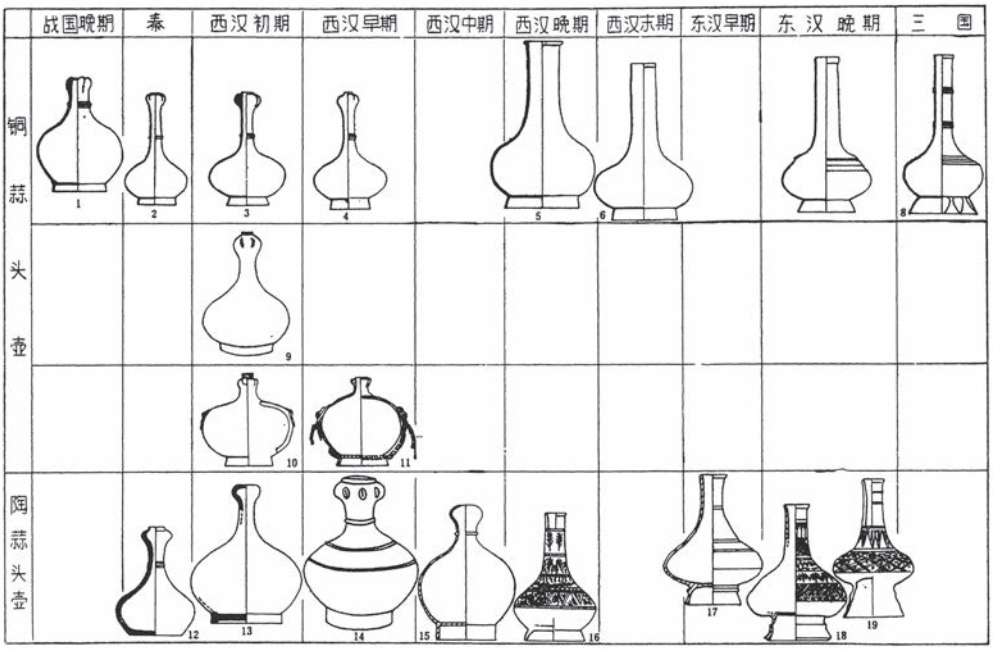
李陳奇氏の集成・編年によれば、蒜頭壷は戦国時代末に出現し、秦から前漢にかけて盛行した（図13）。扁球形の口縁部は、前漢末には筒状に変化する傾向がみられる（李 1985）。雲夢大汶頭 1 号



第11図 ヒョウタン形土器の分布



第12図　ヒョウタン形土器［1 ／ 8］



第13図　蒜頭壺の型式分類（李 1985）

1：陝西鳳翔高庄 M1　2：湖北雲夢睡虎地 M34　3：湖北雲夢大坟頭 M1　4：湖北宜昌前坪 M25
5：広西合浦漢墓　6：江蘇盱眙 M4　7：広東広州 M5028　8：江西南昌 M4　9：四川越西華陽漢墓
10：湖北雲夢大坟頭 M1　11：陝西漢中漢墓　12：湖北雲夢睡虎地 M33　13：陝西朝邑 M202
14：山東臨沂銀雀山 M4　15：四川成都石羊漢墓　16：広東広州 M3026　17：湖南郴州奎馬岭
18：広東広州 M5041　19：広東広州 M5052

漢墓出土の木牘に 、供献・副葬された器物の名称が記されている。「二斗鈚一、一斗斜一」の記載が蒜頭扁壷と長頸の蒜頭壷の容量に一致することから、鈚は錍で、扁壷をさす酒器を意味するとしている。斜も鉶という酒器に通じるものとされる。

このほか山東省蒼山県出土の東漢早期の銅製の提梁壷に、口縁部が袋状を呈する例（張 1998）がある。共伴とされる銅壷には元和四（78）年黄陽君の銘があることから、袋状口縁の蒜頭壷の下限は後漢に降る可能性がある。

表11　ヒョウタン形土器の出土一覧

遺 跡 名	頂部の穿孔	備　考	文　献
元岡・桑原遺跡４２次	○	丹塗、有窓で丸底、全形がわかる。	常松 2007・福岡市教 1174 集
元岡・桑原遺跡４２次	○	丹塗、小片	福岡市教委 1354 集
志登尾北遺跡	○	丹塗、小片	糸島市 2018
カラカミ遺跡	×	丹塗、有窓で遺存度が良好	宮崎・正林 1985・常松 2007
原の辻遺跡	○	丹塗、長崎県文化財保護課保管	鴇田 1944・常松 2007
原の辻遺跡	○	丹塗・有窓	長崎県教委 124 集・常松 2007
那珂遺跡群 23 次	○	丹塗、最も大型	福岡市教委 290 集
那珂遺跡群 50 次	○	丹塗	福岡市教委 518 集
比恵遺跡群 53 次	○	丹塗、最も小型	福岡市教委 451 集

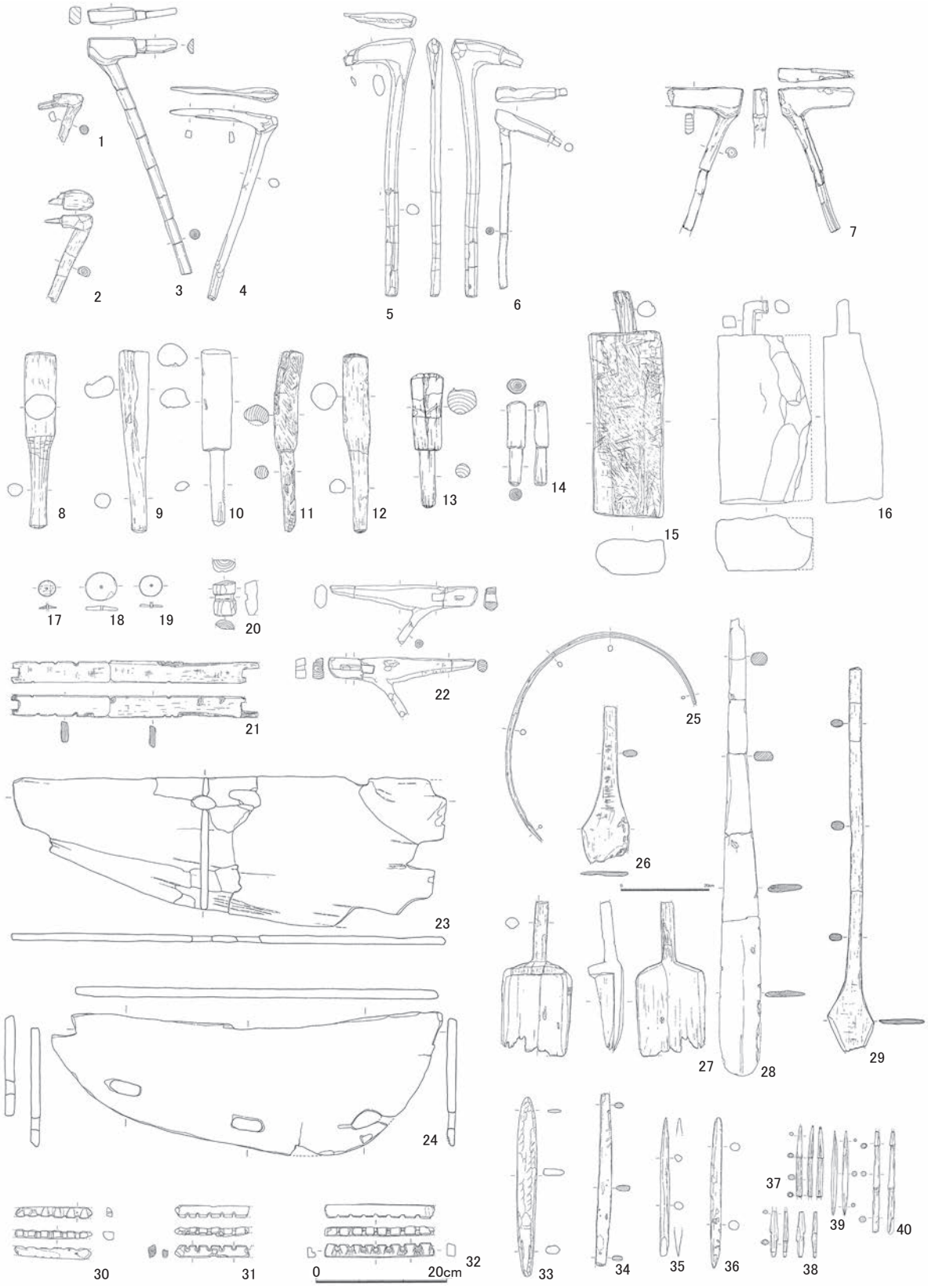
前 1 世紀代における長頸の袋状口縁壷とヒョウタン形土器、筒形器台の出現は、北部九州の祭祀儀礼が神仙思想の隆盛という外的要因の影響下で成立したことを示唆している。三雲遺跡や元岡・桑原遺跡、比恵・那珂遺跡などで検出された辰砂の粒子は、水銀朱の需要が恒常化したことのあらわれであろう（市毛 1998）。唐古・鍵遺跡の高楼を描いた絵画土器や褐鉄鉱の殻のなかの粘土を仙薬とする神仙思想のあらわれと評価する説のように（辰巳 2005）、外的要因を想定しなければ説明困難な事象は、弥生中期の近畿でも確認されるようになった。

2. 木製品

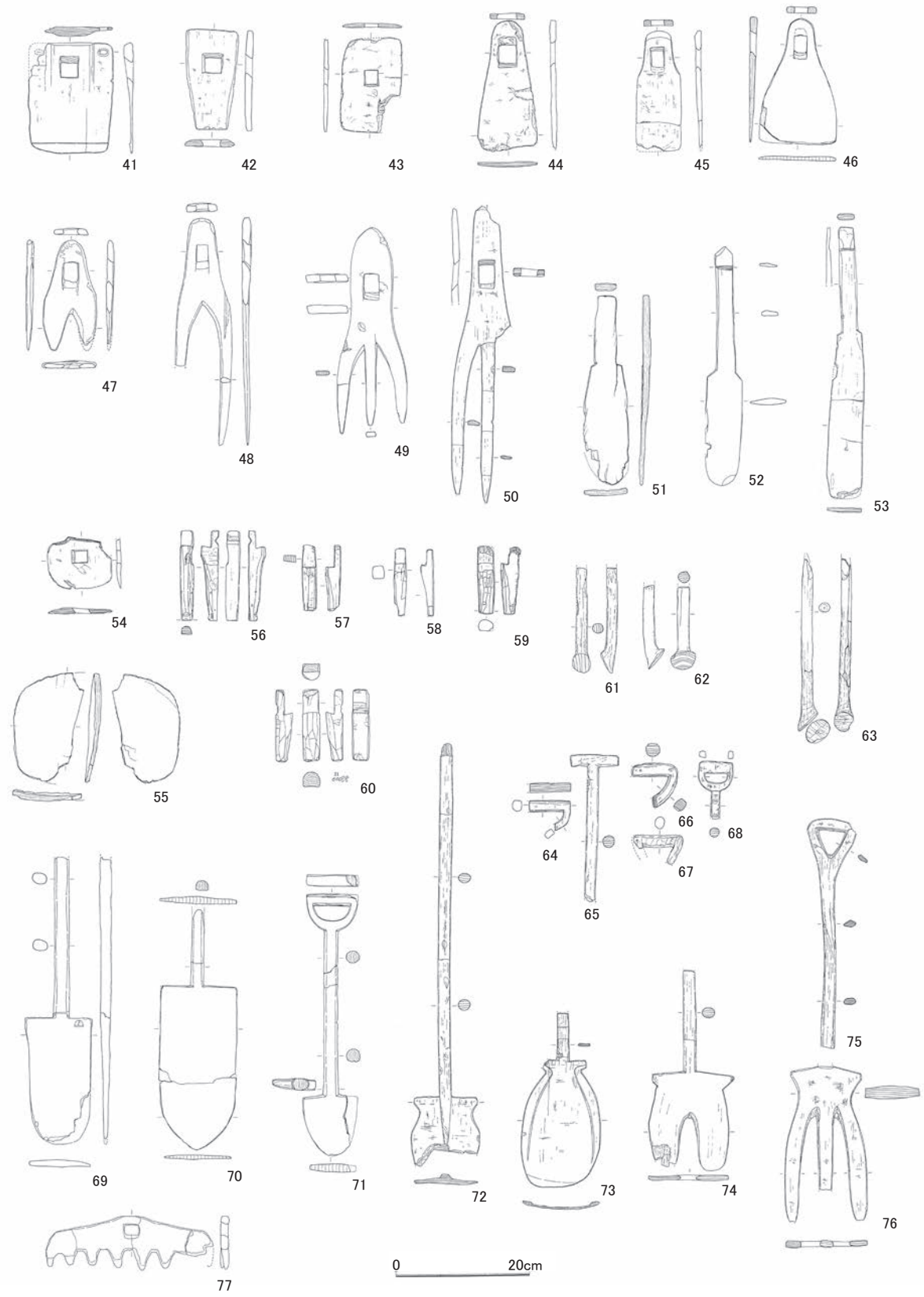
自然流路の湧水は木製品の遺存状況にも功を奏したようで、工具、農具、建築部材、祭祀遺物が検出された。SD01・02 で出土した木製品について種別に分類した。挿図の内容は次のとおりである。

第 14 図（1）・・・・・　斧柄・槌・工作台・紡錘車・織具・運搬具・船材・漁労具・発火具
第 15 図（2）・・・・・　鍬・鋤・サラエ
第 16 図（3）・・・・・　机・椅子・臼・杵
第 17 図（4）・・・・・　杓子・蓋・儀器・簪・盾・短甲
第 18 図（5）・・・・・　容器
第 19 図（6）・・・・・　建築部材
第 20 図（7）・・・・・　祭祀遺物

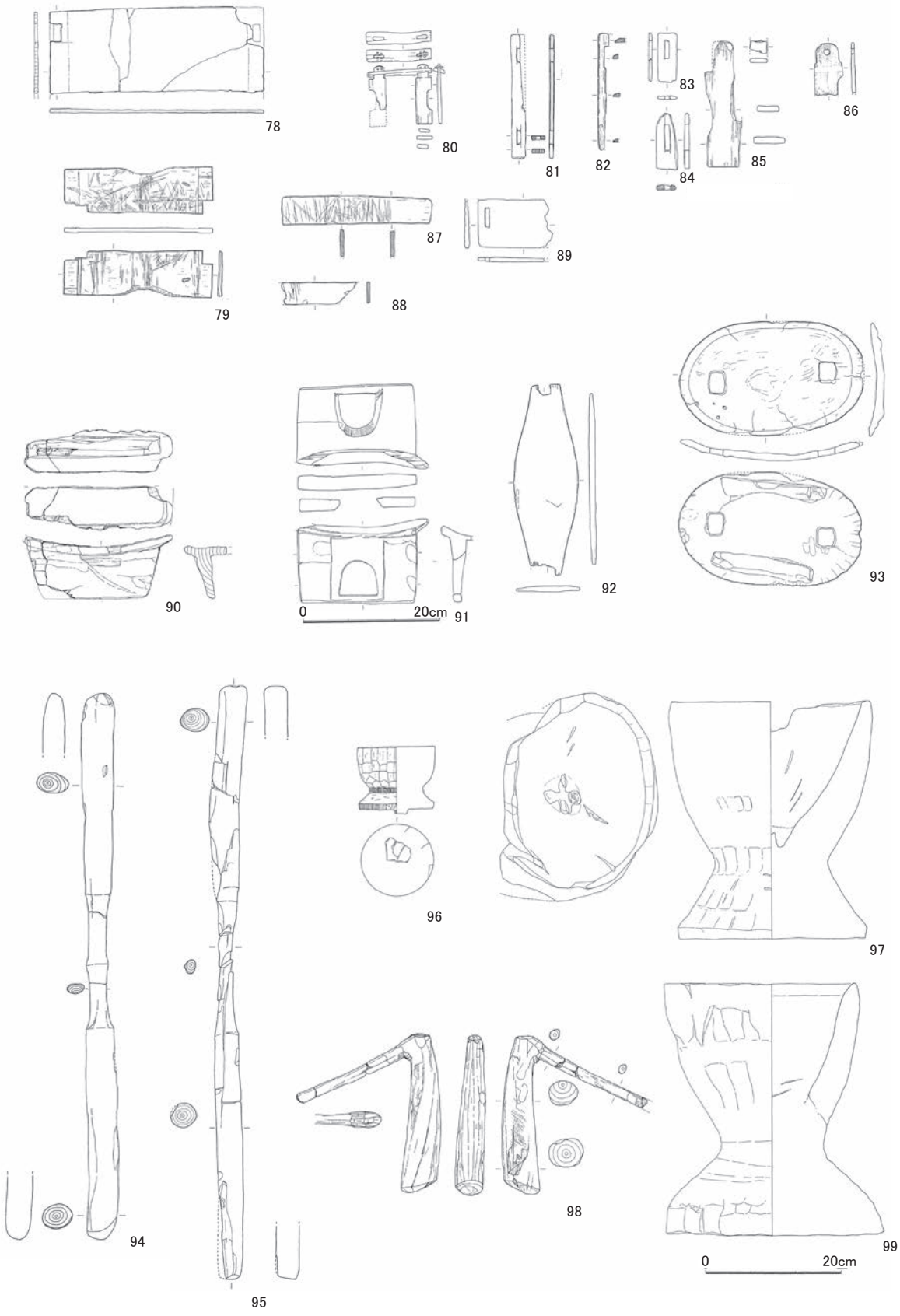
第 14 図（1） 斧柄 1 には、鉄斧を装着するための縦横の段を有するものがある。2 は、石斧用の可能性がある。横槌には把手と槌身の境が明瞭な段をもつものと境目が明らかでない二種がある。工作台は SD02 で 2 点が出土。17 ～ 19 は木製の紡錘車。20 は編み錘で、中央の溝に縄を結わえた。21 は編台の目盛板の部材と推定される。長側面の浅い凹部は縄を固定するための切り込みである。



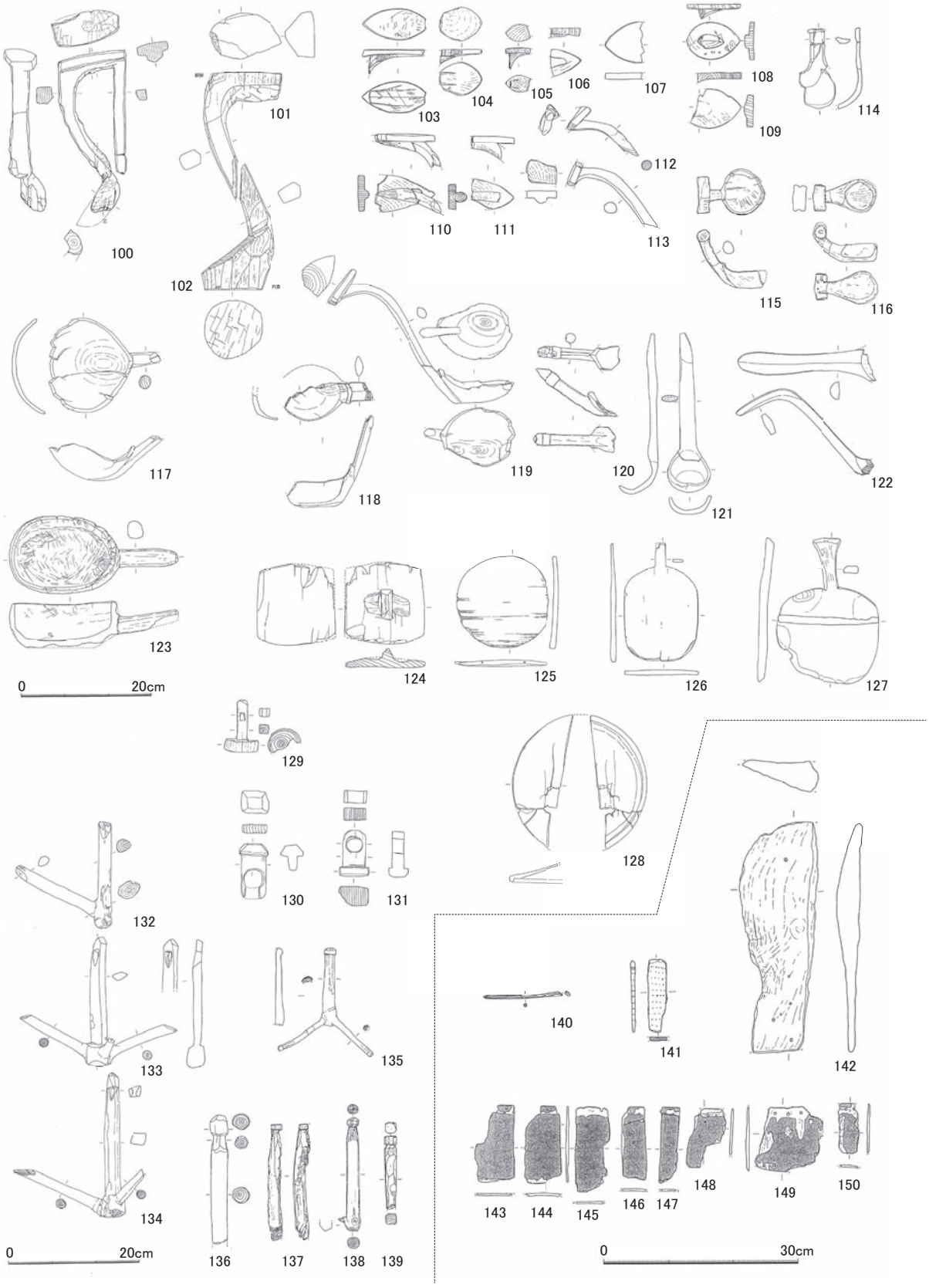
第14図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（1）[1 ／ 12]



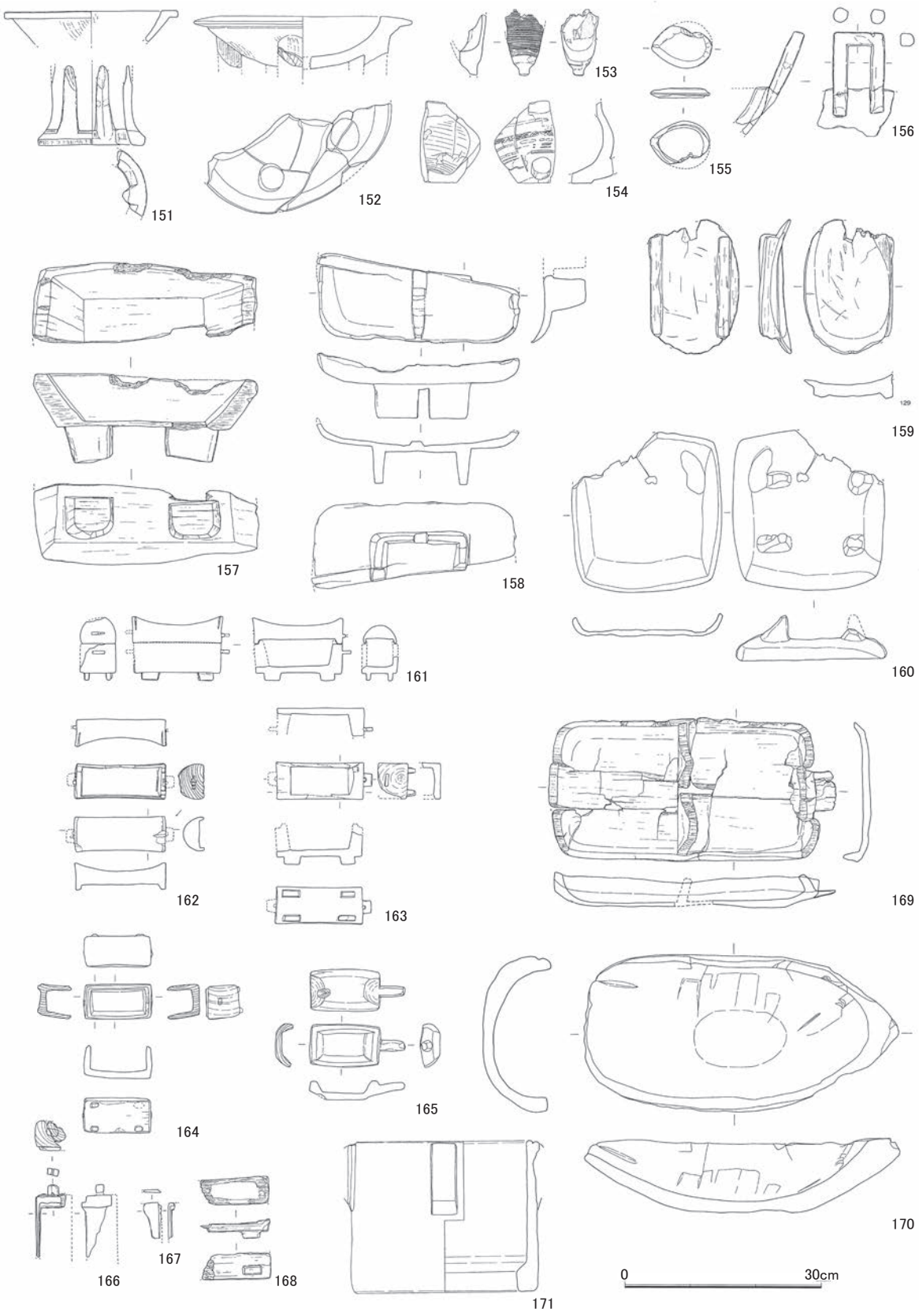
第15図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（2）[1 ／ 12]



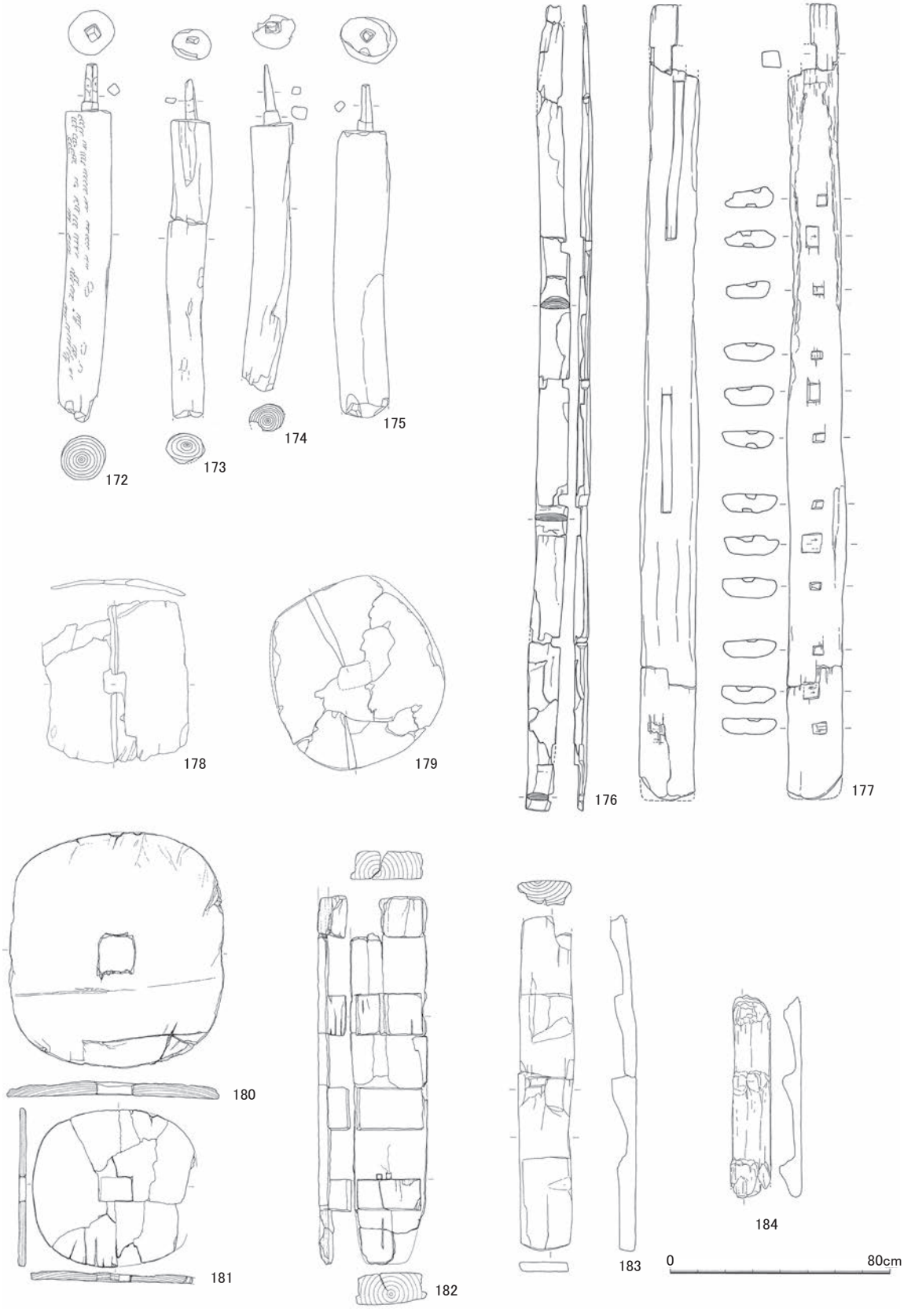
第16図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（3）[1 ／ 12]



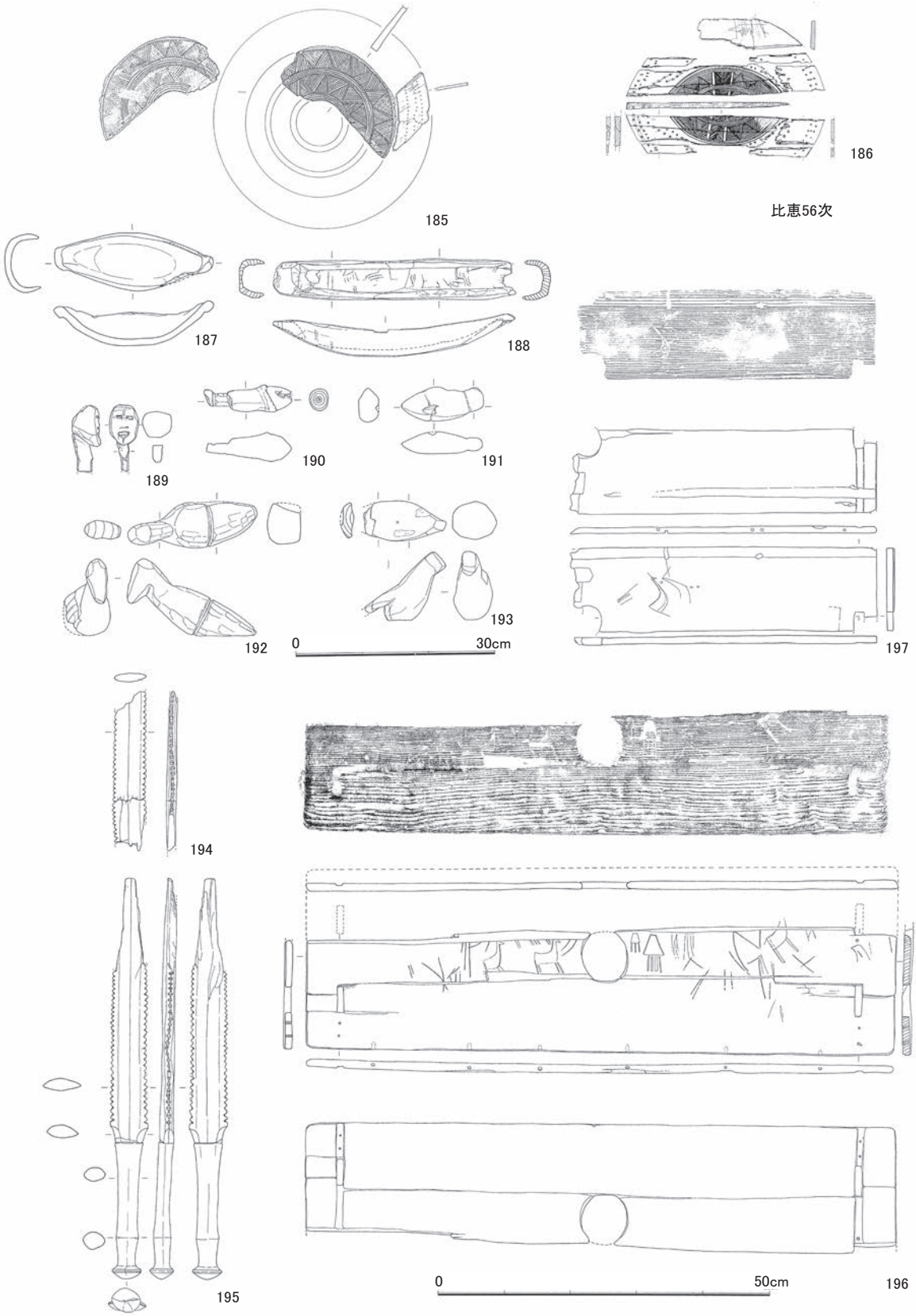
第17図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（4）[1／12・1／8]



第18図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（5）[1 ／ 8]



第19図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（6）[1 ／ 20]



第20図　元岡・桑原遺跡群 第 42・52 次調査出土木製品（7）[1 ／ 8]

表10　SD01・SD02の木製品 第14～20図掲載資料一覧

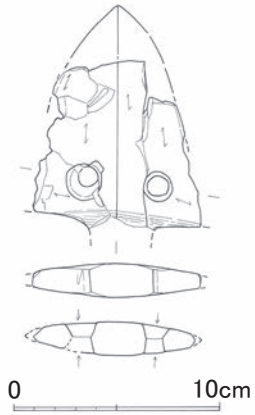
	集	図	番号
1	1246	15	12
2	1246	15	5
3	1354	101	62
4	1354	101	63
5	1246	15	6
6	1246	15	10
7	1275	111	1
8	1354	106	91
9	1246	27	104
10	1246	27	105
11	1246	27	106
12	1246	27	107
13	1275	111	9
14	1246	27	111
15	1354	105	84
16	1246	35	141
17	1246	44	221
18	1246	44	222
19	1246	44	223
20	1246	44	226
21	1246	47	255
22	1246	15	1
23	1246	56	297
24	1246	56	298
25	1246	57	299
26	1246	57	300
27	1246	57	302
28	1246	57	301
29	1246	56	296
30	1246	44	230
31	1246	44	231
32	1354	99	38
33	1354	103	76
34	1246	60	340
35	1246	59	312
36	1354	103	71
37	1275	117	40
38	1275	117	43
39	1275	117	41
40	1275	117	42
41	1246	20	46
42	1246	22	68
43	1246	22	64
44	1246	16	13
45	1246	16	17
46	1275	112	12
47	1246	17	23
48	1246	17	24
49	1354	107	98
50	1354	108	109
51	1275	113	25
52	1354	110	131
53	1246	21	59
54	1246	23	74
55	1275	113	26
56	1246	23	71
57	1246	23	72
58	1246	23	73
59	1354	110	128
60	1275	113	21

	集	図	番号
61	1246	23	81
62	1246	23	82
63	1275	113	23
64	1246	24	84
65	1246	24	85
66	1246	24	86
67	1246	24	88
68	1246	24	87
69	1246	24	89
70	1275	114	27
71	1275	115	31
72	1246	24	83
73	1246	26	103
74	1354	106	88
75	1354	109	111
76	1354	109	117
77	1246	20	54
78	1275	118	45
79	1246	45	242
80	1246	45	245
81	1354	99	32
82	1246	45	246
83	1246	45	248
84	1246	45	250
85	1246	45	249
86	1354	99	31
87	1246	45	243
88	1246	45	244
89	1246	45	247
90	1275	118	46
91	1354	101	61
92	1246	47	259
93	1246	46	253
94	1246	28	112
95	1354	102	69
96	1246	37	165
97	1246	29	118
98	1275	116	35
99	1246	30	119
100	1275	120	56
101	1354	111	1
102	1354	111	1
103	1246	43	205
104	1246	43	206
105	1246	43	207
106	1246	43	208
107	1246	43	209
108	1354	100	43
109	1354	100	44
110	1246	43	210
111	1246	43	211
112	1246	43	212
113	1246	43	213
114	1354	100	45
115	1246	42	195
116	1276	120	78
117	1246	41	194
118	1246	40	187
119	1354	100	55
120	1246	42	196

	集	図	番号
121	1354	100	52
122	1246	42	200
123	1354	111	6
124	1246	38	166
125	1246	39	180
126	1246	38	171
127	1246	38	170
128	1246	39	181
129	1246	44	236
130	1246	44	240
131	1246	44	241
132	1354	102	64
133	1354	102	65
134	1354	102	66
135	1246	58	310
136	1246	58	304
137	1246	58	305
138	1246	58	306
139	1246	58	307
140	1246	44	225
141	1246	44	232
142	1246	44	235
143	1246	36	152-A
144	1246	36	152-B
145	1246	36	152-C
146	1246	36	152-D
147	1246	36	152-E
148	1246	36	153-A
149	1246	36	154-A
150	1246	36	154-B
151	1246	37	159・160
152	1246	36	145
153	1246	36	146
154	1246	36	147
155	1354	97	3
156	1246	33	133
157	1246	31	125
158	1246	32	128
159	1246	32	129
160	1246	31	127
161	1246	68	379・380
162	1246	68	379
163	1246	68	380
164	1246	68	381
165	1246	68	382
166	1354	98	16
167	1354	98	18
168	1354	98	19
169	1246	32	130
170	1246	34	140
171	1275	122	63
172	1246	53	280
173	1246	53	281
174	1246	53	282
175	1246	53	283
176	1246	50	266
177	1246	50	267
178	1246	48	261
179	1246	49	263
180	1275	124	75

	集	図	番号
181	1275	124	76
182	1275	124	77
183	1246	54	288
184	1246	54	287
185	1246	66	371
186	520	28	01001・01012～01015
187	1354	97	7
188	1246	33	134
189	1246	67	374
190	1246	67	375
191	1246	67	376
192	1246	67	377
193	1246	67	378
194	1354	97	2-2
195	1354	97	2-1
196	1246	62	347
197	1354	96	1

土器 42次土器群103



石戈 52次SD01(B10区)

22 は背負子の部材とされる。23 は上端は直線、下端は半月形の幅約 1 mの準構造船の仕切り板である。23 も準構造船の仕切り板で、弧に沿って 3 箇所に枘孔がある。25 は漁労具のたもあみの枠で、枝を輪状に曲げて加工した。26・29 は、船の推進具の一部で、柄から緩やかに両側に開き、最大幅の地点から内傾する。27 は、船内の水（アカ）をかき出すための掬い具、アカトリである。30 ～ 32 は火錐臼。33・34 は、断面が扁平なのでアワビオコシと想定される。35 ～ 40 は硬質の材を使用した刺突具で、３本単位で緊縛して大型魚の漁に用いたヤスと推定される。

第 15 図（2）起耕具である鍬には平鍬、二又鍬、三又鍬、多又鍬などがある。方形に近い形状で肩部に穿孔のある平鍬 41 は糸島地方の遺跡で多く出土することから「糸島型」とされるタイプである。木柄には泥除を装着するための鍬類組合せ具の部材 56 ～ 60 がみられる。54･55 は泥除とみられる。鋤には平鋤、二又鋤、三又鋤がある。鋤の柄にはＴ字形とＵ字形の二種がある。74・76 のように上部に括れをもつものや、73 のように縁部を肥厚させたものなどがある。金属製の鋤先を装着したタイプはみられない。77 は整地具のサラエ。

第 16 図（3）78 ～ 89 は、組合せ式案の部材で、天板には多数の刃物痕跡がみられる。80 は小型の組合せ式案で、天板を欠くが脚と桟が固定された状態で出土した。組合せ式案は、福岡平野の雀居遺跡で原形を保った状態で出土して以来、各地で部材が追認された（下村 2001）。糸島地方では今宿五郎江遺跡、壱岐では原の辻遺跡で出土している。90・91 は椅子の側面、93 は椅子の座面と推定される。竪杵は 112・113 のように持ち手の中央部が幅広くなるものは、前期の持ち手中央の算盤玉状が退化した形態である。98 は横杵。臼 97 は､安定感のあるタイプで受部の 6 割強を遺存する。99 の台部はさらに大きい。96 は小型臼の未成品。

第 17 図（4）杓子は把手の位置によって縦柄、斜目柄、横柄に大別される。また杓子の受部には丸底と平底の２種がある。100 ～ 102 は未成品。Ｔ字形の把手を有する 115 は、52 次調査でよく似た型式の土製品 116 が出土している。杓子の柄には先端部が箆状やＴ字形、木葉形などがあり、木葉形にはふたつの正円が中心で交叉した形状がある。124 ～ 128 は、蓋形木製品。129 ～ 131 は建築部材であろう。132 ～ 139 は木の枝分かれ部を加工したもので、儀器の蓋（きぬがさ）に分類される。140 は枝を加工した簪（かんざし）。141 は楯の破片、モミ材を使用。142 は短甲の破片か。143 ～ 150 は報告（1246 集）で漆塗り木製容器としたが、短甲との指摘をうけた。

第 18 図（5）151・152 は精巧な刳物の高杯である。153 は、黒漆の上から朱漆を丁寧に塗りあげた容器で韓国・釜山古村に類例がある（東亜細亜文化財研究院 2008）。円錐状に広がる脚台をもつ。154 はジョッキ型の漆塗容器、155 は黒漆塗の蓋である。162･163 は、繊細な造りの刳物箱で、身と印籠蓋がセットになる。南方遺跡（岡山市）の例から 161 のように復元される。164 は、蓋と合わさる部分が遺存している。165 は槽のミニチュア。156 は把手を長方形に削り出した容器。157 ～ 160 は有脚の容器、169・170 は槽、171 はスギの割材を用いた樽。

第 19 図（6）172 ～ 175 は柱材で、上部の削り出した箇所はねずみ返しなどを固定する受部である。182 ～ 184 は高床建物などの梯子の部材。178 ～ 181 の方形や円形の有孔円盤はねずみ返し。177･178 は建築部材とした。176 は側面にコ字の切り込み、177 は一方に細長い溝が切られている。

第 20 図（7）有文木製品 185 は、内区の両面には鋸歯文が向きを違える斜線によって複合鋸歯文を構成している。鮮やかな赤彩が施されている。類例は、比恵遺跡群 56 次調査の木製品 186。比恵例は、鋸歯文の間に有軸羽状の文様帯がある。186 は外周の鋸歯文を平行線でうめるのに対し、元岡例は、鋸歯文を直交する線でうめている。円形の透かし孔から翳（さしば）とする意見がある。特殊遺物 2 点が福岡平野の拠点集落と糸島地域で出土したことは注目される。187・188 は船形木製品。189 は

人頭を象った木製品で、顎が反った人面に長菱形の板状の胴部を削り出す。北部九州で人面を表現した例は、人面付銅戈や上鑵子遺跡の戦士を描いた線刻板（岡部 1997）、原の辻遺跡の人面石などがあるが、本例の顔面には装飾表現はない。今宿五郎江遺跡ではコケシ状の木製品が出土した（1221集）。弥生の木偶は、滋賀県内に多い（濱 1993）。190 は、人面を表現した木製品と近接して出土した。双方に大小の男性器を表現したようにみえる。３点のトリ形木製品が調査区西の台地側から流れ込んだ状態で出土した。192 の羽をとじたトリは、胴部に溝が回る。193 は、尾部付近に角張った切り込みがある。トリ形木製品は、詫田西分遺跡（佐賀県）や上鑵子遺跡（糸島市）で出土しているが、福岡市内では初例である。トリ形木製品が近接して出土したことは、祭祀の道具立てとして注目される。剣形木製品 195 は、漆黒色の硬質の材を用いたもので、刃部に鋸歯状の加工を施している。全長は少なくとも 90 ㎝を超す。196 は、下端面に並ぶ木釘の痕跡から琴の側板とみられる。側板の枘孔の位置から短辺は 30cm 程度とみられる。内側には小口板を固定する溝が彫られており、木釘の痕跡がみられる。側板下端の小口部の木釘痕跡から、「箱作り」と推定される。中央の円形透かし孔をはさんで左側に「シカ」、右側に「台形の屋根をもつ２棟の建物」、右に「２本の脚をもつ動物」が線刻と板を剥離する技法で表現されている。197 は、196 と類似する造りで、トリの線刻画と不整形な半円形の共鳴孔がみられる。絵画のある琴や木板は西日本や北陸で出土しているが（ニューサイエンス社（編）1998）、同一遺跡の部材に「シカ、建物、トリ」を描いた琴板は本例のみである。

3. 金属器

調査区出土の金属製品については、1246 集で総括的な紹介を行い、1354 集で中細形銅戈の鋳型についての所見を加えた。中細形銅戈の鋳型の仕様順位は D 面→ B 面を B 面→ D 面と訂正する。

表 11　元岡・桑原遺跡群 42・52 次調査出土の金属器類

種　類	概　要	報告書	挿図
漢代の貨幣	9 点。五銖銭１と貨泉 8。	1246	9
漢式鏡の破片	1 点。平縁で復元径 15 ㎝、内行花文鏡か。	1246	11
小形仿製鏡	4 点。重圏文系 2 点、内行花文鏡系 2 点。	1246	11
青銅製鞘尻金具	1 点。片刃刀子の鞘尻金具。舶載品。	1246	10
辰砂の粒子	1 点。長軸 1.5 ㎝、極めて大粒。	1246	10
青銅製鋤先	2 点。刃部から袋部にかけての破片。	1246	11
鉄製品	3 点。鋳造鉄斧・袋状鉄斧。	1246	14
小銅鐸	2 点。無文・無鰭、SDＯ１で近接して出土。	1246	12
銅鏃	5 点。すべて有茎式、十字の鏑をもつタイプ１点。	1246	13
銅戈鋳型	1 点。中細形銅戈の両面范。使用痕跡あり。	1354	139

4. まとめ

土器集積を構成する 9,169 箱の土器も、およそ３世紀という時間で平準化すると壮観なイメージは和らいでしまう。報告書に掲載した土器は、調査時に重要と判断した資料や遺存度の高い資料から抽出したものである。未図化の資料については器種、底部、口縁部の分類はできるかぎり行ったが、掲載された土器の構成比率との整合性は、本来、属性分類をもとに組立てられた土器の型式組列との比較によって検証されなければならない。

2018 年までに刊行された 4 冊の報告書に掲載された壷、甕、鉢、高杯などから 1,110 点を抽出して土器相の分布を示したのが右上のグラフである。Ⅰ B 期とⅡ期が全体の半数を占め、それ以外のⅠ A 期・Ⅲ期・Ⅳ A 期・Ⅳ B 期は、それぞれ 10％前後の比率で拮抗している。

交差年代法によって前1世紀後半～1世紀頃とされるⅠB期～Ⅱ期には『漢書』地理志の記述や『後漢書』倭伝の金印「漢委奴国王」下賜、倭国王による朝貢などの外交イベントの記事がある。ⅠB期を前1世紀内の土器相とし、Ⅱ期を1世紀代全般と捉えた結果、Ⅱ期の土器の急激な減少は、環境変化などによる集落の衰退として結論付けられたのではないか。だがこの頃、大型化がすすむ青銅祭器の生産は継続され、Ⅱ期を衰退期とするのには違和感がある。たとえばⅠB期の下限を1世紀中頃まで時期幅をもたせれば、評価は大きく異なる。このように各土器相の時期幅については改めて検討が必要である。

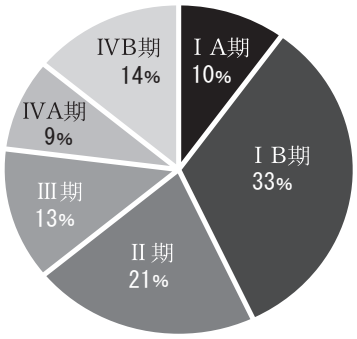


表12　土器相の分布

註・文献

F胡　昌鈺 1983「成都石羊西漢木槨墓」『考古與文物』16－2期、陝西人民出版社
H濱　修 1993「弥生時代の木偶と祭祀」『紀要』第6号、〔財〕滋賀県文化財保護協会
　春成秀爾 2011「弥生時代の龍」『祭りと呪術の考古学』塙書房
I市毛　勲 1998「倭人と辰砂」『新版　朱の考古学』雄山閣
L李　陳奇 1985「蒜頭壺考略」『文物』1985－4期、文物出版社
M宮崎貴夫 2005『原の辻遺跡』『日本の遺跡　32』同成社
　森本幹彦 2017「伊都国と奴国の銅鐸」『福岡市博物館研究紀要』第26号、福岡市博物館
N永井宏幸 2013「円窓付土器からみた地域間交流」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
　ニューサイエンス社（編）1998「特集　弥生時代の絵画木板」『考古学ジャーナル』No.432
O岡部裕俊 1997「福岡県前原市上鑵子遺跡出土の人物線刻板について」『考古学ジャーナル』No.416、ニューサイエンス社
　大阪府立弥生文化博物館 2008「倭人がみた龍」
　大神邦博 1968「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」『古代学研究』53古代学研究会
　岡村秀典 2002「考古学からみた漢と倭」『日本の時代史1　倭国誕生』吉川弘文館
R力武卓治 1982「席田遺跡群赤穂ノ浦遺跡出土の銅鐸鋳型について」『考古学ジャーナル』No.210、ニューサイエンス社
S下村　智 2001「安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」と木製机」『アジア歴史文化研究所報』第18号
T武末純一・平尾和久 2016「〈速報〉三雲・井原遺跡番上地区出土の石硯」『古文化談叢』第76集、九州古文化研究会
　辰巳和弘 2005「辟邪の鏡 形のこころ 図像考古学の試み2」『考古学ジャーナル』NO.532、ニューサイエンス社
　鴇田忠正 1944「長崎県壹岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」『日本文化史研究』星野書店
　常松幹雄 1997「弥生時代の甕棺に描かれた絵画と記号」『福岡市博物館研究紀要』第7号、福岡市博物館
　常松幹雄 2005「九州」『考古資料大観2 弥生・古墳時代 土器Ⅱ』小学館
　常松幹雄 2006「シカと鉤の廻廊」『原始絵画の研究 論考編』六一書房
　常松幹雄 2009「弥生時代の木製祭祀具―福岡県元岡・桑原遺跡群の調査から―」『考古学ジャーナル』No.591、ニューサイエンス社
　常松幹雄 2013「弥生土器の東漸」『弥生時代政治社会構造論』雄山閣
　常松幹雄 2016「踝烏と蟾蜍 ―弥生文化にみられる日と月―」『第3回九州弥生研究ネットワーク交流会』
Y山口譲治 2015「Ⅰ区出土木製品 元岡・桑原遺跡群24」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』1275集
　柳田康雄 2002「九州弥生文化の研究」学生社
　柳田康雄 2019「北部九州における長方形板石硯の出現と終焉」『平成30年度 纒向学研究センター定例研究集会（第7回）』
Z張　生 1998「中国青銅器全集12 秦漢」文物出版社

[資料出土遺跡に関する報告]
〔財〕東亜細亜文化財研究院・大韓住宅公社釜山地域本部 2008「釜山古村宅地開発事業地内文化遺跡発掘調査現場説明会（3次）」『〔財〕東亜細亜文化財研究院発掘調査現場説明会』第143集
島根県教育委員会 2006「中野清水遺跡（3）白枝本郷遺跡」『一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』7、国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
鹿島町立歴史民俗資料館 2002『縄文と弥生の美と祈り』
岡山市教育委員会 2005『南方（済生会）遺跡　―木器編―』
福岡県教育委員会 1980「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』第58集
長崎県教育委員会 1995「原の辻遺跡」『福岡市文化財調査報告書』第124集
長崎県教育委員会 2005「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書』第30集
勝本町教育委員会 1985「カラカミ遺跡」『勝本町文化財調査報告書』第3集
福岡市教育委員会 1992「那珂遺跡4」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第290集
福岡市教育委員会 1996「比恵遺跡群20」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第451集
福岡市教育委員会 1997「那珂18」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第518集
福岡市教育委員会 1997「小葎遺跡（大原B遺跡第1次）」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第541集
福岡市教育委員会 2003「雀居8」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第747集
福岡市教育委員会 2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集
福岡市教育委員会 2014「元岡・桑原遺跡群23」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1246集
福岡市教育委員会 2015「元岡・桑原遺跡群24」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1275集
福岡市教育委員会 2015「元岡・桑原遺跡群25」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1276集
福岡市教育委員会 2015「千里2次」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1325集
福岡市教育委員会 2017「元岡・桑原遺跡群28」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1328集
福岡市教育委員会 2018「元岡・桑原遺跡群29」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1354集
糸島市教育委員会 2010「三雲・井原遺跡Ⅵ」『糸島市文化財調査報告書』第3集
糸島市教育委員会 2010「石崎 矢風遺跡」『糸島市文化財調査報告書』第3集
糸島市教育委員会 2013「三雲・井原遺跡Ⅷ」『糸島市文化財調査報告書』第10集
二丈町教育委員会 1994「深江 井牟田遺跡」『二丈町文化財調査報告書』第8集
二丈町教育委員会 2001「石崎 曲り田遺跡」『二丈町文化財調査報告書』第27集
二丈町教育委員会 2008「吉井水付遺跡」『二丈町文化財調査報告書』第42集
志摩町教育委員会 2009「一の町遺跡発掘調査概要」『志摩町文化財調査報告書』第30集
前原市教育委員会 1993「本田孝田遺跡・東ヌス町遺跡」『前原市文化財調査報告書』第49集
前原市教育委員会 1996「上鑵子遺跡」
前原市教育委員会 2003「三雲・井原遺跡Ⅲ」『前原市文化財調査報告書』第82集
前原市教育委員会 2005「潤地頭給遺跡」『前原市文化財調査報告書』第89集
前原市教育委員会 2005「三雲・井原遺跡」『前原市文化財調査報告書』第92集
前原市教育委員会 2006「潤地頭給遺跡Ⅰ」『前原市文化財調査報告書』第93集
前原市教育委員会 2006「潤地頭給遺跡Ⅰ」『前原市文化財調査報告書』第93集
前原市教育委員会 2007「潤地頭給遺跡Ⅱ」『前原市文化財調査報告書』第96集

表13　SD01・SD02の土器相 第4・5図掲載資料一覧

SD01

	集	図	番号
1	1174	34	177
2	1174	120	1042
3	1275	21	111
4	1174	116	990
5	1275	17	89
6	1174	110	932
7	1275	55	431
8	1174	49	309
9	1174	117	998
10	1275	42	306
11	1174	118	1010
12	1174	118	1009
13	1275	55	433
14	1174	119	1028
15	1174	119	1029
16	1275	25	155
17	1174	73	580
18	1275	16	85
19	1275	88	753
20	1275	99	880
21	1275	102	903
22	1174	67	521
23	1275	101	897
24	1174	117	1000
25	1174	117	999
26	1275	24	152
27	1275	55	437
28	1174	43	265
29	1174	119	1017
30	1174	119	1018
31	1275	16	79
32	1174	59	428
33	1275	75	637
34	1275	62	490
35	1275	88	752
36	1275	10	25
37	1275	79	662
38	1174	36	186
39	1174	32	159
40	1275	42	311
41	1174	37	203
42	1275	90	787
43	1174	32	163
44	1275	64	522
45	1275	81	692
46	1275	16	78
47	1275	16	81
48	1275	87	749
49	1174	37	196
50	1275	10	23
51	1275	33	224
52	1174	36	188
53	1174	49	311
54	1174	112	953
55	1174	112	952
56	1174	49	312
57	1275	44	338
58	1275	52	410
59	1275	44	334
60	1275	82	696

SD01

	集	図	番号
61	1275	82	700
62	1275	16	82
63	1174	32	162
64	1174	29	123
65	1275	49	379
66	1275	72	606
67	1275	92	800
68	1174	77	632
69	1174	49	314
70	1174	63	479
71	1174	63	481
72	1275	13	42
73	1174	102	864
74	1275	44	335
75	1174	30	132
76	1174	18	26
77	1275	29	194
78	1174	40	227
79	1275	82	706
80	1275	90	779
81	1275	26	172
82	1275	90	782
83	1275	90	785
84	1174	107	905
85	1275	61	486
86	1174	112	941
87	1275	40	282
88	1275	59	466
89	1174	85	698
90	1174	107	906
91	1174	92	767
92	1174	108	917
93	1174	97	817
94	1174	102	867
95	1174	63	476
96	1174	44	276
97	1174	57	403
98	1174	96	800
99	1174	96	799
100	1174	87	716
101	1275	83	720
102	1174	40	229
103	1174	54	365
104	1174	71	563
105	1174	71	566
106	1174	85	704
107	1174	86	713
108	1174	88	739
109	1174	97	809
110	1174	98	820
111	1174	98	821
112	1174	69	553
113	1174	57	404
114	1174	99	837
115	1174	38	206
116	1174	100	847
117	1174	100	848
118	1174	40	224
119	1174	76	623

SD02

	集	図	番号
1	1354	83	275
2	1276	24	164
3	1354	86	312
4	1354	83	274
5	1354	82	268
6	1354	83	272
7	1276	22	151
8	1276	22	152
9	1276	38	284
10	1354	68	72
11	1354	84	279
12	1276	22	149
13	1354	69	76
14	1354	81	255
15	1276	69	658
16	1354	72	127
17	1354	91	367
18	1276	93	970
19	1354	83	278
20	1276	42	327
21	1276	42	319
22	1276	20	116
23	1354	86	308
24	1354	81	261
25	1276	20	118
26	1354	87	315
27	1276	40	295
28	1276	109	1154
29	1276	31	224
30	1276	31	225
31	1276	38	268
32	1276	101	1070
33	1276	76	742
34	1276	31	208
35	1276	75	736
36	1354	74	149
37	1276	56	545
38	1354	86	300
39	1276	29	198
40	1276	28	180
41	1276	24	156
42	1276	76	753
43	1354	69	77
44	1276	79	765
45	1276	76	749
46	1276	19	98
47	1276	19	97
48	1276	69	659
49	1276	69	660
50	1276	69	661
51	1276	42	322
52	1276	80	786
53	1276	75	738
54	1276	20	115
55	1354	77	179
56	1354	77	180
57	1276	76	745
58	1276	76	748
59	1276	81	792
60	1276	80	788

SD02

	集	図	番号
61	1276	84	855
62	1276	44	337
63	1276	44	341
64	1276	28	189
65	1276	62	602
66	1276	80	771
67	1354	87	329
68	1276	33	232
69	1276	60	583
70	1276	47	361
71	1276	60	585
72	1276	71	674
73	1276	71	677
74	1276	83	815
75	1276	63	615
76	1276	52	491
77	1276	15	40
78	1276	46	351
79	1276	63	613
80	1276	84	857
81	1276	84	858
82	1276	84	859
83	1276	83	836
84	1276	83	837
85	1276	83	829
86	1276	83	833
87	1276	104	1100
88	1276	61	589
89	1276	61	591
90	1276	44	342
91	1276	44	343
92	1276	62	601
93	1276	62	604
94	1276	45	349
95	1276	13	18
96	1276	33	235
97	1276	45	348
98	1276	14	31
99	1276	14	32
100	1354	65	22
101	1276	69	668
102	1276	71	687
103	1276	47	371
104	1276	63	614
105	1351	79	230
106	1276	47	362
107	1276	15	35
108	1354	85	299
109	1276	15	44
110	1276	15	41
111	1276	17	70
112	1276	17	68
113	1276	62	594
114	1354	78	224

特論３　元岡・桑原遺跡群の弥生時代遺物からみた交流

森本 幹彦

はじめに

元岡・桑原遺跡群の発掘調査の中でも終盤に近い第 42・52 次調査では大量の弥生時代遺物の出土があり、豊富な外来系遺物や希少資料から、当遺跡の弥生時代像は大きく見直されることとなった。本稿では外来系土器の整理を中心に、元岡･桑原遺跡群をとりまく対外交流の様相について考察する。

１．元岡・桑原遺跡群の外来系土器

１）朝鮮半島系土器

①孔列文土器

縄文時代晩期の包含層などから、図１のような孔列（文）土器が出土している。いずれも深鉢の口縁付近の破片で、焼成前に内側から外側に向かって開けられた孔が巡る。

１は図の右上端付近がやや厚く、山形口縁状に図示されているが、直口縁の可能性もある。２と３は同一個体の破片かもしれない。内傾接合である。器形、内傾接合、内外面横方向の条痕・ナデ調整などは在来の縄文土器と共通する。朝鮮半島の孔列土器と同時期とみられるが、孔列以外の要素が縄文土器の形と製作技術であるのは北部九州の孔列土器の特徴である（三坂 2010）。

②三角形粘土帯土器

朝鮮半島系土器は粘土帯土器段階から増加する（図２）。口縁に断面が三角形または扁平な粘土帯を有するものが多く、「勒島式」とも呼ばれる三角形粘土帯土器が主体である。

１～４はその中でも精製器種である。１は巾着袋形の略完形品である。底部縁の刻み目は希少な特徴であるが、北部九州在来の要素でもない。２は小型壺などの蓋で、内外面ミガキ調整である。３は小片であるが、器形は鉢とみられる。４は当遺跡群出土無文土器で最も大型器種。棒状把手をもつ壺の胴部である。本来は直口縁で長胴気味の器形であろう。棒状把手は勒島式の中でも新しい段階に位置づけられている。１・３・４は黒色磨研土器である。

５～８は三角形粘土帯土器の中・小型甕で、ススが付着する煮沸容器である。６は報告図面の傾き

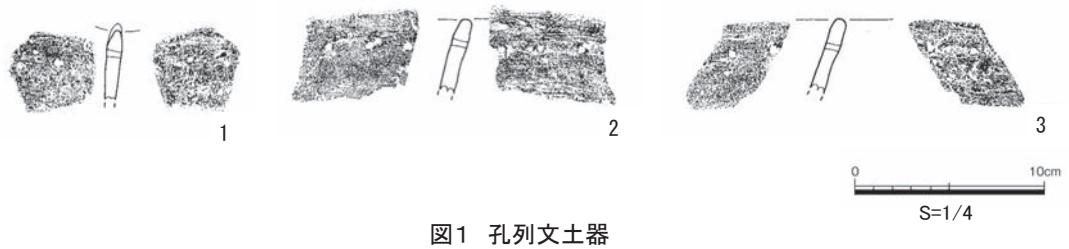


図1　孔列文土器

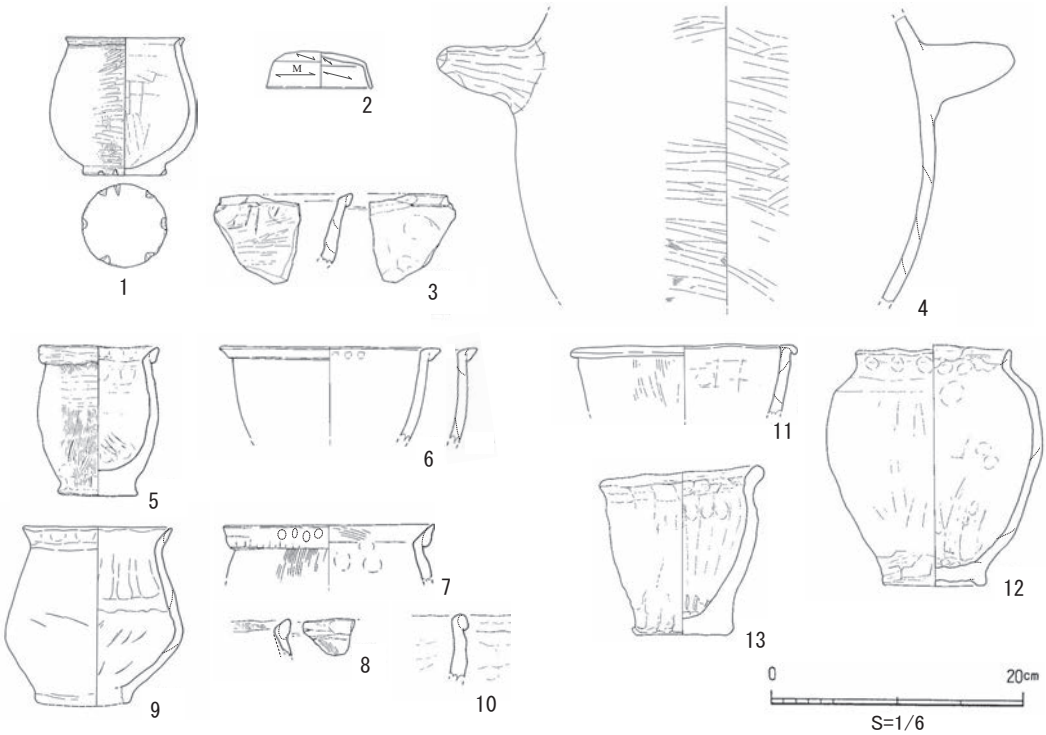


図2　無文土器と擬無文土器

を訂正した断面図を右に示す。10 も粘土帯土器甕である。口縁の粘土帯断面は円形に近いが、厚みはなく勒島式段階と考える。９は単純口縁化した粘土帯土器末期のタイプ。壺形で胴部外面の一部はミガキ調整である。

11 ～ 13 などは擬無文土器と判断する。弥生時代後半期の北部九州在来の土器系譜からは外れる器形で、歪さの目立つ作りなど無文土器の製作技術に通じるとみられる。壱岐や勒島など、他地域から搬入の擬無文（擬弥生）土器である可能性も考えられる。

日本列島出土の三角形粘土帯土器は李昌熙氏が指摘したとおり、遊動性の高い海民の往来を示唆するような、少量の甕を中心とする散発的な出土遺跡が多いが（李 2009）、当遺跡からは多器種の出土があり、対馬・壱岐を除く九州では最も集中する遺跡とみられる。10 は古い型式の可能性があるが、おおむね勒島式の新段階、瓦質土器成立以降の型式が多い。出土状況から弥生土器との共伴関係はあまり明確でないが、弥生時代中期後半から後期前半を主体とする土器群からの出土がある。

また、１のような小型壺・鉢の完形品は那珂遺跡群 30 次（掘立柱建物柱穴埋納）、東入部遺跡２次Ⅱ区墓（墳丘供献）、唐津市・中原遺跡 11 区（水辺祭祀？）など、玄界灘沿岸地域で祭祀用途に使用されたとみられる出土事例がある。本例も河川や水の祭祀に関わる特殊な器として使用されたのではないだろうか。

③三韓系瓦質土器ほか

図３の１～ 10・15 は朝鮮半島南部産の瓦質土器（三韓系）で、古墳時代前期段階に流入したものも含んでいる。後続時期の陶質土器もあわせて図示しておく（11 ～ 14）。いずれも壺で、長頸（1 ～ 3）、短頸直口（4）、短頸広口（7）などの器形があり、把手を有するものもある（5・6）。

螺旋状の平行沈線文は１・４・７～９・11・12・15 などで確認できる。２と３は厚みがやや異なるが、同一個体の可能性が高い。８と９は同一個体で、他にもその破片が出土しているが、７とは別個体で

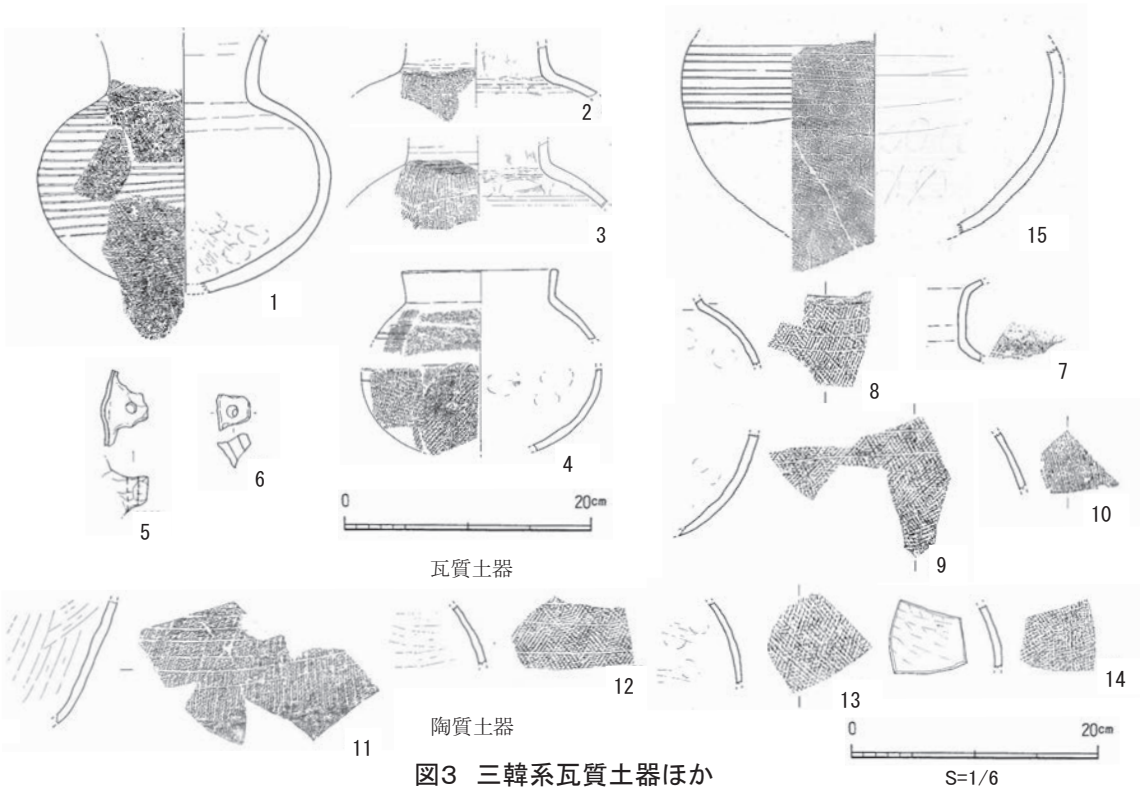


図3　三韓系瓦質土器ほか　S=1/6

ある。外面のタタキは、2・3・10・11 が縄目、7 ～ 9・12 ～ 14・15 が格子目である。胴部の全体的な形や調整が分かる 1 と 4 では外面の上半部と下半部で異なる種類のタタキが施されている。1 は縄目タタキの後、下部に（正）格子目タタキ、4 は平行タタキの後、下部に（斜）格子目タタキが施される。このようなタタキ分けは朝鮮半島西南部の馬韓系土器に多いと考えられている。15 は胴部の沈線よりやや下位に粘土継ぎ目がある。外面は全面的に（斜）格子目タタキが施されるが、継ぎ目付近から下部は 2 次タタキ調整である。

これらは原三国時代後半期以降の型式が多く、弥生時代終末期から古墳時代前期を主体とする土器群からの出土がある。図 2 に挙げた粘土帯土器よりは新しい段階のもので、流入時期は異なると考える。

④楽浪系土器

図 4 は朝鮮半島北部産の楽浪系土器である。三韓系瓦質土器と近い時期、弥生時代終末期前後の段階に流入したもので、帯方郡段階のものも含まれるであろう。いずれも泥質胎土の瓦質焼成で、風化しているが、黒化処理されているものが多い。小型鉢（椀）形（1 ～ 6）の表面は強い回転ナデ調整で、底面は静止糸切りの後、縁の付近をヘラケズリしている。内面には放射状や格子状の暗文（条線が深めで沈線状のものも含む）が施されている。口縁部の破片は外方に突出するタイプ（1・2）である。7 は外面に縄目タタキ、内面に当て具痕がある胴部小片である。広口短頸壺

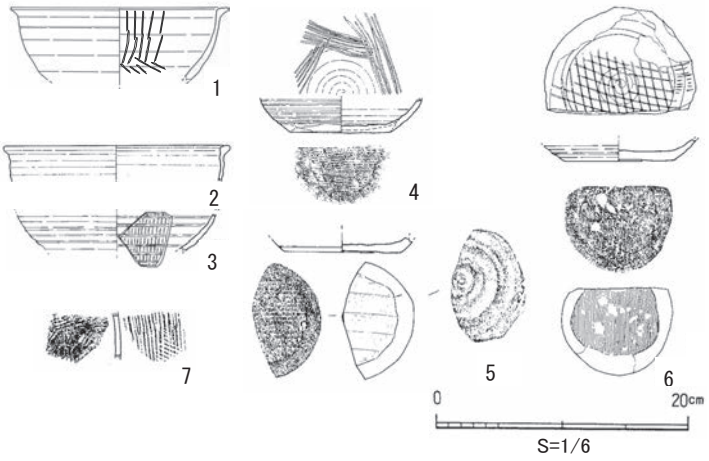


図4　楽浪系土器　S=1/6

であろう。

小型鉢を主体とする器種構成は今津湾の対岸に位置する今宿五郎江遺跡とも共通している。

２）格子目タタキの弥生土器・土師器

朝鮮半島南部の土器の特徴を部分的に有する弥生土器、土師器も少なくない。

図５は形態レベルの三韓系土器要素がみられるもので、いずれも弥生土器・土師器の焼成である。

１は瓦質短頸壺を模倣した形態の壺である。器面調整は在来の壺と共通する。２は三韓系土器に類似する把手をもつ壺である。把手を除くと北部九州在来の壺であるが、三韓系土器とも類似する器種が選択されているのであろう。胴部調整などは布留式系土器の製作技術と共通する。３、４は底部に複数の焼成前穿孔がある甑形土器である。全形の分かる資料が出土していないが、弥生時代後期から古墳時代初頭前後の甕形土器をベースとする多孔式の甑であろう。

格子目タタキを有する弥生土器・土師器（図６～９）は 100 点前後出土している。胴部や突帯の外表面に嶺南地域の三韓系土器と共通する斜格子目タタキが施された土器である。北部九州在来の平行タタキの代わりに格子目タタキが施されている。器面調整レベルの三韓系土器要素である。

42 次調査区東部（Ⅰ区）に集中しており、遺跡群の中でも分布が偏る傾向にある。弥生時代後期から古墳時代前期前半の在来器種であるが、大小の甕、短頸壺、鉢、器台、支脚がある。タタキは口縁から底部方向、左から右方向に展開するものが多い。土器の口縁を下にして、右下から左上への工具の運動で調整したものであろう。羽子板状のタタキ工具を想定した場合、その軸と格子目はほぼ平行していて、工具を土器に斜めに当てることにより斜格子目となっている。格子目はその形状と密度から少なくとも３種類以上はある。格子目の凹部が一辺 3㎜程度で正方形に近い A（目が細かい）、4㎜× 6㎜程度で長方形ないしは平行四辺形に近い C（目が粗い）、A と C の中間の密度で、長方形に近い B に大別できる。

図６は古墳時代初頭の大甕（甕棺クラスの高さ約 100㎝、口径 80㎝前後の法量）で、胴部の突帯に格子目タタキ A が施される。近隣には格子目タタキではない大甕の集中的な遺棄もあり、祭祀的な場面での使用も考えられる。

図７は甕で各種のサイズがある。13 より小型のサイズでは煤が付着するものがあるが、14 ～ 16 のやや大型サイズでは煤が付着していない。煮沸使用のものも日常的な調理容器ではないかもしれない。16 の格子目タタキは突帯のみで胴部は平行タタキであるが、他は胴部を全面的に格子目タタキで調整している。タタキ目は口頸部や胴部下半を中心にハケメ調整で消される。15 はその後に頸部突帯がナデ付けられて、また格子目タタキが施される。これらの調整手順は在来土器と共通している。格子目タタキの種類は例えば 10・13 が C、11 が B、15 が A など、土器法量との相関性は低い。

図８の壺も同様である。格子目タタキの壺は大小の短頸壺に限られ、複合口縁壺などの形式はみられないようである。５は煤が付着している。図９の１～６は粗製の鉢で、各種の法量があって煤が付着するものもある。６は台脚が付くタイプ。格子目タタキは B ～ C である。７～ 12 は粗製の器台で、13・14 は支脚である。支脚の格子目タタキは上面の平行タタキとの併用である。器台も大小のサイズがあり、支脚より出土量が多い。出土比率からみて、壺・甕に使用された器台に対して、支脚は大甕に使用されたのではなかろうか。

11（京都大学所蔵資料）は古くから知られる採集品であるが、近年の発掘調査によって、このような土器が元岡・桑原遺跡群の中でも特定の区域に集中することが明らかになった意義は大きい。当遺跡以外では出土例が寡少であり、北部九州でも普遍的な土器ではない。壱岐の山中遺跡では棺の一

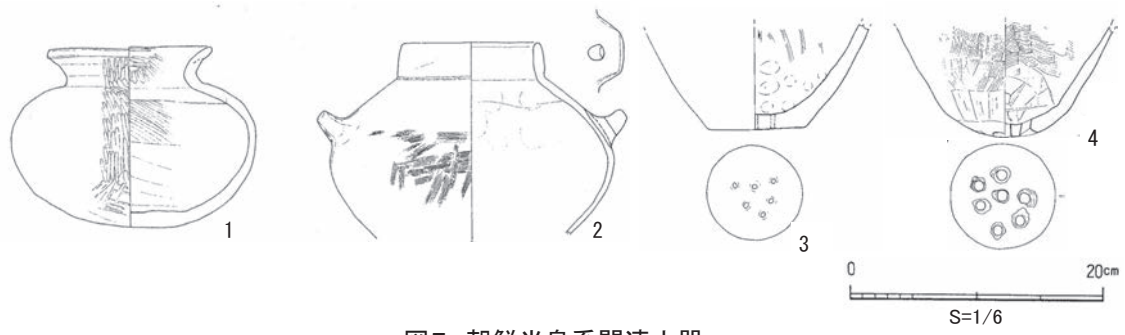


図5　朝鮮半島系関連土器

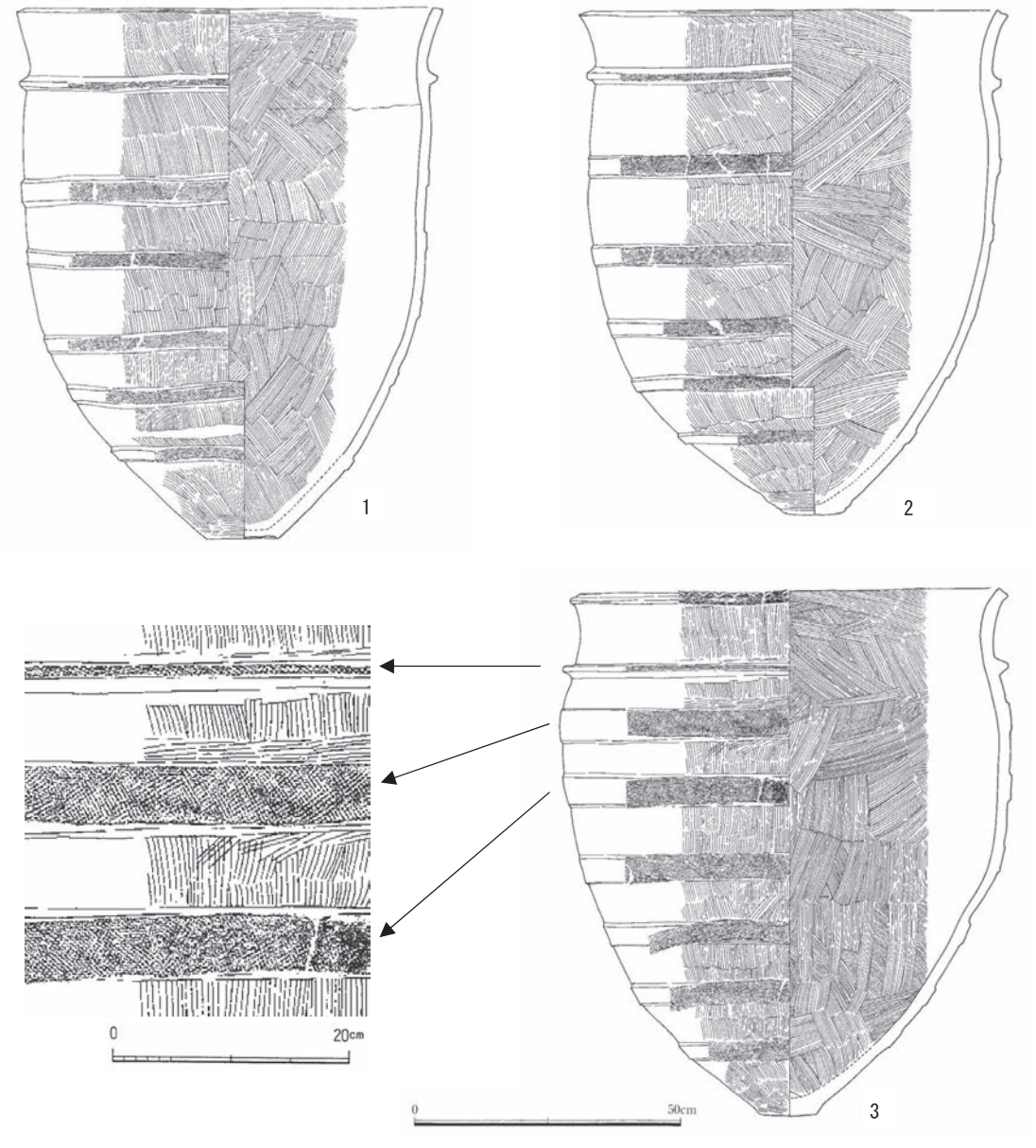


図6　格子目タタキ土器①

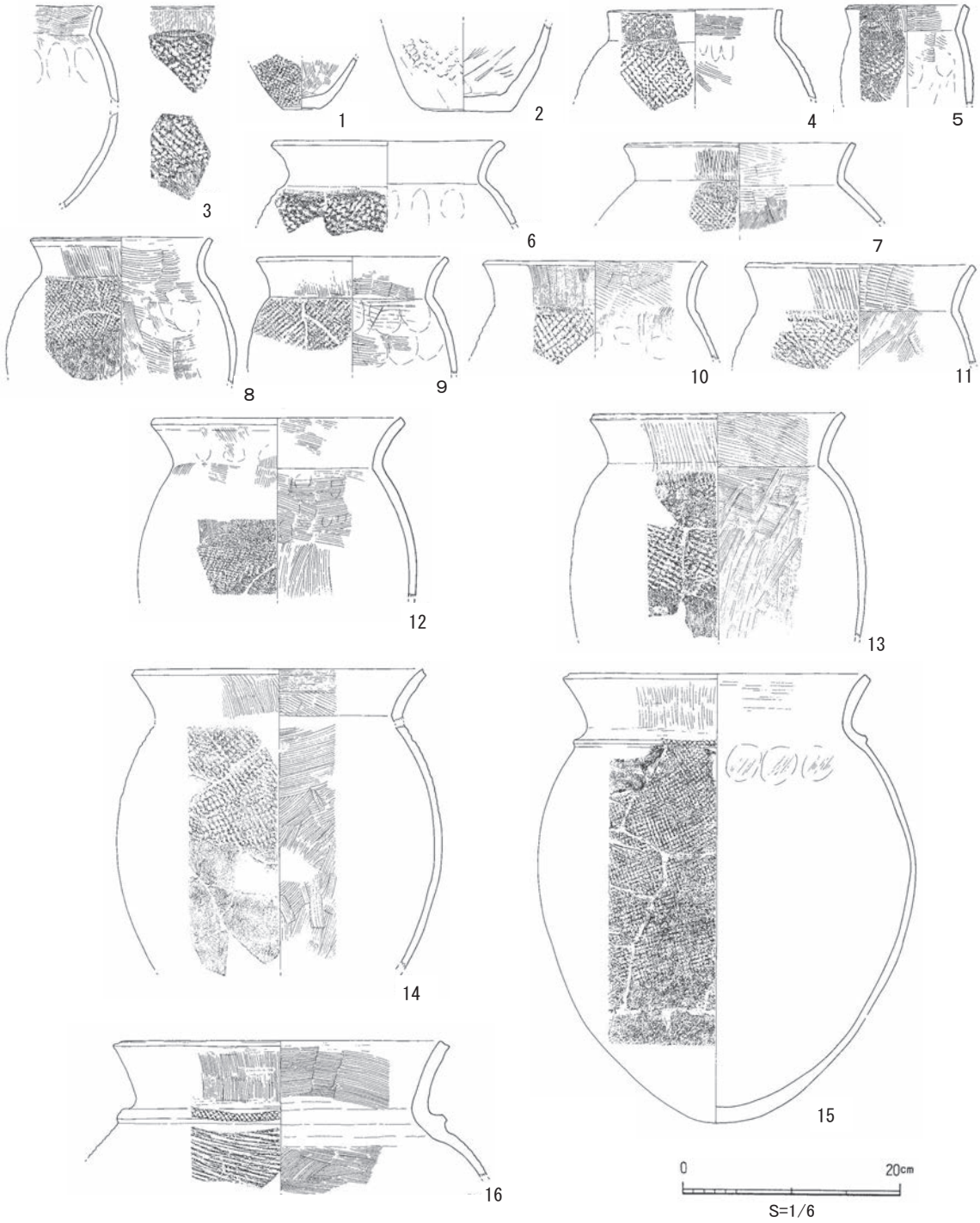


図7　格子目タタキ土器②

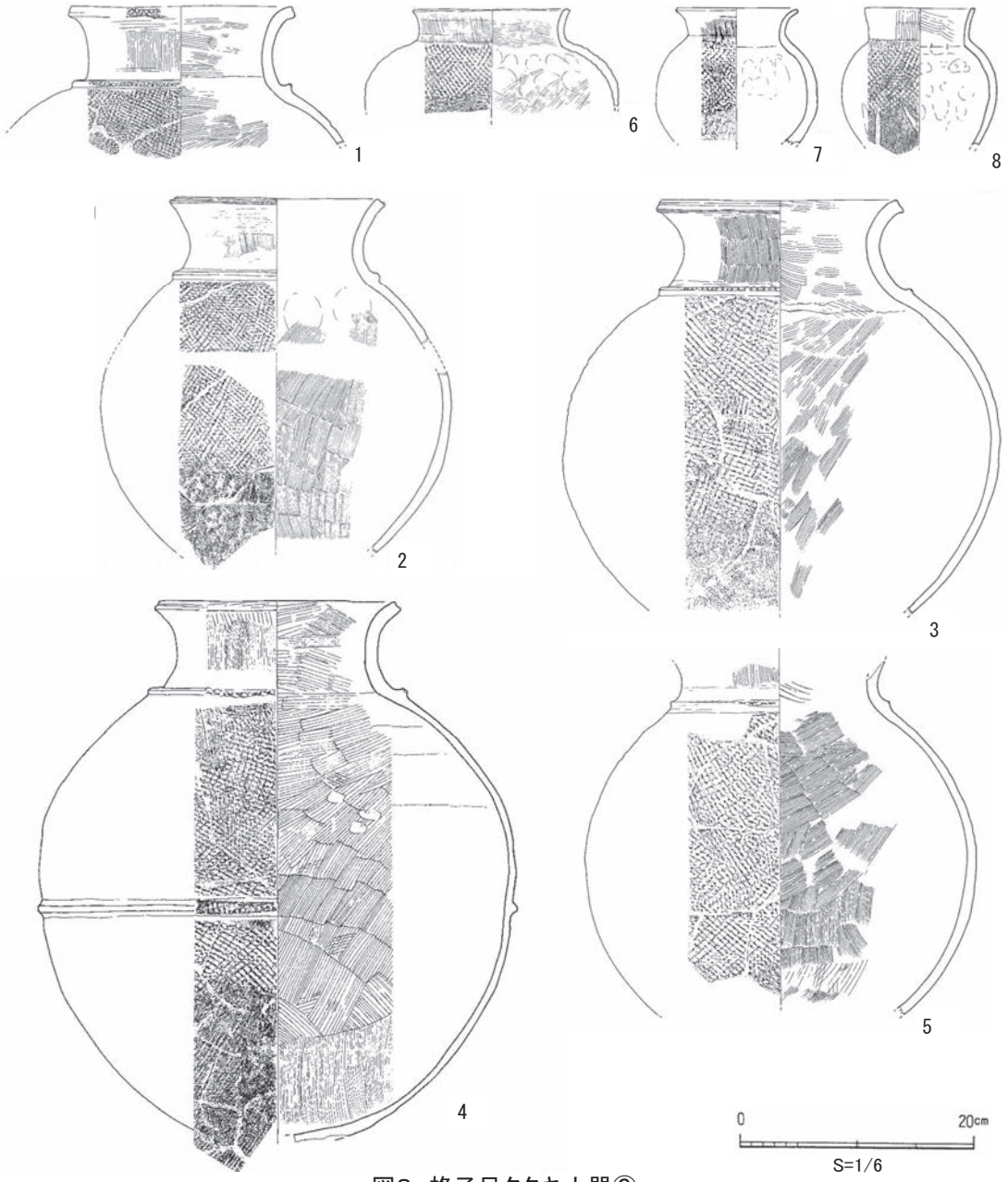


図8　格子目タタキ土器③

つに図８－４タイプの壺が使用されており、当遺跡からもたらされた土器とみられる。一方、板付遺跡１次調査出土の器台は「格子目」の凹凸が元岡・桑原遺跡群とは逆であり、方向の異なる平行タタキが交差したものにみえる。一群の土器とは別に考えたい。

格子目タタキ土器は弥生時代終末期前後の型式が多いが、平底型式（図７－１・2、図９－１など）もあり、弥生時代後期中葉から古墳時代初頭にかけて当遺跡で集中的に製作された土器とみられる。格子目タタキ土器の出土が多い 42 次調査Ｃ～Ｅの１・２区からは土器製作時の副産物とみられる焼成粘土塊も多く出土している（福岡市報告書第 1174 集 131 図）。格子目タタキ土器の祭祀的な遺棄とみられるものがあり、山中遺跡では土器棺に使用されていることから、日常容器ではない特別な用途で作られた土器群と考えられる。

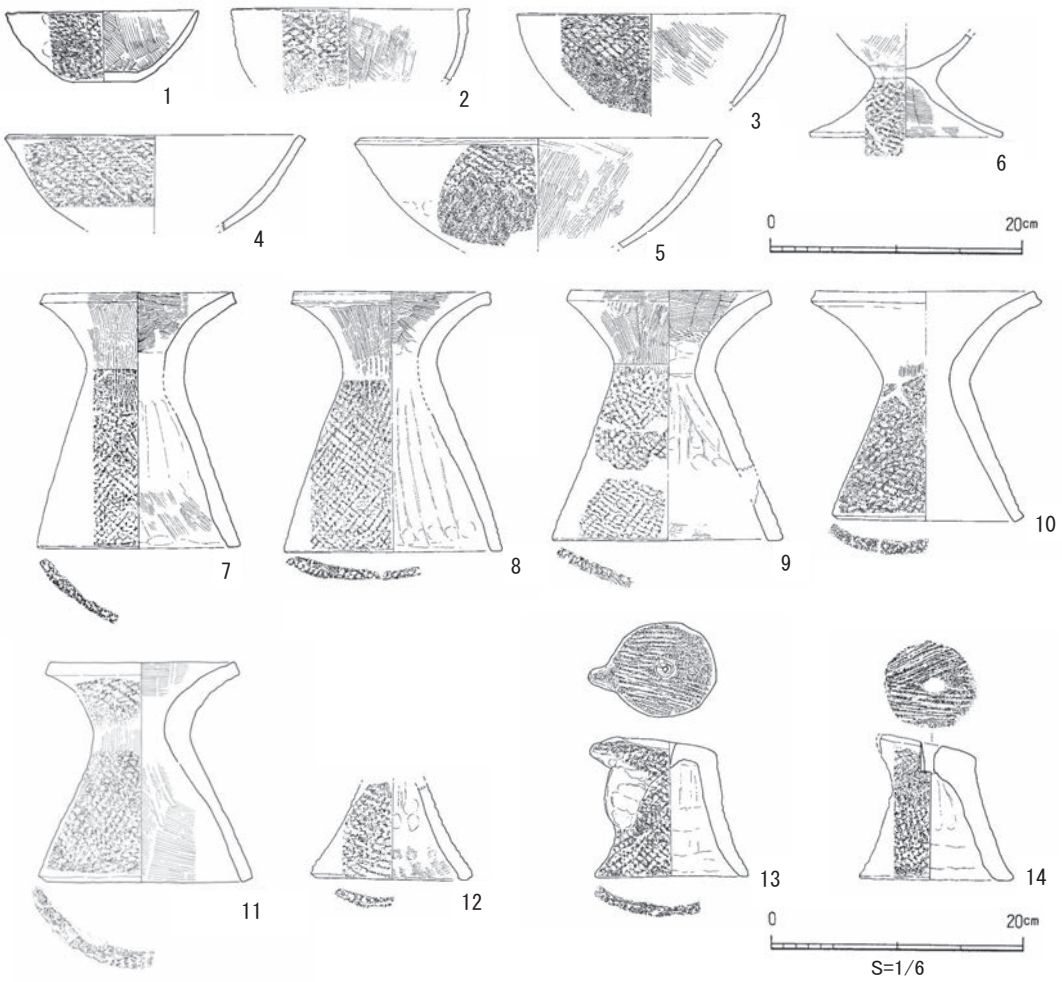


図9　格子目タタキ土器④

3）日本列島各地の外来系弥生土器

山陰や瀬戸内周辺地域をはじめとする外来系弥生土器（土師器）の出土も多い（図 10）。時期幅のある大量の土器群に混在して出土しており、在来系土器との共伴関係を明示できるような整理には至ってないので、土器編年的な検討については今後の課題である。

1・3は山陰・瀬戸内地域の第Ⅳ様式段階の土器である。弥生時代中期後半以降に流入したものである。

1は凹線文と羽状文、列点文、浮文などが複合した文様で加飾された壺で、備後北部に分布の中心がある塩町式土器である。類例からみて下部は連続成形の脚部を有していたとみられる。頸部付近はそれほど器壁の厚みがないので、短頸壺を想定する。3は外面に凹線文を有する有段口縁の甕で、肩部外面に列点文がある。胴部内面は肩部以下がケズリとなっており、器壁が薄い。この系譜を引く後期の甕に比べると精製である。いわゆる中部瀬戸内系土器であるが、当該期は日本海沿岸域にも広く分布している。

2の広口短頸壺は胴部内面の上部がケズリ調整で、肩部外面に列点文があるが全周しない。第Ⅴ様式前葉段階の中部瀬戸内系壺であろう。4～8は3に後続する第Ⅴ様式前葉段階の甕である。やや粗製化し、内面は頸部以下がケズリ調整となっている。これも中部瀬戸内系土器であるが、日本海沿岸

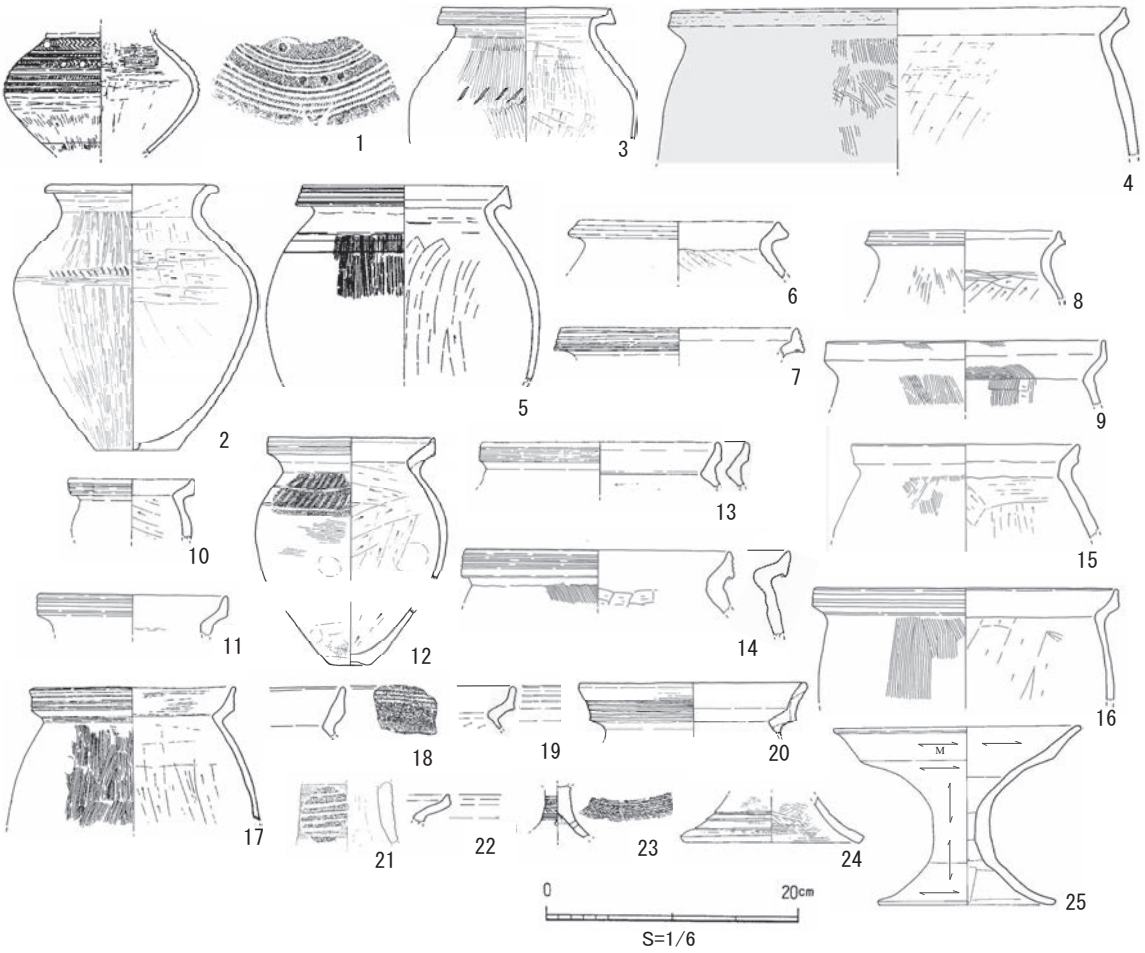


図10　山陰・瀬戸内周辺の土器

にも広く分布する型式である。

10～19は第Ⅴ様式中葉段階の日本海沿岸地域の甕で、有段口縁が直立またはやや外傾化している。12は外面の頸部直下に列点文（ハケメ調整と共通する工具で簾状に施文）と沈線文が複合する文様帯をもつ。文様的特徴や器壁の厚さなどから山陰西部の石見地域周辺の土器とみられる。

全体的に口頸部の作りがシャープさに欠け器壁の厚いものが多く、胴部の張りがそれほど強くない点など山陰西部の土器が主体と考える。その中で19や、さらに有段口縁が伸長する第Ⅴ様式後葉～末型式の20は白色系の精製胎土で胴部の器壁も薄いとみられる土器であり、出雲地域の土器とみられる。

古墳時代初頭前後以降は在地製作品も含めて山陰系土器が北部九州で増加するが、弥生時代後期を通じて山陰系土器が流入した遺跡は少ない。糸島地域では当遺跡しかなく、他に福岡平野の博多遺跡群が該当するのみである。いずれも煮沸容器の甕が主体であり、山陰地域からの人々の往来にともなって流入したものであろう。博多湾沿岸ではそのような人々を受け入れる窓口が限られていたことがうかがえる。

上記の日本海沿岸系土器には山陰より東の北近畿（但馬・丹後）や北陸地域の土器も少し含まれている可能性があるが、桑原遺跡第1次調査の竪穴建物跡（古墳時代初頭）から出土した25はそのような土器に該当する。有段口縁の器台で、脚部にも有段の痕跡があり、外面と受け部の内面はミガキ調整である。北部九州在来の器台は非ミガキ調整の土器である。形態や器面調整からみて、北近畿から北陸地域に分布する器台である。ただし胎土が遺構共伴の在来系土器等と類似しているので、在地での製作品であろう。

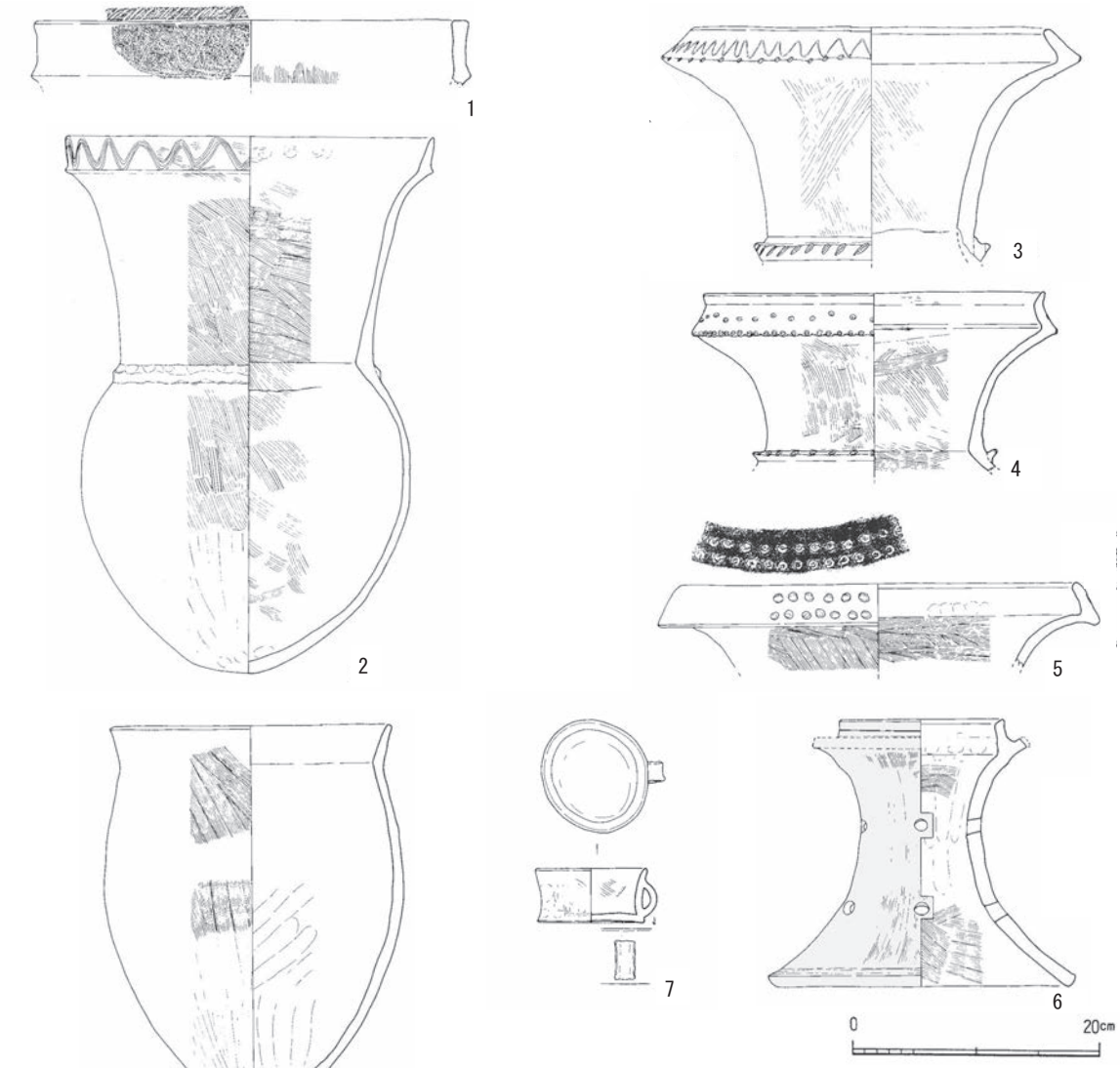
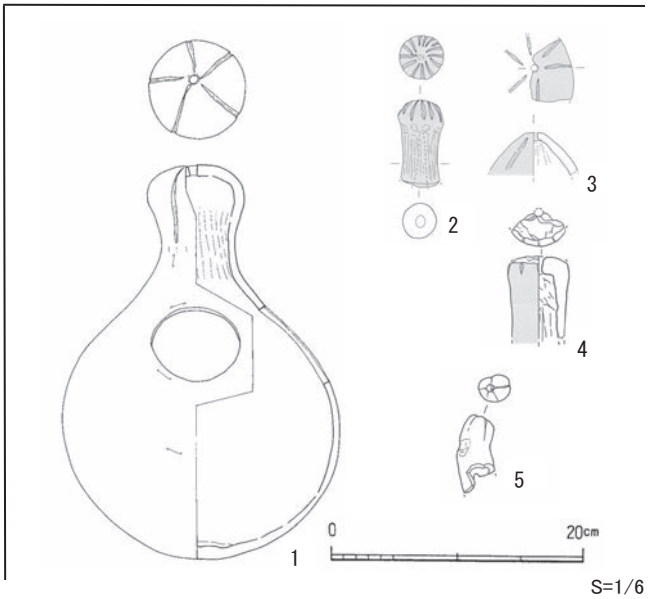


図11　九州周辺の外来系土器



S=1/6

図12　ヒョウタン形土器と関連資料

小破片であるが、21 は頸部外面に多条沈線が施される中部瀬戸内系の長頸壺、22 は讃岐地域周辺の瀬戸内系甕である可能性がある。24 は脚裾に多条沈線が施される高杯でこれも中国地方の凹線文系土器の系譜を引くものであろう。23 は小型の高杯脚部であるが、細かな貝殻列点文と櫛描文で構成される有軸羽状の文様帯がある。近隣の遺跡では三雲・井原遺跡群や今宿五郎江遺跡からこのような文様帯をもつ東海系の脚付鉢が出土している。それらとは胎土が異なり、法量も著しく小さいが、そのミニチュア土器である可能性は考えられる。

図 11 も外来的な要素をもつ土器である。１～５は弥生時代後期後半から古墳時代前期の複合口縁壺であるが、口縁部外面に波状文や、円形スタンプ文・竹管文などが施されたもので、搬入品かどうかは明確でないが、九州東北部の豊前地域周辺や西部瀬戸内地域との関係がうかがえる土器である。６のやや大型の器台も複合口縁状の受け部や器形、上下２段の透孔配置など、そのような地域との関連が考えられる土器である。他にも長方形透孔や上下２段に透孔が施された高杯の脚部破片などが出土している。９の内外面がミガキ調整の大型鉢は弥生時代中期後半に糸島地域では通有の口縁形態であるが、頸部の突帯は指頭押圧を有するタイプである。このような押圧貼付突帯は本州西部の弥生時代中期土器に系譜があり、本例も西部瀬戸内地域等との関連を考えることができるだろう。同時期の遠賀川以東系甕も定量出土しており、東方面との交流関係は通時的なものであったと考えられる。

一方、有明海沿岸域など、南の地域との関係がうかがえる土器はあまり多くない。７は肥後系のジョッキ形土器である。通例よりも小型で浅い。ジョッキ形土器は北部九州でも広範に分布しており、本例も在地製作品かもしれない。脚台付の甕は８のような高めの脚台を有するタイプのほか、低く開く脚台を有するタイプがあるが、いずれも有明海沿岸地域の脚台付甕とは器形の違いがある。８は形状的にも在来の甕と器台の結合土器とみられる。

その他、図 12 はヒョウタン形土器（１～４）とヒョウタン（５）で詳細な考察は本書の特論２でなされているが、糸島平野、福岡平野、壱岐島など弥生時代中期末前後の玄界灘沿岸域に分布する特殊な器種で、中国の神仙思想との関連も想定されている。

２．外来系の金属、木製品、土製品

他の材質の製品にも外来系または他地域との交流がうかがえる資料があるので既報告の所見を参考に羅列してみる。

木製品（図 13）では１・２の漆塗り製品と類似するものが朝鮮半島からも出土している。１は高杯の身の部分の破片で、表面が黒漆と赤漆で装飾される精製容器である。釜山･古村遺跡から類似品、細長いコップ状の杯に裾がハ字状に開く脚部を有する漆塗り高杯が複数出土している。２は容器の蓋である。平面形が水涙形で、表面に黒漆が塗られている。類似品は光州・新昌洞遺跡から出土している筒形容器の蓋である。３は黒漆と赤漆で装飾された容器で把手を有する壺形ないしはジョッキ形であるが、形態や文様（斜格子文など）の系譜は不明確である。１の高杯は類似品が複数出土している朝鮮半島南部からの搬入品である可能性が高いとみられる。精製の漆塗り筒形容器は２とはタイプが異なるが、今宿五郎江遺跡や雀居遺跡などでも出土しており、北部九州の拠点集落ではある程度普及している。その製作地は今後の課題である。４はクスノキ製の刳物容器で、鉢または大型高杯形の容器であろう。中国・楽浪系の銅鼎など、金属器にみられる形状の方形把手を有する。５はイヌガヤ製の精製刳物容器で、四脚付箱は弥生時代の木製品として普及している器種であるが、鞍形の蓋は類例がなく、その系譜は今後の検討課題である。

また、土器や木器の食事具のミニチュアが当遺跡から多量に出土している。杓子形土製品や手捏ね

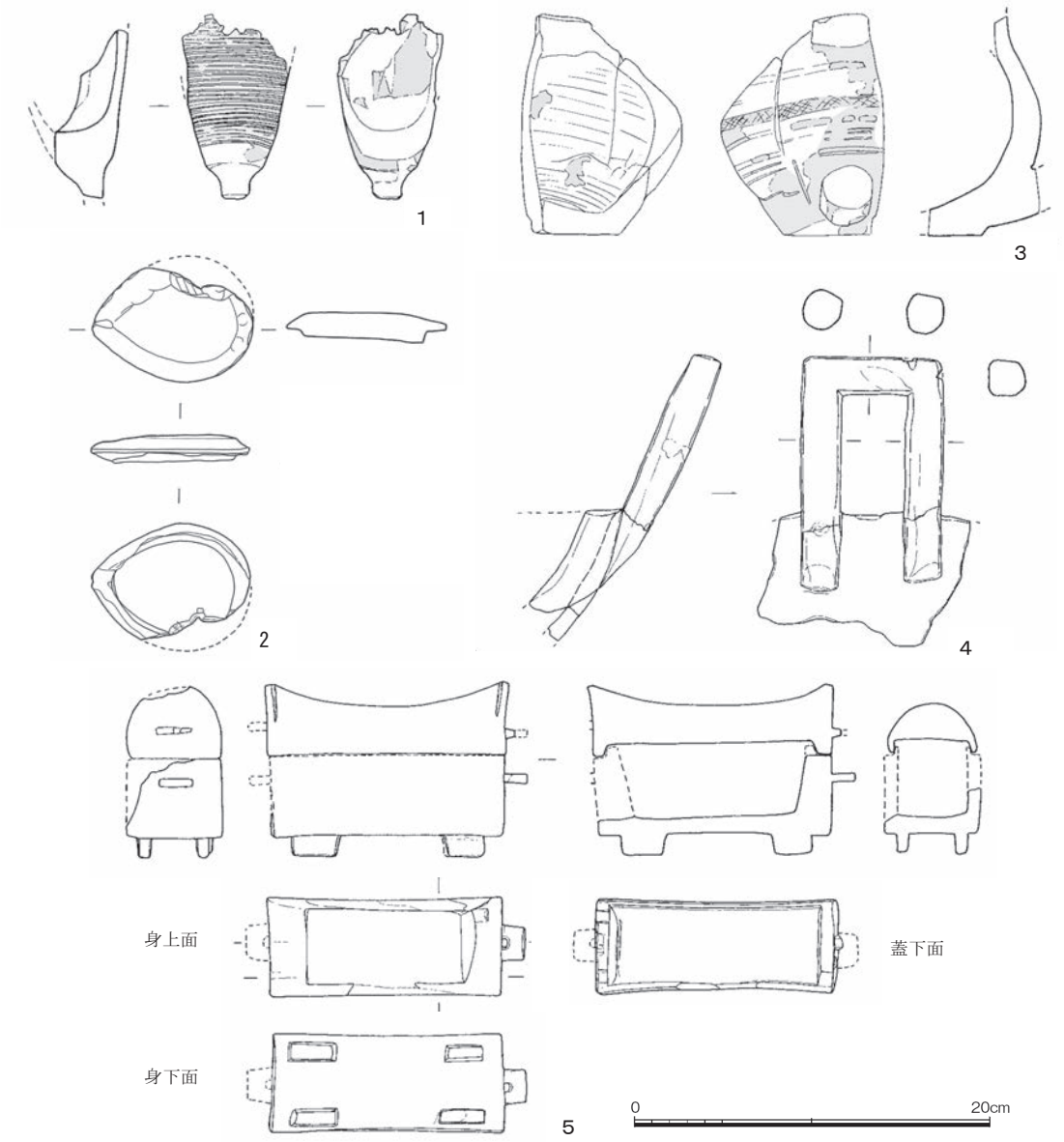


図13　木製品

土器で、図 14 に主なものを示した。1 ～ 15 の杓子形土製品は木製の縦杓子、横杓子、匙をモデルとする大小各種があり、15 のようなハンマーヘッドシャーク形のものも、T 字形柄の木製杓子をモデルとしたものである。16 ～ 57 の手捏ね土器には各種の壺、鉢、杯、蓋、高杯、支脚形などがあり、弥生土器の形に比較的忠実なものからデフォルメ化の著しいものまで様々である。高杯には朝鮮半島系漆塗り製品（図 13 － 1）に通じる形状のものがある（31）が、単純な形状だけに空似の可能性もある。杓子形土製品と手捏ね土器は弥生時代遺跡で通有のものが多いのであるが、それらが多量に出土する遺跡は勒島遺跡など朝鮮半島南部の遺跡にもあり、海を越えた祭祀の共通性として注目できる。

図 15 は大陸からもたらされた金属製品やガラス製品と鉱物である。1 ～ 3 は鋳造鉄斧である。1 は 15 次調査出土。伐採斧に使用された破損品とみられる。袋内面には鋳造時の土製中子の痕跡が遺存する。幅広で、刃部に向かって撥形に開く形状から弥生時代後期、後漢代以降の型式である。2 も使用による破損品であろう。長方形に近い形状であり、1 よりは古い型式で、弥生時代中期後半段階、前漢代に流入したものである可能性が高い。3 は鋳造鉄斧の小破片であるが、再加工の有無は不明である。4 も弥生時代中期から古墳時代前期の鉄器であるが、7 ㎝× 8 ㎝の薄手の鉄板で、鉄素材の可

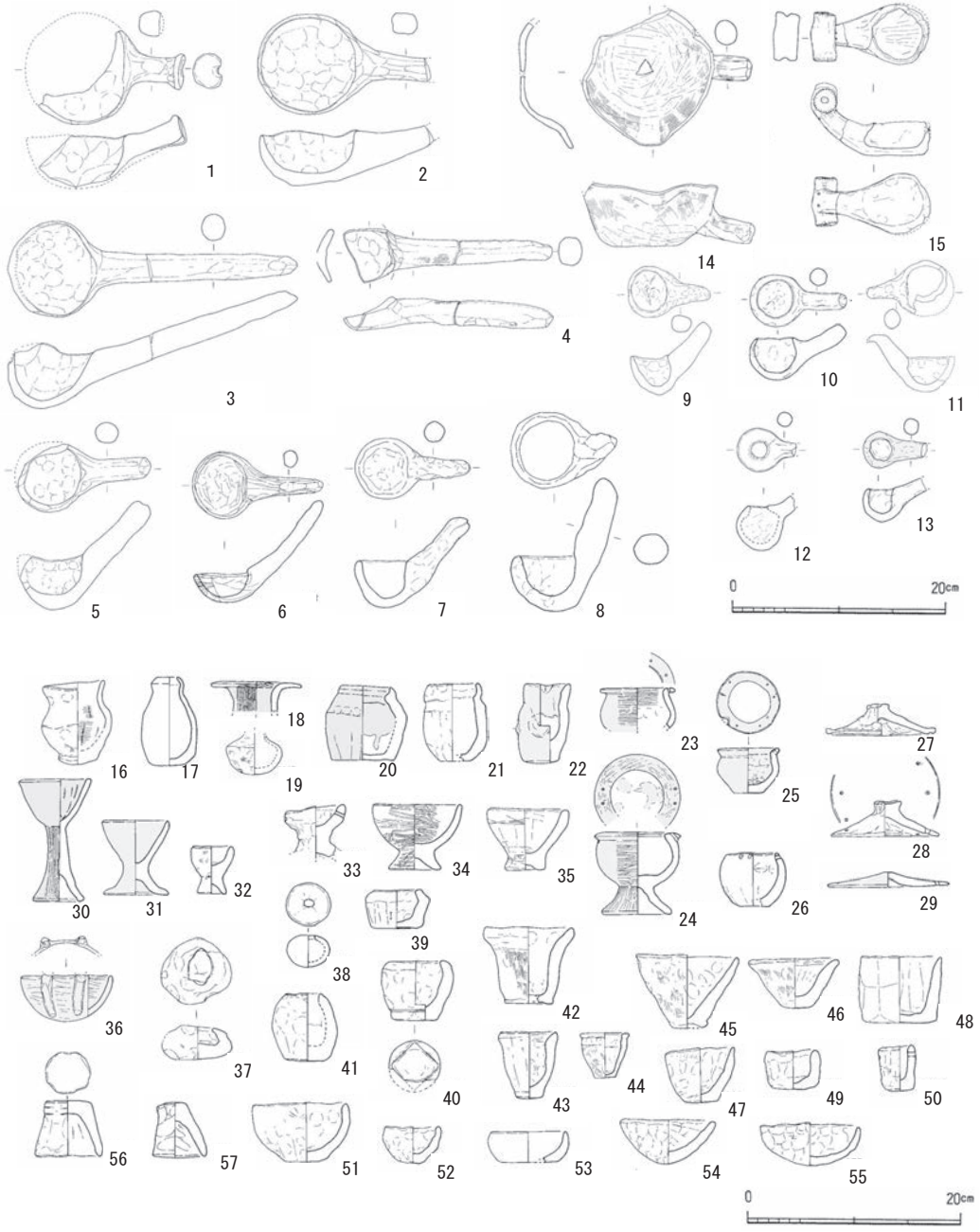


図14　杓子形土製品とミニチュア土器

能性がある。

鋳造鉄斧は弥生時代後半期、石斧に代わって伐採斧の主力となっていくものであり、九州のみならず日本列島で需要が高まる。道具の鉄器化にともない鉄素材も重要な輸入品となってくる。

42･52 次調査地点からは 40 点近いガラス小玉（5 ～ 8）が出土しており、いずれも舶載品である。カリガラスが主体であるが、8 は鉛ガラスである。日本列島でガラス玉の出土が増える段階のものであるが、集落遺跡の出土量としては多い。

銅銭は 9 点出土しており、博多湾沿岸の弥生・古墳時代遺跡としては最も多量な出土である。内訳は五銖銭 1 点（9）と貨泉 8 点（10 ～ 17）である。土器群 106 下出土の 15 の貨泉は弥生時代後期前半までの流入である可能性が高い。出土層位などから 10 ～ 12、14、16 などの貨泉が遺棄されたのは弥生時代終末期前後である。9 の五銖銭は五銖相当の重量で字形なども前漢代の作風におさまるが、出土層位では流入時期を絞ることはできない。博多遺跡群の五銖銭は古墳時代前期以降の流入と

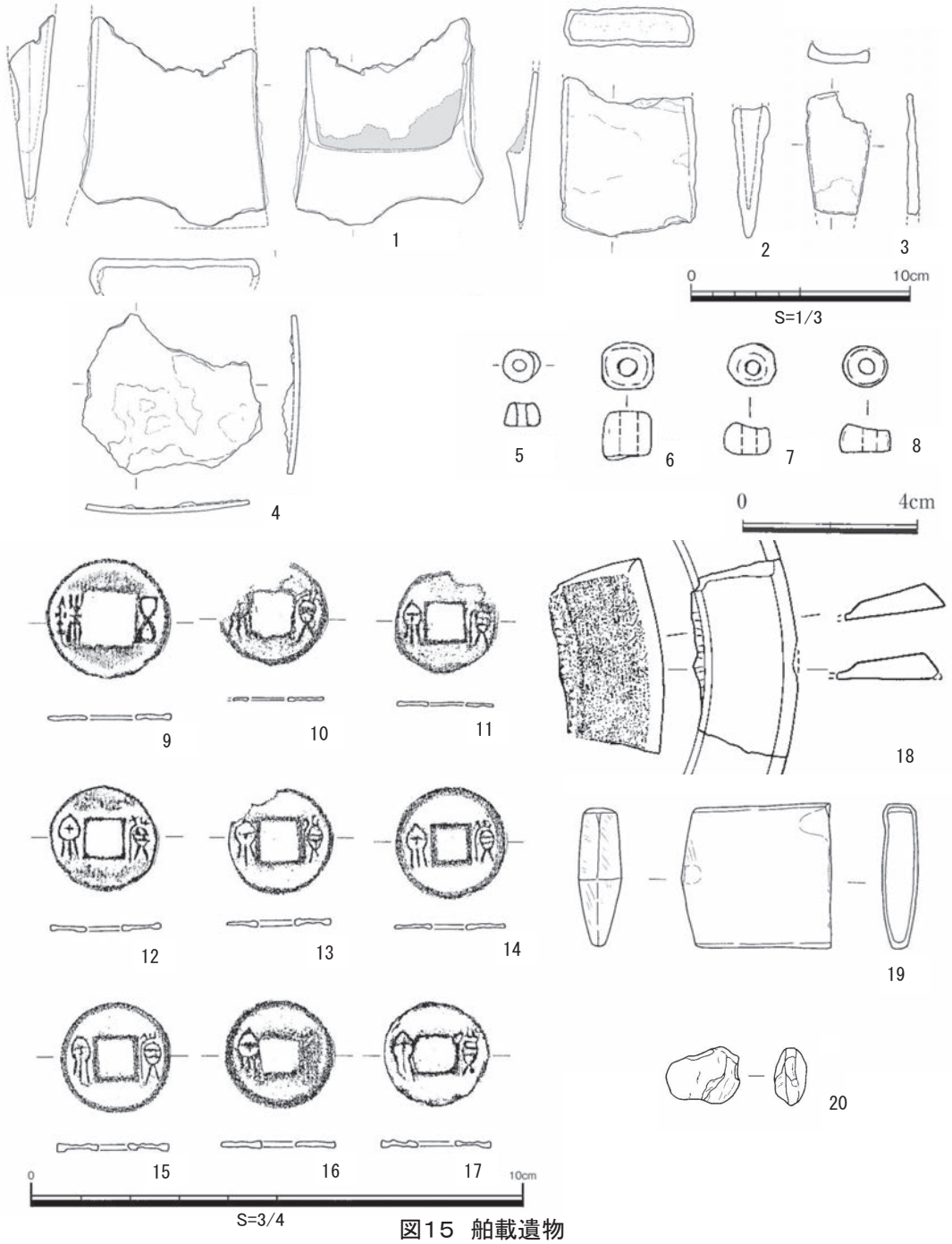


図15　舶載遺物

みられるので、博多湾沿岸域で弥生時代段階に流入した五銖銭としては唯一である。貨泉を主体とする流入は他の弥生時代遺跡に流入した中国銭の組成と共通している。後漢代以降に価値が下落した貨泉ばかりが日本列島に流入した社会的背景や、それらが交易の場で貨幣として機能したかどうか、まだ決着をみない問題であるが、それらを検討する上で今後も鍵となる遺跡であろう。

18 は内行花文鏡とみられる中国鏡の鏡縁破片。11 の青銅製品は刀子の鞘尻金具で、土器群 106 下、弥生時代中期後半の土器とともに出土している。日本では対馬で類例が出土しているのみで、希少な資料である。刀子は文房具の削り刀にも使用されるので、交易・外交と文字使用という観点からも注目されている。20 は水銀朱の原料、辰砂の大粒である。これらや鋳造鉄斧と銅銭は中国系の文物であり、楽浪郡などを窓口に受容したものとみられる。

３．漁具の様相

当遺跡からは石錘をはじめとする多くの漁具が出土しており、生業に占める漁撈の割合が高いことがうかがえる。漁撈を専業とする海民集団は対外交流の担い手としても注目されており、対外交流の解明を目的とした漁具の研究が少なくない。にわかに専業的な漁撈集団（かつ対外交流の担い手）を抽出することは困難であるが、出土している漁具についても整理しておきたい。

図 16 には九州型石錘の主なものを示した。

用途に関わる重量で分けると、４～ 25 ｇの極小型、30 ～ 50 ｇの小型、50 ～ 100 ｇの中型、100 ～ 250 ｇの大型、250 ｇを越える超大型となる。

Ⅰ類は垂下式で主に上窄下寛形をなす。底部形態が丸いⅠＡ類（1･3 ～ 6･13）と、底部を平坦に加工するⅠＢ類（7 ～ 12･14）に大別される。前者は超大型、大型が多く、中型も含む。後者は大型、中型が多く、小型も含む。上窄下寛形よりも紡錘形に近く、底部がとがるⅠＣ類（2）はⅠＡ類から派生したものであろう。超大型品が１点出土している。ⅠＡ類とⅠＢ類は細長いものと寸詰まりのもの、横断面形が円に近いものと扁平な楕円に近いものがある。体部の紐孔は１～２あって紐ずれ防止の溝とあわせて配置のバリエーションがあるので、更なる細別分類も可能である。長軸方向の溝はほぼ全てにあり、全周せずに紐孔より上位を通るものが多い。石材はいずれも滑石が主体で、中・小型品には玄武岩や粘板岩もみられる。未成品はⅠＡ類とⅠＢ類の大・中型品が複数出土している。

Ⅱ・Ⅲ類は平面が対称的な紡錘形をなす「横型」のもの。長軸方向のみに溝が通るⅡ類と、体部中央を交点とする長短両軸方向に溝が通るⅢ類に大別しているが、16 ほか、Ⅱ類でも短軸方向に紐をかけていた痕跡のあるものがあり、用途的な差異はあまりないであろう。溝が「キ」字状に走る 20 のようなタイプは当遺跡で少ないが、Ⅱ、Ⅲ類を通じて最も重い超大型品である。Ⅰ類と同様、横断面が円形に近いものと扁平な楕円形に近いものがある。体部に孔のないⅡＡ類（15 ～ 17）とⅢＡ類（21・22）が多く、超大型から小型品まで各種法量がある。１～２孔のあるⅡＢ類（19）とⅢＢ類（23）は少なく、いずれも中型である。著しく細長いⅣ類（18）は長軸方向の溝が４方向の長側面を通るように施された中型品である。石材の傾向はⅠ類と同様である。未成品はⅡ類またはⅢ類の中・小型品が複数出土している。

ⅱ類・ⅲ類は平面が対称的な紡錘形をなす極小型品で、長軸方向のみに溝が通るⅱ類と、体部中央を交点とする長短両軸方向に溝が通るⅲ類に大別できる。体部に孔のないⅱａ類（24・25）、ⅲａ類（32 ～ 34）、体部中央に孔のあるⅱｂ類（28・31）がある。ⅲａ類に近い土錘も出土している。著しく細長い形態のものはⅳ類とし、長軸方向に溝が通るⅳａ類（26・27）、長短両軸方向に溝が通るⅳｂ類（35）、溝の中央に孔のあるⅳｃ類（29・30）に分類できる。極小型品は粘板岩など、滑石以外の石材も多い。ⅱまたはⅲ類の未成品が出土している。

平面形が円形に近く、中央に綱孔をもつ石錘は Kg 単位の重量がある。環状のⅥ１類（36・37）と厚みのある半球形または筒形のⅥ２類（38 ～ 40）に大別できる。平面の直径 11㎝前後、重量１～３㎏の滑石製品が平均的であるが、37 は直径 20㎝、重量 7㎏を超える花崗岩製品。36 ～ 38 のように中央孔より小さな紐通し孔が側面付近にＬ字形に走るものが一定量あり、垂下のバランスを保つための工夫とみられる。Ⅵ２類の未成品が出土している。他には加工の少ない礫石錘や打欠石錘のⅦ類も出土しており、重量的には超大型（最大で３ｋｇほど）、大型が多い。

これらの機能としては、Ⅰ類が天秤釣など外洋の大型釣漁、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類が袋網系網漁、ⅱ～ⅳ類が小型釣漁、Ⅵ類が刺網系網漁と考えている。Ⅰ類石錘は弥生時代中期末から後期前半に糸島東部で

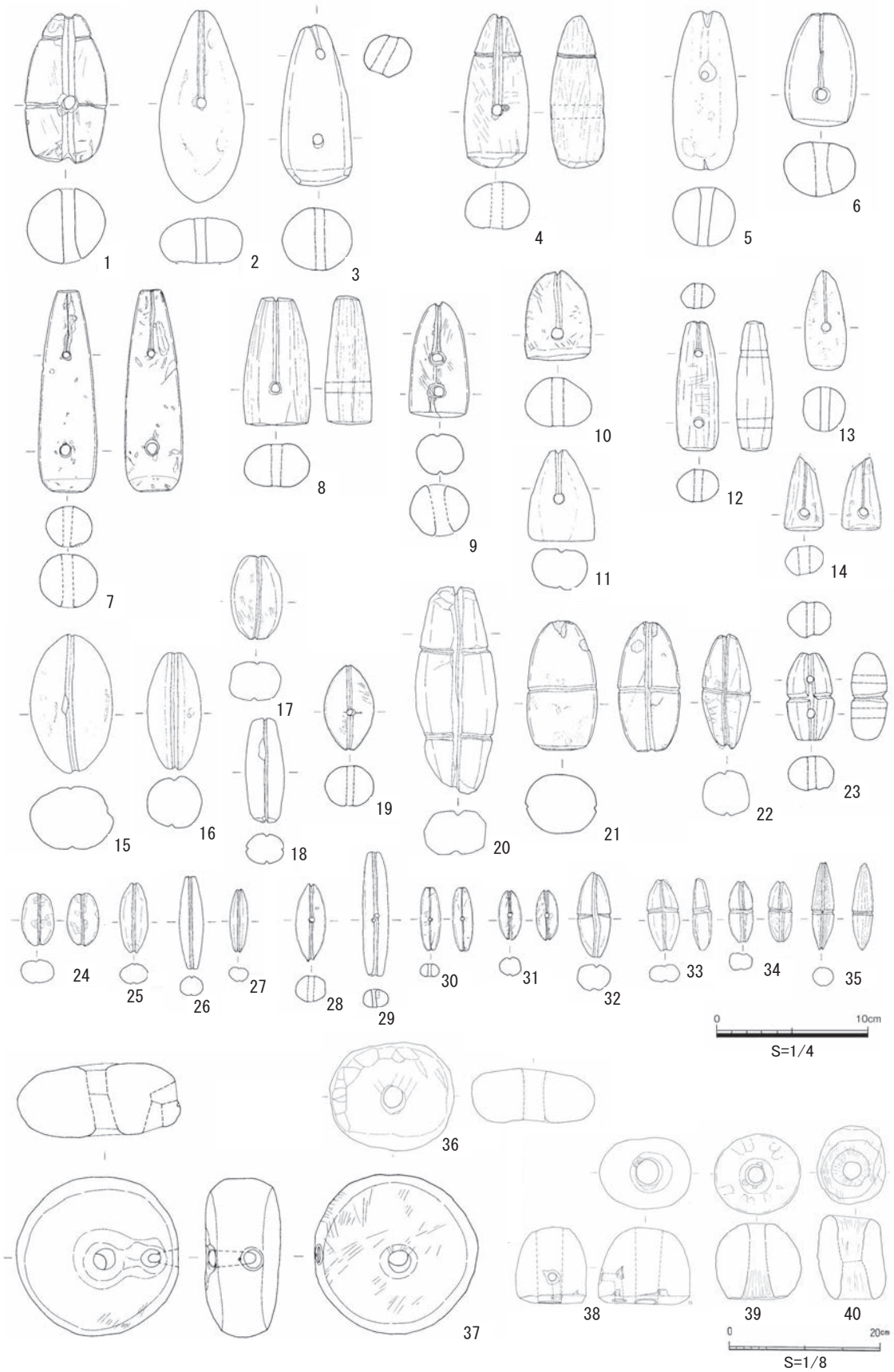

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm
S=1/4
36
37
38
39
40
0
20cm
S=1/8

図16　石錘

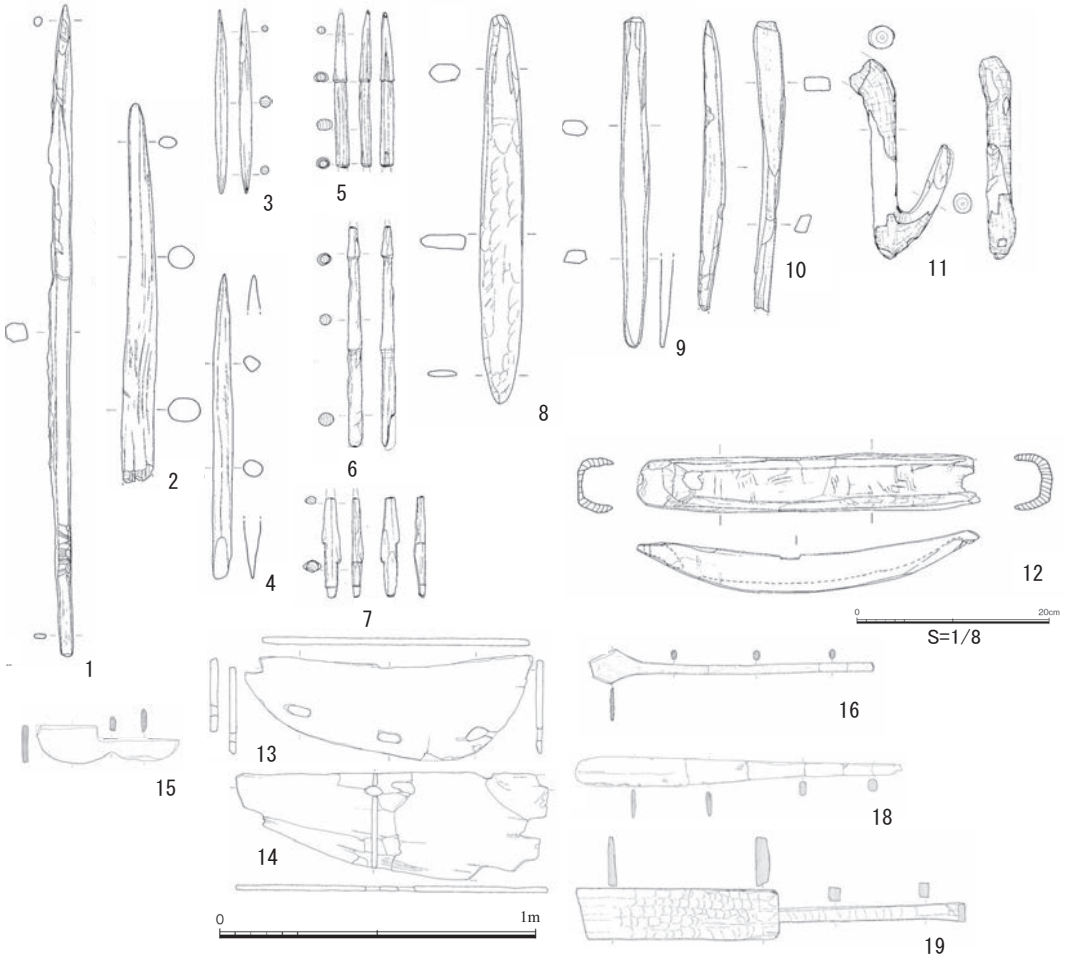


図17　木製漁具・船材

成立し（Ⅰ B 類がやや先行）、後期にはⅡ～Ⅳ類とあわせて糸島から早良西部を中心とする博多湾西部圏を形成する（ii～iv類、Ⅵ類などは博多湾東部と共通）。当遺跡群や大原 B 遺跡、今宿五郎江遺跡などがその博多湾西部圏の中心的な遺跡である。九州型石錘のほぼ全ての種類がそろっており、各種の未成品も出土している。今津の滑石原産地に近く、自給生産のほか、福岡平野周辺や壱岐島、さらに朝鮮半島の勒島など他地域への供給の可能性も考えられる。

他の漁具は図 17 に主なものを示す。骨角器や鉄製の漁具はなく、木製品である。1 ～ 7 は銛やヤスなどの刺突具で複数を組み合わせる加工のものもある。イスノキなど強靭な材質で作られている。8 ～ 10 のヘラ状製品はアワビオコシとみられ、これもイスノキを材料とする。11 はⅥ類石錘を吊り下げるための鉤状製品として碇の可能性が報告されている。他には網枠が出土している。

12 ～ 18 は船に関わる木製品である。12 は舳と艫の反りや側面の直線的な形状からみて準構造船をモデルとしている。船の部材と同じくクスノキ製で長さは 36㎝を測る。容器としても使用できる、祭祀具（形代）であろう。13 ～ 15 はクスノキ製の準構造船部材（波除板など）である。16 ～ 18 は推進具の櫂で、カシなど硬質な木材が使われている。他にも舵または櫂とみられる木製品やアカトリなどが出土している。

4．まとめ

以上、多岐にわたる資料を概観してきたが、その中でも当遺跡の対外交流の特質を示す資料を中心に、時期的変遷などを整理する。

Ⅰ段階（弥生時代中期後半から後期前半）

三角形粘土帯土器（勒島式土器）段階の無文土器が多く出土しており、対馬・壱岐を除く九州では最も集中する。無文土器は多器種にわたり、朝鮮半島南部からの人々の往来にともなってもたらされたり、この地で製作されたものであろう。楽浪系土器はまだほとんど流入していない段階とみるが、鋳造鉄斧や中国銭の一部などの中国系金属器の流入は始まっている。外来系弥生土器は瀬戸内や山陰系の土器を中心とした東方からの流入が増加する。伊都国の成立・発展とも連動して、交流のクロスロードとなっていく段階であろう。

Ⅱ段階（弥生時代後期後半から古墳時代初頭）

三韓系瓦質土器や楽浪系土器の多くはこの段階の流入とみられる。格子目タタキの弥生土器・土師器もこの段階に当遺跡で集中的に生産されている。前段階の無文土器にみる渡来人の往来の延長で、三韓系土器の搬入や、格子目タタキ土器生産という土器文化の融合現象が生じていると考えられる。楽浪系土器は少なくとも数十個体以上ある今宿五郎江遺跡に比べれば少ないが、小型鉢（椀）を主体とする器種構成は共通していて、交易品の集積遺跡としての性格をうかがうことができる。このような器種構成の偏りからは対外交流における伊都国の調整・管理が働いているとも考えられる。外来系の弥生土器は前段階から流入している山陰系土器を主体とするもので、瀬戸内系その他の土器よりも多い。山陰（主に西部の石見から出雲地域か）からの人々の往来によるものである。このような遺跡は北

表 元岡・桑原遺跡群出土の外来系土器

掲載番号	資料名	出土遺構・包含層	報告集数	報告図	備考
1-1	孔列文土器	包含層	1328	32-4	
1-2	孔列文土器	C1区縄文晩期包含層	1328	35-26	
1-3	孔列文土器	C1区縄文晩期包含層	1328	35-43	
2－1	無文土器無頸壺	土器群I13	1276	76－742	筆者実測図 弥生後期前半段階か
2－2	無文土器蓋	土器群I24	1354	73－140	図加筆
2－3	無文土器鉢	包含層	1276	115－1259	1260同一個体
2－4	無文土器把手付壺	土器群I22	1354	71－118	図加筆
2－5	無文土器甕	土器群I35	1276	101－1070	図加筆 弥生中期後半～後期前半段階か
2－6	無文土器甕	SD01(D4区下層)	1275	56－443	断面図修正 弥生中期末段階か
2－7	無文土器甕	土器群I21	1354	66－27	図加筆
2－8	無文土器甕	包含層	1276	115－1258	図加筆
2－9	無文土器壺	土器群I31	1354	88－342	図加筆
2－10	無文土器甕	土器群I06	1276	50－449	図加筆
2－11	擬無文土器甕(深鉢形)	土器群I25	1354	76－166	図加筆
2－12	擬無文土器甕(深鉢形)	土器群I1B	1174	31-145	図加筆
2－13	擬無文土器甕	土器群2	1174	66-511	
	内面粘土帯甕	土器群I06	1276	50－463	
	内面粘土帯甕	土器群I23	1276	95－1004	弥生中期後半段階か
3－1	瓦質土器長頸壺	土器群9A(C･D6･7区付近)	1275	83－720	弥生後期前半段階の可能性
3－2	瓦質土器壺	No1トレンチ･ベルト(土器群2)	1174	73－584	
3－3	瓦質土器壺	E1･2区東拡張(土器群5連続)	1174	124－1076	2と同一個体？
3－4	瓦質土器短頸壺	土器群5A(E1区)	1174	87－714	古墳時代初頭前後段階か
3－5	瓦質土器壺(把手片)	包含層	1276	115－1262	
3－6	瓦質土器壺(把手片)	土器群5A(E1区)	1174	87－715	古墳時代初頭前後段階か
3－7	瓦質土器壺(頸部片)	包含層	1276	115－1263	
3－8・9	瓦質土器壺	包含層	1276	115－1267 115－1270	1264、 1266も同一個体
3－10	瓦質土器壺	包含層	1276	115－1269	
3－11	陶質土器壺	W7･8土層ベルト	1354	91－386	
3－12	陶質土器壺	土器群I06	1276	50－452	
3－13	陶質土器壺	包含層	1276	115－1268	1265と同一個体
3－14	陶質土器壺	土器群I06	1276	50－453	内面赤彩
3－15	瓦質土器壺	C7区下層	1380	14－110	
	瓦質土器壺	土器群5GW間層(E1区)	1174	107－904	
	瓦質土器壺	土器群I04	1276	31－206	
	陶質土器壺	64次SX051	1302	8-17	4～5世紀
	陶質土器甕	包含層	1276	115－1271	4～5世紀
4－1	楽浪系土器鉢	包含層X6	1354	118-60	図改変
4－2	楽浪系土器鉢	土器群I06	1276	50－450	筆者実測図
4－3	楽浪系土器鉢	SD01(D5区1層)	1275	68－574	
4－4	楽浪系土器鉢	包含層(B1区上層)	1174	18－29	筆者実測図
4－5	楽浪系土器鉢	包含層	1276	115－1261	
4－6	楽浪系土器鉢	土器群I05	1276	34－240	
4－7	楽浪系土器壺	包含層(B1区上層)	1174	18－16	筆者実測図
5－1	擬三韓系土器壺	土器群I12	1276	62－594	
5－2	擬三韓系土器壺	土器群5A(E1区)	1174	87－716	図加筆
5－3	甑(底部)	土器群I06	1276	50－473	
5－4	甑(底部)	土器群8(C1区)	1174	47－292	
6-1	格子目タタキ大甕	土器群5B(E1区)	1174	91－761	
6-2	格子目タタキ大甕	土器群5B(E1区)	1174	91－760	
6-3	格子目タタキ大甕	土器群5B(E1区)	1174	91－762	
7-1	格子目タタキ甕か壺	土器群5F(E1区)	1174	105－886	
7-2	格子目タタキ甕	土器群5X(E1区)	1174	108－914	
7-3	格子目タタキ甕	土器群6A(E1区)	1174	82－655	
7-4	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－795	
7-5	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－792	
7-6	格子目タタキ甕	包含層(E1区上層)	1174	75－607	
7-7	格子目タタキ甕	土器群I06	1276	50－451	
7-8	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－796	
7-9	格子目タタキ甕	土器群5D(E1区)	1174	102－861	
7-10	格子目タタキ甕	包含層(B1区上層)	1174	18－19	
7-11	格子目タタキ甕	包含層(B1区上層)	1174	18－20	
7-12	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－798	
7-13	格子目タタキ甕	包含層(C1･2区)	1174	43-266	
7-14	格子目タタキ甕	包含層(C1区上層)	1174	38－204	
7-15	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－800	
7-16	格子目タタキ甕	土器群5B(E1区)	1174	96－794	
8-1	格子目タタキ壺	土器群5B(E1区)	1174	96－797	
8-2	格子目タタキ壺	包含層(C1･2区)	1174	42－256	
8-3	格子目タタキ壺	土器群5B(E1区)	1174	96－799	

表 元岡・桑原遺跡群出土の外来系土器

掲載番号	資料名	出土遺構・包含層	報告集数	報告図	備考
8-4	格子目タタキ壺	包含層(B1区上層)	1174	19－32	
8-5	格子目タタキ壺	土器群5C(E1区)	1174	101－852	
8-6	格子目タタキ壺	土器群8(C1区)	1174	47－291	
8-7	格子目タタキ壺	土器群120、包含層(X5、X6)	1276	113－1227	
8-8	格子目タタキ壺	土器群5B(E1区)	1174	96－793	
9-1	格子目タタキ鉢	土器群5B(E1区)	1174	97－803	
9-2	格子目タタキ鉢	包含層(C1・2区)	1174	41－247	
9-3	格子目タタキ鉢	土器群5A(E1区)	1174	88－739	
9-4	格子目タタキ鉢	土器群5B(E1区)	1174	97－809	
9-5	格子目タタキ鉢	包含層(B1区上層)	1174	18－25	
9-6	格子目タタキ土器 脚付の鉢か壺	包含層(C1区上層)	1174	41－243	
9-7	格子目タタキ器台	包含層(Z2)	1276	113－1236	
9-8	格子目タタキ器台	包含層(C1区上層)	1174	38－206	
9-9	格子目タタキ器台	包含層(C1区上層)	1174	41－244	
9-10	格子目タタキ器台	土器群5B(E1区)	1174	98－825	
9-11	格子目タタキ器台	糸島高校旧蔵 京都大学総合博物館所蔵	1276	148	常松幹雄氏実測
9-12	格子目タタキ器台	包含層(B1区上層)	1174	18－22	
9-13	格子目タタキ支脚	土器群5B(E1区)	1174	100－847	
9-14	格子目タタキ支脚	包含層(Y・Z2)	1276	113－1238	
	格子目タタキ土器	土器群5、8、9、包含層	1174	17、23、33、207、208、295、440、464、480、537、538、724、740、791、810、824、827、829、857、872	
	格子目タタキ土器	SD01　1層	1275	26-182　107-949	
	格子目タタキ土器	包含層	1276	113-1228~1233、1237	
10－1	備後系(塩町式)壺	土器群106	1276	38－268	
10－2	山陰・瀬戸内系壺	包含層	1276	114－1239	
10－3	山陰・瀬戸内系甕	SD01(D・E5・6区間ベルト)	1275	75－637	図改変
10－4	山陰系大型甕	土器群125	1354	76－169	
10－5	山陰・瀬戸内系甕	土器群104	1276	31－208	
10－6	山陰・瀬戸内系甕	土器群136	1276	103－1093	
10－7	山陰・瀬戸内系甕	E1・2区東拡張(土器群5連続)	1174	127－1108	
10－8	山陰系甕	土器群121	1354	66－28	
10－9	山陰系甕	V8区	1354	92－407	
10－10	山陰系甕	包含層	1276	114－1241	
10－11	山陰系甕	土器群121	1354	66－31	
10－12	山陰系甕	土器群9	未報告		筆者製図
10－13	山陰系甕	包含層	1276	114－1242	断面図修正
10－14	山陰系甕	土器群121 包含層	1354 1276	66－29 114-1240	断面図修正
10－15	山陰系甕	土器群127	1354	78－223	
10－16	山陰系甕	V8区	1354	92－408	
10－17	山陰系甕	包含層(C1区上層)	1174	39－220	
10－18	山陰系甕	V8区	1354	92－406	
10－19	山陰系土器	土器群106	1276	50－447	断面図修正
10－20	山陰系甕	D5・6区東西ベルト	未報告		筆者製図
10－21	瀬戸内系壺	X4区	1276	108-1145	
10－22	讃岐系甕	土器群106	1276	50－448	
10－23	東海系?小型高杯	土器群104	1276	31－207	
10－24	瀬戸内系?高杯	包含層(B1区上層)	1174	18－24	
10－25	北陸系器台	桑原1次SC05	432	22－83	図加筆 古墳時代初頭
	山陰系土器甕	土器群117	1276	87－883	
	山陰系土器	SD01(C・D6・7区)	1275	107－953	図より外傾
	山陰系甕	土器群121	1354	66－30	図より外傾
	山陰系甕	土器群125	1354	76－168	図より外傾
	山陰系甕	土器群125	1354	76－167	
	瀬戸内系壺	土器群106	1276	50－446	
11－1	西瀬戸内系壺	土器群106	1276	50－441	
11－2	豊前系壺	土器群106	1276	44－343	
11－3	豊前系壺	土器群112	1276	61－588	
11－4	豊前系壺	包含層	1276	112－1203	
11－5	豊前系壺	土器群112	1276	61－587	
11－6	豊前系?器台	土器群136	1276	104－1100	
11－7	肥後系ジョッキ形土器	包含層	1276	114－1255	
11－8	台付甕	土器群113	1276	80－771	
11－9	大型鉢	土器群1B	1174	64－491	
12－1	ヒョウタン形壺	No1トレンチ・ベルト(土器群2)	1174	73－580	
12－2	ヒョウタン形土器	V8	1354	93－2	
12－3	ヒョウタン形土器	W7S	1354	93－3	
12－4	ヒョウタン形土器	土器群121	1354	67-47	
12－5	ヒョウタン	X7区	1354	99－40	

部九州の中でも少なく、受け入れる窓口が限られていたと考えられる。これも国の調整・管理の表れであろう。

土器以外の対外交流に直接関連する文物も少なくない。中国・楽浪系遺物は鋳造鉄斧（伐採斧）、銭、内行花文鏡片、刀子鞘尻金具（文房具？）、辰砂（朱の原料）があり、朝鮮半島南部の三韓系遺物は漆塗り精製容器と鉄素材状の板状鉄器もその可能性がある。ガラス小玉は両地域からの流入の可能性がある。時期を絞れる資料はそう多くないが、遺物の型式や出土層位から少なくとも鋳造鉄斧の一部、五銖銭や貨泉の一部、鞘尻金具などはⅠ段階から流入している。これらは当時の交易品のごく一端にすぎないであろうが、鞘尻金具や漆塗り精製容器は希少資料であり、中国銭の多量出土も当遺跡の特質である。これらの舶載品は遺跡周辺での消費のほか、伊都国東部の荷揚げ地の一つとして流通の起点に集まった品々でもあったと考えられる。それらは外来系弥生土器の様相からみて、山陰や瀬戸内地域、さらに列島の遠方まで流通する品々であったろう。

石錘をはじめとする漁具についても言及した。時期的な変遷については明らかにしえなかったが、弥生時代後半期における博多湾西部圏の九州型石錘セットが豊富に揃っている。糸島東部の今津湾沿岸の遺跡がこのような石錘セットの確立地であり、生産中心であったことを補強する資料群であろう。弥生時代中・後期段階でこのような石錘が出土する他地域の遺跡（九州や朝鮮半島南部）とは、糸島東部の海民を介在する交流関係も想定できよう。

【図の出典】

図 1 ～ 12　表 1　**図 13**　1：1246 集 36 － 146、2：1354 集 97 － 3、 3：1246 集 36 － 147、 4：1246 集 33 － 133、5：1246 集 68-82　**図 14**　1：1174 集 129-1133、2：1174 集 129-1131、3：1174 集 129-1132、4：1174 集 129-1130、5：1174 集 129-1135、6：1276 集 119-62、7：13544 集 97-3、8：1276 集 91 － 943、9：1275 集 110-996、10：1276 集 119-63、11：1275 集 110-999、12：1276 集 119-70、13：1276 集 119-74、14：1276 集 120 － 75、15：1276 集 120 － 78、16：1275 集 81-682、17：1354 集 118-61、18：1354 集 68-64、19：1276 集 111 － 1195、20：1354 集 91-375、21：1276 集 48 － 406、22：1276 集 111 － 1190、23：1276 集 38 － 275、24：1276 集 111 － 1084、25：1276 集 100 － 1054、26：1354 集 77-190、27：1174 集 33-173、28：1275 集 43-333、29：1276 集 111 － 1182、30：1354 集 69-92、31：1276 集 48 － 401、32：1276 集 111 － 1191、33：1276 集 48 － 389、34：1354 集 91-377、35：1174 集 33-174、36：1276 集 120 － 77、37：1276 集 50 － 475、38：1276 集 111 － 1198、39：1354 集 66-41、40：1276 集 111 － 1196、41：1276 集 111 － 1193、42：1276 集 48 － 411、43：1276 集 111 － 1187、44：1276 集 94 － 990、45：1276 集 48 － 408、46：1276 集 48 － 397、47：1276 集 48 － 382、48：1276 集 48 － 405、49：1276 集 48 － 397　50：1276 集 111 － 1185、51：1276 集 48 － 404、52：1276 集 48 － 386、53：1276 集 48 － 402、54：1276 集 48 － 378、55：1276 集 48 － 375、56：1276 集 111 － 1197、57：1354 集 67-60

図 15　1：15 次 860 集 26-1、2：1246 集 14-34、3：1246 集 14-32、4：1246 集 14-30、5：1174 集 130 － 1171、6：1276 集 141 － 5、7：1276 集 141 － 6、8：1354 集 135-30、9 ～ 17：1246 集 9 － 1 ～ 9、18：1246 集 11-20、19：1246 集 10-11、20：1246 集 10-10

図 16　1：1328 集 128 － 109、2：1328 集 16-136、3：1246 集 128-67、4：1246 集 136-172、5：1328 集 16-137、6：1246 集 128-63、7：1246 集 137-173、8：1246 集 128-64　9：1354 集 128-114、10：1246 集 128-61、11：1328 集 16-142、12：1246 集 128-66、13：1328 集 16-140、14：1246 集 128-60、15：1328 集 15-108、16：1328 集 15-118、17：1246 集 135-154、18：1328 集 15-114、19：1246 集 128-59、20：1246 集 127-53、21：1246 集 135-157、22：1246 集 127-52、23：1246 集 128-65、24：1246 集 135-150、25：1246 集 135-144、26：1328 集 15-121、27：1246 集 135-143、28：1246 集 128-58、29：1328 集 15-115、30：1246 集 128-57、31：1246 集 128-56、32：1328 集 15-123、33：1246 集 127-48、34：1246 集 127-46、35：1246 集 135-156、36：1246 集 138-182、37：1246 集 130-72、38：1246 集 129-71、39：1354 集 130-139、40：1354 集 130-138　**図 17**　1：1354 集 112 － 119、2：1246 集 60 － 343、3：1275 集 117 － 41、4：1246 集 59 － 312、5：1275 集 117 － 40、6：1275 集 117 － 42、7：1275 集 117-43、8：1354 集 103 － 76、9：1246 集 60 － 334、10：1246 集 60 － 333、11：1275 集 117 － 44、12：1246 集 33 － 134、13：1246 集 56 － 298、14：1246 集 56 － 297、15：1246 集 46 － 264、16：1246 集 56 － 296、17：1246 集 113 － 21、18：1354 集 113 － 21

【主要参考文献】

国立晋州博物館 2016『国際貿易港勒島と原の辻』特別展図録

常松幹雄 2016「弥生時代　24. 元岡・桑原遺跡群」『新修福岡市史　考古資料編 1 』福岡市

三坂一徳 2010「日本列島出土孔列土器の製作技術」『考古学は何を語れるか』同志社大学考古学シリーズ

村田好子・中尾篤志 2014「九州型石錘の集成と展望」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』 4

森本幹彦 2008「弥生時代の韓半島系遺物からみた対外交渉」『韓日文化交流』釜山博物館

森本幹彦 2015「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』66-4

森本幹彦 2015「海人集団の東西」『みずほ別冊 2　弥生研究の交差点　池田保信さん還暦記念』大和弥生文化の会

森本幹彦 2017「弥生・古墳時代の博多湾沿岸に流入した中国銭」『福岡市博物館研究紀要』26

森本幹彦 2018「玄界灘沿岸地域における韓半島系土器の様相―粘土帯土器・三韓系土器・楽浪系土器―」『土器・金属器の日韓交渉』新・日韓交渉の考古学－初期鉄器～原三国時代・弥生時代研究会第 2 回共同研究会

李昌熙 2009「在来人と渡来人」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学 2　同成社

元岡・桑原遺跡群周辺　発掘調査報告書（本稿関連、2018 年刊行まで）

福岡市教育委員会 1995『桑原遺跡群』（第 432 集）、1996『小葎遺跡』（第 541 集）、2007『元岡・桑原遺跡群 10』（第 964 集）、2012『元岡・桑原遺跡群 21』（第 1174 集）、2014『元岡・桑原遺跡群 23』（第 1246 集）、2015『元岡・桑原遺跡群 24』（第 1275 集）、2015『元岡・桑原遺跡群 25』（第 1276 集）、2017『元岡・桑原遺跡群 28』（第 1328 集）、2018『元岡・桑原遺跡群 29』（第 1354 集）

特論４　元岡・桑原遺跡群の古墳の変遷から見た社会構造の変化について

大塚 紀宜

はじめに

20 年にわたる元岡・桑原遺跡群の調査では、前方後円墳３基（桑原金屎・元岡石ヶ原・元岡 E-1）を含む計 46 基の古墳が発掘調査された。そのほかに遺跡内には３基の前方後円墳（元岡池ノ浦・峰・塩除）が存在し、併せて大型円墳や群集墳等の古墳が確認されている。

また、同遺跡近隣には泊大塚古墳や御道具山古墳等の前方後円墳があり、元岡・桑原遺跡群内の前方後円墳群を含め、志摩地区の首長墓系譜を追うことができる古墳群として捉えられている。

古墳から出土した副葬品も、桑原石ヶ元古墳群の鍛冶関連遺物や、元岡Ｇ－１号墳の圭頭把頭、元岡Ｇ－６号墳の庚寅銘大刀など特筆すべきものが多く、古墳時代の元岡・桑原地区の社会的な特徴を反映したものといえる。

この論では、元岡・桑原地区の古墳について、主に遺跡立地の観点から概観し、桑原石ヶ元古墳群と元岡古墳群Ｇ群という古墳時代後期～終末期の２つの古墳群について詳細に検討を行う。その上で古墳時代における元岡・桑原地区の位置づけを行いたい。特に、８世紀に大規模な製鉄活動が行われた桑原地区の社会構造の萌芽が古墳時代後期の古墳造営と追善祭祀にみられることを本論で明らかにしたい。

１．元岡・桑原地区の古墳について

（１）前方後円墳・大型円墳

１）発掘調査を実施した前方後円墳・大型円墳

調査を実施した３基の前方後円墳と１基の大型円墳については、調査概要と筆者所見を記しながら古墳の内容を確認していく。

桑原金屎古墳

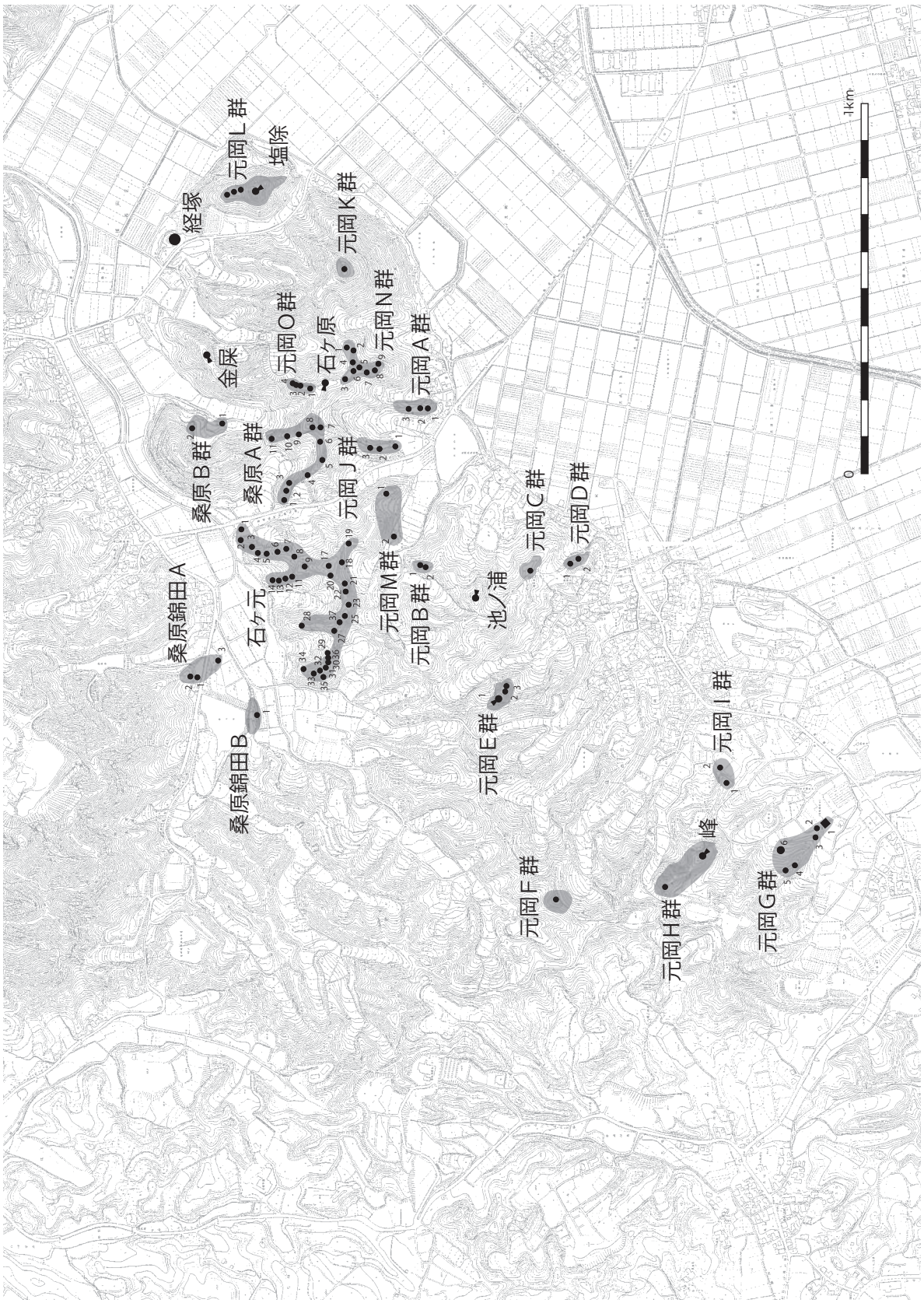
前期の前方後円墳で、大原川の南側の標高 53m の丘陵の狭小な尾根頂部に位置する。尾根は南東から北西に向けて伸びており、古墳墳丘は前方部を南東に向けて築造される。墳丘土砂の流出がかなり進んでおり、現状では現地で墳丘の前方後円形を確認することは困難で、墳裾のラインを追うことも難しい。

調査では墳丘が位置する尾根にトレンチを設定し、墳丘主軸方向のトレンチと直行する 10 本のトレンチ、さらに前方部と後円部の境界部と前方部隅角の確認、後円部確認のための５調査区を設定した。

古墳の規模は墳丘全長約 24.0 ～ 24.2m、後円部径 12.5 ～ 12.7m、前方部幅約 12m と復元され、墳丘形状は後円部３段、前方部２段築成で、地形に従ってやや不整な形状を呈する。基底部からの墳丘高は後円部で２m、前方部で 1m を測り、うち盛土の厚さは 60 ～ 80cm で、元々尾根部で盛り上がっていた地山をある程度削った後に盛土を低く積み上げて墳丘を築造している。

主体部は後円部中央部に位置し、5.2 × 4.1m の方形に地山を掘り下げた後、墓壙周囲に掘削土を積み上げて地山上に墓壙壁を築く、構築墓壙である。

棺は割竹形木棺で、全長 2.7m、幅 50 ～ 67cm の割竹形木棺を墓壙のほぼ中央に設置している。棺の底面に残る頭骨部圧痕から、被葬者の頭位は南西側、すなわち前方部側に向いていたと考えられ



第1図　元岡・桑原遺跡群の古墳分布

る。頭部両側には銅鏡が各 1 面ずつ、鏡面を内側に向けて立てて置かれていた。また、木棺床面に赤色顔料（水銀朱・ベンガラ）が塗布されていた。

2 面の銅鏡は中国鏡とみられる。頭部右側に置かれた鏡は菱雲文鏡で、面径 13.2cm で、鈕座には小型の変形四葉座を配し、内区文様は直線で菱型に区画された内部に雲文が廻る。文様の特徴から西晋代に下るものとみられる。鏡面に麻等の植物繊維による織物が付着する。頭部左側に置かれた鏡は芝草文鏡で、面径 11.6 ～ 11.65cm を計る。文様は 4 つの乳とその周囲に細い陽線で唐草文（芝草文）を廻らせる。乳や唐草文の配置に規格性がなく、湯回りも不良である。西晋後期～東晋の作と考えられ、鏡面に絹織物の付着が見られる。

副葬品は銅鏡の他、木棺外から古式土師器・ガラス小玉が出土している。土師器は粘土郭被覆粘土の落ち込みから出土した壺または甕の胴部上位の小破片で、古墳時代前期後半とみられる。ガラス玉は径 2.8mm の緑色小玉で、分析の結果、国内では弥生前期末から古墳後期まで流通したカリガラスと判明した。

前方部にも第 2 主体部があったとみられ、木棺の痕跡とみられる溝を検出している。

古墳の年代は墳丘形状、副葬遺物から古墳時代前期後半とみられ、4 世紀代と推定される。また、トレンチ調査の結果から、前方部に隣接して方墳とみられる盛土基底部が確認され、同様に後円部の北東側にも 7.7m × 4.8m の長方形墳丘を持つ古墳が想定されている（福岡市教育委員会編 2006a）。

元岡石ヶ原古墳

後期の前方後円墳で、水崎山から東に延びる丘陵の中央頂部に位置し、標高は 70m を測る。この地点を基部として丘陵が八つ手状に広がり、北西に延びる丘陵上には桑原金屎古墳が立地する。

墳丘は果樹園の造成の影響を受けて大きく改変されていた。あわせて前方部中央に溝や柱穴があり、中世山城による改変も考えられる。墳丘全長は 49m、後円部は径 25m 高さ 5m、前方部は長さ 26m 幅 23m 高さ 3m で、後円部は 2 段築成、前方部は 1 段築成である。墳丘表面に葺石は見られない。墳丘盛土は、後円部では地山整形で 3m 程度の高さに削り出した高まりの上に盛られており、石室築造と同時に築成された一次盛土と、墳丘整形時に盛られた二次盛土に分けられる。後円部では地山整形の上に 50cm ～ 1m の盛土が遺存している。

主体部は横穴式石室で、石材の大半は既に抜き取られており、奥壁と右側壁腰石の石材を中心に遺存していた。石室規模は全長 5.7m、玄室右側壁長 3.6m、奥壁幅 2.1m、羨道長 2.1m、羨道幅 80cm を測る。使用されている石材は長 70cm から最大 1.8m の長方形の割石と転石を使用している。羨道はハの字に開いており、玄門部と羨道中央部の 2 か所に梱石を置き、両者の幅 40 ～ 50cm の間隙に敷石を敷いている。羨門部には 150 × 80cm の板石があり、閉塞石として立てられていたとみられる。

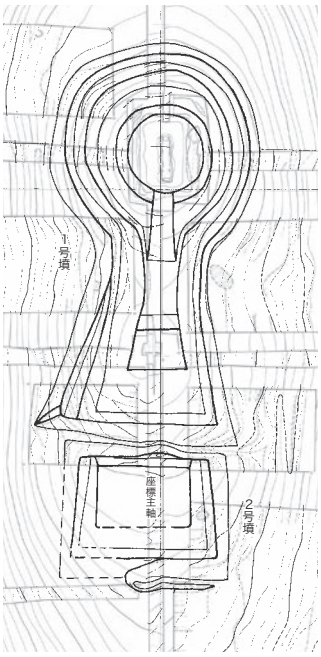
石室からは須恵器や土師器が出土したが、石室内は撹乱され、副葬品で原位置を保つものはない。墳丘からは須恵器・土師器の他、大刀、鉄矛、鉄鎌、鉄鏃、鋲具、留金具等が出土し、武器や馬具が副葬されていたことがうかがえる。須恵器には坏・高坏・瑞の他、台付子持ち瑞、皮袋形土器、鹿形瑞等の特殊な器形も含まれる。

出土した須恵器の型式は TK10 ～ TK43 で、古墳の築造が 6 世紀半ば、その後 6 世紀後半まで追葬・祭祀が行われたと考えられる（福岡市教育委員会編 2006a）。

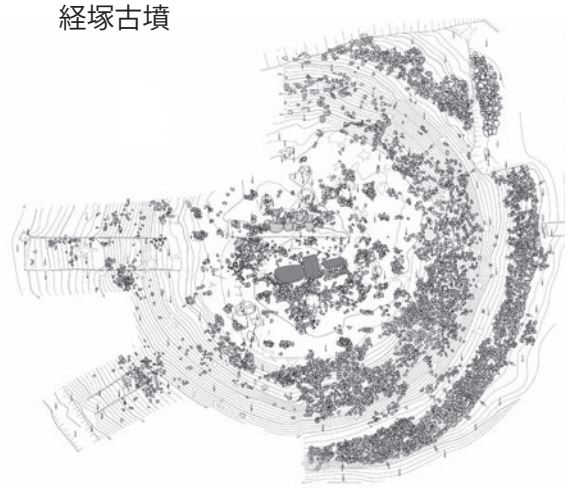
元岡E―1号墳

南北に延びる丘陵尾根部の最高所に位置し、標高 65m の丘陵頂部に立地する。この丘陵の東側に

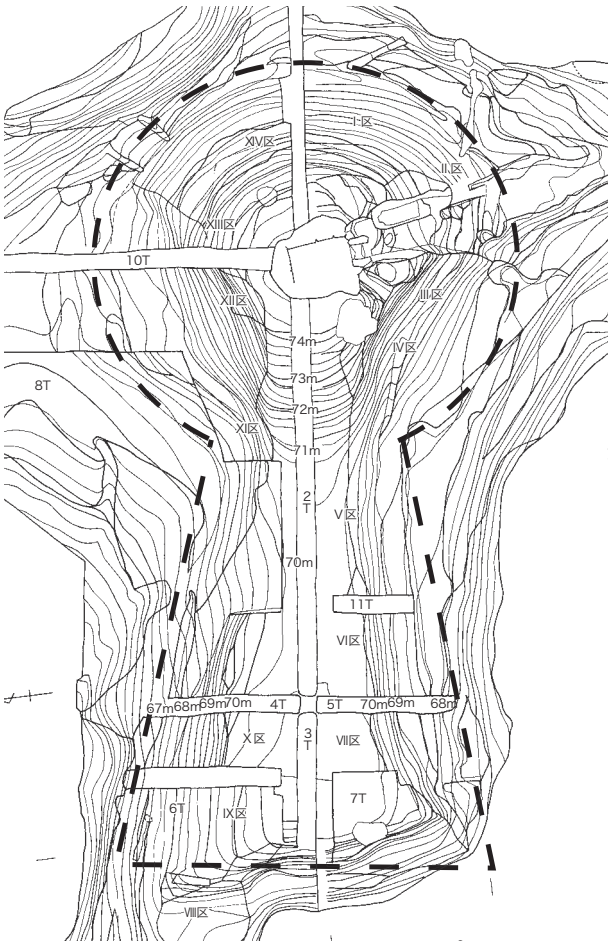
桑原金屎古墳



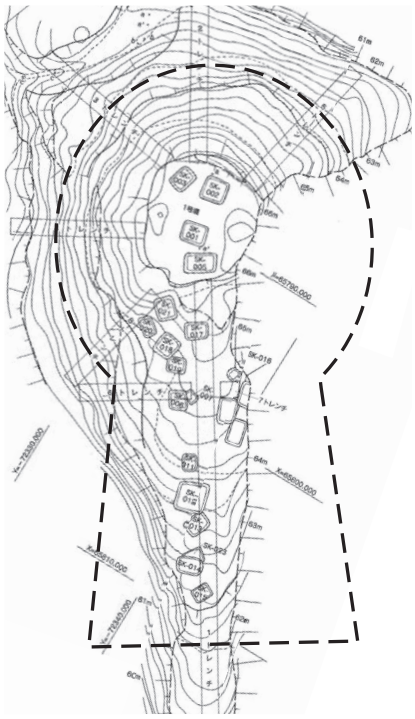
経塚古墳



元岡石ヶ原古墳



元岡Ｅ古墳群１号墳



第2図　元岡・桑原遺跡群の前方後円墳・大型円墳（発掘調査を実施したもの）

隣接する尾根上には元岡池ノ浦古墳が立地する。

墳丘は西側が大きく削られ、全体に造成を受けていて築造時の形状は留めていないが、墳丘全長35m、後円部径 22m、前方部長 15m に復元でき、後円部は主軸方向に長い楕円形を呈する。古墳裾部から古墳頂部までの高さは後円部で 3.4m、前方部で 3.5m を測る。後円部は尾根頂部に築造し、前方部は北東に延びる尾根上に延びている。墳丘は地山を削り出した後に頂部に盛土造成を行って構築したとみられる。墳丘盛土は後円部に一部遺存し、黄褐色砂質土と暗茶褐色砂質土が版築状に積まれて硬く締まる。墳丘外表で葺石等は確認できない。墳丘の遺存状況からみて段築は後円部、前方部ともに 2 段築成と推定できる。

後円部の墳頂部は大きく削平され、近世の墓壙によって一部が破壊されていたが、表土直下で長さ 1m 幅 30cm の範囲で灰白色粘土が貼られた状況が確認でき、これが主体部の粘土郭床面と推定され、主体部は棺を割竹形木棺で作り、粘土郭で覆っていたとみられる。

粘土郭の灰色粘土内から方格 T 字鏡が 1 面出土した。出土時には鏡の直上、直下で黒色炭化物層が確認され、木目状の痕跡が確認され、木箱等の板の上に置かれたものとみられる。鏡は直径 9.2cm で小型鏡の部類に属する。内区の二重の方格の外側には T 字文と 8 座の円乳座を配置し、方格内には 12 個の円乳座を配する。外区には外向鋸歯文と複波文を施文する。文様は不鮮明で、内区の T 字以外の文様が見られず、踏み返し鏡または鋳型の再利用による鋳造品とみられ、技術的に劣る仿製鏡とみられる。

墳丘、主体部ともに遺存状況が悪く、時期を判断できる出土遺物にも乏しいが、古墳時代前期（4 世紀）に築造された可能性がある（福岡市教育委員会編 2005）。

経塚古墳

桑原地区に位置する古墳で、水崎山から北に延びる丘陵の先端部に位置し、現地の標高は 12m である。墳丘北側 40m で丘陵端部に達し、古墳築造当時は古墳のすぐ下が海岸線だったとみられる。

古墳付近の地形は道路の敷設や農地造成による地下げ等で大きく改変され、墳丘の西側墳裾と古墳東側の削平が著しい。

墳丘は円墳で、直径 30m、高さ 3.6m を測り、二段築成で 1 段目は墳裾から 70 ～ 1.2m の高さで、幅 1m のテラスを設ける。2 段目はテラスから 2.2 ～ 2.5m の高さで、墳丘斜面の傾斜は 1 段目よりも急である。墳丘外表面にはテラス面を除いて 10 ～ 20cm 大の石を敷いて葺石としている。葺石は地割り線に基づいて規格的に敷設され、区画ごとに石材が異なるなど施工分担が分かれていたことが想定される。

墳丘周囲には周溝が掘られていたとみられるが、現状では墳丘西側から南側のみに遺存する。周溝の幅は 6m で、墳裾から 3m の間隔を置く。墳丘中心から周溝外縁まで直径 49m の規模が想定される。

主体部は竪穴式石室とみられ、墳丘中央に石室天井石とみられる板石が墳丘頂部に立てられており、古代末から中世にかけて立石信仰の対象とされていたことが記録されている。立石西側に石室西側側壁上面とみられる列石が確認されている。保存のため主体部内部の調査は行っておらず、主体部の規模や形状は不明である。

古墳頂部の平坦面に分布する敷石群は古代末～中世の祭祀関連の遺構とみられる。

出土遺物は須恵器・埴輪で、埴輪には円筒埴輪の他、家形埴輪も出土しており、墳丘外表は埴輪が建てられ、葺石で装飾されていたものとみられる。須恵器には初期須恵器が含まれている。

出土遺物から、古墳の年代は 5 世紀中頃とみられる。

2）その他の前方後円墳

元岡・桑原遺跡群内には上記の 3 基の前方後円墳と 1 基の大型古墳の他に、3 基の前方後円墳が確認されている。（元岡Ⅰ－ 1 号墳は 47 次調査で円墳と判明したため、除外する。）

これらの前方後円墳は開発対象区域外であることから今回の大学移転事業に伴う調査は実施しておらず、古墳の主体部や副葬品についての情報はなく、時期についても推測の域を出ない。これらの古墳については九州大学考古学研究室が平成 17・18 年に測量調査を行い、その成果が公表されているので、その成果と合わせて古墳の概要を記載しておく（宮本ほか 2005、宮本ほか 2006）。

塩除古墳

元岡・桑原丘陵の北東端に位置する標高 50m の山頂に位置する。墳丘全長 53m、後円部径 35m、前方部長 23m、前方部幅 19m。墳裾からの墳丘高は後円部で 5m、前方部で 4m を測る。墳丘外表に丸石による葺石が確認できる。前期古墳とみられ、金屎古墳に並行する時期の可能性もある。

元岡池ノ浦古墳

東に延びる標高 70m の尾根頂部に位置する。墳丘斜面の削平を受けており、特に前方部両側の斜面改変が著しい。墳丘本来の形状は留めていない。墳丘全長 60m、後円部径 30 ～ 32m。墳裾からの墳丘高は後円部で 5m、前方部で 3.7m を測る。葺石が確認でき、埴輪破片が墳丘上で表採されている。

古墳北側斜面下の 7 次調査で、池ノ浦古墳に伴うものと見られる古墳時代前期後半の壺形埴輪破片が出土しており、このほか墳丘から採集された円筒埴輪は 4 世紀後半～末の様相を示す（岡部裕俊・川村裕一郎 1994）。

以上の点から、古墳時代前期後半～末（4 世紀後半）の古墳の可能性が高い。

峰古墳

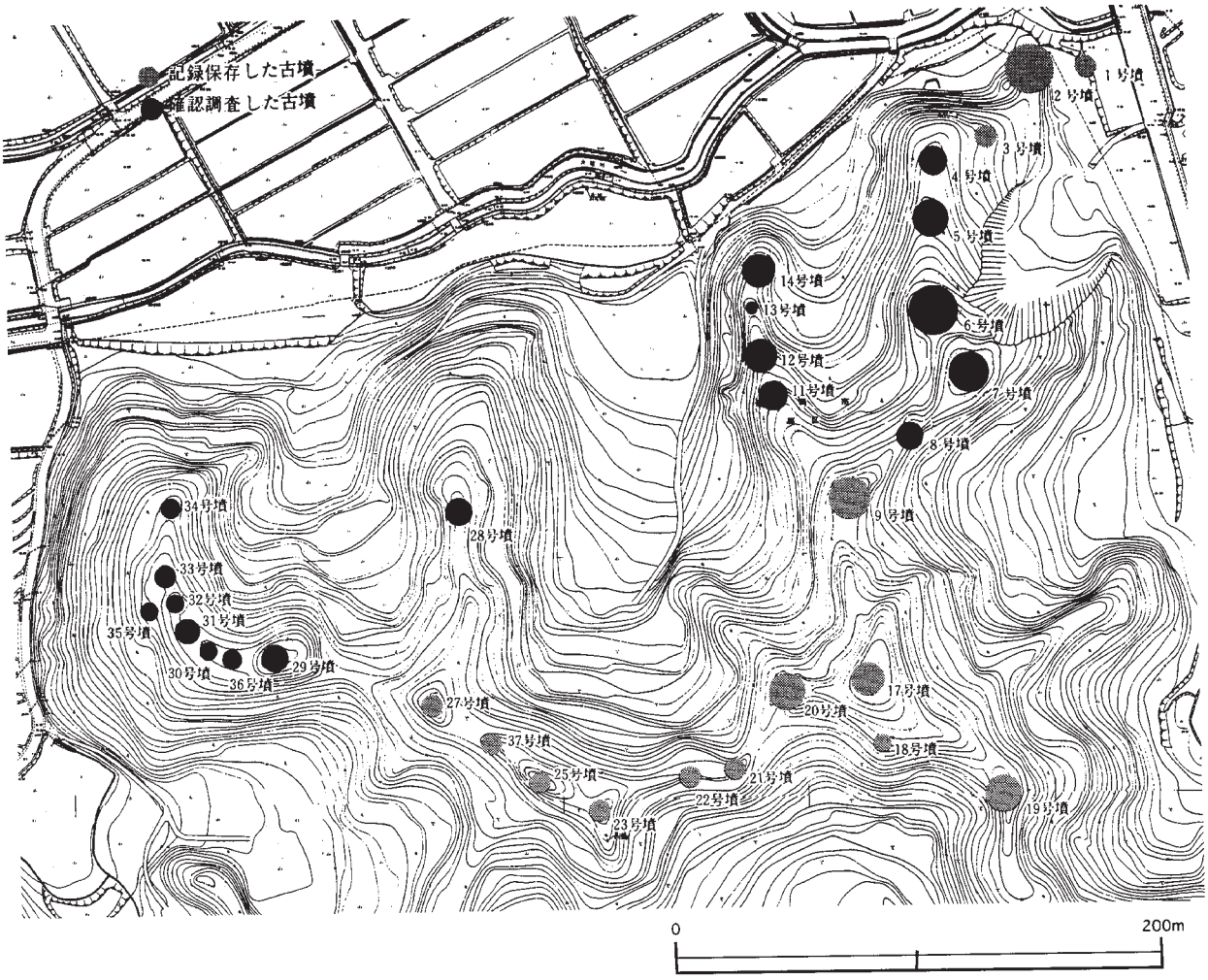
元岡丘陵南側の、南北に延びる尾根上の標高 75m 付近に立地する。墳丘全長 52m、後円部径 27 ～ 33m、前方部幅 16m。墳裾からの墳丘高は後円部で 4m、前方部で 1.5 ～ 2m を測る。墳丘形については、中世山城による改変の可能性も指摘されている。（福岡市教育委員会編 2016、山崎 2016）

6 世紀前半～中頃の古墳という説がある（宮本他 2006）一方、前期古墳の可能性も指摘される（福岡市教育委員会編 2016、福岡市教育委員会編 2006a、PP.8 ～ 14）。

（2）群集墳

古墳時代後期を中心として、元岡・桑原丘陵の各所に群集墳が作られる。数次の踏査・試掘調査を経て、九大移転用地内で現在確認されている古墳群は合計 21 ヶ所 91 基である（既調査分を含む）が、現時点で判明していない小円墳もかなりの数にのぼると推定されている。

調査した全ての古墳について言及することは紙幅の都合があるため、以下では古墳群ごとに主要な墳墓を取り上げ、各古墳群の時期と特徴について概観する。



『元岡・桑原遺跡群 2』より転載

第3図　桑原石ヶ元古墳群分布図

桑原石ヶ元古墳群

大原川右岸の 4 本の尾根上に立地する古墳群で、合計 32 基の小円墳から構成される。5 世紀中頃に築造を開始し、8 世紀まで祭祀が継続された。12 号墳から鍛冶工具セットが出土し、8 号墳から装飾大刀、8 号墳や 12 号墳などで馬具が出土するなど、桑原地区の社会構造を反映した古墳群と考えられている。

2 号墳：径 22m で古墳群最大。玄室長 3.1m、玄室幅 1.8m。奥壁側に屍床をもつ。6 世紀後半の遺物が出土。

6 号墳:径 20.5m の円墳。玄室長 3.9m、玄室幅 2.4m。6 世紀後半～ 7 世紀の遺物が出土。須恵器・武器（単鳳環頭大刀・鉄鏃・靭金具）、馬具（鋲具・鈴）、装身具（ガラス玉・土玉・耳環）が出土。

8 号墳：両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.4m、玄室幅 1.9m。武器（鉄鏃・弓金具・刀・単鳳環頭大刀・鉄矛・石突）馬具（鞍・帯金具・帯先金具・飾金具・素環鏡板付轡・鞍金具・覆輪・輪鐙）装身具（ガラス玉・土玉・碧玉管玉・瑪瑙丸玉・水晶製切子玉・琥珀勾玉・耳環）等、6 世紀末～ 7 世紀の遺物が出土。

9 号墳：径 18m の円墳。玄室長 2.4m、玄室幅 1.6m。墳丘から 6 世紀後半～末の遺物が出土。馬韓系陶質土器（壺）が出土し、他に鉄器（鉄鏃・鉄斧）が出土。（陶質土器は 7 号墳でも出土）

11 号墳：径 12m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 2.3m、玄室幅 1.8m。玄室から 7 世

紀の遺物が出土し、墓道から供献鉄滓が出土。武器（鉄刀・鉄鏃）、馬具（素環鏡板付轡）工具（刀子）・装身具（ガラス小玉・耳環）等が出土。

12 号墳：径 14m の円墳。玄室長 2.7m、玄室幅 1.9m。玄室内は屍床を区画し、3 面の床面を確認。玄室内から人骨の他、6 世紀末～ 7 世紀初頭の遺物が出土。武器（鉄鏃・弓金具・刀）馬具（鈴・鋲具・辻金具・雲珠・素環鏡板付轡）農工具（刀子・鉄鋸・鉄鉇・鉄斧・鑿・金床・金槌・金鉗）装身具（ガラス玉・耳環）武器（鉄刀）等。

19 号墳：径 16m の円墳。両袖式単室の横穴式石室。玄室長 3.5m、玄室幅 2.4m。床面の敷石は 1 面で、6 世紀中頃の遺物が出土した。須恵器・土師器・武器（鉄鏃・鉄刀）・工具（刀子）・馬具（楕円形鏡板付轡・鋲具・吊手金具）・装身具（ガラス玉・碧玉管玉・翡翠勾玉・耳環）

28 号墳：径 12m の円墳。玄室長 2.7m、玄室幅 1.7m。玄室内から 6 世紀末～ 8 世紀の遺物が出土した。

29 号墳：径 15m の円墳。両袖式単室の横穴式石室で玄室長 2.1m、玄室幅 1.4m、羨道長 3.1m。6 世紀中頃から 8 世紀の遺物が出土した。

30 ～ 36 号墳：墳丘径 8 ～ 10m の低墳丘墳。主体部は竪穴系横口式石室で、5 世紀後半～ 6 世紀前半に築造されたとみられる。

うち、6・11・28・29 号墳は 8 世紀半ば以降まで、8 号墳では 8 世紀前半まで祭祀が継続される。また 6・11・28・29 号墳からは供献鉄滓も出土している。

石室構造、出土遺物から見て、まず古墳群西側尾根部に 5 世紀後半に竪穴系横口式石室を主体部とする低墳丘墳（30 ～ 36 号墳）が作られ、その後 6 世紀中頃に尾根上方に 19 号墳、29 号墳等が築造され、その後各尾根伝いに 6 世紀末まで古墳が築造され、一部の古墳は 8 世紀まで追葬・祭祀が行われたことが分かっている（福岡市教育委員会編 2003）。

桑原古墳群 A 群

21 次調査、25 次調査、45 次調査で計 11 基の古墳を調査。全体に遺存状況が悪いが、5 世紀末に築造が始まり、6 世紀中頃まで築造が継続し、4 号墳では 7 世紀まで祭祀が継続している。

2 号墳：径 11m の円墳。玄室長 2m、玄室幅 2.1m。鉄鉗、刀子等出土。6 世紀中頃の築造。

3 号墳：径 12m の円墳。玄室長 3.0m、玄室幅 1.9m。鉄斧、馬具等出土。6 世紀中頃の築造。

4 号墳：径 12m の円墳。玄室長 2.5m、幅 1.8m。鉄鉗等出土。6 世紀中頃の築造、7 世紀まで祭祀が継続。

7 号墳：径 8m の円墳。丘陵最高所に作られる。玄室長 2.1m、玄室幅 1m。5 世紀末の築造で、古墳群中最古。

9 号墳：墳丘不明。石材抜痕から玄室幅 1m、玄室全長 2m の小石室墳とみられる。

10 号墳：径 8m の円墳。石室長 1.85 ～ 1.9m、奥壁幅 78cm。鉄刀・鉄鏃・鉄鑿・土器・装身具等の副葬品が出土。遺物から 6 世紀末～ 7 世紀初頭の築造、7 世紀後半までの追葬が考えられる。

桑原石ヶ元古墳群との関連で見ると、5 世紀末には石ヶ元古墳群とは別の群として築造が開始され、6 世紀半ばまでは石ヶ元古墳群と A 群の両方で造墓活動が行われる。その後、6 世紀後半には A 群での古墳築造は縮小する一方で、石ヶ元古墳群での築造が盛んになる。

この造墓活動の変遷は桑原地区（大原川右岸地区）における集団の消長を反映しているものとみられ、5 世紀末から 6 世紀半ばまで小規模な集団ごとに古墳群を形成していた状況が、6 世紀後半に古墳の築造が石ヶ元古墳群に集約された状況から見て、この時期に桑原地区の集団が統合されたものと

推測できる。一方、7 世紀まで A 群での祭祀が継続していることから、集団内での大家族集団での出自意識は保持され、7 世紀に入っても家族ごとに本来の古墳群で祭祀を執り行っていたとみられる。

なお、9 ～ 11 号墳は 1 ～ 8 号墳とは別の尾根に位置し、築造時期も他の古墳よりも半世紀ほど遅い。この 3 基の古墳については、谷を挟んで東側の尾根に位置する元岡 O 群 2 ～ 4 号墳や南側斜面の元岡古墳群 N 群と関連づけて考えるべきであろう（福岡市教育委員会編 2005、2006b、2011）。

元岡古墳群 N 群

29 次調査で計 9 基の古墳を調査する。元岡石ヶ原古墳の南側尾根の標高 66 ～ 52m の高所に築造された古墳群。

1 号墳：径 11m の円墳。玄室長 2.4m、幅 2.3m。6 世紀前半の築造。

2 号墳：墳丘・石室不明。7 世紀代の須恵器が出土。

3 号墳：径 9m の円墳。玄室幅 1.9m。7 世紀後半～ 8 世紀の須恵器が出土。

4 号墳：墳丘・石室不明。7 世紀後半の須恵器が出土。

5 号墳：墳丘規模 7.5m 以上。玄室長 1.3m、羨道長 2.3m 。7 世紀代。

6 号墳：墳丘不明。玄室長・玄室幅 1.6m の正方形プランの玄室をもつ。鉄鏃・鉄斧が多数出土。8 世紀代の須恵器が出土。

7 号墳:墳丘不明。玄室長 2.4m、幅 1.1m、羨道長 1.3m、最大幅 80cm。7 世紀代の須恵器が出土。

8 号墳：墳丘・石室不明。 7 世紀代。

9 号墳：墳丘径 6 ～ 7m。玄室長 1.8m、幅 1.0m 。7 世紀代の築造。

1 号墳は他の古墳から離れた場所に位置し、他の古墳よりも数世代早く作られており、独立墳だった可能性が高い。石ヶ原古墳に近く、古墳時代後期の集落が確認された 49・51 次調査区が位置する谷の谷奥部に位置することから、本来は前方後円墳だった可能性も考えられる。7 号墳・9 号墳は玄室幅が狭く、玄室から羨道までほぼ同じ幅の石室形で、7 世紀前半の築造とみられる。

他の古墳は、立地も尾根線から少し下りた斜面（北の桑原側ではなく、南の元岡側を向く斜面）に作られ、玄室プランが小型の正方形を呈し、他の古墳群で見られる在来の石室形態とは異なる。このことから、築造された時期は他の古墳よりもかなり下ることが予想され、築造主体者、被葬者についても在地の集団とは別の要素を考える必要があろう（福岡市教育委員会編 2005）。

元岡古墳群 O 群

37 次調査で 4 基の古墳を調査する。古墳は尾根頂部の長さ 25m の範囲内に集中して作られている。調査地点は大字元岡であり、古墳群の名称も元岡古墳群であるが、墓道は桑原側へ下る谷に接続している。

1 号墳：径約 6m の円墳。玄室長 2m、幅 65cm で竪穴系横口式石室に近い。

2 号墳：小石室墳。玄室長 0.75m、幅 0.4m で、短い羨道がつく。

3 号墳：幅 5.5m の円墳。玄室長 1.57m、幅 0.85m 、羨道長 65cm 。6 世紀後半の須恵器と馬具セットが出土。

4 号墳：径 4m 程度の円墳。玄室長 1.1m、幅 0.55m、羨道長 45cm 。

いずれの古墳も石室幅が狭く、墳丘をほとんど持たない。1 号墳は 5 世紀後半から末に作られたと考えられ、他の古墳よりも先行する。築造当時は単独墳の様相を呈していたとみられる。

また 2 ～ 4 号墳は 3 号墳を主墳とするグループとみられ、3 号墳が 6 世紀後半に築造されたのちに 2・

4 号墳が作られたとみられる。

1 号墳は石ヶ原古墳よりも先行して作られた古墳とみられ、N 群 1 号墳とともに 5 世紀後半～ 6 世紀前半にかけて尾根上の高所に古墳を作る占地意識があったことを示す。

元岡・桑原地区の 6 世紀後半の古墳石室で 3 号墳のような幅狭の石室プランを取るものはなく、3 号墳からは馬具セットが出土し、3 号墳は特徴的な性格を有している。なぜこの立地でこのような形態の石室を持つ古墳が作られたのか疑問が残る。築造立地等を含め、古墳や被葬者の性格についてさらに検討する必要があろう（福岡市教育委員会編 2005）。

（3）元岡古墳群Ｇ－1 号墳・Ｇ－6 号墳

この 2 基の古墳は前方後円墳ではなく、また他の群集墳と比較しても墳丘形態・石室形態、使用石材の大きさ、副葬品の内容等で大きな差異がみられる。また築造された位置も桑原地区の古墳群とは離れており、この距離が築造時の社会構造を反映している可能性がある。ここでは 2 基の古墳の概要について延べ、次節で考察を加えたい（福岡市教育委員会編 2013）。

元岡古墳群Ｇ－1 号墳

遺跡群の西側に位置する標高約 100m の石ヶ岳から南へ延びる丘陵の先端部に位置する。墳丘形は方墳で、周溝とみられる溝が石室の両側に掘られており、その間隔から墳丘規模が一辺 18m と推定できる。溝の傾斜から、古墳は尾根線上に作られたものではなく、尾根線の西側斜面に作られたと考えられる。墳形が方墳である古墳は元岡・桑原地区では唯一のものである。

古墳の上部は削平され、石室は腰石以下のみが遺存する。石室形態は両袖式単室で、玄室の規模は長さ 3.6m、幅 2.1m で、元岡・桑原地区の古墳の中では最大である。使用されている石材は最大長 2.5m で巨大な石材を使用しているが、他の群集墳で巨石を使用した石室はなく、Ｇ－1 ・Ｇ－6 号墳の 2 基の石室の築造技術が図抜けていたことをうかがわせる。

石室床面は撹乱を受けておらず、2 面の床面が確認され、多くの副葬品が確認されている。主な出土品として、鉄刀 5 本、圭頭把飾、鉄鏃、胡籙金具、馬具、銅鏡、銅釧、耳環、玉類、須恵器などが挙げられる。鉄刀は石室壁際からまとまって出土し、追葬の際に寄せられたものとみられ、複数回の追葬が考えられる。

古墳の築造時期は出土遺物より 6 世紀末から 7 世紀初頭と考えられている。

元岡古墳群Ｇ－6 号墳

Ｇ－1 号墳の北側 120m に位置する。尾根の東側斜面に位置する古墳で、墳丘盛土は遺存していないが、周溝から墳形は略円形を呈し、墳丘径 18m であることが分かる。

主体部は石室全長 7.5m、玄室長 2.5m、玄室高 1.8m、玄室最大幅 2.4m の両袖式単室の横穴式石室で、床面の敷石は古墳時代のものを 2 面確認しているが、上面は単独で成立するか疑わしく、基本的に 1 面の敷石上で複数の追葬を行っていると考えられる。

石室に使用されている石材には巨石を使用しており、特に玄室上の天井石には板石ではなく高さの高い転石を使用している。奥壁は高さ 2m の巨大な一枚石の石材で構築されており、築造技術の高さと、被葬者の社会的地位の高さを示している。

石室の主軸は正確に南北方向を向いており、石室の開口方向は谷側ではなく尾根方向を向いている点で、在来の築造理念とは異なる要素が認められる。

『元岡・桑原遺跡群 22』より転載

第4図　元岡古墳群G群古墳分布図（1/1000）

玄室・羨道は撹乱を受けておらず、副葬品は原位置をとどめて検出された。副葬品は金象嵌銘入大刀（『庚寅銘大刀』）の他、鉄矛、弓金具、馬具、工具（鉄斧・鉄鋸・鉄鑿・鉇）が出土しており、閉塞石積み内から大型青銅鈴が出土している。

２．古墳時代後期の２つの対照的な古墳・古墳群

この節では、前節で概要を述べた古墳・古墳群のうち、元岡古墳群Ｇ－６号墳と桑原石ヶ元古墳群を取り上げ、それぞれの古墳・古墳群の築造理念、築造後の追葬・追善活動を検討したい。

（１）元岡古墳群Ｇ－６号墳

１）墳丘・石室・方位

ここではＧ－６号墳の築造の際の築造理念、社会的背景を、残された墳丘・石室の形状を検討して考察する。

墳丘　調査前は、天井石のレベルまで盛土造成がなされており、墳丘の存在自体が全く認識されていない状況であった。この造成盛土は地山の花崗岩バイラン土に近似し、土質が均質で硬く締まっていたことから、古墳南側の建物群の廃絶後、近世～近代にかけて西側斜面を削り、その土砂で斜面を埋め上げて平坦面を造性したものとみられる。

造成盛土の除去により、中世以前の造成面が確認されたが、土層断面の観察によって中世の時点で古墳墳丘が完全に失われ、石室が露出していたことが明らかになった。墳丘盛土とみられる土はその後、石室西側の地山整形面上で部分的に 10cm 以下の厚さで確認され、本来は墳丘盛土があったことが想定できるが、墳丘の形状は西側に残る周溝から想定するほかない。

中世の時点で墳丘が失われた背景、理由については想像の域を出ないが、古墳周辺の地山は砂質分の強い花崗岩風化土で、粘性に欠き、調査中にも雨で容易に流出する状況が見られた。この土を墳丘に使用したと仮定すれば、築造後短期間に墳丘上部の土砂が流れ出し、石室が露出することもあり得るだろう。また、人為的な墳丘の掘削を想定するならば、平坦面を造成し建物を建築するために墳丘盛り土を削り出して、古墳部分を平坦にしながら斜面に盛り土を施工した可能性も考えられる。

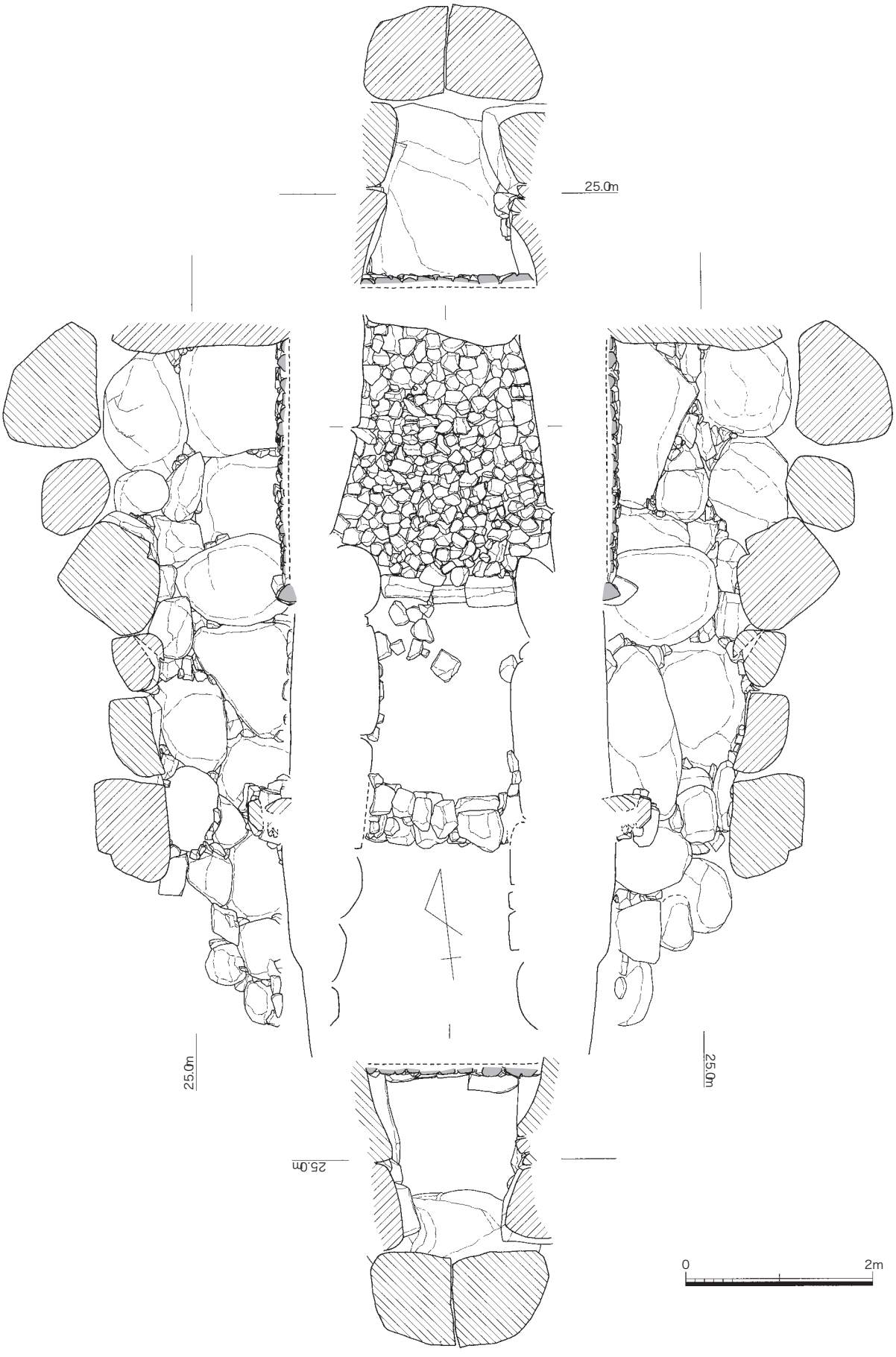
西側周溝は古墳南東方向から上ってくる墓道と一体化しており、極めて深い。これも斜面に降った大量の雨水が墓道を下る際に溝床面を削ったことによるものと考えており、平面的な位置関係は古墳築造時から変化ないものとみられる。

現在の周溝の位置が築造時のものであるということを前提として考えると、現在の周溝の位置は石室を中心として半径 9m の円弧を描くように回る。西側斜面の墳丘端は墳丘盛土が失われているために不明瞭であるが、古墳の復元直径は 18m とみてよいと思われる。方墳であるＧ－１号墳の幅が 18m であり、同地域の１～２世代差の２基の古墳で規模をそろえようとした可能性があると思われる。

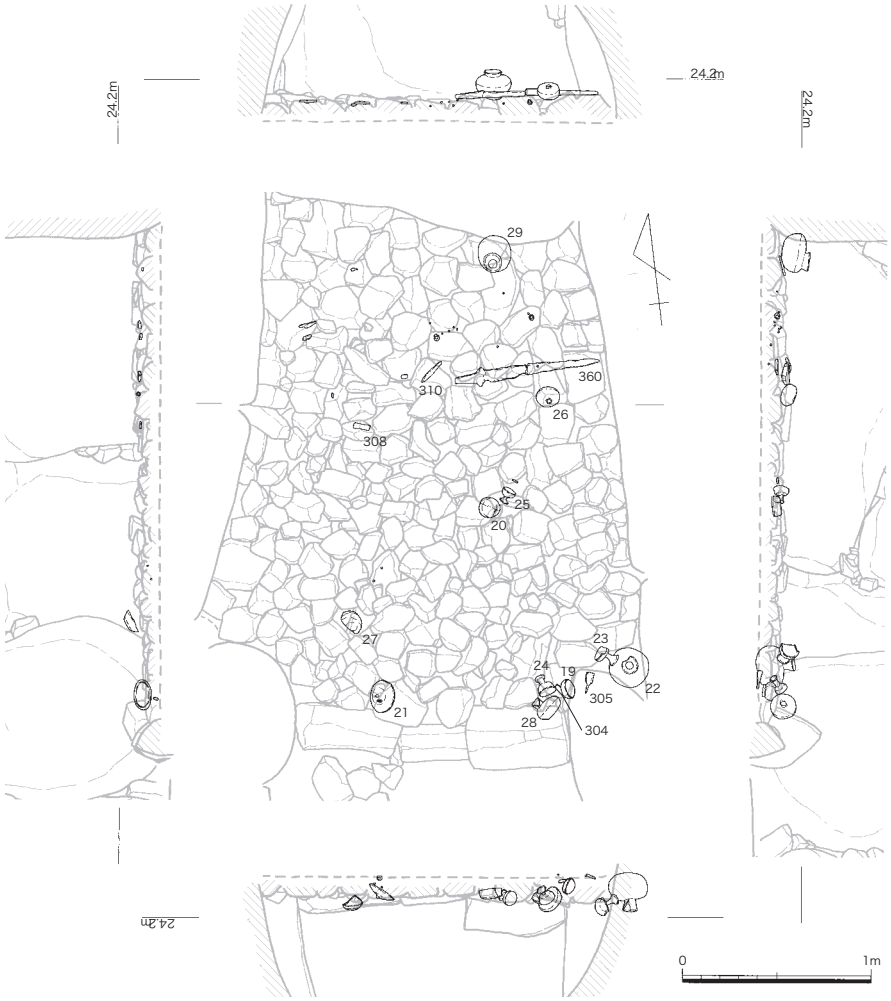
墳丘形状については前稿で述べている（福岡市教育委員会編2013, P.72）が、周溝の形状からみて「正六角形墳」「正八角形墳」ということは難しい。Ｇ－６号墳は石室前面に直線的な部分があり、その背後の周溝は直線的に伸びるため、正面観は多角形的な様相を呈していたとみられ、単なる円墳ではなく、多角形的な指向があった上で墳丘を設計したことも想定可能である。７世紀代の多角形墳の要素が十分でないながら取り入れられていたとみれば、G-6 号墳の墳形がそれまでの在地の要素を超えた要素を備えていたと考えることもできよう。

石室　石室は巨石を使用した両袖式単室構造で、石材の使用や構築に際して在地的な要素を主に取り入れて築造している。玄室、羨道に屍床や棚等の特別な要素は全く見られない。

使用している石材は転石を使用したとみられ、大型の石材が使用されている部分が多い。割石等の



第5図　元岡古墳群G−6号墳石室実測図（1/60）



第6図　G−6号墳玄室内遺物出土状況（1/40）

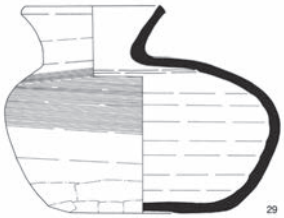
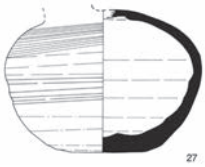
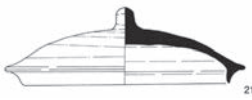
加工痕が残る石材はないが、石室壁石の中で一対の石材を割って使用しているとみられる石材がある。しかし石材に割った痕跡が見られないことから、割れ口を細かく敲いて丸みを持たせ、敢えて転石を自然石のように見せているように感じられる。石材を割って平面を出し、平滑な壁面を構築する方向性ではなく、丸石を積み上げた感じを出すことを意図して石室が作られたものであろう。この方向性はＧ－１号墳の石室でも認められる。

方位　Ｇ－６号墳の石室の最大の特徴はその形状ではなく、石室の主軸方向にあると考える。通常、群集墳内の小円墳は、尾根上にあるものは尾根両側のいずれかの斜面方向に開口する。また斜面上の古墳は斜面下方に開口する例が大半で、開口方向は築造された地点の地形に大きく左右される。

Ｇ－６号墳は奥壁を北に向け、石室主軸がほぼ南北に向く。ただし、現地の斜面は東北東に向かって傾斜しており、南側に開口することは開口方向が斜面のやや上方に向くということになる。現に、石室内から開口部を通じて外を眺めると古墳南側の尾根の斜面が見え、下方の谷の眺望は全く見えない。斜面には小規模な支谷などもなく、開口部が谷筋に向いていたことも考えられない。Ｇ－６号墳の石室主軸は築造された地点の地形に全く左右されず、本来の造墓原則を崩してでも石室の主軸方向を南北に取ることを優先したものと考えられる。

石室主軸を南北に取り、墳丘軸線を方位に合わせるのは７世紀半ばの天皇陵を含む一部の古墳に見られ、その背景には中国文化における方位や暦の思想があるとみられている。ただ畿内でも７世

表1　G−6号墳玄室内副葬遺物のセット関係

	平瓶	高坏	その他	
②⑤				ⅣB
③				
④				
①				Ⅴ

（縮尺：1/5）

紀初頭に築造された古墳に方位の要素を見出せるものは少なく、Ｇ－６号墳は古墳の築造に際して、国内でも比較的早期に中国の方位思想を受容していた例となろう。

２）出土遺物から見た埋葬行為

石室内からは庚寅銘大刀をはじめ、須恵器・土師器、鉄器等の遺物が出土している。床面は大きな撹乱を受けておらず、最終追葬・祭祀時の状況をほぼ留めていると考えられる。中世の時点で石室が開口していた時には、石室床面は土砂の堆積によって古墳時代の床面よりも 30cm 上昇しており、この時に古墳時代の遺物が荒らされたことは考えられない。

出土遺物の種類ごとに、出土状況とその原因・背景について検討する。

須恵器・土師器　前回の報告（『元岡・桑原遺跡群 22』）でも触れたが、Ｇ－６号墳から出土した須恵器は玄室・羨道・石室外で器種、時期が明瞭に異なる。

玄室内から出土した須恵器は平瓶 4 点、高坏 3 点、壺 1 点、坏身 1 点、蓋 1 点の器種構成である。平瓶、高坏の割合が高く、併せて全体の 70％を占める。また、坏が 1 点しかないことも特徴的である。この割合は 7 世紀前半の副葬土器の器種構成比率を反映している可能性が高い。

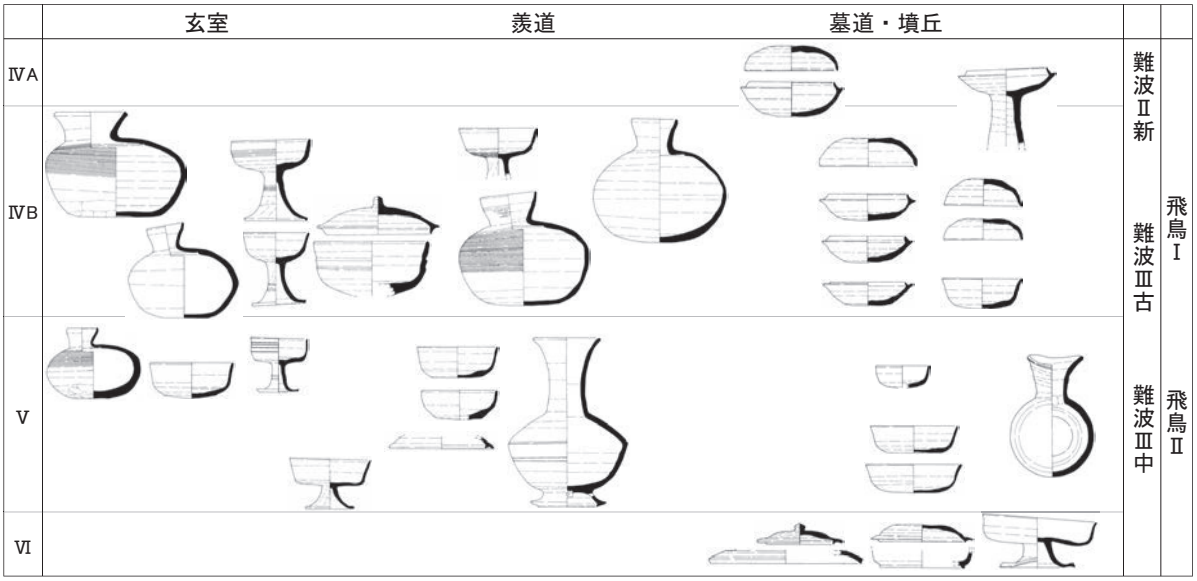
これらの土器の出土位置について、前稿でも簡単に言及しているが、再度確認しておきたい。（番号は『元岡・桑原遺跡群 22』中の遺物番号）

①玄室中央部より出土

　平瓶（26）1 点、高坏（25）1 点、坏身（20）1 点

②玄室奥壁より出土

表2　G−6号墳出土遺物編年表



（『元岡・桑原遺跡群 22』P.70 より転載）

平瓶（29）1 点

③玄室入口中央付近より出土

平瓶（27）1 点、蓋（21）1 点　※平瓶（27）は破片の一部が羨道から出土。

④玄室入口東端より出土

平瓶（28）1 点、高坏（24）1 点。他に土師器坏（19）1 点

⑤玄室南東隅より出土

壺（22）1 点、高坏（23）1 点

①の玄室中央部で確認された須恵器 3 点は、最終埋葬時に設置された後に原位置を保持したまま埋没した可能性が高いと考えられる。この須恵器群を「最終埋葬時の副葬土器」としたい。土器型式も、高坏が小型化し脚端部が強く外反したり、平瓶も小型化して体部が丸みを帯びたりするなど、形態的にも新しい要素を備えており、玄室内出土土器の中で時期的に最も下るものとみられる。

その他の土器のうち、玄室入口東端の、側壁と梱石の隅でまとまって出土した④の平瓶・高坏・土師器坏は同時期に石室隅に寄せられたものとみられ、同時に副葬され、片付けられたセットとみられる。②、⑤の高坏も、片付けの際に同時に脇に寄せられたものとみられ、セットで副葬されたものとみられる。④と②･⑤の片付けの方法が異なっているのは、追葬の際の片付けの手順の差であろうか。平瓶（29）を意図的に奥壁中央に据えたことも考えられる。

以上のことから、埋葬の際に想定される副葬土器のセットは次のようになろう（表 1 ）。

［平瓶 1 点］＋［高坏 1 点］（＋［オプションとして坏等 1 点］）

後述する耳環から想定される被葬者数と、副葬土器セットの数が異なるが、玄室外に破砕廃棄された可能性も考慮すべきであろう。

なお、玄室南東隅の壺（22）は壁石築立後、敷石敷設前に設置され、その後敷石を置いて固定しており、出土状況からは副葬遺物の片付けとは違う意味が認められる。おそらく、石室築造の過程で祭祀的な行為を行い、その行為の痕跡として壺が残されたと考えられる。

3）大刀の出土状況と副葬年代

大刀は石室中央やや東よりで出土した。出土状況の特徴は以下の通りである。

①大刀は把部を中央部付近に置き、切先を東側壁側に向け、刃を奥壁側に向けている。
②大刀の脇に平瓶（26）が置かれている。大刀の出土レベルと平瓶の底面レベルはほぼ同じである。
③玉や耳環、刀子などの小物類を除くと、玄室中央部で出土した遺物は大刀、平瓶（26）、高坏（25）、坏身（20）のみである。

まず、大刀が玄室中央で出土していることに注目する。副葬後に別の追葬行為があった場合、壁際に刀類が片付けられている状況が多くみられることから、この大刀については副葬後、別の追葬が行われていない、つまり最終埋葬時の副葬品である可能性が指摘される。

大刀の位置については、桑原石ヶ元古墳群 11 号墳の事例が参考となる。石ヶ元 11 号墳は奥壁側で鉄刀が切先を右側壁方向に向け、刃を羨道側に向けて副葬されている。G-6 号墳大刀よりも奥壁側に寄せて置かれているが、追葬の際に片付けられた状況ではない。石ヶ元古墳の報告者は初葬時に伴う副葬品であるとの見解を出しているが、ここでは最終埋葬時の副葬品の可能性を指摘したい。ちなみに 11 号墳出土須恵器のうち、最も時期が下るものは 8 世紀代であるが、玄室内からは 7 世紀初頭以降の須恵器が出土しており、7 世紀代の副葬とみることは十分可能である。

石ヶ元 12 号墳でも第 1 面（最上面）で石室中央に把を奥壁側に向け、石室主軸に平行におかれた状況で出土している例がみられ、被葬者の遺体の傍に置かれていたものとみられる。時期を特定する須恵器に乏しいが、7 世紀代に下ることは確実である。同様に、8 号墳でも単鳳環頭大刀が玄室中央で出土している。把を奥壁側に向けており、主軸に並行する状態で出土している。ただしこの鉄刀は下面からの出土であり、時期的には 7 世紀前半まで上がる可能性もあり、また最終埋葬時のものでないため副葬時の原位置をとどめていない可能性が高い。

これらの例から見ると、元岡・桑原地区の 7 世紀代の大刀の副葬形態として、被葬者の体位が人骨または屍床・敷石から判明できる例では被葬者の傍らに大刀を平行に置いている例が確認できる。同時に、刀を置く方向として、玄室主軸に平行方向に置かれるものと、直行方向に置かれるものの 2 通りがあることも確認可能である。この刀の方向は、被葬者の体位に直行する方向での副葬が元岡・桑原地区で見られないことから、被葬者の体位の方向によって決定されたものとみられ、Ｇ－６号墳の大刀の方向は、この刀を副葬された被葬者が石室主軸に対して直行方向に安置されたことによるものとみられる。

被葬者が玄室に横方向に安置され、大刀が遺体の傍らに置かれたとの仮定に基づいて被葬者の位置を検討すると、刀の手前側には平瓶（26）が置かれているため、刀よりも平瓶の方が被葬者に近くなり、不自然である。被葬者は大刀の奥壁側、玄室の最奥部に安置され、手前に刀、そして須恵器が供えられたとみられる。

大刀の副葬時期は上記のように最終埋葬時とみられ、その年代は最終埋葬の際に副葬された須恵器によって判定できる。前稿でも述べたが、最終埋葬時の須恵器の型式は九州編年でⅤ期とされるもので、その年代は研究者によって若干差があるものの、7 世紀前半～中頃、特に 7 世紀第二四半期と考えられ（表２）、この時点で大刀が副葬された可能性が最も高い。

そのほかの可能性として、最終埋葬後、追善祭祀の際に大刀が供献されたと想定することも不可能ではない。その場合、その後 11 世紀までの間に 30cm の土砂堆積が見られることから、年平均 1mm のペースで土砂が流入したと考えると、大刀を敷石上に直接置くことができる下限は 7 世紀末頃が限界ではないだろうか。この仮定には遺物等の傍証は全くないため、この時期に供献されたことを主張するのはかなり困難と思われるが、今後大刀の技術的な検討から議論の対象となる可能性があるため、一応提示しておく。

（２）桑原石ヶ元古墳群

１）「４支群」の築造時期と差異

ここで「４支群」としたのは、桑原石ヶ元古墳群を地形的に３つの尾根と１つの主尾根にまたがる古墳群とみなし、筆者が尾根ごとに分類したものである。東から、第１支群から第３支群とし、さらに主尾根の群を第４支群とする。

〈第１支群〉１号墳～１４号墳

〈第２支群〉２８号墳

〈第３支群〉２９号墳～３６号墳

〈第４支群〉１７号墳～２７号墳・３７号墳

※１０・１５・１６・２４・２６号墳は欠番

各支群の展開を簡単に見ていくと、出土土器からみて最も早く出現するのは第３支群の竪穴系横口式石室墳群で、その次に同一支群の２９号墳が６世紀前半に築造される。また、第４支群の１７・１９・２０号墳も６世紀前半に築造されるが、第４支群のこれらの古墳は同時期に築造された、やはり尾根高所の元岡Ｎ－１号墳や元岡Ｏ－１号墳と同じ社会構造の下で作られた古墳とみられ、共通した理念を持つものであろう。

６世紀半ばになると第１支群の古墳の築造が開始され、第２支群の２８号墳も、この時期の土器は出土していないが石室形態から６世紀半ばの築造と考えられる。

６世紀後半には各古墳での追葬行為等が頻繁に行われたことが出土遺物から明らかである。その一方で、第４支群では追葬行為が終了し、７世紀まで祭祀が継続した痕跡を持つ古墳はない。

第１～第３支群ではその後、７世紀以降も追葬・祭祀が継続して行われ、一部の古墳では８世紀まで祭祀が行われたとみられる。また、７世紀以降に新たに築造された古墳はないとみられる。

２）８世紀以降に継続する祭祀について

各支群で継続された８世紀以降の祭祀は、６世紀末までの古墳築造に直接結びつく追葬行為から色彩を変えていく。これを示すために、８世紀以降に祭祀が継続した古墳が各支群でどのような位置にあったのか、古墳の規模や立地を検討し、８世紀の祭祀の目的や理念について考えていきたい。

各支群で、８世紀以降の遺物が出土し、祭祀が行われたとみられる古墳は以下のとおりである。

〈第１支群〉６号墳・８号墳・１１号墳

〈第２支群〉２８号墳

〈第３支群〉２９号墳

〈第４支群〉１８号墳

第１支群の６号墳･８号墳は第１支群を構成する２つの尾根のうち東側の尾根に近接して築造され、８世紀半ばまでの遺物が含まれる。１１号墳は第１支群の西側尾根に位置し、８世紀後半まで祭祀が継続する。

２８号墳は第２支群の唯一の古墳で、８世紀後半までの祭祀が確認できる。２９号墳は第３支群の後発の古墳で、８世紀後半まで祭祀が継続する。第４支群の１８号墳では、８世紀の中期段階の土器が出土し、一時的に祭祀を実施したことが考えられる。遺物の出土量が少量で、一時的な祭祀等の行為だったとみられる。

７世紀代までは、各古墳で追葬行為が継続しており、各古墳で祭祀に伴う遺物も一定程度の出土量が確認できる。これらの古墳の中で８世紀まで祭祀が継続している古墳は各支群で１～３基に限定さ

れ、８世紀末には各支群でちょうど１基ずつの古墳に収斂される。

この結果に、鉄滓供献の事例がみられる古墳を重ねる。古墳墓前に鉄滓の供献がみられる古墳は、1・２・６・１１・２８・２９の各古墳で、このラインナップはほぼ上記の８世紀まで祭祀が継続した古墳にほぼ重なる。１１号墳は製錬滓から鍛冶滓まで一連の工程で派生する鉄滓とみられ（福岡市教育委員会編 2003, P.213）、供献時期は製錬の開始時期（６世紀後半～７世紀前半）以降、８世紀までの時期幅内の鉄滓とみられ、６号・２９号墳出土鉄滓は６世紀後半～７世紀前半代とする科学分析結果が出ている（福岡市教育委員会編 2003, P.222）。これらの供献鉄滓出土古墳の多くが８世紀まで祭祀が継続する古墳であることは、これらの古墳が７世紀前半に他の古墳とは異なる位置付けとして認識されていた可能性があり、興味深い。

このように、各支群にちょうど１基ずつ８世紀の奈良時代まで祭祀が継続する古墳が存在することは、７世紀後半から８世紀前半にかけて各群で祭祀の対象とする古墳を「選択」されていた状況があったことを示している。７世紀中頃までは各古墳で追葬行為を行っていたものが、追葬がなくなり追善祭祀のみになった７世紀後半段階に祭祀対象（＝祭祀場）となる古墳を１基にまとめるという、祭祀の統合・再構成があったことも想定できる。

また、祭祀対象の古墳を選択するに当たって興味深いことは、選択された古墳が必ずしもその群で古墳の規模が最大の古墳や、副葬品の質・量が多い古墳ではないことである。例えば第１支群にある 12 号墳は鍛冶工具のセットが出土し、その他の副葬品の質も高いことから、その被葬者は集団の盟主的立場の人物であろうと考えられている。しかし 12 号墳は７世紀初めには祭祀行為が停止し、８世紀に祭祀を行った痕跡はない。祭祀の対象となる古墳は、被葬者の地位や権威の高さによって決まるものではなかったとみられる。

古墳群全体を大原川北岸から見たときに、景観的には各尾根の中腹のほぼ同じ高さに１１号墳・２８号墳・２９号墳が並ぶ。それぞれの尾根に家族や氏族の単位を反映させ、３基の古墳が各氏族の崇拝の象徴として尾根の上にあり、その上の主尾根に遥か昔に作られた祖先の墓（第４支群）を望める光景が、石ヶ元古墳群につながりある人々の社会構造を視覚的に明示するものとして機能したことも、十分考えられるであろう。

古墳時代後期に作られた古墳群が８世紀にも違う意識を伴って祭祀遺構として機能している状況は、石ヶ元古墳群が古墳時代に限定される資料としてではなく、古墳時代と古代を繋ぐ資料的価値を有していると考えられる。

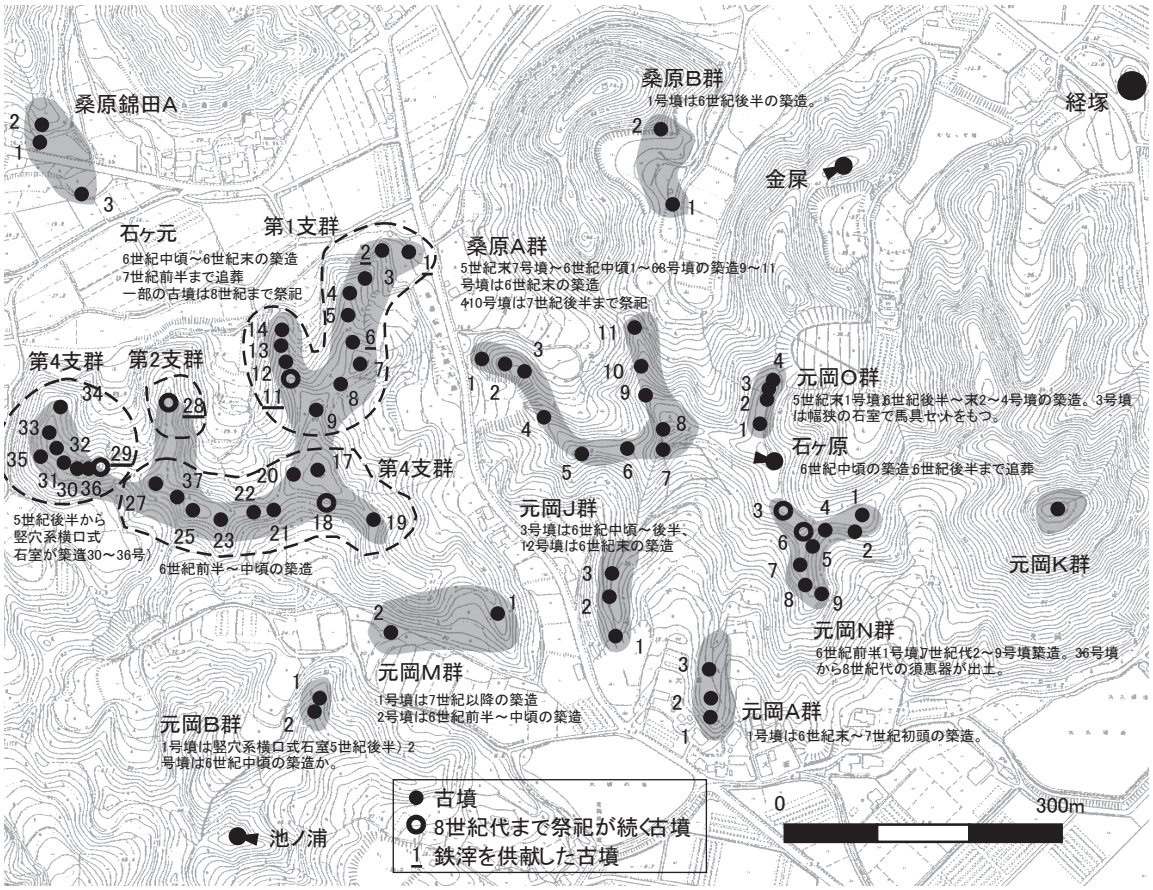
３．元岡・桑原地区の古墳築造の構造

（１）古墳時代後期～古代の元岡・桑原地区古墳群の変遷

前節で元岡古墳群Ｇ－６号墳と桑原石ヶ元古墳群の構造と、その背景について検討してみた。元岡・桑原遺跡群にはこれらの古墳を含む２１の古墳群が存在し、うち１５の古墳群については調査を実施している。この節では元岡地区全体での、古墳時代後期から古代にかけての古墳の築造、追葬、祭祀の変遷を確認し、古墳に反映された元岡・桑原地区の社会構造について考察する。

１）古墳時代中期後半～後期前半（５世紀後半～６世紀半ば）

５世紀後半～６世紀初頭にかけて、桑原地区の尾根の高所に竪穴系横口式石室墳が築かれる。（桑原石ヶ元３０～３６号墳・桑原Ａ－７号墳・元岡Ｎ－１号墳、元岡Ｏ－１号墳）これらの古墳は丘陵上の高所を占地して作られ、当初は独立墳の様相を呈していたとみられる。ただし、今津湾側から見たときに眺望のきく地点には既に前方後円墳が築かれているため、この時期の古墳は尾根上にあるが



第7図　古墳時代後期以後の元岡・桑原地区の古墳変遷図

今津湾側からは見えにくい場所に築造されているものが多い。

その後、６世紀前半に前方後円墳の石ヶ原古墳が桑原Ａ－１号墳に近接して作られ、５世紀後半に作られた各古墳の周辺に小円墳が作られ、丘陵尾根上の数か所に分散して古墳群が形成される（桑原Ａ群・元岡Ｎ・Ｏ群・石ヶ元）。

２）古墳時代後期後半（６世紀後半）

６世紀前半まで盛んに築造されていた各古墳群で築造数が減少する。一方、桑原石ヶ元古墳群で古墳群の規模が拡大し、古墳の築造、追葬が増加する。

その一方で、６世紀後半～末には尾根高所を中心に小石室墳の築造がはじまる（桑原Ａ－１０号墳、元岡Ｏ－３号墳など）。また、元岡Ｇ－１号墳で初葬・追葬が行われ、石ヶ元９号墳で陶質土器が副葬されたのもこの時期である。

これらの状況から見て、この時期に元岡･桑原地区の社会構造に新しい要素が加わった可能性がある。

３）古墳時代終末期（７世紀以降）

前段階で出現した小石室墳はこの段階にも継続して築造・追葬が行われる（元岡Ｎ－５・７・９号墳、元岡Ｏ－２、４号墳等）。元岡Ｎ群では７世紀中頃にかけ墓群の経営が盛んに行われる。

先述したように、石ヶ元古墳群では７世紀半ばまでは各古墳で追葬が行われるが、７世紀後半には支群ごとに選択的な古墳祭祀が行われるようになる。

元岡Ｇ－６号墳の築造、追葬が行われ、庚寅銘大刀が副葬されたのはこの時期にあたる。

このように、６世紀後半に変化した社会構造が発展的に継続したのがこの段階の特徴である。

４）古墳群の変遷から見た集団構造の変遷

上記の変遷を見ていくと、１）から３）の段階を通じて、古墳群の築造・追葬の傾向が古墳群ごとに特徴的に推移する状況がみられる。

５世紀後半～６世紀半ばにかけての状況は、桑原地区の小集団が、それぞれ別個に古墳群を築いたものとみられる。古墳の占地は、それ以前の前方後円墳の占地と共通し、築造にあたる理念が前代から踏襲された可能性が高い。

６世紀後半に石ヶ元古墳群での築造が盛んになり、各古墳群での築造数が減少するのは、各集団の造墓が石ヶ元に集約されたものとみられる。この場合、各集団が尾根ごとに造墓を行ったことが十分考えられる。この集団の集約はその後も継続したとみられ、石ヶ元の各尾根を単位とした小集団ごとの祭祀を８世紀まで継続したと考えられる。

一方、６世紀後半に出現した小石室墳、そしてその後の元岡Ｎ群は、新たな集団の出現を示していることが考えられる。とくに､元岡Ｎ群は桑原地区ではなく元岡地区に開口する谷に作られており、新たな集団が元岡地区を拠点としたことが考えられ、桑原地区で古墳が築造されなくなった７世紀にも古墳を造営するなど、活発に動いていた様子が見受けられる。

（２）元岡古墳群Ｇ群と石ヶ元古墳群の構造的差異

丘陵の北側に位置する桑原石ヶ元古墳群の特徴は、５世紀後半から６世紀後半にかけての 100 年あまりの期間に狭い範囲に密集して築造され、石室構造は比較的小型の石材を使用し、在来的な工法で作られたこと、鍛冶道具や馬具など集団の活動に密接した副葬品を有することが挙げられる。

一方､丘陵南端に位置する元岡古墳群Ｇ－１号墳とＧ－６号墳は､大型の石材を使用して築造され、石室構築の技術が在来よりも高いことが想定できる。副葬品も、Ｇ－６号墳で工具一式が出土しており、集団の生業に密接した副葬品も含まれるが、Ｇ－１号墳で圭頭把飾を含む鉄刀５本、Ｇ－６号墳で庚寅銘大刀が副葬され、鉄刀を通じて大和政権や外部勢力との関係がうかがえる。

この石室構造や副葬品の差には、次のような可能性が考えられる。

①同一集団の、特定の階層だけが異なった墓域を形成していた可能性

②それぞれの被葬者が属する社会構造が異なっていた可能性

①は、副葬品の質から見て、ほぼ同時期のＧ－１号墳と石ヶ元 12 号墳等と階層の別があったとは考えられない。②で挙げたように、両古墳群の構成集団が別物で、それぞれ異なった社会構造を有しており、それが副葬品の内容に反映したものと考えられる。

桑原石ヶ元古墳群の被葬者集団は、鍛冶（のちに製鉄）活動に従事し、在地的な特色を持つ集団であることがこれまでの研究から推定されている（福岡市教育委員会編 2003)。Ｇ－１、Ｇ－６号墳の被葬者は前述したように中央政権との関係を色濃く残している。またＧ－１、Ｇ－６号墳の石室石材の巨大さは、築造にあたって地域的な集団を超えた労力の必要性を感じさせる。このように桑原石ヶ元古墳群と元岡Ｇ群の被葬者集団の背景には、在地と中央という対比関係のようなものが見えてくる。

（３）まとめ～古代の元岡・桑原地区の社会構造につながる古墳築造の構造

６世紀後半に出現した小石室墳と元岡Ｎ群、そして同時期に作られた元岡Ｇ－１号墳、それを継ぐＧ－６号墳の存在は、６世紀後半に元岡・桑原地区に出現した新たな集団と、その集団が中央政権と強いつながりを持っていたことが前項までの考察の結果導き出せた。

この集団が元岡地区に出現した社会的背景を考えた時に、６世紀後半の大和朝廷の朝鮮半島進出の

動きが考えられる。この動きの一端として 602 年の久米皇子の派兵が挙げられるが、それ以前に糸島半島が朝鮮半島進出の橋頭堡として大和朝廷の影響を強く受けていたことは十分に考えられ、その影響を受けた結果、元岡地区に新たに大和朝廷の影響を受けた集団が発生した、という状況も考えうる。

桑原石ヶ元古墳群の被葬者集団である「鍛冶（製鉄）技術を持つ在地的地縁集団」に対して、元岡地区の新たな集団は「中央政権と繋がりを持つ（擬制的な）集団」であり、両者は 7 世紀まで別々の墓域を構成して、一体化することはなかったことが、古墳の築造状況から推測できる。

古代に桑原地区が一大製鉄炉群を構成して大規模な操業を行うが、この操業については国家的プロジェクトとしての製鉄・鉄器製作事業が想定されている。この場合の社会構造として、

〈中央政権の支配・指示〉＋〈在地の技術者集団〉

という図式が考えられるが、6 世紀後半から 7 世紀にかけての元岡・桑原地区の古墳群から見出せる構造は、まさにこのプロトタイプの形態だったといえる。

桑原石ケ元古墳群と元岡Ｇ－６号墳、そして庚寅銘大刀は、古代の元岡・桑原遺跡群における大規模な製鉄・鉄器生産を可能とした社会構造を検討する上で、欠かすことのできない重要な考古学的証拠として考える必要があろう。

〈論文・文献〉

網干善教 1979「八角方墳とその意義」『橿原考古学研究所論集』第 5

小田富士夫 1964「九州の須恵器序説」『九州考古学』22

岡部裕俊・川村裕一郎 1994「糸島地方の古墳資料集成（その 1）」『福岡考古』16

川越俊一 2000「藤原京条坊年代考」『研究論集ＸＩ』奈良国立文化財研究所学報第 60 集

佐藤隆 2000「古代難波の土器様相とその史的背景」『難波宮址の研究』第 11

直宮憲一 1988「八角墳再考」『網干善教先生華甲記念　考古学論集』

西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『小林行雄博士古稀記念　古文化論考』

舟山良一 2008「須恵器の編年」『牛頸窯址群　総括報告書Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第 77 集

宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・今井隆博 2005「福岡市西区元岡・塩除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」『九州考古学 80』

宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・黒木貴一 2006「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」『九州考古学 81』

山崎龍雄 2016「中世 13　元岡・桑原遺跡群」『新修福岡市史　資料編　考古 1』

〈調査報告書〉

福岡市教育委員会編 2003『元岡・桑原遺跡群 2』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 744 集

福岡市教育委員会編 2005『元岡・桑原遺跡群 5』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 861 集

福岡市教育委員会編 2006a『元岡・桑原遺跡群 6』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 910 集

福岡市教育委員会編 2006b『元岡・桑原遺跡群 7』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 861 集

福岡市教育委員会編 2008『元岡・桑原遺跡群 11』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1011 集

福岡市教育委員会編 2011『元岡・桑原遺跡群 18』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1105 集

福岡市教育委員会編 2013『元岡・桑原遺跡群 22』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1210 集

福岡市教育委員会編 2016『元岡・桑原遺跡群 26』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1301 集

福岡市教育委員会編 2018『元岡・桑原遺跡群 30』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1355 集

福岡市教育委員会編 2019『元岡・桑原遺跡群 33』福岡市埋蔵文化財課調査報告書第 1381 集

特論５　古墳時代後期から古代の様相について

菅波 正人

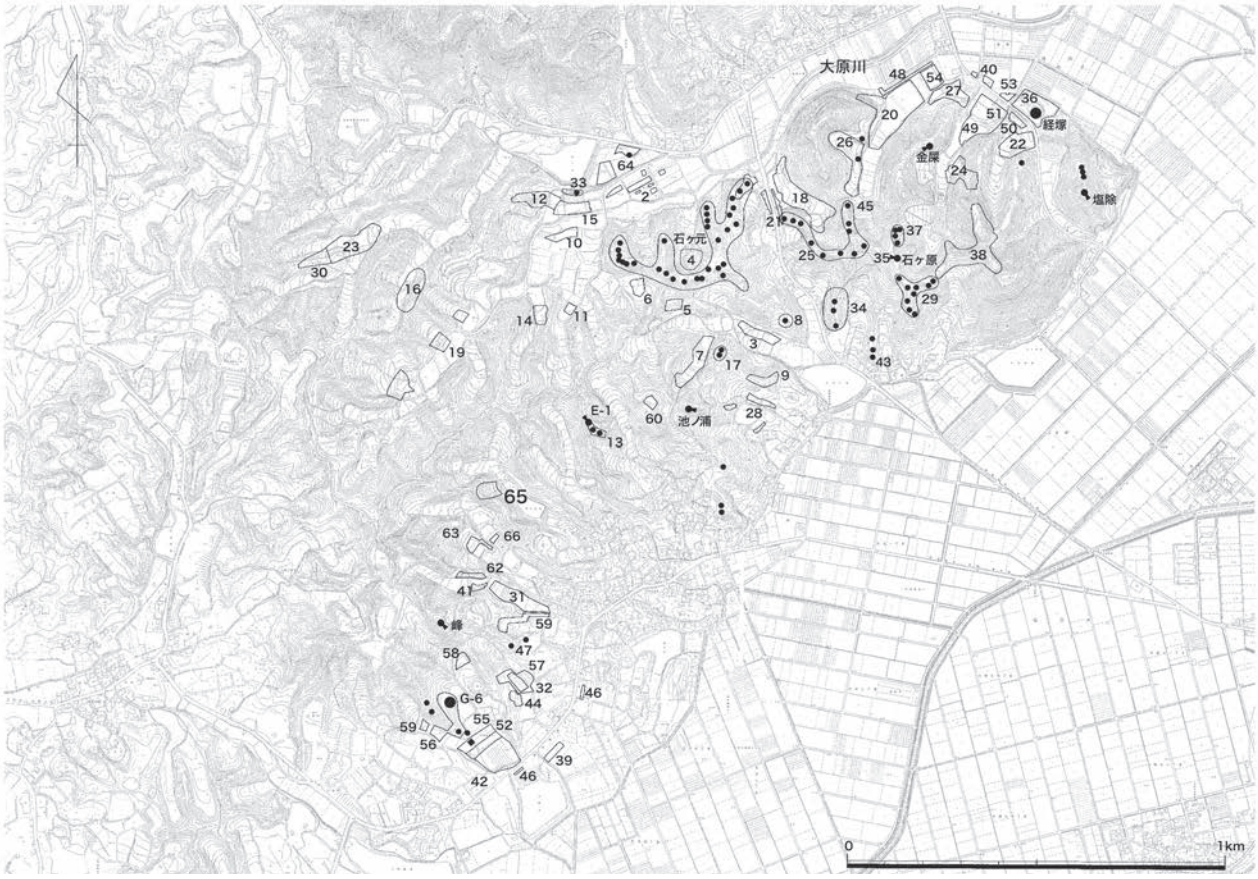
1 古墳時代後期の遺構と遺物

遺跡の立地する丘陵は第三紀後葉に形成された花崗岩を基盤とし、高さは標高 100m 前後を頂部として樹枝状の浸食谷が地形を複雑にしている。遺跡群の北側を流れる大原川流域を除くと、平野はほとんどなく、弥生時代以降、集落は主に谷部に営まれている (第 1 図)。

古墳時代の遺構・遺物は前半期から見られるが、後半期には石ヶ原古墳などの大型の前方後円墳が築造されるとともに、桑原石ケ元古墳群などの群集墳や集落の増加する。

遺跡群の北側に位置する第 20 次､27 次調査地点では 100 軒以上の竪穴住居を検出した（第２図)。周囲に金屎古墳、経塚古墳、石ヶ原古墳などの前方後円墳、大型円墳が分布することからも、この地域の拠点となる居住域と考えられる。竪穴住居は５世紀代から営まれ､７世紀までの長期にわたる(第３図)。調査区北側中央に幅 20 m、長さ 50 mを超えるため池 SX044 があり、５世紀～７世紀の各時期の土器、木器（農耕具、建築部材等)、動物骨（馬）などが多量に出土した。注目されるのは完形の土器（土師器の小型丸底壷、須恵器坏)、子持ち勾玉や滑石製の小玉、大刀などで、水場の祭祀に使用されたと考えられる（第４図)。更に､桑原石ヶ元古墳群でも見られた鍛冶道具や陶質土器（第５図）なども出土しており、半島系の工人集団の居住も想定される。

第 20 次調査地点東側の丘陵を挟んだ谷部に位置する第 49 次、51 次調査では、中央を蛇行しながら北流する河川の両側に営まれた、６世紀後半から７世紀初めの竪穴式住居跡 14 棟と８世紀初めま

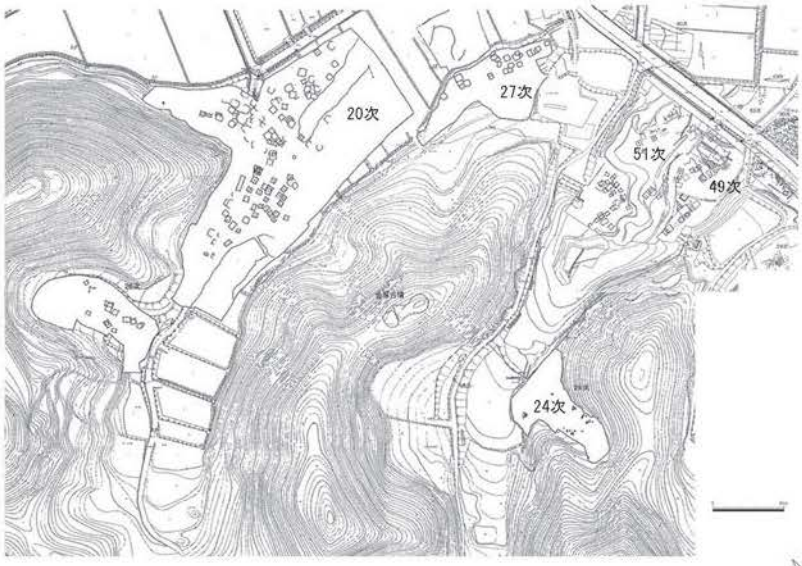


第１図　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図（1/15,000）

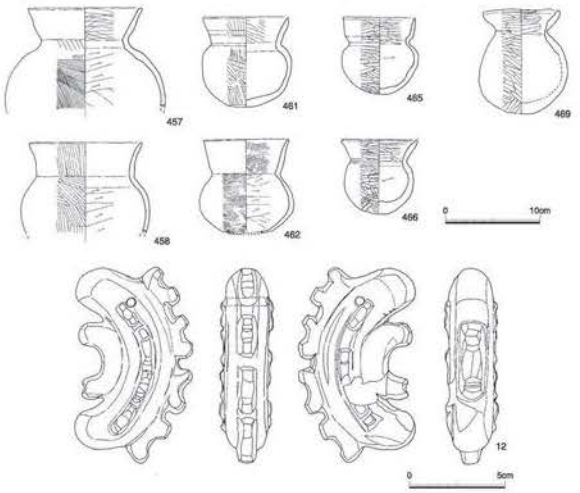
でと考えられる掘立柱建物 72 棟を検出した（第６図）。また、河川から柱やネズミ返し、扉などの部材が出土した。この地点は第 20 次調査地点と異なり、竪穴住居の造営開始は６世紀後半で、特に７世紀初頭から後半にかけては、１×１間や２×２間の総柱建物が密集して営まれている。それぞれの建物は小規模であるが、一定の範囲に継続して倉庫群が営まれる。

同様の構造は第７次、第 18 次調査地点でも見られ、集落の開始時期や河川の両岸に倉庫群が営まれるようになるなど類似点が多い（第７図）。竪穴住居より倉庫が多いことから居住域というより、独立した倉庫域と見做すことができる。

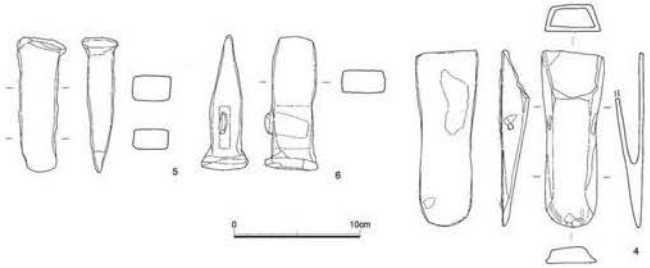
一方、手工業生産に関しては、第 24 次調査では７世紀前半代の竪穴住居からふいごの羽口が、第



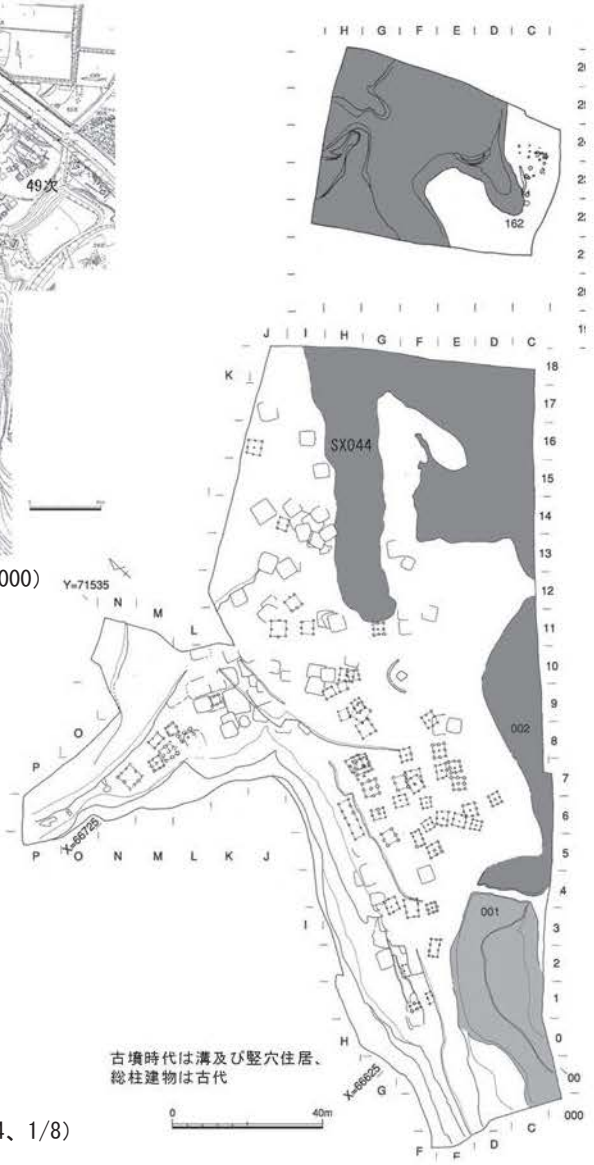
第２図　第 20 次・27 次・49 次・51 次調査地点遺構分布図（1/6,000）



第４図　第 20 次調査 SX044 出土土師器及び子持勾玉実測図（1/4、1/8）



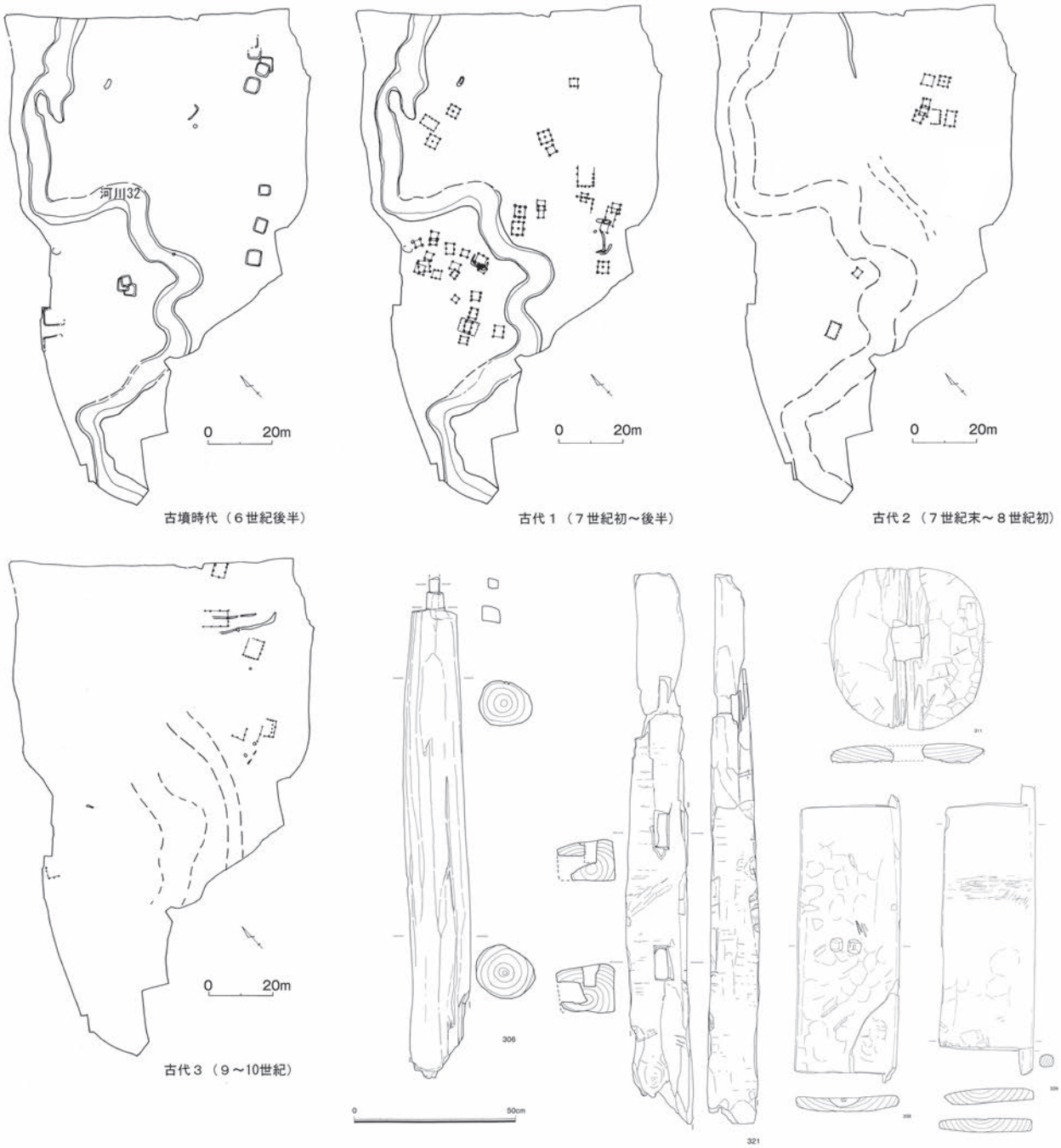
第５図　第 20 次調査出土鍛冶道具及び鋳造鉄斧（1/6）



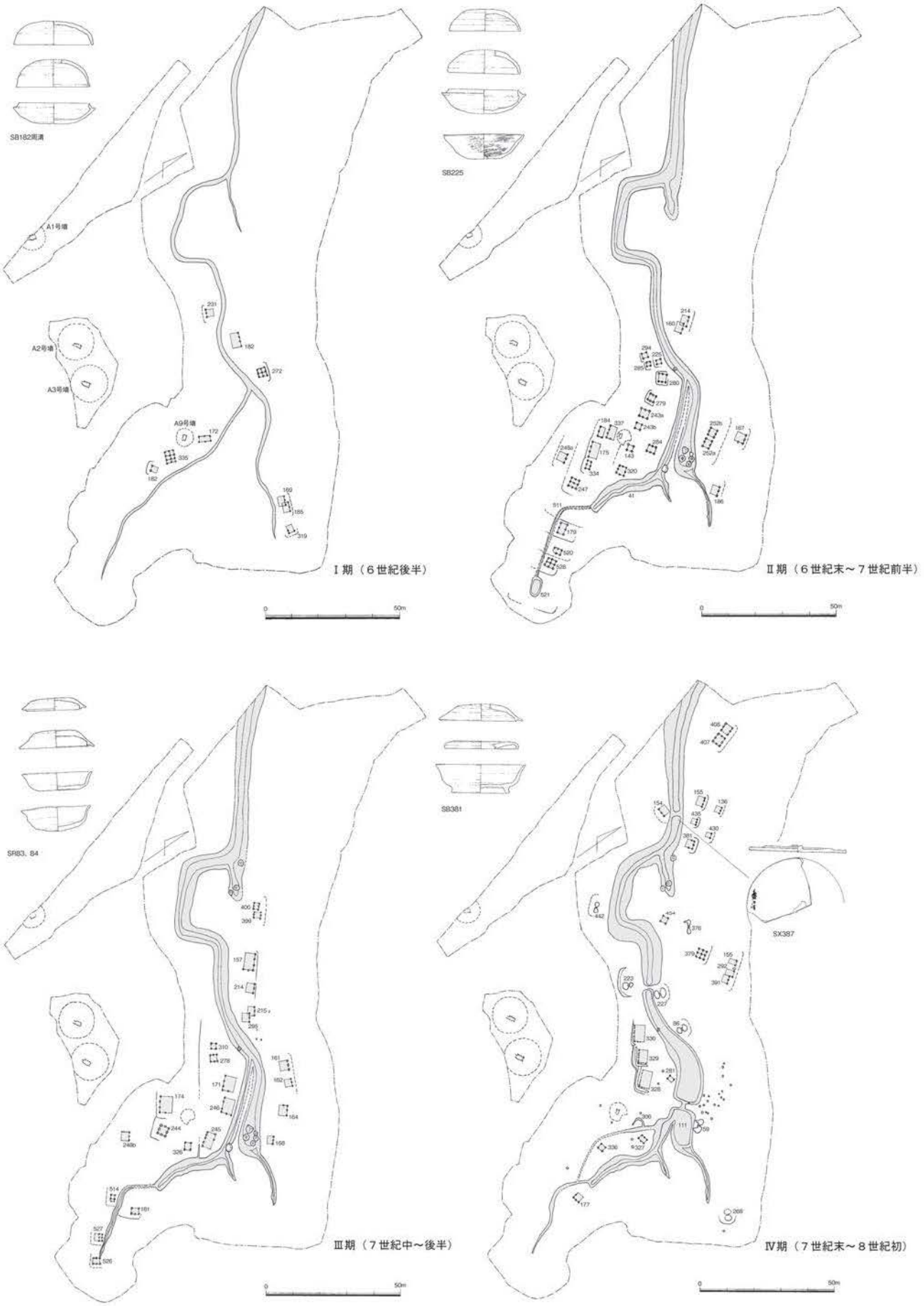
第３図　第 20 次調査地点古墳時代遺構分布図（(1/2,000）

20 次調査では鉄製の金槌や鏨、桑原石ケ元古墳群第 12 号墳からは鍛冶道具が出土しており、鉄器の生産が行われていたことが想定される。また、第 18 次調査では須恵器系土師器に見られる当て具痕に類似した木製の当て具が出土しており、土器の生産も行われていたことも想定される。さらに、第 18 次、20 次調査では古墳時代の河川から馬の歯や木製の鞍、壷鐙なども出土しており、馬の飼育もおこなわれていた可能性も推測される。

このように 6 世紀後半から 7 世紀にかけて、集落構造や手工業生産などにおいて大きな画期が認められる。それはこの地域が当該期に百済支援の軍事的拠点であったことと関連した現象と捉えることができよう。更に、集落構造や手工業生産（鉄、須恵器）にみられる動向は、博多湾沿岸地域全体で捉えるべきものであり、那津官家の設置を契機とする地域の再編成の一環として考える必要があろう。



第６図　第 49 次・51 次調査地点遺構変遷図及び河川 32 出土部材実測図（1/20、1/2,000）



第７図　第 18 次調査地点遺構変遷図（1/2,000）

2 古代の遺構と遺物

古墳時代後期においては、6 世紀後半から 7 世紀かけての倉庫域の出現や多様な手工業生産など、百済支援に関わる軍事的拠点整備の様相を窺うことができた。前述の調査地点では 7 世紀末～ 8 世紀初頭に遺構が見られなくなるものや構造が大きく変わるものなどがあり、新たな画期を向える。

遺跡群が所在する地域は古代では志摩郡に属し、郡内は登志、川辺、韓良、明敷、久米、加夜、志麻、鶏永といった郷が存在した。文献では正倉院に現存する最古（大宝 2 年）の戸籍の筑前国嶋郡川辺里戸籍がある。戸籍には嶋郡の大領である肥君猪手が居住していた川辺里の比定地は諸説あり、現在の志摩町馬場付近を中心とした地域という説もあるが、確定していない。

郡家に関わる遺構については今のところ不明確であるが、本遺跡群では遺構や遺物の様相から公的施設の存在が想定される。中でも木簡と製鉄遺構は他の遺跡を圧倒している。木簡は第 7 次、15 次、20 次、18 次、57 次調査で出土し、これらの地点では墨書土器や硯、帯金具などもみられる。製鉄遺構は主に第 7 次、12 次、18 次、20 次、24 次、31 次調査で確認され、大規模な操業が想定される。

第 7 次調査地点は第 18 次調査地点同様、6 世紀後半から遺構が見られるようになる（第 8 図）。7 世紀後半～ 8 世紀前半では掘立柱建物（総柱 3 棟、その他 17 棟）、石垣状遺構、貯水遺構、道路状遺構、製鉄炉 6 基、地床炉（鍛冶炉含）17 基、焼土壙 10 基、土壙数基、溝・柱穴多数を検出した。

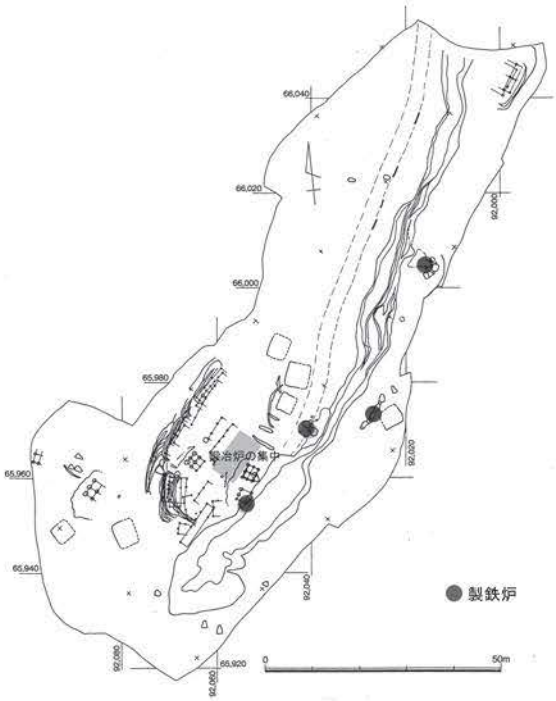
建物群は谷の西側斜面に数段の大規模な造成面を設け、約 20 棟の建物が営まれる。貯水遺構は谷奥中央にあり、検出面で幅約 10 m、長さ約 50 m、深さ約 2 mを測る。文字関連資料として、木簡のほかに墨書土器 1 点（判読不明）や箆書土器「坏」、硯 3 点などが出土した。3 点の木簡は貯水遺構の下層で出土し、8 世紀前半以前に位置づけられる（第 10 図）。

1 号木簡は「壬辰年韓鐵□□」と記された荷札形式のものである。壬辰年は共伴遺物の年代観などから、持統 6（692）年と考えられる。2 号木簡は本来、長さ 60 ｃｍ前後の長大形の木簡であり、両端を欠損している。墨痕は薄いが「里長」、「嶋里」等の文字が見られ、郡符木簡の可能性がある。

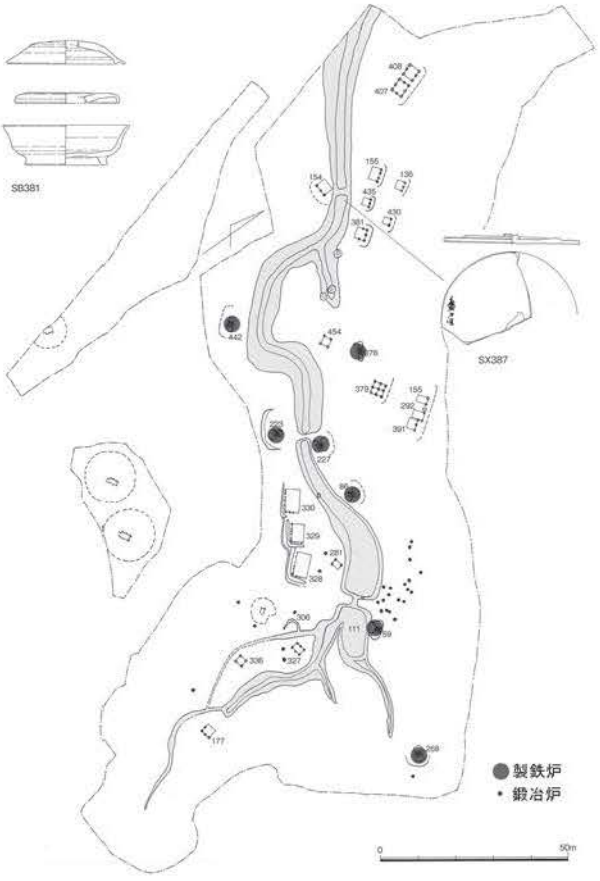
第 18 次調査地点では 7 世紀前後の時期には倉庫域が形成されるが、7 世紀中ごろには側柱建物も見られるようになり、3 ～ 4 棟の倉庫からなるまとまりが 3 ～ 4 ヶ所で確認される（第 9 図）。この時期で少数ではあるが鍛冶炉も見つかっている。7 世紀末ごろでは遺構は谷の開口部に広がるとともに、谷奥は再び造成され、製鉄炉や鍛冶炉など製鉄遺構が多数営まれている。谷部からは 7 世紀代に位置づけられる荷札木簡が出土したが、内容は不明である。

第 15 次調査では第 12 次調査から連なる谷部の最下層で木簡が出土した（第 11 図）。木簡は折敷底板を転用したもので十数点に破断していた。共伴遺物などから 8 世紀前半以前と考えられる。木簡は本来の半分程度の遺存であるが、片面に 3 行約 70 文字が読みとれる（第 12 図）。内容は古代の「解除（祓）」に関連するものであり、祓に用いる祓具の品目と数量を記している。祓具は記載分だけで 15 種類に及び、それぞれの数量も多い。またこのうち 6 品には合点が付されている。そこに記された「人方、馬方、弓、矢、酒、米」などの品目は大祓の祓具にも共通する一方で、「水船、五色物、赤玉、立志玉、栗木、□木」などは都城の祓具にないものも含まれる。三宅和郎氏はここで見られる祓は都城系と在地系祓具の双方が使用されていたと指摘する。

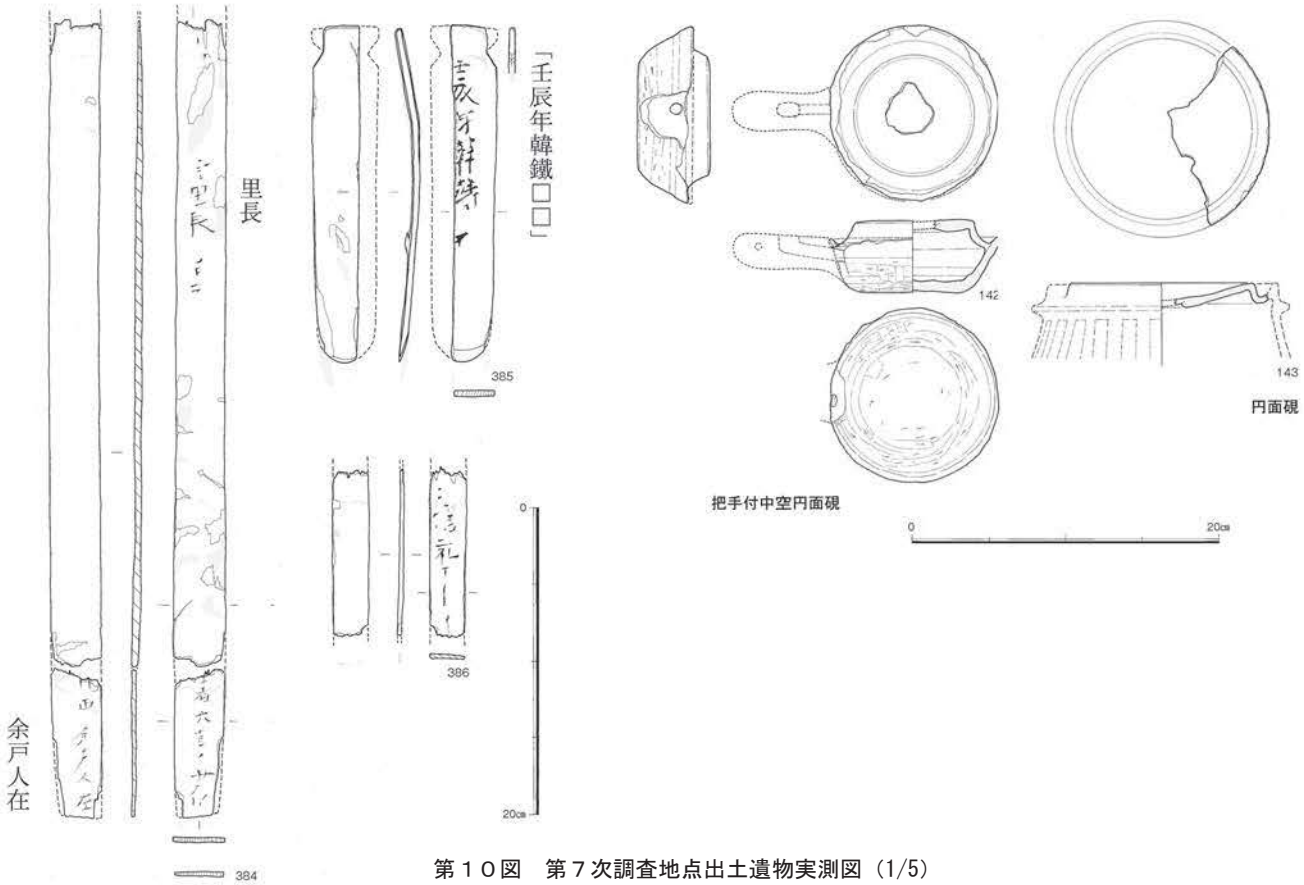
第 20 次調査地点は 5 世紀から 7 世紀にかけて居住域として利用されるが、8 世紀になると大規模な整地が行われ、2 × 2 間の総柱建物から構成される倉庫域となる（第 13 図）。2 × 2 間の建物は床面積約 10 ～ 14 ㎡で、東西 30 m、南北 30 mの範囲に概ね柱筋をそろえて配置される。重藤輝行氏は倉庫域は郡や郷などの官衙に伴うものというより、その規模などから郡内の有力者が所管するもの



第８図　第７次調査地点古代遺構分布図（1/1,600）



第９図　第 18 次調査地点古代遺構分布図（1/2,000）



第１０図　第７次調査地点出土遺物実測図（1/5）

と推測する。調査区東側では池状遺構 SX001（第 14 図）があり、土器類（須恵器、土師器）、木簡、木製品、鉄製品等が多量に出土した（第 15 図）。木製品には舟形木製品や斎串などの祭祀具があり、池状遺構での祭祀形態や第 18 次調査の木簡記載の祓い具との共通点も注目される 。

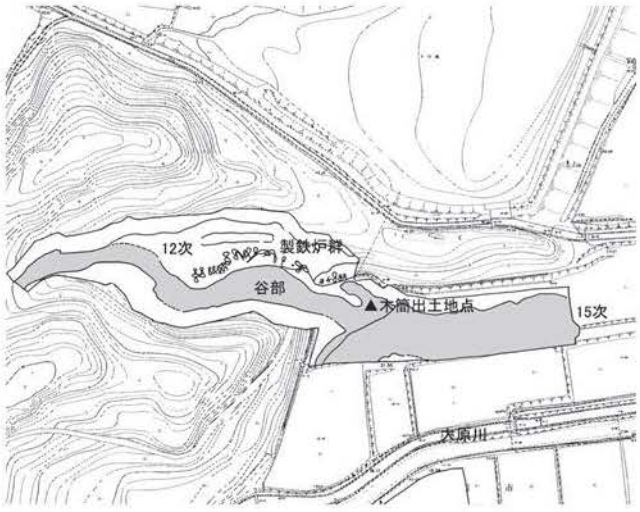
木簡は共伴した土器や記載されていた年紀から８世紀前半代と後半代の二つに分けられる。内容については年紀、地名、人名を示したもの、貢納に関わるもの、税に関わるもの、祭祀に関わるものなどがある（第 16 図）。

年紀には８号木簡の「 太寶元年 」（701 年）と 1 号木簡、26 号木簡の「 延暦四年 」（785 年）がある。そのうち、８号木簡の年紀の記載は「大寶元年辛丑」とあり、干支との併用で大宝令施行直後の状況を示す資料として注目される。

地名を示すものとして、「 嶋郡赤敷里 」「登志郷」「久米郷」「志」があり、志麻郡内の各郷（明敷、久米、登志、志麻）の多くから持ち込まれたものと推測される。

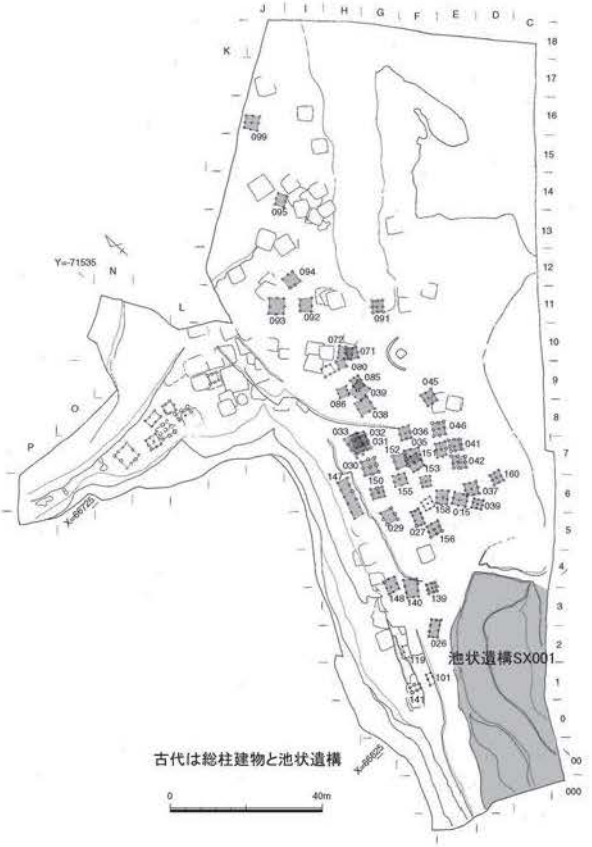
人名には「 難波部 」「 額田部 」「 久米部 」「 建部 」「中臣部」「己西部」などがある。これらの人名は嶋郡川辺里の戸籍にも見られるが、軍事に関わりがある「建部」や「久米部」、朝鮮半島との関わりが深い「己西部」などがあることは、この地域が７世紀に半島支援の軍事的拠点であった状況からすると非常に興味深い。

この他、 1 号木簡に記されていた「 計帳 」や 14 号木簡に見られる「出挙」は当時の制度に関連するものである。また、13 号木簡の「道塞」は、道の「塞神」、「障神」（サヘノカミ）に通じ、道祖神に関わる資料とされる。平川南氏はこの木簡は博多湾に面した地理的状況から外国使節の来着を意識



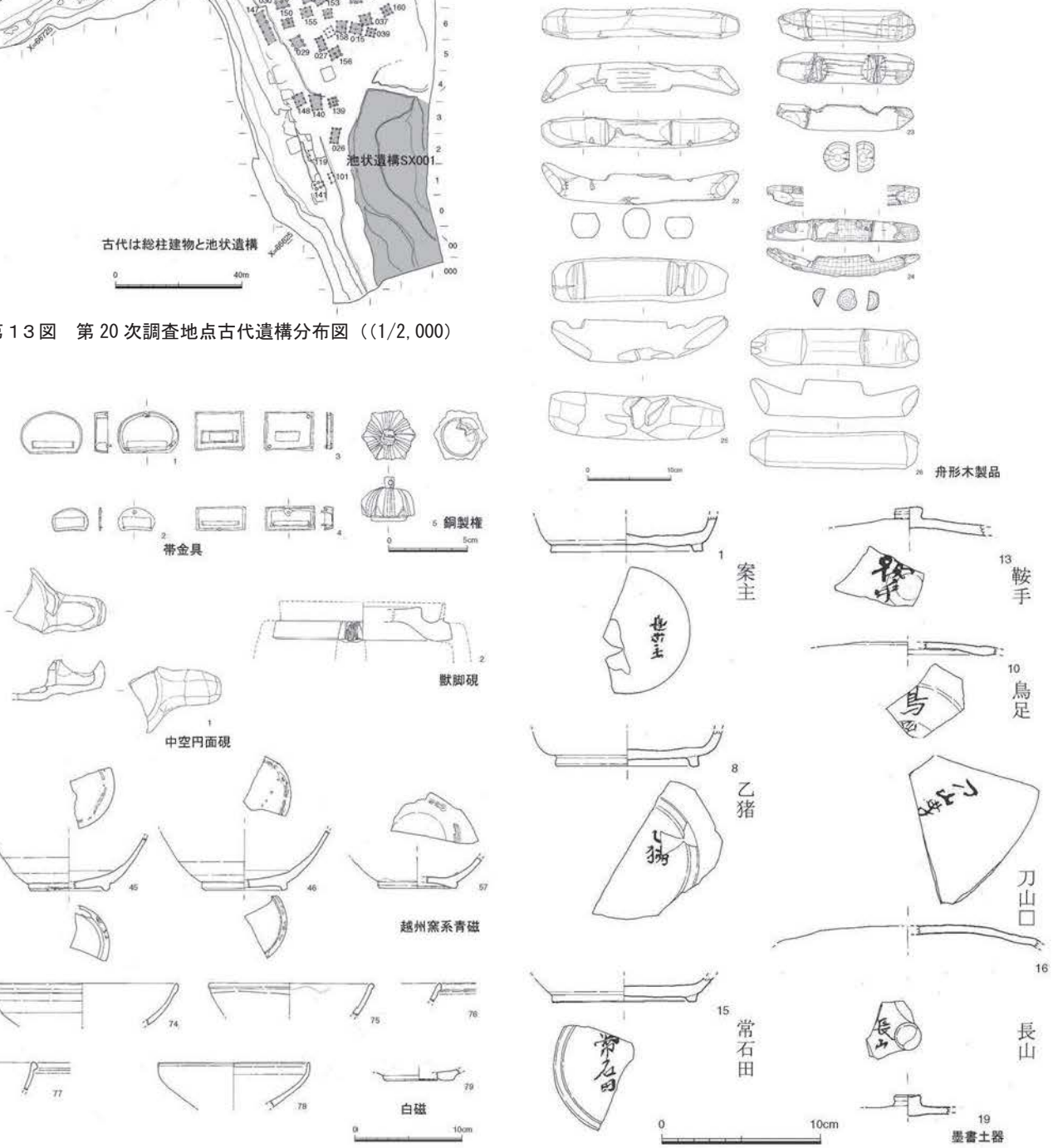
第１１図　第 15 次調査地点木簡出土位置図

第１２図　第 15 次調査地点出土木簡実測図及び釈文（1/4）

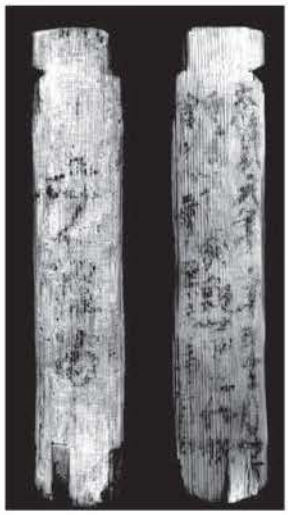


第１３図　第 20 次調査地点古代遺構分布図（(1/2, 000）

第１４図　第 20 次調査掘立柱建物及び池状状遺構（西から）



第１５図　第 20 次調査出土遺物実測図（1/4、1/6、1/8）



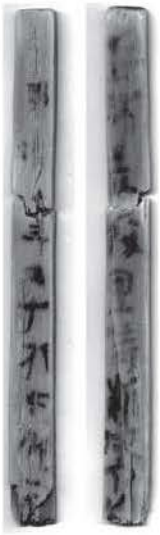
・「太寶元年辛丑十二月廿二日」
白□□□〔米二石カ〕［　］鮑廿四連代税
官川内□〔歳カ〕六黒毛馬胸白
・「『六人ア川内』」

・□〔粮カ〕壹石者
・計帳造書□□用仍□
延暦四年六月廿四日中

献上　□□□（皮カ）……延暦四年十月十四日真成

登志郷

久米□〔郷カ〕大神マ得



・「嶋郡赤敷里□〔持カ〕難波ア□〔首カ〕
・「□□〔五月カ〕廿三日丁卯□□□

・道塞　」
・十乙（天地を逆に）　」

・　□〔銭カ〕百十五文
□己酉マ田麻呂西□□〔岡マカ〕□［　］
・［　］

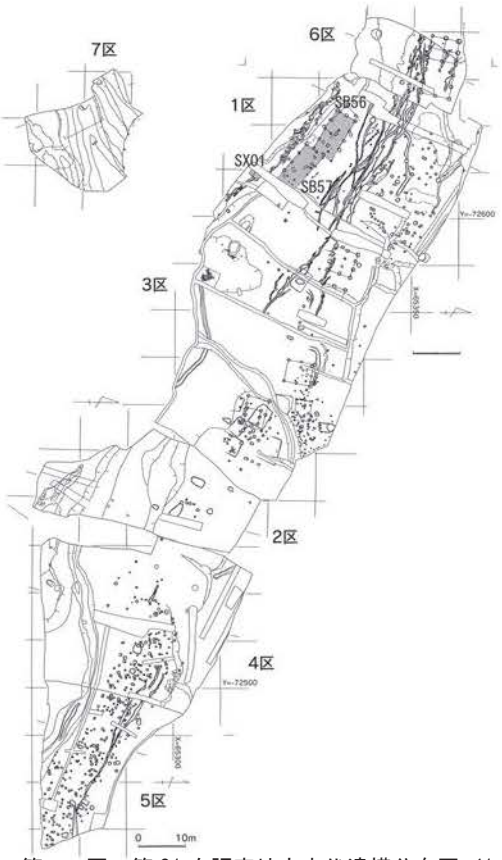
□建マ根足

第１６図　第 20 次調査地点出土木簡赤外線写真及び釈文(1/4)

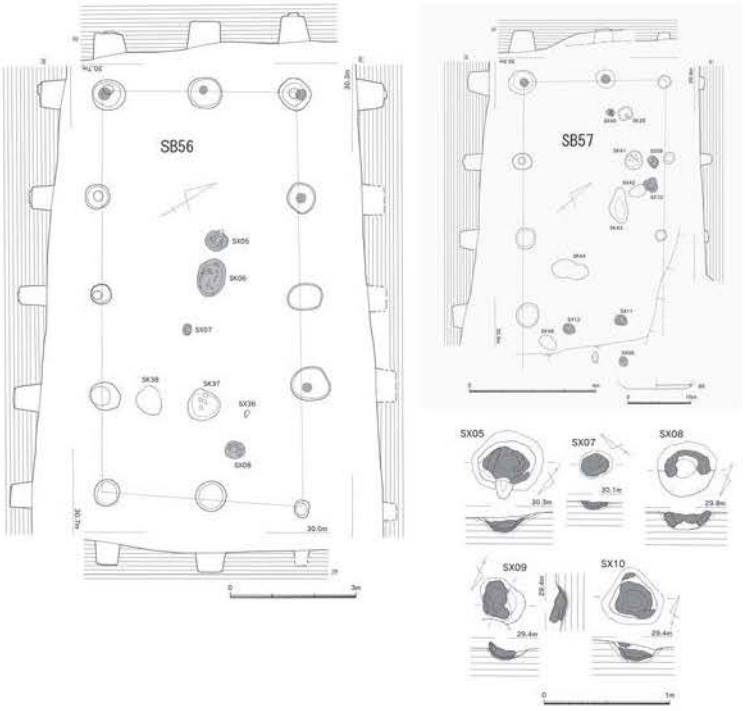
し、疫病などの侵入を防ぐための祭祀に使用した可能性を指摘する。

更に、文字資料として、80点余りの墨書土器も出土した(第15図)。墨書土器は遺跡群内では第7次、18次、31次、57次調査で出土しているが、点数は1～2点と少なく、本地点の量は群を抜いている。墨書の内容は文書事務を行う下級役人を指す「案主」、人名と考えられる「乙猪」、「嶋足」、地名と考えられる「刀山下」、「常石田」、祭祀に関わると考えられる「善」、「依」、「稲奉」等があり、木簡や祭祀の遺物などの内容とも符合していることが分かる。

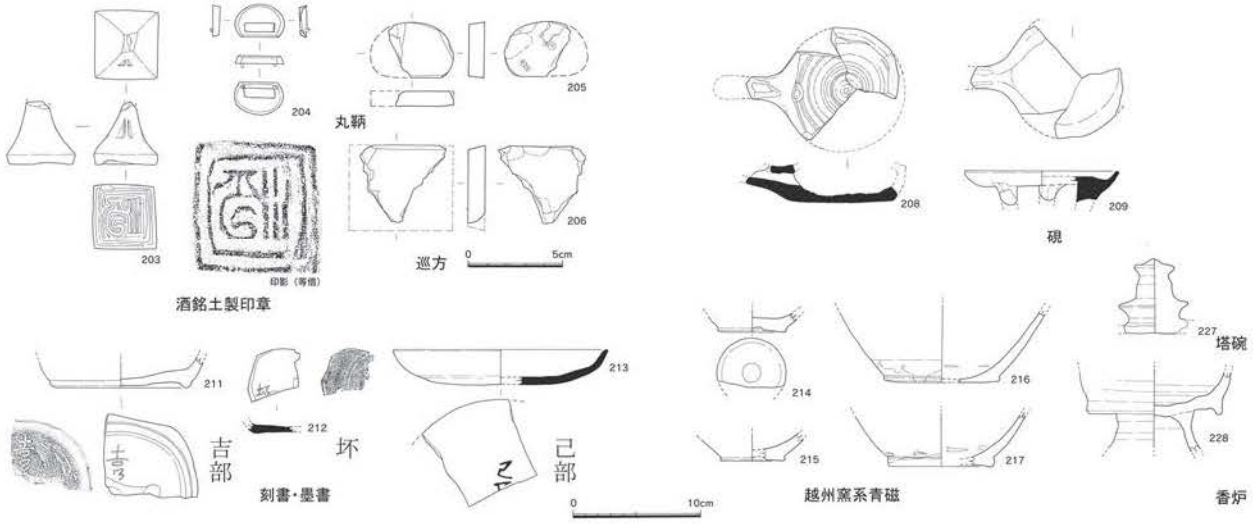
第31次調査では遺跡群の南西に位置し、第7次や18次調査地点と同様に6世紀代に遺構が見られるようになる。古代では9世紀代の鍛冶工房や掘立柱建物、瓦窯などを検出した（第17図)。鍛冶工



第１７図　第31次調査地点古代遺構分布図（1/2,000）



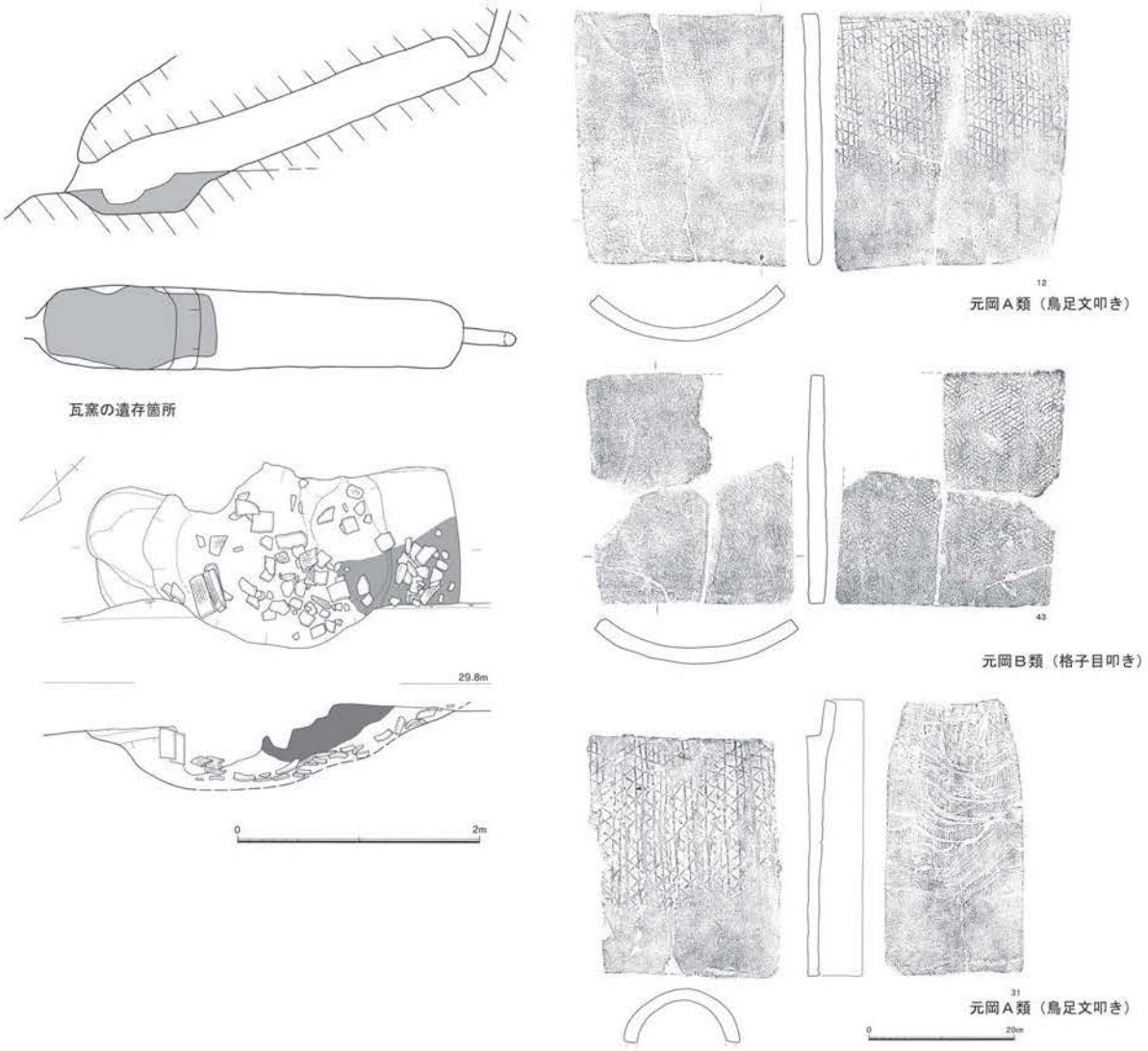
第１８図　第31次調査地点鍛冶工房実測図（1/60、1/200）



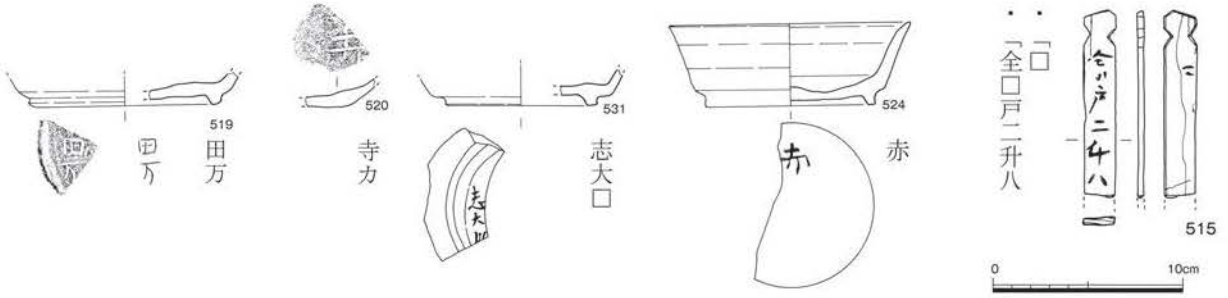
第１９図　第31次調査地点出土遺物実測図（1/4、1/5）

房は２× 4 間の上屋を持つもので、内部に複数の鍛冶炉がある（第 18 図）。調査地点の上流に当たる第 41 次調査地点では製鉄炉の一部を検出しており、製鉄工房域と言える。また、「酒」銘の土製印章や丸鞆・巡方、墨書土器や硯、越州窯系青磁なども出土している（第 19 図）。

瓦窯 SX01 は削平により、燃焼部から焼成部にかけてのみ残存する（第 20 図）。床面幅 1.0 m、燃焼部の長さ 1.4 mを測る。出土した瓦は平瓦、丸瓦のみで、軒瓦は含まれない。平瓦は桶巻き作りで、凸面の叩きは鳥足文叩きと格子目のの文様が見られる（第 21 図）。前者は鴻臚館跡や女原瓦窯跡などの出土瓦と類似するもので、工人の繋がりや供給先を考える上で注目される。



第２０図　第 31 次調査地点窯跡 SX01 及び出瓦実測図（1/10、1/60）



第２１図　第 57 次出土遺物実測図（1/4）

3 製鉄遺構の様相

糸島地域では海岸で良好な砂鉄が得られることから製鉄遺跡が多く分布する。遺跡群でもこれまでに 50 基近い製鉄炉を検出した。その内、第 7 次、18 次では 7 世紀末にさかのぼる製鉄炉の他、鍛冶遺構も複数基を検出した。炉の形態は規模 40 ㎝ほどの小型のもので、第 12 次調査で見られるⅠ類の箱型炉である。鉄滓の量から操業の規模は大きくないが、大規模な鉄生産に向かう画期と考えられる。

遺跡群で最も集中するのは第 12 次調査地点で、製鉄炉跡 27 基を検出した（第 22 図）。遺構の時期は 8 世紀中ごろから後半にかけてのもので、製鉄炉の形態は両側に排滓坑がつく箱形炉である。炉の配置は谷に対して、直交するもの（22 基）と平行するもの（ 5 基）がある（第 23 図）。炉床の形態は規模や構造などから大きく 3 つに分類（Ⅰ～Ⅲ類）される（第 24 図）。特に主体を占めるⅡ類はⅠ類より大型で、炉床の掘り方に粘土を貼り、その内部を焼成し、炭や真砂土などを充填するなど、構造面の進展がみられる。また、炉の側面に送風に関わると考えられる土坑が取り付くのも特徴である。この送風に関わる遺物として注目されるのが、木製の送風管で、十数点出土した。一般に土製のものがよく知られるが、本例は稀有なものである。この他に滓の掻き出しなどで使用したと考えられる木製品も出土しており、炉構造や操業の様子を復元する上で重要な資料と言える（第 25 図）。

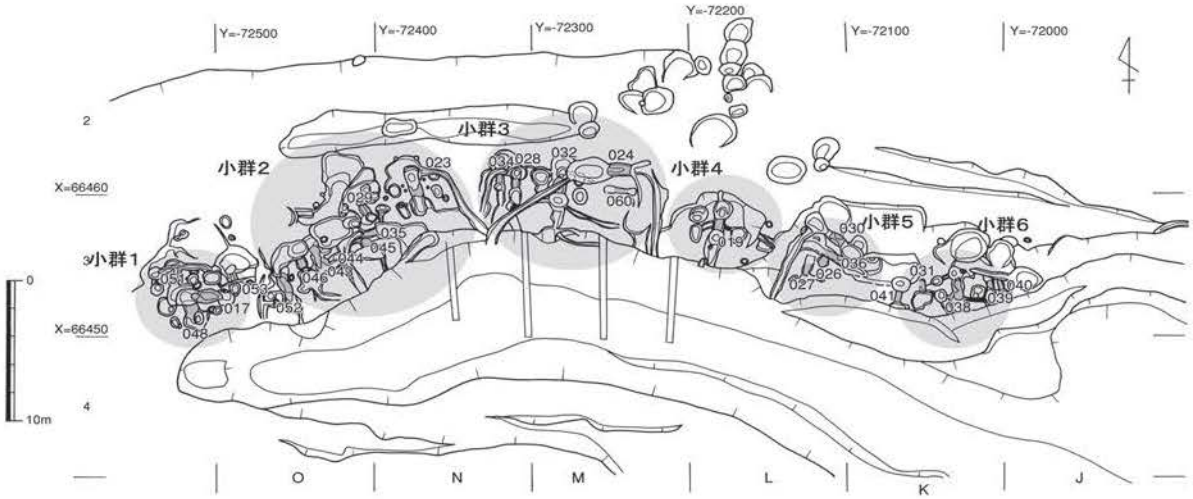
鉄関連遺物としては総重量で約 78,000kg に及ぶ炉壁、鉄滓が出土している。これらの金属学的分析の結果では、ここでは高炭素鋼から一部白鋳鉄組織を呈するものが多数確認され、刃金原料に適した高炭素鋼指向の操業が推測されている。

第 12 次調査地点では少量ながら鍛冶の羽口も出土したが、鍛冶遺構は確認できないことから、この場所では鉄の製錬作業が主作業で、以後の作業は別の場所で行われたと推測される。

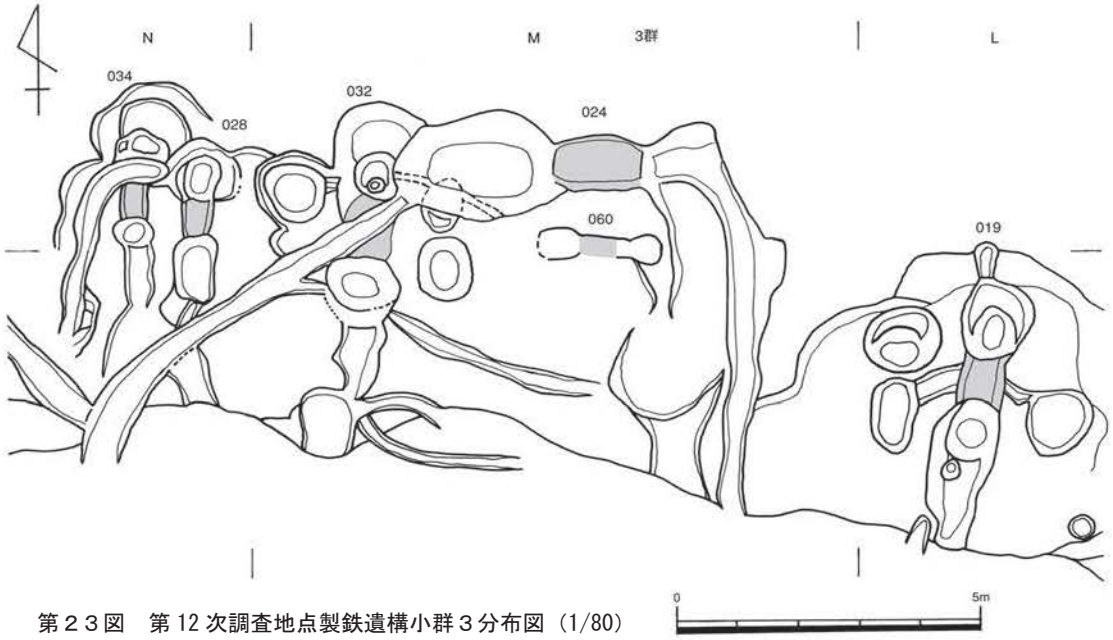
このほか、数基の土坑状の木炭窯を検出したが、製鉄炉群の規模からそれらの窯で木炭がまかなえたとは考えにくい。古代の木炭窯は糸島市（旧志摩町）藤原遺跡などに見られる横口式のものや太宰府市宝満山遺跡で見られる登り窯があげられるが、これらの遺構は第 12 次調査地点のみならず、遺跡群の中でも検出されていない。木炭は他の地域から持ち込まれた可能性が高い。

遺跡群の東側に位置する第 24 次調査地点では、製錬炉 8 基とそれに伴う排滓土坑、鍛冶炉 3 基、砂鉄ピットなどを検出した（第 26 図）。操業の開始は第 12 次調査地点に後出するものと考えられ、製鉄炉の形態は大型のⅡ類（第 27 図）が主となる。送風管は長さ 30 ㎝ほどの土製のもの（第 28 図）で、第 12 次地点とは異なる送風形態である。また、鍛冶炉も検出されており、鉄の精錬までの一連の作業工程が想定される。操業体制の相違はどのような意味をもつか、課題といえる。

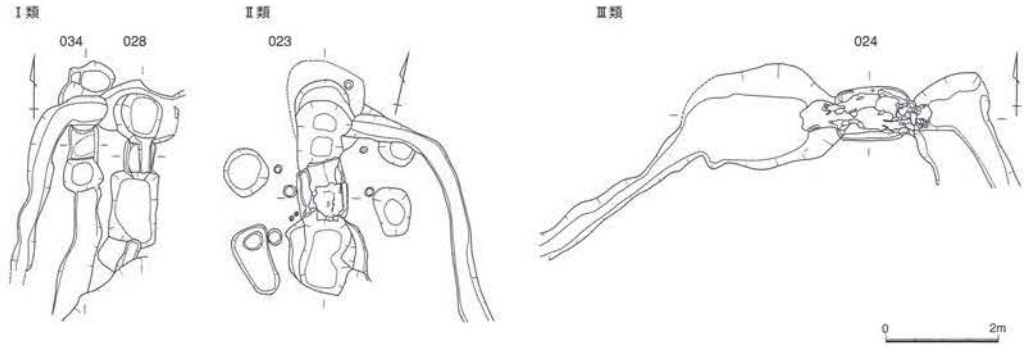
周辺の製鉄遺跡を見ると、元岡・桑原遺跡群の北側約 2 km に位置する福岡市西区大原 A 遺跡第 1 次調査では 8 世紀前半から後半にかけての製鉄炉が 3 基検出されている。いずれも両側排滓の箱型炉である。炉床の規模は長さ 1 mを超えるものである。地形に対して炉を直交して配置するものと平行して配置するものが見られる。炉には送風に関連する土坑等は見られない。この調査地点ではこの他に鍛冶炉、炭窯と考えられる焼土坑等も検出されており、鉄の精錬までの一連の作業過程がうかがえる。この調査地点の更に北側 500 mにある大原 D 遺跡でも多くの製鉄関連遺構が検出されている。1～3 次調査では形態が明確ではないが、奈良時代から平安時代にかけての時期の製鉄炉が 3 基検出されている。鍛冶炉、焼土坑なども検出されており、大原 A 遺跡と同様の様相を示している。遺物には多量の鉄滓、炉壁が検出されているが、送風に使用したと考えられる土製の送風管も出土している。第 4 次調査では 9 世紀代と考えられる製鉄炉が 1 基検出されている。炉床規模は 1 mを超え、地形に対して平行に炉を配置し、両側に排滓坑が付く。送風に関連する遺構は見られない。周辺では覆屋を



第２２図　第 12 次調査地点製鉄遺構分布図（1/500）



第２３図　第 12 次調査地点製鉄遺構小群３分布図（1/80）



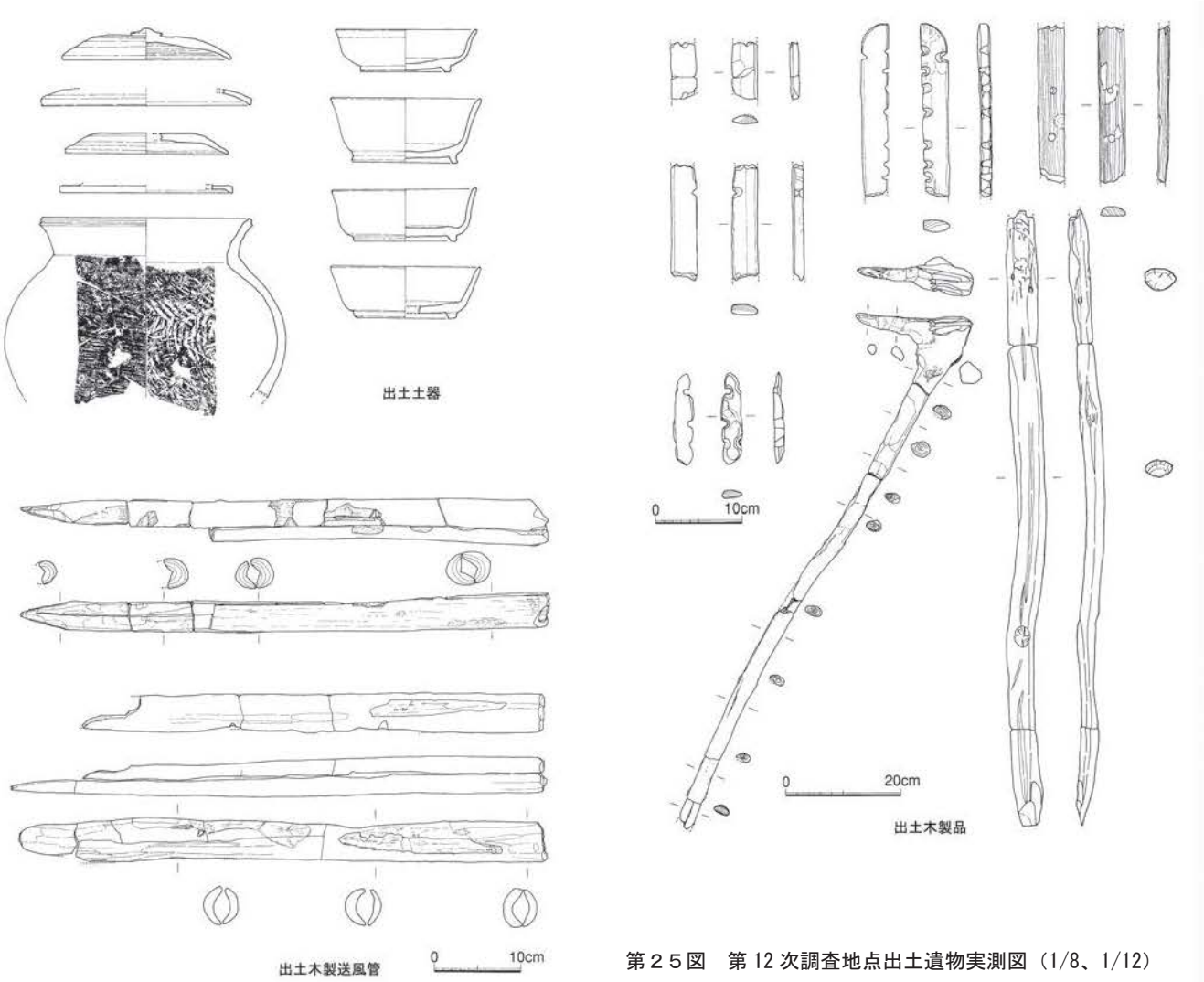
第２４図　第 12 次調査地点製鉄遺構分類図（1/150）

タイプ	炉の向き（谷に対して）	規模（炉の掘り方の幅）	炉床構造	送風関連施設（炉の側面の土坑）	遺構
Ⅰ類	直交	40cm程度	炉は掘り込んだ内部で火を焚いた後に、真砂土や焼土、炭を充填	無	040,039,031,041,026,027,028,034,045,044,046,043
Ⅱ類	直交	60cm程度	内部に粘土を貼り、充分焼き固める。その中に真砂土や焼土、炭を充填。床面は断面U字形で、焼成は壁から床面まで及ぶものが多い。	有	038,019,032,023,029,052,017,048,051,053
Ⅲ類	平行	60cm程度	Ⅱ類と同様	無	030,036,024,060,035

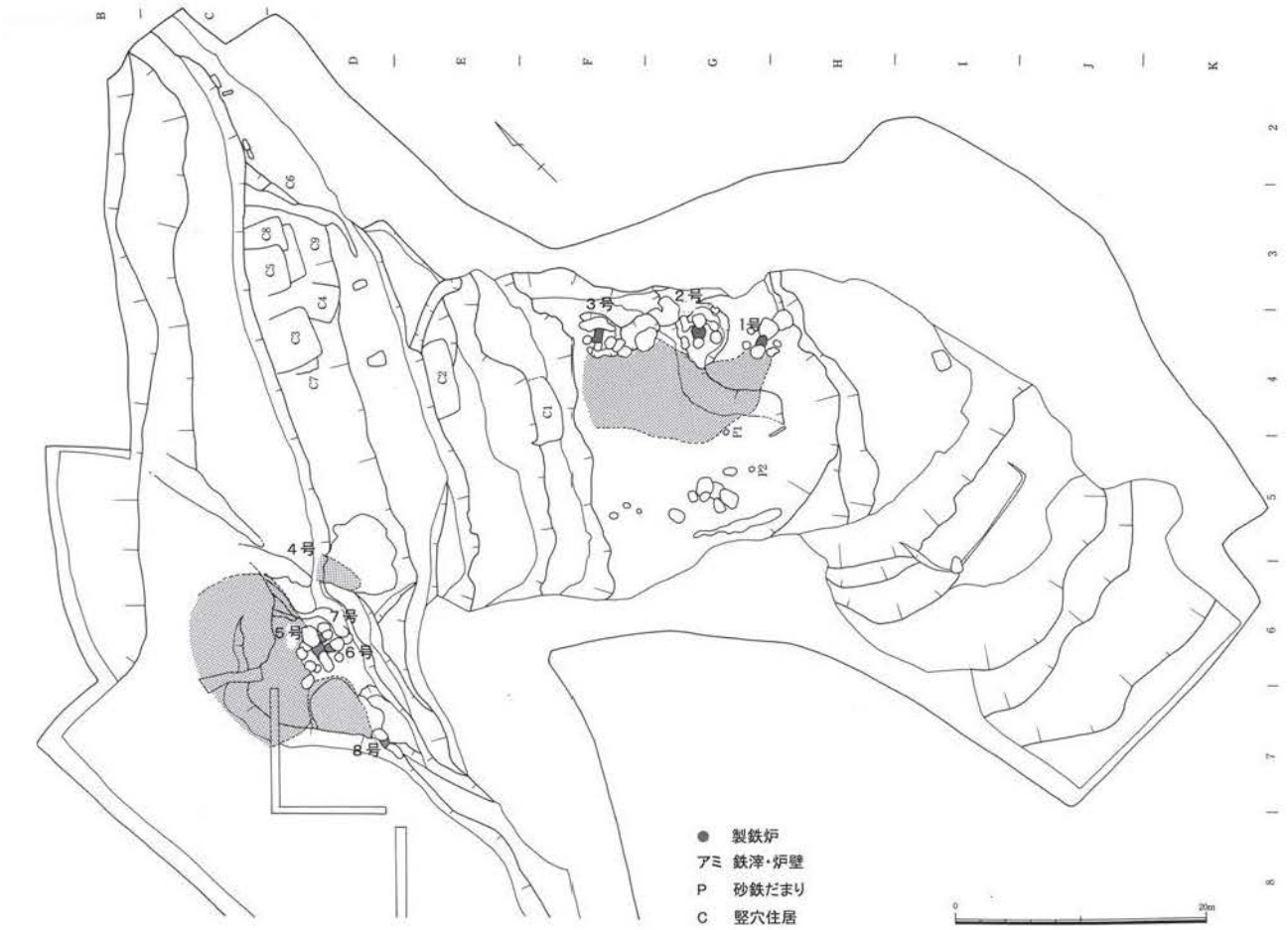
もつ鍛冶炉や焼土坑が検出されている。この他、第５、６次調査では製鉄炉は検出されていないが、鍛冶炉、焼土坑などが検出され、鉄滓、羽口などが出土している。それらの分析から荒鉄から不純物を除く精錬鍛冶や鉄器製作のための鍛錬鍛冶が行われていたことが分かっており、鍛冶を中心とした作業場であったと推定されている。このように大原Ａ遺跡、Ｄ遺跡は８世紀～９世紀にかけての製鉄遺構が集中する地域で、元岡・桑原遺跡同様、当時の拠点のひとつと考えられる。

この他、糸島市（旧志摩町）八熊製鉄遺跡では８世紀後半に位置づけられる製鉄炉が７基検出されている。ここでは切り合いながら炉が密集して造られている。炉床の規模は１ｍを超えるもので、地形に対して直交して配置されるものと平行して配置されるものとがある。切り合い関係から後者が新しく位置づけられる。また、炉壁、鉄滓の他、土製の送風管なども多数検出されている。炉壁には平面形三角形の送風孔が複数見られ、炉の構造を復元する重要な資料である。製鉄に関連する遺構としては藤原遺跡では横口式の炭窯が見つかっている。このタイプの炭窯の検出例は少なく、炭の生産体制は検討課題と言える。

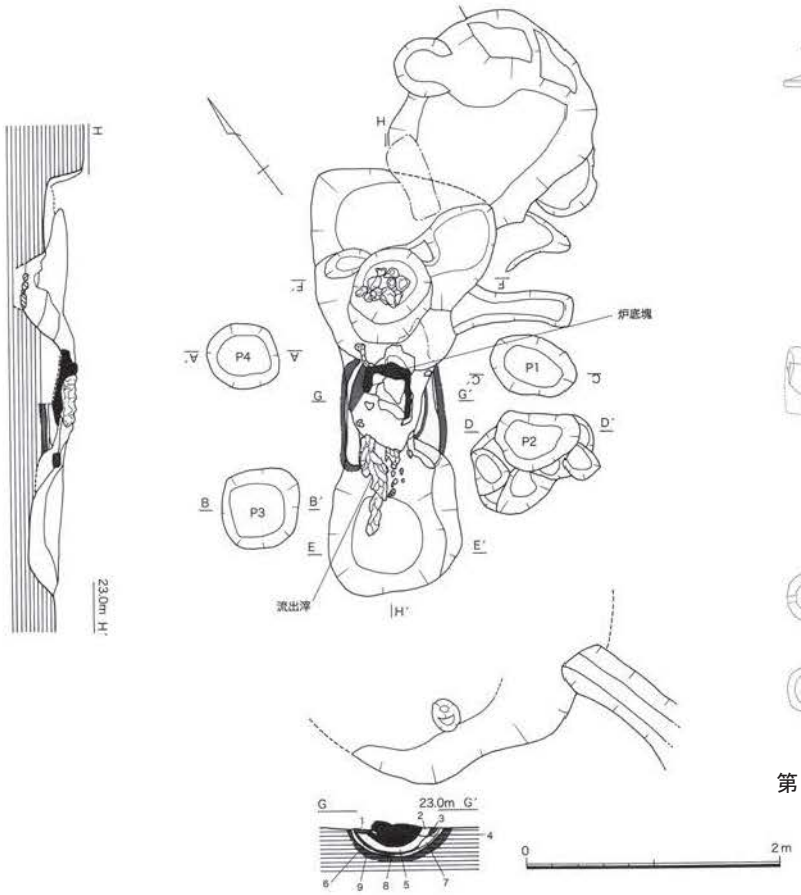
遺跡群での製鉄遺構の変遷をまとめると、7 世紀末～ 8 世紀初頭に第 7 次、18 次調査地点で見られるようなⅠ類の製鉄炉による操業が始まる。その後、第 12 次調査地点でⅠ類に加え、大型のⅡ類、Ⅲ類による大規模な操業が行われる。続く第 24 次調査地点ではⅡ類を主体とした操業が行われ、周辺遺跡もこのタイプが主となり、８世紀後半をピークに大規模鉄生産が行われる。９世紀になると、



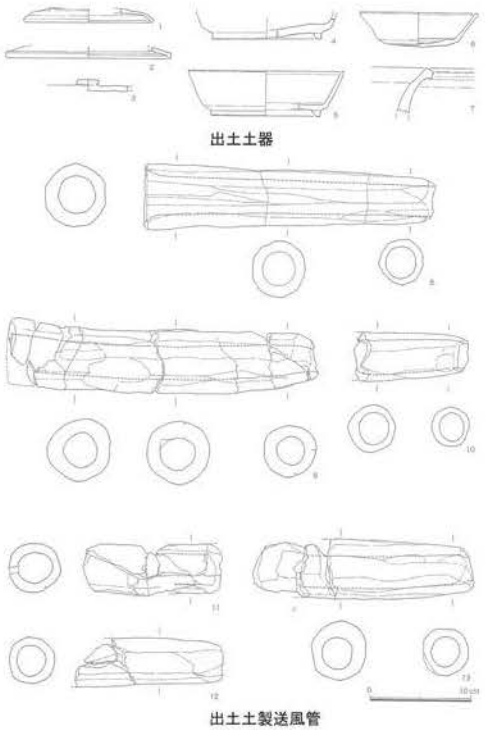
第２５図　第 12 次調査地点出土遺物実測図（1/8、1/12）



第２６図　第 24 次調査地点製鉄遺構分布図（1/600）



第２７図　第 24 次調査地点 1 号製鉄炉実測図（1/60）



第２８図　第 24 次調査地点出土遺物実測図（1/8）

生産規模は小さくなるが、第 31 次調査地点で見られるように公的な製鉄工房は存在する。

遺跡群には鍛冶道具を副葬した桑原石ヶ元古墳群や桑原 A 古墳群、第 7 次調査の 692 年に比定される「壬辰年韓鉄」銘の木簡などから、6 世紀後半～ 7 世紀代の製鉄工人の存在が想定される。そのような素地が奈良時代の大規模な鉄生産につながったと考えられる。ただし、第 12 次調査で確認されたさまざまなタイプの製鉄炉の在り方は、系統の異なる工人の存在が予想される。特にⅡ類の炉は太宰府市宝満山遺跡で 8 世紀前半のものが検出されており、大宰府の指揮下で他地域の技術も導入し、大規模に製鉄を行った可能性が考えられる。生産の大規模化については、関係が悪化した新羅への備えということが要因として考えられる。

4 おわりに

『日本書紀』には、推古 10（602）年、来目皇子が新羅を討つために撃新羅将軍に任命され、二万五千の軍衆が筑紫の嶋郡（現在の福岡市の一部と糸島市）に駐屯したと記されている。当時、筑紫の地は磐井の乱以後、ヤマト王権にとって、外交、防衛の重要な拠点として位置づけられ、那津官家の設置など博多湾岸地域の再編に力を注いでいる。中でも嶋郡が位置する糸島地域は、勢力を強めてきた新羅に対する軍事的拠点としての役割を持っており、最前線と言える場所であった。また、8 世紀半ばの怡土城の造営などの新羅対策でも重要な役割を担った場所と考えられる。

元岡・桑原遺跡群で見つかった古墳時代後期から古代の遺構、遺物はそのことに関わる重要な資料であり、律令国家成立期の対外関係を考える上でも欠かすことのできないものと言えよう。

報告書・文献

菅波正人編 2004「元岡・桑原遺跡群 4」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 860 集　福岡市教育委員会

菅波正人編 2007「元岡・桑原遺跡群 13 －第２０次調査報告２－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1013 集　福岡市教育委員会

菅波正人編 2009「元岡・桑原遺跡群 14（上・下）」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1063 集　福岡市教育委員会

吉留秀敏編 2007「元岡・桑原遺跡群 12 －第 7 次調査報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1012 集　福岡市教育委員会

吉留秀敏編 2009「元岡・桑原遺跡群 16 －第 18 次調査報告２－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102 集　福岡市教育委員会

上角智希編 2010「元岡・桑原遺跡群 17 －第 31 次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1103 集　福岡市教育委員会

大塚紀宜　2018「元岡・桑原遺跡群 31 －第 49・第 51 次・第 57 次・第 62 次・第 65 次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1356 集　福岡市教育委員会

平川南 2006「道祖神信仰の源流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 133 集　国立歴史民俗博物館

三宅和朗 2004「律令祭祀遺物の再検討」『政治と宗教の古代史』三田古代史研究会

重藤輝行 2018「西海道のヤケと倉 - 九州北部の首長・豪族居館を例として -」『大宰府の研究』大宰府史跡発掘五〇周年記念論文集刊行会　高志書院

※この章の挿図は各報告書より転載および一部加筆して使用した。

【編集後記】

元岡・桑原遺跡群の発掘調査は 1995 年から開始し、2015 年まで 66 次にわたって行われました。また、発掘調査報告書は 2001 年の発掘調査概報、2002 年の『元岡・桑原遺跡群 1』を皮切りに、今年度までに 34 冊の本報告書、2 冊の概報を刊行し、この他にパンフレット 1 冊、リーフレット 4 部を発行しました。本報告書はこれらの報告書を締めくくるものとして刊行されるものです。

この一連の発掘調査・報告書作成作業にあたっては多くの困難がありましたが、九州大学をはじめとする関係各位のご助力によって調査を遂行することができました。

調査前にはその存在すら把握されていなかった遺跡が次々と明らかになり、大規模な製鉄遺構や「壬辰年韓鐵」木簡の発見、「大宝元年」銘木簡、権衡等にみられる古代官衙的な様相など古代の官営製鉄工房の姿が明らかになり、「古代の製鉄コンビナート」としての元岡・桑原遺跡群のイメージが 2000 年代に入って定着しました。

一方、2010 代には元岡古墳群Ｇ－１・Ｇ－６号墳で相次いで重要な発見が相次ぎ、特に 2011 年 9 月にＧ－６号墳から出土した「庚寅銘大刀」は国内でも稀な古墳時代の金象嵌銘大刀として全国的に注目を集めました。

このように発掘調査を通じて考古学的に重要な遺跡と判明し、一般の方からも高い関心が寄せられるようになった元岡・桑原遺跡群に対して、九州大学のほうでも当初の計画を変更するなど遺跡の保護に最大限の努力をいただきました。

発掘調査、整理・報告書作成にあたっては、地元の方々をはじめ、福岡市内外の関係機関等からも多大なご協力をいただきました。

市民の方々にも現地説明会や講演会に多数ご参加いただき、遺跡の発掘や出土品についてご理解を頂きました。そして考古学・歴史学をはじめとする諸先生方にも発掘現場をご訪問いただき、多くの貴重な助言を賜りました。

また、発掘作業員・補助員・技能員の方々も猛暑、厳冬の辛い時期に発掘作業に従事いただき、作業を円滑に進めることができました。整理補助員の方々も膨大な遺物や記録類の処理に多くのご尽力をいただきました。

すべての方々のお心遣いに対し、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

報　告　書　抄　録

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん　３４
書名	元岡・桑原遺跡群　３４
副書名	九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う発掘調査の概要
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1385 集
編著者名	大塚紀宜（編）・萩原博文・米倉秀紀・常松幹雄・森本幹彦・菅波正人
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8621　福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号
発行年月日	平成 31（2019）年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
もとおか・くわばらいせきぐん	ふくおかけんふくおかしにしく	40130	2782	33°35′40″	130°13′00″	19950820 ～ 20151008	約 210,000	大学移転
元岡・桑原遺跡群	福岡県福岡市西区 おおあざもとおか・おおあざくわばら 大字元岡・大字桑原							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑原遺跡群	集落・古墳・散布地・水田・官衙	旧石器～近世	石組炉・自然流路・古墳・製鉄炉・鍛冶炉・竪穴住居・掘立柱建物・貯水池等	鉄器・製鉄遺物・石器・土器・瓦・木器・木簡・装身具・鉄滓等	元岡・桑原遺跡群の発掘調査の総括編

要　約	平成 7 年（1995 年）から平成 27 年（2015 年）までの 21 年間に及ぶ、九州大学移転事業にともなう発掘調査の総括編。各次の調査成果を要約、抜粋し、一覧表にまとめたほか、旧石器時代から古代について時代別に特論形式で遺跡の概要と問題点を論じた。

元岡（もとおか）・桑原（くわばら）遺跡群 34

―九州大学伊都キャンパス移転事業に伴う発掘調査の概要―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1385 集

2019（平成 31）年 3 月 25 日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷　株式会社トータルプルーフ
福岡市南区清水 4 丁目 6 番 3 号